兵庫県文化財調査報告　第161冊

砂　入　遺　跡

―〔本文編〕―

― 小野川放水路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（Ⅰ）―

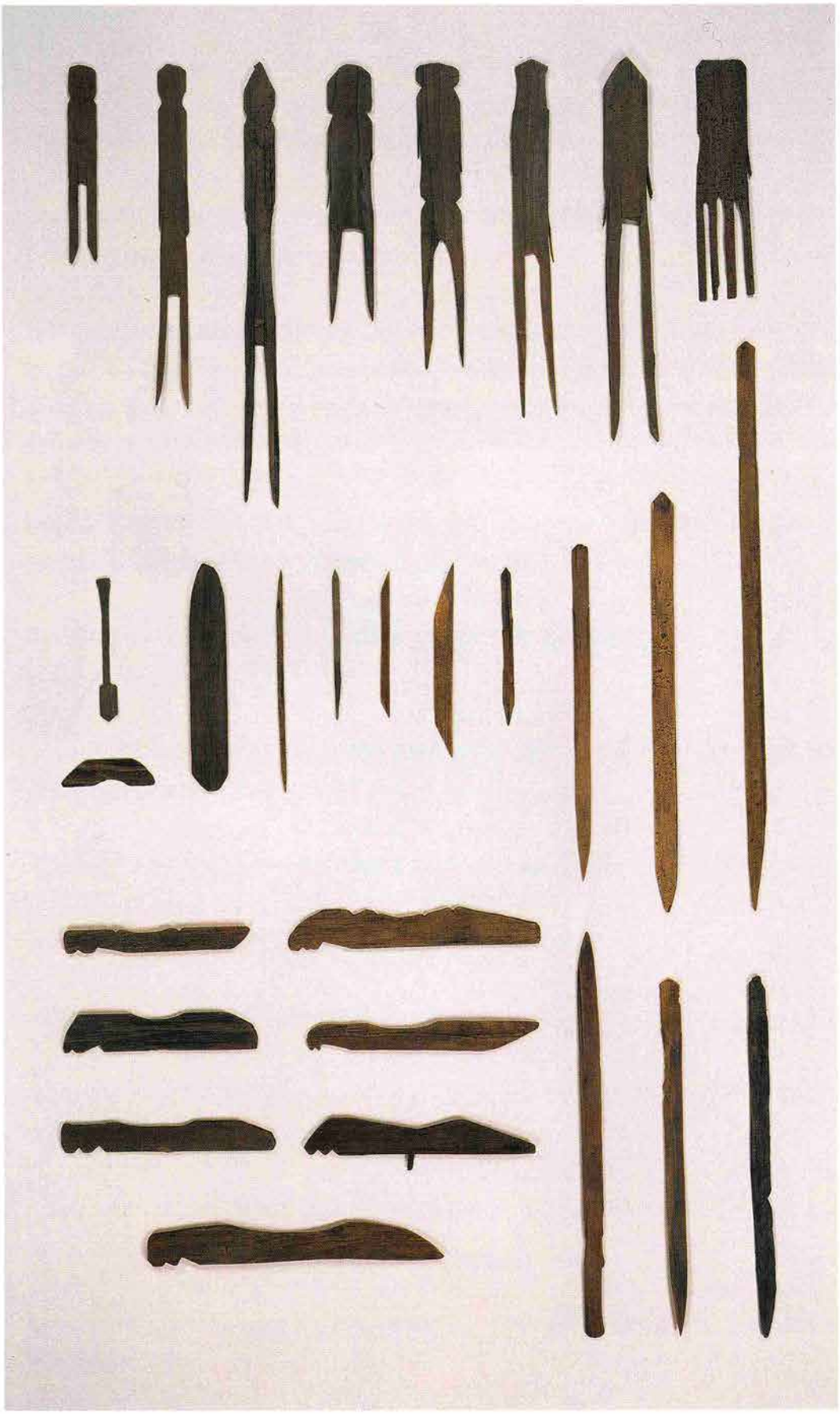
1997.3

兵庫県教育委員会

１）遺跡遠景（西から）

２）遺跡遠景（南から）

上層の祭祀具



下層の祭祀具

例　言

1．本書は兵庫県出石郡出石町田多地字持網ほかに所在する砂入遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は建設省近畿建設局豊岡工事事務所の計画する小野川放水路事業に伴うものであり、同事務所の依頼を受け兵庫県教育委員会が実施した。

3．小野川放水路事業に伴う発掘調査は砂入遺跡のほか袴狭遺跡、入佐川遺跡、嶋遺跡、カヤガ谷墳墓群、カヤガ谷横穴、大谷墳墓群、北山墳墓群、口小野散布地を対象として昭和62年度から平成７年度まで実施した。このうち砂入遺跡については昭和62年度から平成５年度まで断続的に調査を実施し、整理作業は平成２年度～平成８年度に行った。

4．小野川放水路事業に伴う発掘調査では縄文時代～近世に至る各時代の遺構・遺物が検出されているが、このうち律令期を中心とする遺構群について「袴狭遺跡群」と総称する。

5．本書の執筆は、渡辺昇・西口圭介・久保弘幸・藤田淳・柏原正民・岡昌秀が担当した。執筆分担は目次および本文中に示す。

6．微地形の分析は青木哲哉氏（立命館大学非常勤講師）に、木器の樹種同定は伊東隆夫氏（京都大学木質科学研究所教授）に依頼し、玉稿を得た。

7．木簡の釈読は奈良国立文化財研究所資料調査室の方々にお願いした。

8．本書の編集は主任技術員伴悦子の補佐を得て、藤田が行った。

9．本書に使用した地図は国土地理院発行25,000分の１地形図（豊岡・須田・江原・出石）である。

10．発掘調査および整理作業で得られた図面・写真・遺物は兵庫県埋蔵文化財調査事務所で保管している。

11．木器の一部は財団法人・元興寺文化財研究所に保存処理を委託し、今後とも継続して処理を予定している。

12．調査および報告書作製にあたり下記の方々の御助力・ご助言を得た。御芳名を記し感謝の意を表します（敬称略）。

綾村宏・上原真人・岡田憲二・金子裕之・小寺誠・坂井秀弥・潮崎誠・嶋倉巳三郎・島地謙・瀬戸谷晧・館野和己・寺崎保広・古尾谷知浩・光谷拓実・水野正好・渡辺晃宏

凡　例

1．実測図の表現方法について

木器の実測図はできるだけ簡素な表現を図るよう心がけた。木器の場合、形態上の特徴を表す稜線、製作時の工具痕、摩耗や圧迫などの使用痕等、一つの平面図上に現れる線の種類が多く煩雑になりやすい。特に調査時の破損など本来の属性とは無関係なものは極力省略した。本報告における主な表現上の取り決めは以下のとおりである。

1）欠損や破損の表現は原則として省略したが、加工痕・使用痕等が破損面によって途切れる場合などは表現している。なお、人形股部の折り取り部分は破損と同様な状況を呈するため、破損面と同様な表現をしているが、人為的な「折り」であるので留意願いたい。

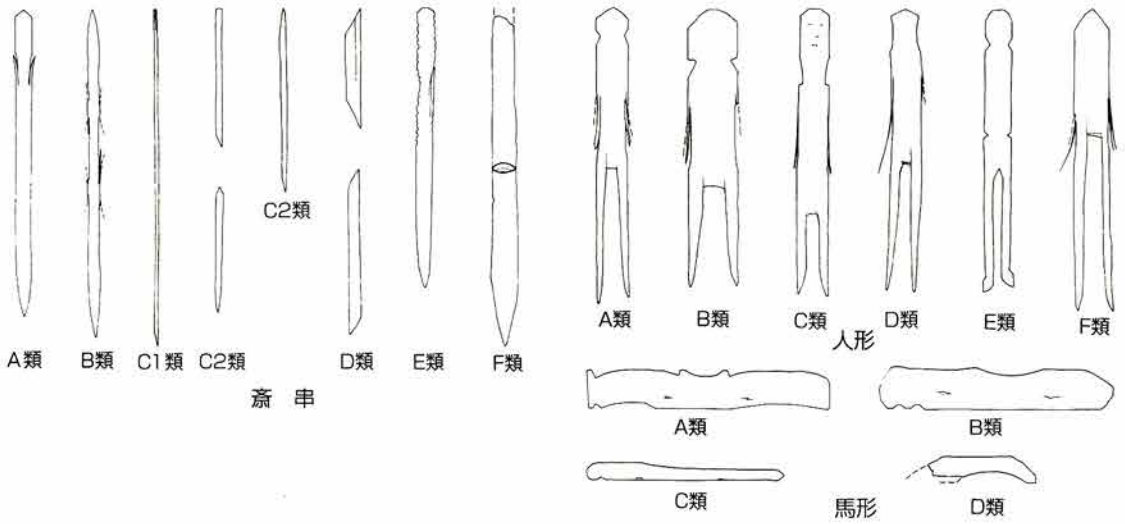
2）木器の大半はスギの板目材が使用され、その割裂性を利用して製材されている。このため、多くの場合、材面には晩材部と早材部の境が明瞭な段差をもって軸方向に走行するのが観察される。しかし、平面図上ではこうした段差は原則として省略し、断面図での階段状の表現にとどめた。

3）人形・斎串などの「切掛け」は、回数も多く完存する場合はまれである。確認できるすべての切掛けについて復元線（点線）を書き込むことは困難で、最も外側にのみ表現した。なお、これを補うため、一覧表において確認できる限りの切掛けの数を個々に示した。

4）馬形の足の差し込み部分から復元線（点線）を延ばしているものは、差し込まれた足の板片が残存していることを示す。

5）明かな欠損については復元線（点線）で明示したが、欠損面が平滑で一見したところ完形かと思えるようなものもある。特に用途不明品など不定形な木製品では欠損を見誤っているものがあるかもしれない。

2．斎串、人形、馬形の分類は以下のとおりである（詳細は第4章第1節参照）。



本文目次

第1章　調査の経緯

第1節　調査にいたる経緯 …… (藤田) …… 1

第2節　調査の経過 …… (藤田・渡辺・柏原・西口) …… 4

第3節　整理作業の経過 …… (藤田) …… 8

第2章　遺跡の位置と歴史的環境 …… (渡辺) …… 11

第3章　調査の結果

第1節　砂入Ⅰ区 …… (藤田) …… 15

第2節　砂入Ⅱ区 …… (渡辺・久保) …… 20

第3節　砂入Ⅲ区 …… (渡辺) …… 27

第4節　砂入Ⅳ区 …… (柏原) …… 29

第5節　砂入Ⅴ区 …… (西口) …… 33

第4章　出土遺物

第1節　木　器 …… (藤田・岡) …… 37

第2節　土　器 …… (藤田) …… 49

第3節　石器・金属器 …… (藤田) …… 55

第5章　まとめ

第1節　遺構について …… (藤田・渡辺) …… 57

第2節　木製祭祀具について …… (藤田・柏原) …… 64

第3節　おわりに …… (藤田) …… 79

第6章　砂入遺跡の地形環境 …… (青木哲哉) …… 127

第7章　砂入遺跡出土木製品の樹種 …… (伊東隆夫) …… 141

挿図目次

図１．砂入Ⅱ区調査風景 …… （５）
図２．砂入Ⅲ区調査風景 …… （６）
図３．砂入遺跡の位置 …… (11)
図４．砂入遺跡周辺の遺跡 …… (13)
図５．カヤガ谷横穴 …… (14)
図６．ＳＤ１８最下層遺物出土状態図 …… (22)
図７．ＳＫ０３ …… (27)
図８．人形・馬形・斎串の分類 …… (39)
図９．田下駄の分類 …… (41)
図10．砂入Ⅰ～Ⅲ区の遺構の変遷 …… (58)
図11．砂入Ⅱ区の遺構の変遷 …… (61)
図12．人形・馬形・斎串の組成 …… (64)
図13．上層（上）と下層（下）の祭祀具 … (65)
図14．人形の組成 …… (67)
図15．人形の長さの度数分布 …… (68)
図16．馬形の各部位の呼称 …… (71)
図17．馬形の各部位の分類 …… (72)
図18．馬形の組成 …… (74)
図19．馬形の長さの度数分布 …… (75)
図20．斎串の組成 …… (77)
図21．斎串の長さの度数分布 …… (78)
図22．遺跡周辺の等高線と調査区の位置 …(128)
図23．遺跡付近の地形分類図 ……(129)
図24．地質断面図(1) ……(131)
図25．地質断面図(2) ……(133)
図26．縄文海進頂期における海域 ……(136)
図27．遺跡付近の模式的な地形環境 ……(138)
図28．木製品顕微鏡写真(1) ……(149)
図29．木製品顕微鏡写真(2) ……(150)
図30．木製品顕微鏡写真(3) ……(151)
図31．木製品顕微鏡写真(4) ……(152)

表目次

表１．小野川放水路事業関連埋蔵文化財
　　発掘調査一覧(1) …… （２）
表２．小野川放水路事業関連埋蔵文化財
　　発掘調査一覧(2) …… （３）
表３．整理作業工程表 …… （９）
表４．祭祀土坑の器種構成 …… (63)
表５．人形・馬形・斎串組成表 …… (64)
表６．人形組成表 …… (67)
表７．人形法量集計表 …… (68)
表８．人形属性表 …… (69)
表９．馬形組成表 …… (74)
表10．馬形法量集計表 …… (75)
表11．斎串組成表 …… (77)
表12．斎串法量集計表 …… (78)
表13．木器一覧表 …… (83)
表14．土器一覧表 ……(119)
表15．各調査区の堆積物 ……(135)
表16．製品別樹種一覧表 ……(143)
表17．樹種同定結果一覧表 ……(144)

付　図

付図１．砂入Ⅱ区ＳＦ０１全体図
付図２．砂入Ⅱ区ＳＤ１８全体図 (1)
付図３．砂入Ⅱ区ＳＤ１８全体図 (2)
付図４．砂入Ⅱ区ＳＤ１８全体図 (3)
付図５．砂入Ⅲ区全体図

第１章　調査の経緯

第１節　調査にいたる経緯

平成２年９月の近畿地方を襲った台風19号は但馬地方に大雨を降らせ、円山川下流の六方川流域でも675戸もの家が浸水するという、大きな被害をもたらした。

この円山川は兵庫県の中央部朝来郡生野町に源を発し、但馬中央部を北流して日本海に注ぐ一級河川であり、古来より水運によって但馬地方の経済・交通をささえてきた。しかしながら、ひとたび洪水がおきると甚大な被害をもたらし、美しい水田風景も一夜にして泥の海と化した。円山川の支流である小野川（六方川上流部の通称）や出石川、あるいはこれに注ぐ小河川の袴狭川や入佐川の流域でも、毎年のように洪水の被害が生じている。

この慢性的な内水被害の解決のため、建設省では、昭和42年から調査を開始し、昭和45年に小野川放水路事業計画が決定された。その概要は小野川と袴狭川、入佐川を放水路で統合し、直接、出石川へ放流するとともに、放水路に阻まれた内水をサイフォンで六方川へ排水するというものである。

用地買収などの事業が開始された昭和62年、兵庫県教育委員会社会教育・文化財課は建設省近畿建設局豊岡工事事務所と協議を行い、職員を派遣し事業地内の遺跡の確認調査を実施した（表１－①）。この調査は出石町教育委員会の埋蔵文化財担当職員と合同で行った。その結果、それぞれの河川の流域で土器や木器の出土が確認され、小野川流域の一部では全面調査が、袴狭川と入佐川の下流部では２次確認調査が必要であると判断された。ただし、この確認調査は用地買収などの関係上、工事範囲全域を行うことはできず、未確認部分については用地買収後まで残されることとなった。

年が明けた１月より小野川流域の対象地を『砂入遺跡』とし、第１次の全面調査を開始した（砂入Ⅰ区）。出土した大量の木製祭祀具は当初の予測をはるかに越えるもので、遺構の広がりもさらに下流側へ続いていることが明らかとなった。以後、砂入遺跡では確認調査を随時実施しながら、平成５年に終了するまでに合わせて５次の全面調査を実施した（砂入Ⅰ区～砂入Ⅴ区）。各調査区の位置関係は、左岸側では上流側から砂入Ⅰ区～Ⅲ区があり、砂入Ⅰ区の対岸（右岸側）が砂入Ⅴ区である。砂入Ⅴ区から深い谷と尾根一つ隔てた約300m上流には砂入Ⅳ区がある（図版２・５）。それぞれの調査区の調査経過は次節で述べる。

砂入遺跡よりさらに小野川上流部では確認調査と工事立会を４ヵ所（表１－③・⑩・⑯・⑱）実施した。土器などの遺物は出土したものの明確な遺構は存在せず、全面調査にはいたらなかった。しかし、出石町教育委員会の調査では荒木遺跡で奈良時代の掘立柱建物群が検出されており、広範囲に遺跡が散在することは確実である。

袴狭川、入佐川流域では前年の確認調査をうけて、昭和63年度に下流部の２次確認調査が実施された。すべての調査区で木器や土器が出土し、全域の全面調査の必要性が確認されるとともに、さらに上流部に遺跡が広がっていることが確実視されることとなった。また、河川に面する丘陵上にも墳墓や横穴の存在することが分布調査による微地形の観察から予想された。そこで平成元年以降、砂入遺跡の全面調査と並行して、袴狭川・入佐川上流部の確認調査、および小野川も含めた河川沿いの丘陵尾根部の確認調査を実施し、引き続き全面調査を実施していった（表１・２及び図版１・２）。

この結果、小野川流域では砂入遺跡のほかに丘陵部のカヤガ谷墳墓群とカヤガ谷横穴の全面調査を実施した。袴狭川流域では水田部の10次にわたる全面調査（袴狭Ⅰ区～袴狭Ⅹ区）と、大谷墳墓群の全面調査（丘陵部４地点）を実施した。入佐川遺跡では水田部の４次にわたる全面調査（入佐川Ⅰ区～入佐川Ⅳ区）と、北山墳墓群（丘陵部）の全面調査を実施した。

結果としては、袴狭川・入佐川流域とも現水田部分については工事範囲の大半を発掘することになった。遺跡は現在流れている河川の下や堤防下にも広がっていることが十分に予想されたが、施工技術と工期上の問題から全面調査は行えず、部分的に工事立会等で対処せざるを得なかった。なお、袴狭遺跡などの調査経過の詳細については今後刊行予定の報告書で記述されるためここでは割愛する。

以上の小野川放水路事業にかかる埋蔵文化財発掘調査は建設省近畿建設局豊岡工事事務所の依頼を受けて、兵庫県教育委員会が調査主体となって実施した。調査にあたりましては、建設省近畿建設局豊岡工事事務所・兵庫県農林水産部豊岡土地改良事務所・出石町教育委員会には多種多様の協力を得ましたことを深く感謝いたします。

表１　小野川放水路事業関連埋蔵文化財発掘調査一覧（１）　　○付き数字は立会・確認調査

	調査地点・種別	調査番号	調査担当者	調査期間	調査成果
①	流域確認調査	870046	森内秀造・西口圭介・小寺誠（出石町教育委員会）	昭和62年11月４日～昭和62年11月４日	口小野：古式土師器を含んだ遺物包含層の存在が推定される。砂入：人形、斎串などが出土。鳴・坪井：加工材、杭列などが出土
2	砂入Ⅰ区全面調査	870058	西口・藤田淳・甲斐昭光	昭和63年１月11日～昭和63年３月31日	小野川旧河道の北側川岸を確認。奈良時代～平安時代の木製祭祀具多数出土。下流の確認調査も実施。
③	問組工事区工事立会	880078	西口	昭和63年12月21日～平成元年３月16日	小野川左岸で木製祭祀具出土。
④	坪井遺跡確認調査	880080	西口・久保弘幸	昭和63年12月21日～平成元年３月16日	袴狭川下流部で木器を含む包含層を確認。平成２年度以降、袴狭遺跡の一部とされる。
⑤	入佐川遺跡確認調査	880021	西口・久保	昭和63年12月21日～平成元年３月16日	入佐川下流部で平安時代の木製祭祀具、木器、古式土師器などを含んだ包含層確認。
6	砂入Ⅱ区全面調査	890021	渡辺昇・久保	平成元年12月11日～平成２年３月27日	砂入Ⅰ区の下流側続きの調査。平安時代の道路状遺構と奈良時代の流路などを確認。大量の木製祭祀具が出土。
⑦	鳴遺跡確認調査	890068	渡辺・久保	平成元年12月11日～平成元年12月29日	支線排水路周辺の確認調査。調査範囲の北端で古墳時代の旧河道を確認。南端部で木簡を含んだ旧河道を確認。
8	袴狭Ⅰ区全面調査	890073	渡辺・久保	平成元年12月24日～平成元年12月26日	木器を含んだ遺物包含層確認。
⑨	鳴遺跡工事立会	900036	山上雅弘・三原慎吾	平成２年８月７日～平成２年８月９日	平成元年度確認調査をうけての工事立会。南端側は遺構なし。北端側も調査必要深度には工事が達せず。
⑩	口小野散布地確認調査	900041	渡辺・柏原正民	平成２年９月30日	昭和62年度確認調査で古墳時代の包含層が推定された部分の確認調査。明確な包含層は存在せず。
⑪	砂入遺跡確認調査	900038	渡辺・柏原	平成２年９月18日～平成２年10月５日	小野川右岸の確認調査。カヤガ谷墳墓群の西の谷部で木製祭祀具の包含層を確認。
12	砂入Ⅲ区全面調査	900037	渡辺・柏原	平成２年９月18日～平成２年11月25日	砂入Ⅱ区の下流側続きを調査。奈良時代の流路などの続きを検出。
⑬	カヤガ谷墳墓群確認調査	900120	渡辺・柏原	平成２年９月17日～平成２年10月８日	小野川右岸の丘陵の確認調査。古墳および越前焼の壺を埋納した遺構を検出。
⑭	袴狭遺跡確認調査	900040	渡辺・柏原	平成２年10月22日～平成２年11月27日	袴狭遺跡の上流部の範囲確認調査。内田地区で銅印や墨書土器、木簡等が出土し、柱根も検出。官衙の存在が予想される。
15	袴狭Ⅱ区全面調査	900039	渡辺・柏原	平成２年10月22日～平成２年11月27日	旧河道と道路状遺構を検出。斎串を中心に大量の木製祭祀具が出土。
⑯	小野川流域工事立会	900174	三原	平成３年２月19日～平成３年２月26日	昭和63年度工事立会部分の対岸（右岸）の工事立会。遺物は出土したものの、遺構は存在せず。
17	カヤガ谷横穴全面調査	900182	渡辺	平成３年３月18日～平成３年３月28日	昭和63年度工事立会部分の右岸で横穴が確認されたため全面調査を実施。横穴６基を調査。
⑱	小野川流域工事立会	910178	大平茂・長谷川真・柏原	平成３年５月９日	遺構、遺物ともに無し。
19	カヤガ谷墳墓群全面調査	910022	大平・柏原	平成３年５月24日～平成３年６月28日	弥生時代末～古墳時代の埋葬主体19基と中世の遺構２基を検出。ガラス玉 150点出土。
⑳	袴狭川流域確認調査	910021	大平・柏原	平成３年６月14日～平成３年９月９日	袴狭川中流部の左岸と右岸の確認調査。左岸では遺構なし。右岸では木器を主とする遺物包含層確認。
21	袴狭Ⅲ区全面調査	910021	大平・柏原	平成３年６月14日～平成３年９月９日・平成３年11月２日～平成３年11月15日	袴狭川中流部と下流部の２地点を全面調査。中流部では洪水砂に覆われた２面の水田を検出。下流部では水田と水路を検出。

	調査地点・種別	調査番号	調査担当者	調査期間	調査成果
㉒	砂入遺跡確認調査	910020	大平・柏原	平成３年９月18日～ 平成３年10月16日	砂入Ⅱ区の小野川対岸の確認調査。奈良時代～平安時代の遺構面を確認。
23	砂入Ⅳ区全面調査	910020	大平・柏原	平成３年９月18日～ 平成３年10月16日	古墳時代～平安時代の水田や掘立柱建物などを検出。
㉔	カヤガ谷墳墓群確認調査	910022	大平・柏原	平成３年９月18日～ 平成３年10月16日	小野川右岸丘陵上の確認調査。遺構無し。
25	袴狭Ⅳ区全面調査	910144	大平・柏原	平成３年12月14日～ 平成４年２月６日	平安時代の２面の水田を検出。上層水田からは「延喜六年」の紀年銘木簡が出土。
㉖	砂入遺跡工事立会	910175	大平	平成４年２月12日	砂入Ⅴ区の東側の水路切り換えに伴う工事立会。遺構、遺物ともに無し。
㉗	嶋遺跡工事立会	920082	大平	平成４年４月８日	袴狭川、入佐川と出石川との合流点付近の工事立会。遺構、遺物ともに無し。
28	入佐川Ⅰ区全面調査	920166	大平・村上泰樹・柏原	平成４年４月13日～ 平成５年２月10日	古墳時代の堤防上祭祀土器群と石釧、扉板を転用した井堰、奈良～平安時代・近世の旧河道などを検出。
29	袴狭Ⅴ区全面調査	920360	大平・村上・柏原	平成５年１月６日～ 平成５年３月11日	奈良時代～中世の３面の水田を検出。同時に袴狭Ⅵ区の一部も調査を行い、中世の遺構面を確認。
㉚	袴狭遺跡確認調査	920360	大平・村上・柏原	平成５年１月６日～ 平成５年３月11日	袴狭川左岸の丘陵部の確認調査。４ヵ所の尾根で弥生時代末～古墳時代の墳墓を確認（大谷墳墓群）。
㉛	入佐川遺跡工事立会	920397	大平・西口	平成５年２月26日・ ３月26日	入佐川Ⅰ区下流側の工事立会。古墳時代の水路と水田面を確認。
32	大谷墳墓群全面調査（A・B区）	930081	大平・西口・藤田・鈴木敬二・岡昌秀	平成５年５月28日～ 平成５年８月20日	弥生時代末～古墳時代の埋葬主体部８基を検出。
32	大谷墳墓群全面調査（C・D区）	930081	大平・西口・藤田・鈴木・岡	平成５年12月21日～ 平成６年３月１日	弥生時代末～古墳時代の埋葬主体部８基と竪穴住居跡１基を検出。
㉝	入佐川遺跡工事立会	930248	大平・西口	平成５年６月２日	平成４年度立会地点隣接地の工事立会。古墳時代の水路と水田面を確認。本年度に入佐川Ⅱ区として全面調査を実施。
34	入佐川Ⅱ区全面調査	930082	大平・西口・藤田・鈴木・岡	平成５年６月１日～ 平成５年７月20日	平安時代の旧河道とそれに架かる橋脚を検出。
35	袴狭Ⅵ区全面調査	930080	大平・西口・藤田・鈴木・岡	平成５年６月15日～ 平成５年１月26日	中世の三間堂を検出し、茶筅、卒塔婆、側面人形などが出土。
36	袴狭Ⅶ区全面調査	930124	大平・西口・藤田・鈴木・岡	平成５年４月１日～ 平成６年３月31日	古墳時代～平安時代の水田面を検出。サケ、シカなどを線刻した箱形木製品が出土。田下駄も多数出土。
37	砂入Ⅴ区全面調査	930079	大平・西口・藤田・鈴木・岡	平成５年10月12日～ 平成６年３月７日	縄文時代前期の土壙、奈良時代～平安時代の水田・道路遺構・井戸などを検出。井戸は地震で倒壊しており噴砂も確認。
38	袴狭Ⅷ区全面調査	940182	大平・鈴木・中村弘・岡・服部寛	平成６年６月21日～ 平成７年３月16日	弥生時代中期～平安時代の水田・溝などを検出。
39	袴狭Ⅸ区全面調査	940183	大平・鈴木・中村・岡・服部	平成６年６月21日～ 平成７年３月16日	袴狭遺跡中枢部の調査。奈良時代～中世の４面の遺構面を検出。平安時代の面では礎石および掘立柱建物群が検出され、多数の墨書土器、木簡などが出土。
40	入佐川Ⅲ区全面調査	940184	大平・鈴木・中村・岡・服部	平成６年６月21日～ 平成７年３月16日	古墳時代の貯木場、掘立柱建物などを検出。漆塗り木製把頭が出土。
㊶	入佐川遺跡確認調査	940298	大平・鈴木・中村・岡・服部	平成７年１月10日～ 平成７年３月13日	入佐川Ⅲ区と同様な遺構の広がりを確認。
㊷	入佐川遺跡確認調査	940298	大平・鈴木・中村・岡・服部	平成７年１月10日～ 平成７年３月13日	丘陵部の確認調査。古墳時代の墳墓群（北山墳墓群）を確認。
43	入佐川Ⅳ区全面調査	950122	大平・鈴木	平成７年５月２日～ 平成８年２月５日	弥生時代～平安時代の水田・水路と中世の畝状遺構や建物跡を検出。天目茶碗などが出土。
44	北山墳墓群全面調査	950121	大平・鈴木	平成７年５月２日～ 平成８年２月５日	此隅山城の曲輪と古墳時代中期の墳墓群を検出。箱式石棺からは３体の人骨が出土。
㊺	袴狭遺跡確認調査	950123	大平・鈴木	平成７年６月１日～ 平成７年６月２日	袴狭Ⅸ区対岸の確認調査。
46	袴狭Ⅹ区全面調査	950291	大平・鈴木・深江英憲	平成７年11月28日～ 平成７年11月30日	奈良時代～平安時代の水田と流路を検出。

表２　小野川放水路事業関連埋蔵文化財発掘調査一覧（２）

	小野川流域				袴狭川流域				入佐川流域				出石町教委調査
	水田部		丘陵部		水田部		丘陵部		水田部		丘陵部		
	立会・確認	全面	確認	全面	立会・確認	全面	確認	全面	立会・確認	全面	確認	全面	
昭和62年	①	2			①								
昭和63年	③				④				⑤				袴狭遺跡１次確認
平成元年		6			⑦	8							袴狭遺跡２次確認
平成２年	⑩・⑪・⑯	12	⑬	17	⑨・⑭	15							袴狭遺跡３次確認（荒木遺跡）
平成３年	⑱・㉒・㉖	23	㉔	19	⑳	21・25							カヤガ谷５号墳全面
平成４年					㉗	29	㉚		㉛	28			袴狭遺跡１次全面
平成５年		37				35・36		32	㉝	34			袴狭遺跡２次全面
平成６年						38・39			㊶	40	㊷		袴狭遺跡３次全面
平成７年					㊺	46				43		44	

第２節　調査の経過

１．昭和62年度の調査（砂入Ｉ区全面調査ほか）

調 査 期 間：昭和63年１月11日～昭和63年３月31日　　全面調査面積：約1,800㎡

調 査 主 体：兵庫県教育委員会　社会教育・文化財課

調査担当者：技術職員　西口圭介・藤田　淳・甲斐昭光

室内作業員等：小仲満智子・玉岡祐子・細田美穂・田辺あつみ

昭和62年11月の確認調査で祭祀具などの木器が出土した地点を中心に東西240ｍの調査区を設定した。ただし、遺構面が現地表下１ｍ以下にあり、軟弱地盤への対応として安全勾配を確保したため、遺構検出面での南北幅は東端と西端の最も広い所で15ｍと12ｍであり、その間は幅数ｍの狭い部分が延々と続く。幅の狭い範囲では断面観察と遺物の取り上げが精一杯であった。主要な遺構は東西に別れており、その間の面的、層位的なつながりは十分に追跡できなかった。

この東西に細長い調査区を排土運搬の都合上６分割し、排土で埋戻ししながら東側から順次調査を進めた。

№１～№３付近では人力掘削開始直後から人形が出土しはじめた。調査区の南壁際では人形と斎串が折り重なって出土し、杭で護岸した流路も西流することが判明した。そこで、用地境際までの南側と東側の一部を拡張した。祭祀具の集中部は全体を検出することができた（ＳＫ０５）が、流路は北肩側のごく一部しかとらえられなかった。流路の杭列は２列あり外側をＳＤ０２、内側をＳＤ０３としたが遺物は分離できなかった。流路から北へ外れると、暗褐色ピート層（Ⅶ層）が広がり、田下駄などの農具が出土した。さらにその下部ではスギの倒木も現れた。

№３～№５付近では人力掘削開始直後から人形・馬形・斎串などが続々と姿を現し、南壁に沿って護岸施設を伴う流路を検出した。遺物の大半はこの流路から北岸側へオーバーフローして堆積した砂質シルト層中（Ⅵ層最上部）に含まれており、先に検出したＳＤ０２・０３に対応するものと判断した。さらに西側では護岸施設を伴う別の流路を確認した（ＳＤ０４）。これら流路内の砂質シルト層をすべて除去すると砂層が一面に広がり、幅広い別の流路の存在が判明した（ＳＤ０１）。埋積した砂をすべて除去し肩部の護岸施設を検出して調査を終えた。

№５～№６付近では調査区の幅はさらに狭くなりかろうじて上流から続く流路の一部を調査したが、これより下流側では機械の及ぶ所まで掘削した後、断面観察と少量の遺物の取り上げのみを行った。

№17～№19付近では東側と西側で流路の一部を検出した。断面観察の結果、東側の流路（ＳＤ０７）が西側の流路（ＳＤ０５）よりも古いことが判明した。さらにその下層から板材を渡した畦畔と井堰１を検出したが、これもやはり同一層の遺構ではなく、畦畔のほうが上層に位置する。

農道を挟んで№20～№22付近では調査区全面に洪水砂が広がっていた。当初すべて上流のＳＤ０５の堆積物かと思われたが、護岸用のシガラミや杭列によっていくつかの流路の重なりが確認でき、ＳＤ０８～ＳＤ１０を識別した。ＳＤ０８は唯一両岸が確認できた流路であり、幅10ｍもあることから古小野川であろうと考えた。またこれまで検出した流路もＳＤ０８と同様の規模を予測できることから、古小野川あるいはその分流であろうと判断するに至った。

洪水砂をすべて除去すると暗褐色ピート層が全面に広がったが、この層を少し掘り下げると大量の木製祭祀具が検出され、東西方向の帯状に分布した（ＳＦ０４）。ＳＦ０４に相当する層はさらに下流に

続いていることから重機で下流側の数箇所を深掘りしたところ（図版１－②）、木製祭祀具が出土したため全面調査の必要性が確認された。これが、次年度以降の砂入Ⅱ区・Ⅲ区となる。　（藤田）

２．平成元年度の調査（砂入Ⅱ区全面調査ほか）

調 査 期 間：平成元年12月11日～平成２年３月27日　　全面調査面積：約1,700㎡

調 査 主 体：兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

調査担当者：調査第２課　主任　渡辺　昇／技術職員　久保弘幸

室内作業員・現場補助員等：藤原まゆみ・井崎研作・真狩和成・岩浅　恵・広瀬圭子・玉岡祐子・谷口千代子・米澤実江子・井上由美・橋本純子・川見玲子・谷沢恵理子・山崎久美

昭和62年度に引き続き、砂入遺跡の全面調査を実施した。昭和62年度全面調査部分の西側で、小野川ショートカット部分へ小野川が曲がっている部分にあたり、今までの砂入遺跡の調査部分より幅が広くなっている。昭和62年度に確認調査が行われ、全面調査が必要となった地域で、約1700㎡が対象地である。確認調査結果によって、表土下約1.8mを機械によって掘り下げ、その下を人力によって調査を行う予定であった。しかし、調査に先立って周辺の圃場整備（農業基盤整備事業）が行われ、その際に耕作土は除去されていた。そのため機械掘削深度はやや浅くなっている。

平成元年度の調査は、砂入遺跡の全面調査と嶋散布地の確認調査が計画されていた。予定では冬季を避けて秋に実施する計画であったが、他の遺跡の調査工程などの都合によって、昨年度までと同様に師走も押し迫った時期から調査を行った。当初危惧された積雪は、１月末こそ１週間近くの降雪があり、３日間は作業中断を余儀なくされ、さらに３日間は除雪作業を行い作業に支障をきたしたものの、それ以外はほとんど雪による妨げはなく調査を行うことができた。暖冬で比較的順調に調査が実施できたとはいえ、やはり但馬地域は山陰地方特有の気象条件から、この時期に調査を行うのは不適当であった。その理由はにわか雨やにわか雪が常時あり、気温が低いことと湿度が高いことから面の検出が困難なことである。その通り２月はそのほとんどの日が降雨（雪）に見舞われた。調査期日の制限からほぼ全日調査実施対象とせざるを得ない状況であった。しかも、当初予想していた以上に明確な遺構が検出され、大変な作業量となった。冷たい霙・雪・雨のなかで細かい作業に従事して戴いた補助員・作業員の方々に感謝致します。特に日曜祝日も返上して、排水施設の管理・見回りを常時行って戴いた尾上孝雄氏には感謝の念に堪えません。

図１　砂入Ⅱ区調査風景

しかし、調査時期が悪いことから、周辺で発掘調査が実施されておらず、経験豊富な作業員の方が多く参加戴けたことは、調査担当者として調査が順調に進捗できた最大の要因であった。また、出土遺物は木器が多く、遺物の保存状況のためには最適最良の時期であったように思われる。祓えの道であるＳＦ０１などの調査は両方の要因がなければ、調査が行えなかったものと思われる。その点では好時期に調査を実施したことになる。

調査は、嶋散布地の確認調査を1989年12月20日から行い、砂入遺跡の全面調査を翌1990年１月６日から行った。砂入遺跡のポンプ釜場を撤去し、埋め戻しを行った３月27日までの実働77日間を調査に費やした。併せて調査中にショートカット部分の立ち会い（一部確認）調査も行った。　（渡辺）

３．平成２年度の調査（砂入Ⅲ区全面調査ほか）

調 査 期 間：平成２年９月18日～平成２年11月25日　　全面調査面積：1,226㎡

調 査 主 体：兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

調査担当者：調査第１課　主任　渡辺　昇／技術職員　柏原正民

室内作業員・現場補助員等：藤原まゆみ・谷口千代子・米澤実江子・井上由美・橋本純子・川見玲子　永田由紀

平成２年度も昨年度に引き続いて砂入遺跡の全面調査と袴狭川・小野川の上流部の確認調査を実施した。砂入遺跡は昭和62年度の確認調査で全面調査を実施する範囲となっていた部分で、平成元年度は調査期間の都合で今年度に送った地点である。小野川拡幅部分からショートカット部分（小野川放水路）へ曲がる地点で幅は最も広いところである。昨年度の調査結果を元に基準杭なども継続して使用した。遺構名も同一遺構であることが明確であったので、同一名としている。年度が変わっただけで遺跡としては、同じ面として認識し調査を行っている。ただ、上層の遺構については北側に広がっており、この調査地点内では遺物としてしか確認されなかった。前年度と対照すると、下層の遺構については継続して西側に調査を行ったことになる。今年度の調査で小野川左岸の調査は終了したことになる。

今年度の全面調査は今までの３ヵ年と異なり、時期の良い秋に実施した。９月18日から11月25日までの実働24日間調査を行った。気候が良い分、木器の乾燥が早く実測・写真撮影などの作業を俊敏にする必要が生じてきた。昨年度と比較すると遺物の出土量も少なく遺構の密度も低いことから、順調に調査

図２　砂入Ⅲ区調査風景

を進めることができた。

今年度新たに小野川上流部分（口小野散布地）と、小野川右岸の確認調査を実施した。口小野散布地では遺構・遺物ともに確認されず、遺跡が広がっていないことが確認された。僅かに下流の荒木遺跡で大型の掘立柱建物が検出されており、官衙色の濃い遺跡は小範囲であることが確認された。小野川右岸の調査では２ヵ所の確認調査を実施し、１ヵ所は全面調査が必要（後の砂入Ⅳ区）と思われた。他地点は山裾に近く谷部分に遺跡（後の砂入Ⅴ区）が広がっているものと判断した。また、左岸についても今までに調査した砂入遺跡までの間の工事区間について拡幅個所が狭小であることから工事に併せて立ち会い調査を通年実施した。

砂入遺跡の調査ではないが、袴狭川上流部の一部の全面調査と確認調査も実施した。ほぼ全域で遺跡が認められ、今まで呼称していた砂入遺跡・坪井遺跡では不適当と考え、全体を袴狭遺跡群とし、河川ごと微高地ごとに遺跡名を与えることにした。（渡辺）

４．平成３年度の調査（砂入Ⅳ区全面調査ほか）

調 査 期 間：平成３年９月18日～平成３年10月16日　　全面調査面積：684㎡

調 査 主 体：兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

調査担当者：調査第１課　主査　大平　茂／技術職員　柏原正民

室内作業員：井上由美

砂入遺跡が存在する小野川流域のうち、左岸については昭和62年度以降全面調査が行われてきたが、右岸については遺跡の範囲そのものが不明確であった。この状況から埋蔵文化財の有無を確定する目的で、小野川右岸の確認調査を順次実施することとなった。平成２年度はその初年度にあたり、全面調査の実施した砂入Ⅰ～Ⅲ区の対岸を対象として調査を実施した。

その結果、もっとも上流にあたる字カヤガ谷において、祭祀具や木器・土師器などが少量出土し、遺跡の存在が考えられた。

確認調査の成果を受けて、平成３年度に全面調査を実施した。調査の対象となった地区は、東西を尾根に遮られ南を小野川によって隔てられる谷の出口部分にあたる。調査区は小野川に沿って、東西に細長い三角形を呈する。東西は71.2m・南北は最大幅を測る東端で16.5m、調査面積は684㎡である。

他の調査区とは異なり、比較的安定した遺構面が存在した。古墳時代から中世にかけての水田、奈良～平安時代の掘立柱建物・柵列・ピット群などを検出している。

なお、この調査区内では旧河道の痕跡は確認できず、木器の出土は少なかった。（柏原）

５．平成５年度の調査（砂入Ⅴ区全面調査ほか）

調査期間　：平成５年10月12日～平成６年３月７日　　全面調査面積：2,747㎡

調査主体　：兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

調査担当者：調査第１班　主査　大平　茂／主任　西口圭介／技術職員　藤田　淳・鈴木敬二／研修員　岡　昌秀

室内作業員・現場補助員等：長谷川英子・竹中美由紀・北村千佳子・中瀬俊子・吉谷典宏・松尾伸也・山下　亮

砂入Ⅴ区は砂入Ⅰ区の対岸（小野川右岸）に設定された調査区である。調査区は小野川に開く丸谷

の開口部に位置しており、もともとは養鶏場の前庭にあたる厚い盛土が施された広場にあたる。

砂入遺跡の調査区の大部分を占める小野川左岸部分の状況については昭和62年度の確認調査によってある程度明らかになっていたが、小野川右岸の状況については、明らかではなかった。小野川右岸の確認調査は昭和62年度においては用地買収が進捗しておらず、上流の一部（口小野地区）で実施できたのみであったためである。

しかし、左岸の全面調査が進むにつれて、現在の小野川川床よりも遺構が深い深度にあること、右岸方向に伸びる遺構が存在すること、また、右岸側からの遺物の流入があることなどが明らかになり、右岸側にも遺跡が広がることが推測された。

小野川右岸の確認調査は平成２年度以降に用地買収の進捗にともなって実施されてゆく。このうち、砂入Ⅴ区の調査範囲の確定に係わる確認調査は都合３回実施されている。平成２年度（⑪）・平成３年度（㉒）及び全面調査に先立って行われた平成５年度の確認調査である。

平成２年度の調査では砂入Ⅱ区の対岸付近に２本のトレンチを設定し、小野川右岸において全面調査が必要な範囲のうち、下流側（西側）の範囲を確定する作業をおこなった。

平成３年度の調査では砂入Ⅳ区側から順次６本のトレンチを設定し小野川右岸における全面調査が必要な範囲のうち、上流側（東側）の範囲を確定する作業をおこなった。この調査によって西側に設定した３本のトレンチにおいて遺構の存在が確認された。

平成５年度では、10月より平成２年度・平成３年度の調査結果を受けて全面調査に入ったが、調査開始当初に全面調査対象区の西半部に再度トレンチを設定し、最終的な全面調査範囲を絞り込んだ。

全面調査は、２度の確認調査の結果をもとに、第１面（鎌倉時代）直上までの盛土・旧耕土・洪水砂層をパワーショベルを使用して除去し、以下については人力による掘削・精査を実施した。機械掘削の深度は約2.5mである。

全面調査において検出精査を実施した面は縄文時代前期～鎌倉時代に至る４面、加えて古墳時代前期の遺物包含層を検出した。この内、縄文時代前期の調査は、調査区の西端部において実施しているが、放水路に係わる施工時に盛土下となる北半部は上面での検出に止め、南半部のみ遺構の掘削・精査を実施した。また、空中写真撮影は第２面において実施している。（西口）

第３節　整理作業の経過

砂入遺跡では通常の遺跡とは異なり土器の量に比べ木器の量が圧倒的に多い。そこで、整理作業も木器の台帳作製、実測、保存処理を中心として進めていくこととなった。特に、大量の祭祀遺物を数量的に扱う上ではなんらかの基準を設けて数量を集計する必要がある。調査中より砂入遺跡を含む袴狭遺跡群の出土木製祭祀具の点数に関して数万点とも言及してきたが、これは破損し断片化した木製祭祀具が多いためで、最大個体数を想定したものである。より実態に近い数量を得るには何らかの方法で最小個体数を求めなければならない。そこで、人形・馬形・斎串については頭部の遺存する資料を抽出することを主眼に遺物の分類と抽出資料の台帳登録、それにもとづいた実測資料の抽出を進めた。遺物量の最も多い砂入Ⅱ区では台帳作製時に混乱が生じ、遺構・土層を単位とした集計には不十分な成果しかあげることができなかった。現在のところ砂入遺跡全調査区をとうして登録されたものを数えると、人形750点、馬形623点、斎串2,558点、その他の形代50点、木製祭祀具総数3,981点を最少個体数として提示し

ておく。ただし、斎串Ａや斎串Ｆには抽出もれもあり、実際の個体数はさらに増加することは確実である。

１．整理作業の進行状況

整理作業は表３に示すような工程で平成２年度～平成８年度の間に実施した。

平成２年度には、全体の整理に先駆けて砂入Ⅰ・Ⅱ区の木製祭祀具の一部の台帳作製（ネーミング・接合補強に相当）・実測・写真撮影を行い、元興寺文化財研究所に委託して保存処理を行った。

平成３年度には、砂入Ⅰ～Ⅲ区の土器のネーミングと接合補強を行い、木器も一部実測した。

平成４・５年度には、木器の台帳作製と実測・写真撮影を中心に作業を進め、写真と実測が終わった木器の一部を元興寺文化財研究所に委託して保存処理を行った。

平成６年度には、砂入Ⅳ・Ⅴ区の土器のネーミング・接合補強、砂入Ⅰ～Ⅲ区の土器の実測・復元・写真撮影および木器の台帳作製・実測と写真撮影を行い、木器の一部の委託保存処理を行った。本年度で砂入遺跡の木器の実測は終了した。さらに、金属器の保存処理も行った。

平成７年度には、全遺物の実測と写真撮影を終え、木器の一部の委託保存処理を行った。

平成８年度には、トレース・レイアウトと編集を行い本報告書としてまとめた。本年度も木器の一部の委託保存処理を行った。

２．整理担当者

各年度において砂入遺跡（袴狭遺跡も含む）の整理作業を担当した職員と整理技術嘱託員は以下のとおりである。

平成２年度

整理担当職員：主任　吉識雅仁／技術職員　別府洋二（木器保存処理担当）

整理技術嘱託員：企画技術員　岡田依理子／図化技術員　岡崎輝子・吉田由起子

平成３年度

整理担当職員：技術職員　篠宮　正／技術職員　別府洋二（木器保存処理担当）

整理技術嘱託員：主任技術員　長浜幸子／図化技術員　吉田由起子・吉井京子／図化補助技術員　西原美知代・光澤鈴子・伊藤ミネ子・川上啓子・衣笠雅美・長谷川洋子／日々雇用職員　家光和子

平成４年度

整理担当職員：主任　山下史朗／主任　村上賢治（木器保存処理担当）

整理技術嘱託員：主任技術員　広戸紀子・八木和子／図化技術員　片岡喜久子・石野照代・吉田優子

表３　整理作業工程表

作業内容	平成２	平成３	平成４	平成５	平成６	平成７	平成８
ネーミング	木○	木土○	木○	○	○		
接合・補強	木○	木土○	木○	○	○		
実測・拓本	木○	木○	木○	○	○	○	
復元						○	
写真撮影	木○		木○	○	○	○	
トレース							○
レイアウト							○
執筆・編集							○
木器委託保存処理	○		○	○	○	○	○
金属器保存処理					○		

／図化補助技術員　西原美知代・光澤鈴子・伊藤ミネ子・川上啓子・衣笠雅美・長谷川洋子・家光和子・井原登美子／日々雇用職員　佐伯純子・宮沢昭世・八尾美佳・奥野春枝

平成５年度

整理担当職員：主任　村上賢治（木器保存処理担当）

整理技術嘱託員：主任技術員　広戸紀子／図化技術員　石野照代・吉田優子・宮沢昭世／図化補助技術員　井原登美子／日々雇用職員　中山春子・茅原加寿代

平成６年度

整理担当職員：主任　中川　渉／主査　加古千恵子（金属器保存処理担当）／主任　藤田　淳（木器保存処理担当）

整理技術嘱託員：主任技術員　広戸紀子／企画技術員　尾崎比佐子／図化技術員　和田寿佐子・宮沢昭世・喜多山好子／図化補助技術員　中山春子／日々雇用職員　黒田智香・茅原加寿代・村上京子

平成７年度

整理担当職員兼木器保存処理担当：主任　藤田　淳

整理技術嘱託員：主任技術員　伴　悦子・広戸紀子／企画技術員　赤松千鶴・小山みゆき／図化技術員　木村淑子・茨木恵美子・前田千栄子・西野淳子・飯田章子・宮沢昭世・船木昌美・川上　緑・高嶋美和・竹内泰子／図化補助技術員　臼井昌代／日々雇用職員　山口潤子・山口幸恵・西谷佐織・高田めぐみ・真子ふさ恵・位上篤子・藤池亜希・黒田智香・石　美穂・前川悦子

平成８年度

整理担当職員兼木器保存処理担当：主任　藤田　淳

整理技術嘱託員：主任技術員　伴　悦子・広戸紀子・酒井喜美子／企画技術員　赤松千鶴・小山みゆき・本窪田英子・香川フジ子／図化技術員　萩原聡美・中西睦子・鈴木まき子・横山キクエ・臼井昌代／図化補助技術員　西谷佐織・小野潤子・高田めぐみ／日々雇用職員　松本嘉子・宮野正子・中村正子・清水いずみ・尾鷲都美子・奥田保子・奥野政子・藤池亜希・前川悦子

３．木器の保存処理

砂入遺跡の木器は当事務所で保有するＰＥＧ含浸装置の処理容量を遙かに越える遺物量であり、また、平成７年度までは玉津田中遺跡出土木器の保存処理でまったく余裕がなかった。このため、平成２年度および平成４年度以降継続して元興寺文化財研究所に保存処理を委託した。平成８年度までに処理を終えた木器は1798点に達する。しかしながらすべての木器の処理は完了しておらず、今後、袴狭遺跡等の木器も含め当事務所でも保存処理を計画的に実施してゆく予定である。なお、大量の木器の保管を簡便にするためにパック法を採用したが、使用したチューブ式ビニール袋の水蒸気透過度が高かったため、短期間のうちに乾燥が進行し変形を生じた資料も少なくはない。自然乾燥によって変形した木器の形状の復旧に関する研究成果も提示されており（西尾1993年・岡田1994年）、今後、処理を進める中で、少しでも形状の復旧ができるよう検討したい。

第２章　遺跡の位置と歴史的環境

砂入遺跡を含む袴狭遺跡群は兵庫県の北東部、出石郡出石町の市街地から約２km北にあり、三方を山に囲まれたの狭隘な沖積低地を中心に立地する。山裾に沿って小野川、袴狭川、入佐川という三本の小河川が西流するが、砂入遺跡はこのうち最も北側の小野川流域の遺跡である。小野川は下流で六方川となり、北流して円山川に合流する。袴狭川と入佐川は一本となって、間近を流れる出石川に流れ込み、さらには円山川と合流し、日本海へと注ぐ。遺跡から日本海へは直線距離で約18kmである。

砂入遺跡周辺の平地は、発掘調査を実施するまで遺跡が存在するとは考えていなかった。遺跡の名称が示すように（砂が入りこんでいる場所）花崗岩の風化ばい土が平野部分に広く厚く堆積している地域である。確認調査を実施しさらに全面調査によって、多量の木製祭祀具が出土するまで、袴狭遺跡群という大規模な律令期の祭祀遺跡が存在するとは思っていなかった。

花崗岩の風化土が平野部分に広く堆積しているが、その供給源である花崗岩が周辺の山塊の基盤土壌である。「出石真砂」として需要が高く、早くから主要産業の１つとして土取りが袴狭遺跡周辺で行われていた。その際に多くの古墳や横穴が確認され、兵庫県の中でも古墳の周密地帯として知られた地域であった。弥生時代後期から古墳時代にかけての墳墓が多数調査されている。

砂入遺跡は出石郡出石町田多地に所在する遺跡である。周辺の歴史を概観してみると、但馬では**旧石器時代から縄文時代**にかけての遺跡が多数あり、兵庫県のなかでは遺跡数の多い地域である。神鍋遺跡やハチ高原遺跡のような中核的な遺跡が知られている。しかし、出石町では今のところこの時期の明瞭な遺構や遺物群に恵まれていない。出石郡内では但東町木村で尖頭器が出土している。遺跡の東側に所在する宮内遺跡で縄文時代後期の土器が確認されている。今回報告する砂入遺跡の例がやや纏まって出土した例である。下流域の豊岡市で長谷貝塚や中谷貝塚が知られている。中谷貝塚は現在でも堆積状況が確認できる貴重な遺跡である。

弥生時代になっても同様で、宮内黒田遺跡や出石神社境内遺跡で前期の遺物が出土している程度で、出石町内では好資料はない。最近の調査で小野川下流部の豊岡市駄坂で多量の遺物が出土しており、この時期の状況が多少なりとも明らかになりつつある。袴狭遺跡群でも下層から少量の弥生時代前期に遡る土器が出土しており、この時期から生活を営んでいることは確実である。後期から古墳時代にかけての土器は多量に見られ、この時期には集落が拡大したものと思われる。但馬全体に言えることであるが、中期中葉から後期にかけての遺跡は各地で確認されているが、母集落となる大規模な調査例は知られておらず、細かい状況は不明である。高地性集落も南北で確認されており、状況は他地域と相似たものと思われるが、全体像はなかなか浮かび上がってこない。

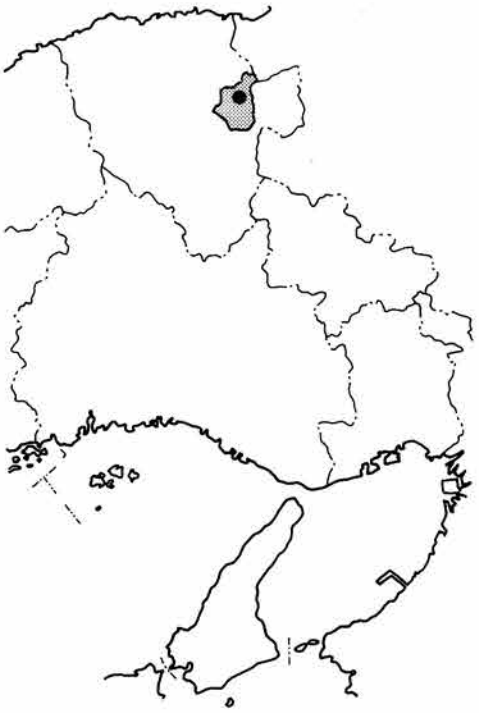
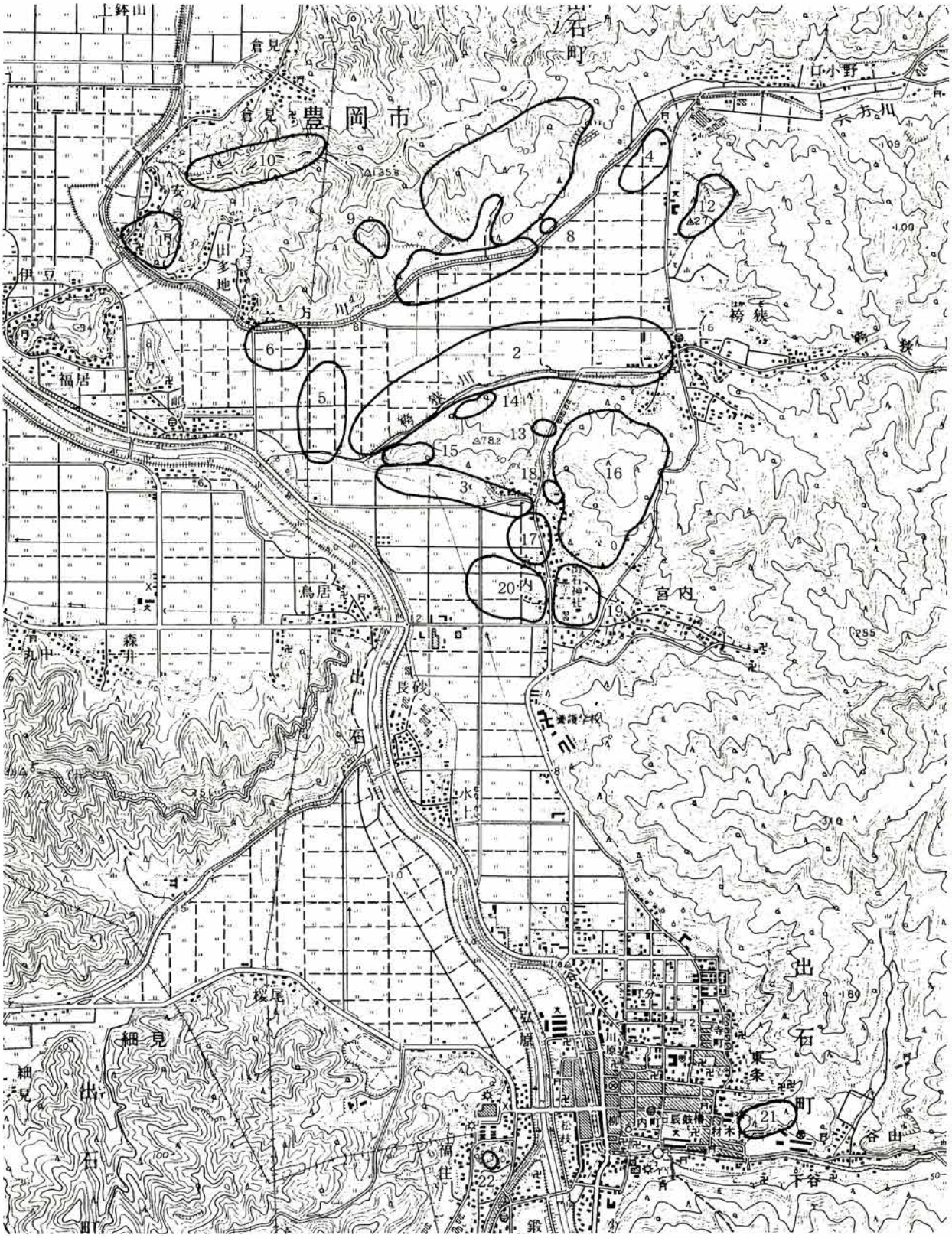


図３　砂入遺跡の位置

古墳時代になると状況は一変する。砂入遺跡周辺での調査例も多いが、古墳文化を考える上にも重要な遺跡が存在する。特に著名な古墳として数少ない紀年銘を出土した豊岡市の森尾市尾古墳がある。砂入遺跡の下流部で、北側に3㎞足らずの距離に位置している。「□始元年」の紀年銘のある三角縁神獣鏡が出土していることで知られている古墳である。尾根上に立地する長方形の墳形をしている。現在は行政区画は異なっているが、この古墳も元は同じ出石郡の古墳である。森尾市尾古墳の存在する周辺から砂入遺跡周辺にかけての丘陵には多数の古墳が築造されている。弥生時代にまで遡る墳墓から7世紀代まで下る横穴式石室や横穴まで存在する。墳墓は半坂峠墳墓群・御屋敷遺跡・田多地引谷墳墓群・入佐山墳墓群などで、代表的な古墳群は北から半坂峠古墳群・北浦古墳群・立石古墳群・長谷ハナ古墳群・田多地古墳群・安良古墳群・箱根山古墳群・新宮谷古墳群・カヤガ谷古墳群・岩谷古墳群・小野裏山古墳群などである。田多地引谷墳墓群からは五銖銭が、入佐山墳墓群からは多量のガラス玉が出土しており注目される。出石郡の古墳は時期的に一般的に古墳が多く築造される時期よりも古く、鏡を出土する古墳も多数見られる。鏡以外にも石枕など特出する内容である。現在の出石市街地周辺は埴輪を有する大型古墳も認められる。入佐山1号墳や茶臼山古墳・鶏塚古墳で古墳時代中期末から後期にかけて中心地が移動したものと思われる。また、町内には長持型石棺の部材も保管されており、前期の首長墓となる消滅した大型古墳があった可能性がある。入佐山1号墳出土とも伝えられているが確実ではない。それらに遡る古墳として入佐山3号墳がある。砂鉄が埋蔵された古墳で銘のある四獣鏡が副葬されていた。弥生時代末から古墳時代にかけての墓は袴狭遺跡周辺の丘陵を含めて多いものの他地域で最も多い後期の古墳は余り調査されていない。代表的な古墳はカヤガ谷古墳群である。1990年に出石町教育委員会によって調査されたもので、3基の古墳が調査された。1号墳は竪穴系横口式石室と言われる特徴的な石室である。他は通有の横穴式石室である。竪穴系横口式石室は北但馬にやや集中して見られ、特に北西方向約3㎞離れた大師山古墳群の主体部の多くはこの葬法である。但馬の古墳文化、特に後期を考える上に興味深い遺跡である。但馬で特徴的なものに横穴がある。兵庫県下では但馬しか確認されていない。砂入遺跡上流部のカヤガ谷にも横穴が6基あり、調査され装飾太刀などが出土している。また、袴狭川沿いにも横穴が存在していた。坪井横穴と下坂横穴で、特に下坂横穴は地下式横穴という兵庫県で唯一の例である。中世に横穴は再利用されており、青磁などが出土している。集落は袴狭遺跡周辺の各遺跡（坪井遺跡・田多地小谷遺跡・宮内上坂遺跡・入佐川遺跡）で前期の土器が出土している。今のところ住居跡は検出されていないが、一帯にある程度の集落が存在したのは確実であろう。ただ、時期的に限定されており、後期まで継続するとは思われない。

奈良時代になると、やはり最大のポイントは但馬国府の位置であろう。日本後紀に但馬国府を遷す記載があることから2時期の国府があると考えられている。第2次国府は日高町の水上周辺の深田遺跡などであろうと考えられているが、第1次国府について議論が白熱するところである。その1つの候補として袴狭遺跡群周辺もあげられている。出土遺物の内容からは、そのように考えても遜色のない遺物が出土しているが，断定するまでには至っていない。砂入遺跡をはじめ袴狭遺跡・荒木遺跡などの調査で多くの資料を提示し、これから検討を加える段階になったのではないかと思われる。調査地東側に但馬国一宮である出石神社が鎮座している。境内は弥生時代からの複合遺跡で、境内地が但馬国の中心施設があった可能性も十分に想定できる。これらの中で時期の最も古い遺跡は荒木遺跡である。11棟の大型掘立柱建物と井戸などが調査されている。2時期に分けられ配置も大きく変化している。8世紀前半頃から9世紀にかけての集落で官衙的性格の高い遺跡である。出石郡衙の可能性が高いと思われるが、文



袴狭遺跡群　　(1/25,000)

1.砂入遺跡
2.袴狭遺跡
3.入狭川遺跡
4.荒木遺跡
5.嶋遺跡
6.田多地小谷遺跡
7.カヤガ谷古墳遺跡群・墳墓群
8.カヤガ谷横穴
9.田引谷古墳群
10.田多地古墳群（経塚）
11.安良古墳群
12.小野小学校裏山古墳群
13.下坂横穴
14.大谷墳墓群
15.北山墳墓群
16.此隅山城
17.宮内堀脇遺跡
18.オヤシキ遺跡
19.出石神社境内遺跡
20.宮内黒田遺跡
21.入佐川古墳群
22.茶臼山古墳

図４　砂入遺跡周辺の遺跡

字資料に恵まれていない。荒木遺跡の後の段階と平行する遺跡が袴狭遺跡である。内田地区の遺構を代表とするが、多量の質の高い遺物が出土している。木器にやはり見るべきものが多い。琵琶・琴の楽器類や鐙などの漆器と砂入遺跡に共通する人形などの律令期祭祀具・木簡などである。木簡は兵庫県では最多の出土数である。墨書土器も含めて「秦」氏関係の遺物が目立つのが特徴である。銅印や八稜鏡・緑釉陶器・灰釉陶器など特殊な遺物も出土している。時期的な集落の構造の変化も確認されており、興味深い遺跡である。袴狭遺跡内では他には律令期の生活跡と思われる部分は確認されておらず、全体にわたって祭祀遺跡が広がっている。ただ、田多地小谷遺跡で井戸と思われる遺構が確認されている。木簡は下流の嶋遺跡でも出土している。この時期を但馬の他地域と比較すると歴然と異なっている。国府推定地のある日高町以外で、このように律令期の遺構が存在する地域はない。出土遺物においても傑出した存在である。日高町でも多量の木簡や祭祀具が出土しているが、袴狭遺跡群とは比較にならない。それだけの遺物があるのに、遺跡の性格を如実に出来ないところに不思議なものを感じる。但馬の中心地ではあるのだが、国府さらに郡衙としても断定できない点が歯がゆくて仕方がない。

現在のところ、**奈良時代（平安時代前期）以降**になると、また遺跡の集中度は減少する。今回調査した各遺跡や田多地古墳群の上層に築かれた田多地経塚が数少ない調査例である。袴狭遺跡群が傑出した存在であるがゆえに他の歴史時代の遺跡が霞むという事実は否めないにしても、密度は確実に減少している。当然出石町一帯も荘園として組み込まれているが、明確な遺構は検出されていない。袴狭遺跡出土の禁制木簡が当時の状況を知る好資料である。

中世後期から、出石周辺が再度歴史の中心へと引き戻される。室町幕府の管領として六分の一国殿と呼ばれた山名氏の居城が出石に築かれたことによるものである。山名氏の城下が継続して調査されている。袴狭遺跡群でもこの時期の遺構が確認されている。山名氏の拠城は砂入遺跡南方（袴狭遺跡南側）の尾根上に位置している此隅山城と出石町中心地の南側の有子山城があり、国指定史跡となっている。有子山城の山麓にはその後も江戸時代も継続して出石藩の居城である出石城が築かれており、中心地として発展している。その町並みは小京都として昔の面影を十分に残した歴史のある城下町である。江戸時代の遺跡は現在の出石の産業の１つである出石焼の調査例はなく、出石城以外の調査資料は少ない。

図５　カヤガ谷横穴

第３章　調査の結果

第１節　砂入Ｉ区

１．概　要

砂入Ｉ区では主要な遺構（流路）が東西両端に分かれ、土層の大部分は流路内堆積物である。それを流れの方向に分層するわけであるから、必ずしも平面的に検出された流路（ＳＤ）と土層が正確に対応しているとはいい難い。図版６に示した土層は極めて模式的なもので、実際の堆積物は図24（第６章）の地質断面図以上に細分される。

基本土層は第Ｉ～第Ⅸ層に分けられる。このうち第Ｉ層～第Ｖ層は表土およびおそらく近世以降の旧水田土壌で、所どころに水田をかさ上げするための山土が入る。平面調査の対象とはしなかった。

第Ⅵ層は次の第Ⅶ層を切り込む流路（ＳＤ０１～ＳＤ１０）の埋土である。粗砂を中心とする堆積物で、流れの中央付近では粗砂あるいは砂礫がみられ、岸近くや最上部では均質な砂質シルトに漸次変化している。第Ⅵ層の中でもＳＤ０６の埋土には腐植質の強いシルト～粘土がみられ、堆積環境が異なったと想定される。第Ⅵ層の堆積がない部分は調査区北東隅（№０～№２付近）と№15～№20付近のごくわずかな範囲にしかすぎない。

流路は最も新しいＳＤ０６を境として東側にＳＤ０１～ＳＤ０４と南北溝１及び２、西側にＳＤ０４・ＳＤ０５・ＳＤ０７・ＳＤ０８～ＳＤ１０がある。東半ではＳＤ０１⇨ＳＤ０２⇨ＳＤ０３⇨ＳＤ０４の順に新しく、西半ではＳＤ０７⇨ＳＤ０５⇨（ＳＤ０４）・ＳＤ１０⇨ＳＤ０９⇨ＳＤ０８の順に新しい。東壁断面図に示すようにＳＤ０２・０３ではオーバーフローした砂質シルト層が流路北側に広がっており、ＳＤ０２・０３の木製祭祀具の大半はこの層中から出土している。

また、ＳＤ０２・０３の北側では同一面上で木製祭祀具の集中するＳＫ０４が検出された。

第Ⅶ層は腐植質を多く含む暗褐色のシルト主体の層（暗褐色ピート層）で、第Ｖ層下ではほぼ同様に確認できたが上述の各流路で分断される。東端と西端では１ｍ以上の標高差があり同一層とは断定できない。第Ⅵ層が及ばない所では第Ｖ層との識別が困難であったことから流路部分以外の堆積環境には大きな変化がなかったことがうかがえる。

第Ⅶ層中からは調査区東端側の№０～№２付近で田下駄を中心とする木製品が出土し、水田であったと考えられる。下部からはスギなどの倒木が数本みられた（写真図版３－５）。№18付近では畦畔を検出した。また、西端の№21～№22付近ではＳＦ０５と木道を検出した。

第Ⅷ層は黄褐色砂礫を中心とする堆積物で流路内の堆積物である。№20付近で井堰１を検出した。

第Ⅸ層は黒褐色ピート層で無遺物である。

２．Ⅷ層の遺構

井堰１（図版７）

２列４本の丸太材からなり、その直径は約15～20cmである。旧河道内に堆積したと思われる砂層に埋没するような状態で検出された。丸太の両端は調査区外に続いており全体の状況は不明である。上流側と思われる方には丸太に接するように数本の矢板が打ち込まれている。他に遺物は出土していない。

３．第Ⅶ層の遺構

畦　畔（図版７）

井堰１の東側にある。井堰１を埋めた砂（第Ⅷ層）を覆う暗褐色ピート層（第Ⅶ層）上面で検出された。軟弱な地盤上に数枚の板材を並べているが、検出範囲が限られるため全容はわからない。幅20cm～30cm、長さ２ｍほどの板をほぼ一列に数枚並べ、板材に穿たれた数ヵ所の穴に杭を打ち込んで固定している。杭のうち１本（３）は転用の割り材を用いた長さ１ｍ程の頑丈なもので、地上に１／３ほど頭を出して打ち込まれていた。袴狭遺跡での検出例から水田の畦畔であると考えられる。

出土遺物には畦畔の構成材（１～４）と須恵器杯Ａ（８）がある。

水　田（図版７）

明確な遺構が検出されたわけでは無いが、調査区東端側の暗褐色ピート層（第Ⅶ層）の上面～中層にかけて田下駄をはじめとする木器が比較的まとまって出土している。袴狭遺跡でも水田土壌中から同様な木器が多量に出土することから水田と考えた。遺物の出土状況で注目される点は、台状枠付き田下駄の枠（５）が結合状態で出土していることである（写真図版３－２）。台状枠付き田下駄はもう１個体あり（６～10）、８と９が結合した状態で出土した以外は、離れて出土したが、木釘の位置関係から結合状態が復元できた。さらに方形枠付き田下駄の枠部材も支柱１本(19)と横桟（16～18）が出土している。横桟には長さの異なる２種があり、出土位置から19の支柱と組み合う横桟は16・17であろう。

出土遺物はすべて木器（５～26）で、田下駄、えぶり、火鑽板、部材、用途不明品などに混じって小型の人形Ｂ類（20）が１点出土している。

木道とＳＦ０５（図版８）

調査区中央には幅約３ｍほどのごく浅い流路状の窪み部があり東西に延びる。窪み内には腐植物混じりシルトが堆積していることから流れがあったとしても緩やかであったことがうかがえる。この窪みの南側の肩部に沿ってレンズ状に黄褐色粗砂（図版８土層図中３）が堆積しており、この上面をＳＦ０５とする。粗砂層は自然堆積したものであり人為的な遺構ではないが、ＳＦ０５から流路状窪み部にかけて幅約50cmの帯状に大量の木製祭祀具が出土している。

出土遺物の分布は３単位ぐらいに分かれ、幅狭い範囲に密集しており土器や祭祀具以外の木器も少量混在する。木器の向きや種類にまとまりは認めがたく、水際に漂着したような感がある。砂入Ⅱ区のＳＦ０２・０３のように元位置性の高いものではないと思われるが、遠くから流れついたとは考えにくい。やはり、この付近で祭祀が行われたのであろう。

木道は流路状の窪み部に対して直交方向に大小の板材を多数敷き並べたもので、畦畔とも考えられるが、ここではＳＦ０５との関係から低湿地での通路と考えたい。使用材は厚さ１cm前後で薄く細長いものが多く、固定用の杭などは使用されていない。南肩部分では木製祭祀具の帯状分布範囲と重なり、祭祀に係わる遺構である可能性が高い。板材に混じって田下駄や部材、用途不明品が出土している。

ＳＦ０５および木道の出土遺物には土器と木器があり、木器には人形、馬形、斎串などの祭祀具を主に田下駄や部材、用途不明品などが見られる（27～167）。ただし、西隣の砂入Ⅱ区・Ⅲ区で大量に出土した斎串Ｆ類はまったく含まれない。調査当時は認識できなかった可能性もあるが、少なくとも砂入Ⅱ区のように際立った存在ではなく、たとえ見落としたとしてもごく少数である。

土器には須恵器では杯Ａ（７）、短頸壺蓋（11）、甕（12）が、土師器では杯Ａ（９）、甕（15～17・20・21・23）、鍋(34)がある。土師器甕は底部まで復元できたものは無いが個体数は最も多く出土してい

る。

これらの遺物は穏やかな堆積環境下のもとに残され、シルト層で覆われていったと考えられる。出土状況からは後述のＳＤ０１の砂礫層中の遺物のように全く異なる時期の遺物の混入は想定しにくい状況にあり、土器と木器は同時に使用・廃棄されたものか極めて近い時期のものであろう。

４．第Ⅵ層の遺構

ＳＤ０１（図版９）

南壁から北壁に向けて調査区を斜めに横切る流路で、北肩のみ検出され南肩は調査区外にある。深さ約１ｍを測る。肩部には杭を数本打ち込み、小枝を絡ませて護岸しているところがある。この護岸施設付近には砂質シルトや細砂のラミナが見られるが、流路の中心部に向かって砂礫に漸次変化しており、流路の大部分は粗砂で埋めつくされている。深さと土層の堆積状況から後述のＳＤ０８と同じく10ｍほどの川幅が想定され、古小野川と考えられる。

遺物は木器と土器が出土しているが出土状況は異なる。

木器は護岸施設にからまるように北肩付近の砂質シルト層中から少量出土しており、人形（168・169）と馬形(170）が見られる。

土器は比較的多いがすべて砂礫層中から出土している。須恵器では杯蓋（48)、高杯（57)、瑳（58)、杯Ａ（70・73・75～77・81)、杯Ｂ（86・89・90・92)、杯Ｂ蓋（52・64)、皿Ａ（66・67)、椀（98)、壺（105・108・112）などが、土師器では高杯（38・41)、器台（45)、皿Ａ（117)、鍋（133）などがあり、古墳時代初頭～平安時代初頭のものが混在している。

ＳＤ０７（図版９）

ＳＤ０１同様、調査区を斜めに横切る流路の一部が検出された。本来北肩が存在するはずであるが、明確なものは見出しえなかった。ＳＤ０７も大半は砂礫で埋め尽くされているが、最上部には砂質シルトが堆積している。流路内からは砂礫に埋もれるように簡素な井堰（井堰２）が検出された。流れを横断する方向に約50㎝間隔で細い杭を打ち込み、これに長さ約３ｍ、直径約10㎝の細い丸太を半裁した横木をさし渡している。横木は流路の底には密着せず、約10㎝ほど浮いた位置にある。

出土遺物には木器と土器がある。木器は流路最上層の砂質シルト層の比較的まとまった範囲から、人形・馬形・斎串が出土している（171～221)。特に、斎串Ｃ２類、Ｄ類（202～221）はほぼ同寸大のものが一束になって出土しており注目される（写真図版７－２)。紐で結わえられたか、布で包まれるなどして投棄された可能性があるが、遺物に紐で縛ったような痕跡は確認できない。土器はすべて砂礫層中から出土しており、須恵器では杯蓋（47)、杯Ａ（68・71)、杯Ｂ（82)、杯Ｂ蓋（49・53)、椀（95)、高杯（56・99)、壺（111）、甕（114）が、土師器では甕（124）が見られ、古墳時代後期～奈良・平安時代のものが混在している。

ＳＫ０４（図版10)

明確な掘り込みは認められず土坑とは言いがたいが、極めて狭い範囲に木製祭祀具がほぼ水平に集中して出土しており、砂入Ⅱ区のＳＫ０１・０２と類似した出土状態を示す。後述のＳＤ０２・０３の北岸から約１ｍ離れた位置にあり、その間には直径２～３㎝の極めて細い杭数本が打ち込まれていた。この小杭は護岸用に打ち込まれた杭に比べて極端に細く土木用杭としては用をなさない。砂入Ⅱ区の斎串Ｆ類の中には、小径材を分割せずそのまま用いたものがあることから、この杭列もＳＫ０４における祭

祀行為と何らかの関係のあるものと考えておきたい。この杭列よりも南側にも遺物は散在しているがＳＫ０４への帰属は不明確である。

出土遺物は人形Ｃ類と斎串Ａ～Ｃ類のみ(222～247)で、斎串はＣ１類が中心となる。馬形と土器は伴わない。出土状況はＳＤ０２・０３に近い南側に人形が集中するが、斎串はそれより北側にも広がる。同形同大の５体の人形(222～226)のうち４体がほぼ重なっているが、頭位方向は西と東に分かれる。遺物の長軸方向は全体的には流路と並行する東西方向が多く、明確に流路と直交するものは無いが、やや斜めに交わるものはある。多少の流出やＳＤ０２・０３からの流れ込みも想定されるが、一括性は極めて高い。

ＳＤ０２・０３とＳＤ０４（図版11・12）

ほぼ調査区に並行する流路の北肩部分が検出されている。肩部に少なくとも２列の杭列があり、断面でも複数の堆積単位が認められる。複数の流路が並行して重なっていることはわかるが、それぞれの肩の平面的な検出は困難で、遺物の帰属も分けられなかった。

上流側では田下駄などが出土した暗褐色ピート層（第Ⅶ層）を切り込み、断面でもはっきりとした落ち込みを確認できる。西へ下がると２本の南北方向の浅い流路（南北溝１・２）と交わり、肩がわからなくなる。そこから南へ約３ｍほどの間は調査区に並行する護岸施設の存在によってのみ流路の存在が確認できる。ここではＳＤ０１を埋め尽くした砂礫の上に護岸施設を設けている。護岸施設が途切れてしまうと肩は極めて不明瞭となるが、遺物の分布がしだいに北へ振れることから流路も北へ振れ調査区外へと延びると考えられる。遺物の分布の内側に別の護岸施設が存在するが、この内側からはほとんど遺物が出土していないことからＳＤ０２・０３とは別の流路と判断し、これをＳＤ０４と呼ぶ。土層断面では両者の区別は必ずしも明瞭ではなく、同一の流路の可能性も十分考えられる。

護岸施設の杭は数10cm間隔で打ち込まれており、雑木を縦に数分割した杭を主に、直径10cm以下の丸杭を併用している。この杭に長さ１ｍほどの枝を10cmほどの高さに絡ませてシガラミをつくる。シガラミを伴う護岸施設は部分的で、杭列だけか何も無い部分のほうが多い。

ＳＤ０２・０３は幅が不明であるが、ＳＤ０１と同じく中央側は砂礫で急激に埋まり、肩付近および最上部では砂質シルトへ漸変することから、古小野川とみなしうる川幅をもつと考えられる。砂質シルト層は護岸施設を越えて薄く北岸へ広がっており、木製祭祀具を中心とする遺物は砂礫上面までのこの層中から出土した。

木器の出土状況は上流側では散漫であるが、南北溝よりも下流側では密度が高い。後者ではシガラミに引っ掛かったようなものと、その外側に帯状に散在するものがあり、幾分流されて移動しているように見受けられる。人形では腰の切欠きを除いて同形同大の２体（278・279）が重なって出土し、もう１点の280もすぐ近くから出土している。同様に同形同大とみなしうる 261と262、281と282、289と290なども出土位置は近接している。

土器では、完形に復元できた土師器甕２点(148・149)は、シガラミのすぐ外側に並んで出土し、これに接するように人形や馬形が出土している。甕の破片がそろっていることから遠くから流されてきたものではなく、この場に置かれていたと十分考えうる。

ＳＤ０２・０３の出土遺物には木器と土器があり、すべて砂質シルト層中から出土したが、土器の一部にはＳＤ０１最上部のものが混入している可能性がある。なお、ＳＤ０４に帰属すると想定しうる遺物には須恵器杯Ａ(78)と杯Ｂ蓋（61)がある。

木器では人形、馬形、斎串の他、木簡、付札、檜扇、曲物類、木皿などがあり(248～354)、祭祀具以外も比較的多く含まれる。

土器には須恵器では杯A（137)、杯B（138～140)、壺（141)、甕（136）があり、土師器では甕（142～149）と鍋（150）がある。他の流路と異なり土師器甕が多いことは先述のＳＦ０５と類似しており、148、149の出土状況を考慮して木製祭祀具とともに使用された可能性を指摘しておく。

南北溝１

ＳＤ０２・０３とほぼ直交する南北方向の小規模な溝で、幅 0.7～0.4 m、深さ0.2mを測る。埋土はすべて砂礫で幾分盛り上がるようにレンズ状に堆積していた。砂礫の上には杭が打たれ、これに枝を絡ませてシガラミ様にしていた（写真図版９－１)。他の護岸用のシガラミが壁状に枝を積み上げるのに対して、このシガラミ様施設は平面的に広がり、調査中は護岸用シガラミが崩れたものかと考えていた。しかし、砂入Ⅱ区の調査で枝を敷設した遺構が道路状遺構として認識されたことから、これも同様に通路としての機能をもったものであり、ＳＤ０２・０３の北岸に祭祀の場を想定した場合、そこへ至るための道路状遺構である可能性がある。

南端から木器が出土しているが、ＳＤ０２・０３の遺物として扱っている。

南北溝２

南北溝１の西側にあり、北壁では南北溝１と接し、南壁ではやや西へ振る。幅 0.7m、深さ0.5mを測る。西側には複数の肩部が認められ、流れの方向が何回か変化したようである。埋土はすべて砂礫で、溝の肩部を中心に不規則に杭が打たれていた。

南半から木器が出土しているが、ＳＤ０２・０３の遺物として扱っている。

ＳＤ０５（図版13)

ＳＤ０７の少し西側で砂礫に杭を打ち込みそれに小枝を絡ませた施設が検出され、流路（ＳＤ０５）の護岸施設と考えた。護岸施設は２列あり東端は交錯しているため、流れの移動に伴って作り替えが行われたと考えている。ただし互いの埋土はまったく区別できないため両者の関係は不明である。他の流路と同様に流路の大半は砂礫層で埋まり、最上部に砂質シルト層が堆積している。

出土遺物には木器と土器があり、木器は砂質シルト層と砂礫層から、土器の大半は砂礫層から出土している。

木器には人形、馬形、斎串があり(355～369)、人形には同形同大とみなしうるような１対が見られる(355・356)。馬形にも調査区南壁で一括して出土した４点中３点(366・368・369)は、極めて類似した形態をしている。頭部と尻部が特徴的で、ＳＤ０２・０３の馬形には見られない形態である。

土器には須恵器では杯身（54)、杯G蓋（50)、杯B（94)、杯B蓋（63)、皿A(176)、椀（96・97)、高杯（55・60・100)、壺(107)、横瓶(115・116)、甕(113・177)などがあり、土師器では杯A（77・119)、皿A(118)、壺(126)、甕(24・127・128・131)がある。古墳時代後期～平安時代初頭のものが混在している。

ＳＤ０８（図版13)

ＳＤ０８は初めて両岸の検出できた流路で、調査区を斜め横断し南壁側から北壁側へ流れる。流路幅は約10m、深さは約１mあり、古小野川とみなしうる。両岸には杭と小枝によるシガラミの護岸施設がほぼ全域に渡って認められた。護岸施設は東岸ではやや細い枝が使われ数段に積み重ねて丁寧に作られていたが、西岸側では乱雑な作りであった。埋土は両岸近くや最上部では細粒の砂やシルトがラミナ状

に堆積しているが、中央はほとんど砂礫である。流路内には不規則に杭が打ち込まれているところがあり、南壁際ではこれに直径約10㎝、長さ約３ｍの材が引っ掛かっていた。

出土遺物には木器と土器があり、木器の大半は東肩のシガラミ周辺から出土したが、一部は流路内の砂礫層や流路底から出土したものもある。土器は砂礫層中出土のものが大半を占めるが、最上部の砂質シルト層出土のものもある。

木器には人形、馬形、鳥形、斎串、一木鋤がある(370～387)が、馬形は破片を１点確認しているだけである。

土器には須恵器では杯Ａ（69・72)、杯Ｂ（85・93)、杯Ｂ蓋（101・102)、壺（103・104・106)、甕(110）が、土師器では杯Ａ（80・120・121)と高杯（39）が出土しており、古墳時代～平安時代初頭のものが混在する。

ＳＤ０９・１０（図版13)

ＳＤ０９はＳＤ０８の東側に位置し、これに切られて東肩側の一部のみが検出された。肩には部分的に杭が打ち込まれ小枝を絡めていた。埋土の状況もＳＤ０８とほぼ同様であるが、流れの方向はいずれか判断しがたい。ＳＤ１０はＳＤ０９のさらに東に位置する杭列を流路の肩と判断したものである。

ＳＤ０９からは木器と土器が出土しており、木器はシガラミ周辺と砂礫層から、土器は砂礫層中から出土した。ＳＤ１０からは遺物は出土していない。

木器には人形、斎串、用途不明品がある(388～394)。馬形は出土していない。

土器には須恵器では杯蓋（46)、杯Ｂ（83・87・91)、杯Ｂ蓋（62)、杯Ｇ蓋（51)、Ⅲ Ａ（65）があり、土師器では甕(125・129)がある。古墳時代後期～平安時代初頭のものが混在する。

第２節　砂入Ⅱ区

１．概　要

砂入Ⅱ区では洪水堆積物によって大きく分けられた上下２面の遺構面を検出した（図版14)。下層の遺構には溝（ＳＤ１７・１８）と道路状遺構（ＳＦ０２・０３）があり、上層の遺構には道路状遺構（ＳＦ０１）と祭祀土坑（ＳＫ０１～０４）がある。調査区北壁の土層断面図（図版16）ではｃ層がＳＤ１７の堆積物であり、第30層（暗褐色腐植質粘土）が下層遺構検出面である。また、ｄ～ｈ層上面が上層のＳＦ０１上面にあたり、第30層～第27層の堆積後に形成された自然堤防上にＳＦ０１が構築されていることがわかる。自然堤防の東北側には当初低地部が存在するが、粗砂あるいは砂質シルトの堆積でしだいに埋没し、平坦化してゆく。ＳＦ０１はこの間のいずれかに構築されたものである。

２．下層の遺構

上層の遺構とは洪水堆積層によって大きく分けられている。また、出土状況や出土遺物の内容などで大きな差異が認められる。ただ、その間の層についても祭祀遺物は入っており、袴狭遺跡全体で律令期祭祀が断続したとは考えられないが、砂入遺跡（少なくとも砂入Ⅱ・Ⅲ区）においては大きな画期であることは間違いない。

下層の遺構は溝と溝同士に挟まれた道状遺構から成る。上層遺構のような明瞭な道路状遺構ではないが、明らかに祭祀の場として利用された空間である。その中で層的な時期差があり、ある程度の期間祭

祀の場となっていたようである。道状遺構と溝が有機的な関係にあることは確実である。しかし、時期的（層的）に概略を記すと不明瞭と思われるので、下層の遺構についてはまず各遺構の報告をしたのちに、時期的な変遷を出土状態と合わせて報告する。

下層の遺構には溝（ＳＤ１７・ＳＤ１８）と道状遺構（ＳＦ０２・ＳＦ０３）がある。

ＳＤ１７

一時期の小野川の旧河道と思われ、遺構の最終時期は完全に洪水堆積物によって埋められている。埋没時期は上層の遺構の時期に相当するもので、溝（旧河道）として機能していた時期は下層の時期である。ＳＤ１７は小野川とほぼ平行して存在し、最大幅6.2 mと幅の広い遺構である。最大の深度は1.85 mを測る。やや角度を振ったN25° Eの東西方向に主軸を持ち、東から西へ流れている。ほぼ直線に近く蛇行していない。東側でＳＤ１８と分岐しているように見えるが、ＳＤ１７の方が切っており新しい溝である。

ＳＤ１８

ＳＦ０３を挟んでＳＤ１７の南側に位置し、ＳＤ１７と平行に流れる溝である。ＳＤ１７と異なり緩やかにＳ字状に蛇行している。最大幅2.1 m・最小幅1.3 m、最大深度0.5 mの小規模な溝である。ただし、祭祀には十分に利用されており、ＳＤ１７とは比較できないほど多量の遺物が出土している。調査区内での延長距離は70mを越えている。単位として廃棄された状況も推定でき、祭祀形態を考える上に貴重な調査例である。

ＳＦ０２

ＳＤ１８の南側の平坦面である。２つの溝に挟まれていない分、幅は広く部分的に数値が異なっている。基本的にはＳＤ１８からオーバーフローした遺物が堆積した部分と考えられる。最大幅で６m近くを測る。ＳＦ０１とは比較にならないほど、簡単ではあるが一部枝などを敷いており、護岸を含めて道状遺構として利用したものと思われる。

ＳＦ０３

ＳＤ１７とＳＤ１８に挟まれた部分で、道状遺構として認識してよい遺構である。東側が狭く西側が広くなっている。東側の最小幅は1.1 mで、西側の最大幅は5.8 mを測る。ＳＦ０２のようにオーバーフローして溜まった遺物もあるが、幾つかの人形・馬形などは突き刺すなどして当時の祭祀形態の原位置を保っているものと思われる。しかし、硬化面になるほどは使用されていない。部分的に枝葉などが敷かれている。

以下時期的に出土状況を加味していきたい。下層の遺構は大きく３時期に分けることが可能であり、さらに小期に分けれるものと思われる。

①１期（図６）

ＳＤ１８の最下層が該当する。調査区東側部分でのみ顕著に確認できた。２期以降と大きく異なる点は遺物が集中して重なりあって出土していることである。２期以降が祭祀の単位と思われる投棄（祓）の単位があるのに対して明確な単位は認められない。また、２期以降は祭祀遺物に限定されるが、この時期は他の木器（田下駄）や一般に使用された土器（煤付着の甕など）も出土している。

ＳＤ１８は開削された当初のためか、溝底は平坦であった。シルト層などの堆積はなく、ぎっしり遺物が堆積した状況であった。遺物間にシルト・砂の洪水堆積物はほとんど含まず、溝底に堆積した有機

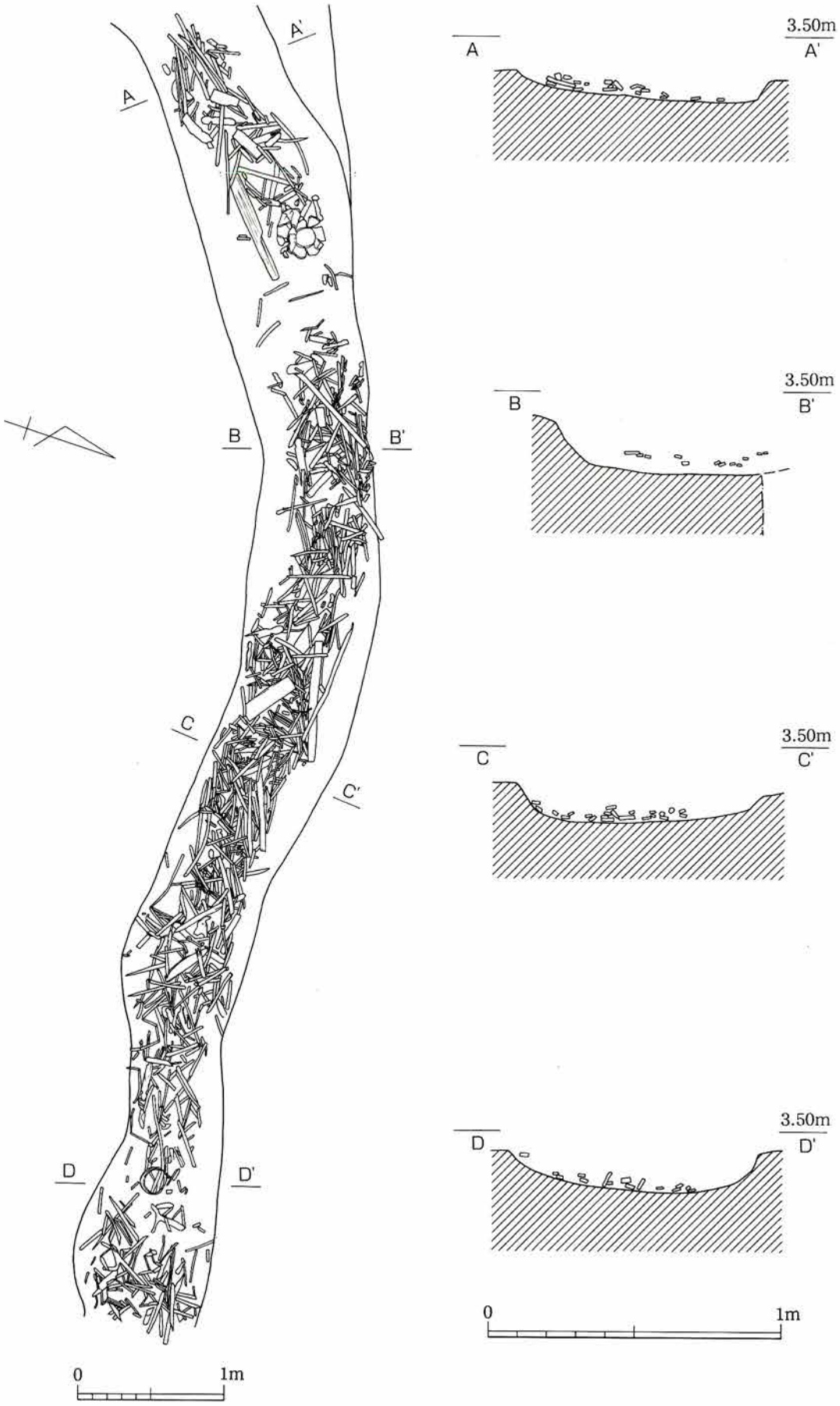


図6　ＳＤ18最下層遺物出土状態図

質を含むシルトが溜まっていた。小野川の旧河道の１つであるＳＤ１７はこの時期まだこの位置を流れておらず、調査区内では確認されていない。ＳＤ１７は１期のＳＤ１８最古段階のレベルより上で遺構は検出されていることから、次の段階以降に開削（流れた）ものと思われる。

出土遺物は斎串が最も多く、次に人形・馬形が続いている。量的には斎串が全体の７割近くを占めている。Ａ類とＦ類が多く、Ｄ・Ｃ２類が続きＥ類が少量である。次に田下駄・曲物などが出土している。脚が出土単位がないことと、混在していることから、祭祀の状況が異なっているものと思われる。今のところ砂入遺跡で最古の祭祀の場で、他地点では確認されていない。

②２期

ＳＤ１８の下層がこの時期になる。次の時期の遺物が上に重なって出土していることから、確実に分離することは困難であったが、一応洪水砂で分けている。ＳＤ１７やＳＦ０２・ＳＦ０３からも該当期の遺物は出土しているが、基本的にはＳＤ１８の下層からの遺物がオーバーフローして溜まったものと思われる。本来的にはＳＤ１８の下層のみが対象となったと考えている。遺物量はこの時期から増加したものと推測される。

全体に渡っていたと思われるが明確に指摘できるのは、東側部分（図版18）と中央部分の湾曲部分（図版20）の両地点である。

東側部分では人形と斎串が主に出土している。人形はＡ類に限られている。人形には墨書や刻み（ヘラ描き）で顔表現を行った人形は確認されていない。大きさはやや小型のものが多いが30㎝近くのものも存在する。斎串は新しい時期のＢ・Ｅ類以外は出土しているが、Ａ類が最も多く次いでＤ類・Ｆ類となっている。馬形はほとんど出土していないが、出土している部分では斎串Ｆ類が伴っている。一応かたまって出土しており、人形では５点、斎串では図化したもので７点（破片を入れると確実なもので12点）の集中した単位が確認できる。人形・斎串ともに同一材で作成した遺物であることが、幾つかは確認できる。可能性としては同一材から作ったのではないかと思われる。

中央湾曲部分は上に多量の廃棄単位があり、確実に分離することが困難であったが、一応砂層で分けている。ほぼ東側部分と同じ状況である。人形はＡ類に限られ、顔表現のある人形は認められない。斎串はＡ類が最も多く次いでＤ類・Ｆ類となる点も同じである。東側以上に単位が明確で、同一材で作成されたと断定することが可能な資料である。１単位（束）はほぼ同一材で作成しているものと思われる。馬形は確実には出土していない。この時期は砂入Ⅰ区から砂入Ⅲ区まで確認されている。

③３期

この時期は下層の遺構全体に広がっており、遺物量も最も多く、砂入Ⅱ区での律令期祭祀の盛行期と思われる。ＳＤ１７はやはり小野川の旧河道で積極的には利用していなかったと思われるが、前段階のように溢れた遺物が出土したのではなく、一部は利用されたと思われる。この時期の大きな変化は、水に流すという意識だけでなく、原位置で祭祀を行ったものと思われる。ＳＦ０３の道の上面で祭祀を行っており、祭祀形態が変化したものと思われる。人形・馬形・斎串を突き刺しているものである。

この時期はＳＤ１８の溝底・ＳＤ１８の肩部とＳＤ１８の溝内・溝内から溢れ出した状態のものに分けられる。ＳＤ１８溝内で顕著な部分は中央の湾曲部（図版20）で、２期の集中部分と同一地点である。斎串と人形が各々束状にされて流されていたようである。ひと塊りとなって数単位となって出土している。人形は人形で、斎串は斎串で束にしている。馬形は含まれておらず、斎串も同タイプだけで１束となっている。Ｄ類の斎串は頭部が不明瞭だが、頭部と確認できるタイプの斎串・人形はすべて頭部を底

（水）に向けた状況で出土している。斎串の方が単位の数が多く、５～12本の単位である。人形は少なく、３～８本の単位である。残された状態の遺物の数で、本来の単位ではなくこれより多い数である。この時期では数点の馬形が出土しており、馬形も祭祀に使用されていたことがわかるが、馬形は１束にはされていない。

斎串は新しい時期のＢ類以外は出土しているが、前期と同じでＡ類が最も多く次いでＤ類となっており、Ｆ類は量的に減少している。Ｃ２類・Ｅ類も少量ながら出土している。１期に少量見られた刻みによる顔の表現をする人形も再び加わっている。量的には人形Ａ類・Ｂ類が最も多く、Ｄ類が続いている。前段階に比べると、Ａ類でも大きさのバラエティが出てくる。単純に大型化したわけではなく、細いタイプ・太いタイプや小さなタイプ・大きなタイプや脚が長いタイプなど変化に富んでいる。Ｂ類にも大小がある。馬形は極端に大きなものはなく、鞍を有するＡ類はまだ出現していない。脚は１本と４本の両者がある。

溝底の出土状態は、１期のものと若干似通っている。１期ほどぎっしりと詰まって出土していないが、出土遺物の内容に祭祀遺物以外のものが混ざっている点は類似している。田下駄や曲物などが出土している。２次堆積の特徴なのであろうか。今のところはある程度の洪水砂が入っていることから最小限の時期差を求めることが可能である。

溝内出土の遺物は部分的にかたまっており、統一的なまとまりはない。上流から流れて一括堆積した状態を示しているものもあり、ばらけた状態で溜まったものもある。これらは上流部の肩部と同一時期の可能性がある。肩部分と道上にオーバーフローした遺物は同時期の可能性もある。特に、上流の道上と下流の溝内が同じ時期の関係が今後生じる可能性は理論上考慮する必要があることから詳細に考えてみたい。現状ではそのような接合関係が認められず、今回の調査地内での接合関係でなく、さらに離れた同士での同時期の関係を考える必要があろうかと思われる。袴狭遺跡群内では今後検討する課題であろう。この遺構内からは人形・馬形・斎串以外の種類が増加している。前段階から出土している舟形に加えて、刀形・刀子形・剣形・鋤形・紡錘車形が確認されている。斎串も新たにＥ類が加わっている。

ＳＤ１７も今までと多少異なった出土状況を示している。前段階までほとんど単独で出土していた遺物がある程度のまとまりを持って出土していることから、使用頻度としては少ないものの祭祀の場として利用されていたことが想定できる。

ＳＦ０２はＳＤ１８の南側に位置しており、ＳＤ１８上層のオーバーフローした遺物が多く位置しているものと思われる。まとまった状況でそのまま移動したような部分も認められる。レベルが僅かにＳＦ０３より低いこともあって、ＳＦ０２側に堆積したようである。出土遺物の内容はＳＤ１８上層と共通している。鋤形・刀形・舟形なども出土している。出土遺物の内容は他遺構に比べてやや馬形が多いように思われる。

ＳＦ０３の出土状況は下層の遺構のなかでも重要な例である。特別に明確な部分は西端に近い部分で、遺物取り上げ時に片足の人形や下部の欠失した斎串が多いことから、その後注意をしたものである。遺物取り上げ後、下部で人形の脚や斎串Ｃ類に近い棒（串）状の細長い材が遺構面上に突き刺さっていた。これらは遺物整理段階で、その後取り上げた脚と本体が接合されたことから、原位置に立てられていたことが証明された貴重な調査例である。同様に馬形の脚と斎串も接合したことから、３種の遺物を使用した祭祀形態が復原できるものと思われる。これ以前は最終段階の祓の流し場であったものが、この時期は原位置で祭祀遺物を立てて祭祀を行ったものである（図版28）。ＳＤ１８の肩部に近い部分から確

認しており、肩沿いとやや離れた位置から検出している。溝の肩沿いに並んでいるものは、西側から斎串（複数？）・人形(879)・斎串・斎串・人形(880)・馬形(928)・斎串（1146）・馬形・人形（875）・馬形(908)・斎串（複数？）、50cm前後奥に西から人形（1323）・馬形（1364）・人形・馬形（1349）・人形(1322)・馬形（1361）と並んでいる。内側は人形と馬形がセットで３組並んでいるが、溝沿いは明確なセット関係をつかむことはできないが、当時の祭式を復原する際の好資料になるかもしれない。それ以外の地点でも同様な出土状況があるのかもしれないが、明確には検出できなかった。

④４期

３期と大きく区別することは出来ないが、遺構の上から大きくはＳＤ１８の一部が埋められ橋状の遺構が設けられることによって、東側のＳＦ０２と西側のＳＦ０３が繋がったことが大きな変化である。この時期から、溝に流す行為から道状の遺構での祭祀が重視されはじめたのではないかと想像される。

洪水堆積物の中砂の上に自然木を中心に橋状遺構を設けて、道状遺構を通したものである。規模的には上層のＳＦ０１と比較すると小規模なものであるが、同種の性格を有するのではないかと思われる。自然木の枝を払っただけで先を尖らせた杭を打ち込み、横木（やはり自然木）を掛け、それに葉の付いた針葉樹の枝葉を敷いている。この中には上層のように遺物は含まれていない。出土状況から橋状遺構周辺以外は、３期と区別することは出来ない。遺構から見た時期設定であり、大枠では３期と同様であるが、５期の特徴（大型祭祀遺物・墨書）がこの遺構を画期とする可能性はある。

⑤５期

上層か下層か判断は出来ないところであるが、砂入Ⅱ・Ⅲ区では祭祀が行われていない時期である。ただ、間の洪水堆積物から出土した遺物のなかには、時期を画する遺物が含まれていることから、この時期を設定した。出土遺物からだけであるが、前代と異なるのは、大型の人形・馬形がこの時期から出土することと、人形に墨書表現が表れることである。遺物からみて、この特徴は上層と下層との差になるものであり、上層の時期と考えた方が妥当かもしれない。（渡辺）

３．上層の遺構

上層の遺構にはＳＦ０１とその上に築かれた３基の土坑（ＳＫ０１～０３）がある。ＳＫ０１～０３は個々にＳＦ０１に関係する祭祀の遺構として注目される。土坑出土として一括性もあり、当時の祭祀形態や祭式を彷彿とさせる資料である。

ＳＦ０１（図版31～33）

ＳＦ０１は調査区のほぼ中央で検出された、東西に延びる枝敷をもつ道路遺構である。遺構は、シルトないしは砂質シルトの堆積（一部では中～近世河道の砂層）に被覆されており、現地表面から－1.0～1.5m（海抜4.7m前後）に埋没していた（図版16）。また東端付近では、遺構を構成する枝敷が検出できず、一部は中～近世河道により浸食を受けていたものと思われる。

調査では機械掘削後人力による道路面の検出を実施した。路面の枝敷は腐朽していたため、被覆層の除去は、遺構に接触しない足場を設置しておこなった。この段階で、路面上よりＳＫ０１と、これにともなう祭祀遺物群を検出した。さらに道路に対し直交する方向に６ヵ所の断面観察ラインを設定し、これに沿って断ち割りを実施して断面の記録をおこなうとともに、上面より順次枝敷を除去していった。この過程で、ＳＦ０１は数次にわたり板・枝がくりかえして敷設され、また、拡幅が行われたことが確認され、さらにＳＫ０２・０３が検出された。

これに加えて、枝敷中に敷き込まれた状態で、多数の木製祭祀遺物が出土した。最終的に、枝敷を完全に除去した後、枝敷を固定する杭列の記録を行い、ＳＦ０１の調査を終了した。

ＳＦ０１の東端、西端は、調査区内では確認できなかった。調査区内で確認された延長は、約31m、最大幅は約３mである。また、道路の南側に、延長2.2m、幅1.6mの方形の突出部が設けられており、この部分にも同様の枝敷・杭列が検出されている。

６ヵ所で実施した横断面の観察から、ＳＦ０１は古小野川水系の氾濫原に設けられたものと判断された。主として砂層ないしはシルト層で構成された氾濫原は、北から南へ下がるゆるやかな傾斜をもっていたが、ここに２列に並行した杭を打設して、この間に厚く樹木の枝（一部では板）を敷きつめている。敷設された枝は、主に直径数cmまでの細いものである。枝の敷設は、一定の単位をもって行われていたようで、適宜方向を変えながら置かれており、一部では市松状を呈していた。枝束の移動を防止するため、路面両側の杭列にともない、これと平行にやや太めの枝が設置（一部では杭に絡めるように）されていたほか、路面中央でも枝束の間に杭を打設し、太い枝を路面に直交に設置している部分が認められた。

ＳＦ０１敷設前の地形面が凹んでいるか、または人為的に掘り凹められた部分では、５～６回にわたって、枝を厚く敷きつめており、敷設回数は場所により異なっていることも確認された。

ＳＦ０１では、数回の拡幅・改修が行われたものと思われるが、その正確な回数は、調査のなかでは判断できなかった。しかし、道路両側の平行する杭列は、最も内側の杭列の幅が2.0m、最も外側の杭列で3.2mを測る。また調査区内だけでも、のべ数百本の杭が用いられている。

ＳＦ０１上からは、上述の土坑に伴う資料以外に、枝束とともに敷き込まれた、人形・斎串・馬形・刀形・折敷等が出土した。これらの遺物は一括性が認められない散漫な出土状況を示してはいるものの、ＳＦ０１西半部でやや密度の高い傾向が看取された。これらの木器は、ＳＫ０１・０２に見られたような、一括した遺棄（廃棄）状況ではないとはいえ、複数回の祭祀の結果であると推測される。

なお、土器では須恵器高杯(134・135)が出土している。（久保）

ＳＫ０３（図７）

ＳＦ０１構築時の地鎮を主目的とした祭祀土坑と考えている。人形（1710）を土坑の肩部から上部にかけて沿わしている。同様に底には人形（1704）を沿わしている。

ＳＫ０２（図版30）

ＳＫ０３の上部に築かれた土坑である。上面に枝などで覆われ道の面となっていることから、ＳＦ01使用時に築かれたものである。ＳＦ０１構築時の地鎮を主目的としたか、ＳＦ０１使用中での祭祀土坑と考えている。その中に人形13点・斎串３点・容器２点を埋置している。土坑内は意図的に埋納しているようで細かい砂が入っていた。人形は刻み７点と墨書６点と刻みの方が多いが、１点は小型品で大型品に限れば同数である。頭部は平坦か丸みを持っているものであるが、１点だけ圭頭のものがある。また、墨書人形の中に１点（1731）だけ墨書のムードが異なっている。他は官人を表しているが、これのみ長い髪で髭を有している。何か違う意図を持っているように思われる。

ＳＫ０１（図版29）

ＳＦ０１の上に築かれた土坑である。砂入Ⅱ区で確認した限りでは律令期では最新の遺構と思われる。土坑は浅い皿状を呈しており、ＳＦ０１の杭を利用して作られている。最大径195cm、深さ45cmを測る土坑である。杭に接するように曲物が置かれていた。この曲物の側板は墨書で顔表現の行われている人

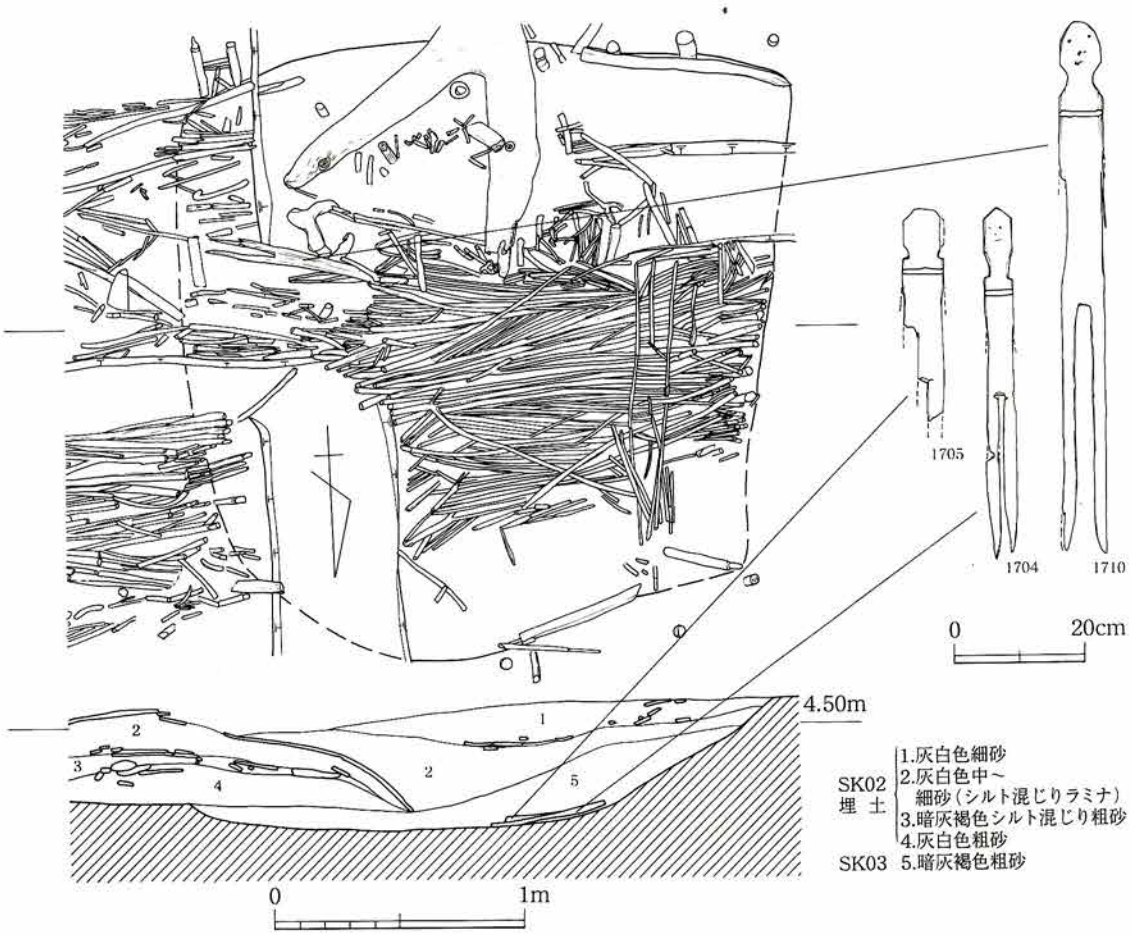


図7　ＳＫ０３

形を使用している。顔を外側に向けて側板にしている。やや離れた位置に人形12点と斎串６点が重なるようにばらけて出土している。頭部を揃えておらず、バラバラになっている。人形の一部は脚が杭に接している。杭の間に土坑を掘り込み埋納場所を設定したと思われる。出土状況での斎串と人形の規則性はないようである。人形12点の内訳は大型が４点、中型が８点の倍数になっており、人形の半分の６点が斎串の数になっている。数に意味がありそうである。人形はすべて墨書されており、その冠の形状や髭の状態にも変化がある。ただ、描いた人物は同一人物と思われる。斎串もすべて大型品で上下に２段の切り込みのある斎串Ｂ類である。他に斎串状の板材が１点出土している。遺物群の上面は中砂でやや硬くしまっていた。その上には枝葉は置かれておらず、ＳＦ０１使用放棄後の堆積ではないかと考えている。使用を止めるにあたっての祭祀を行った状況か、原位置での最後の祭式だったのではないかと推測される。（渡辺）

第３節　砂入Ⅲ区

１．概　要

調査時期が近接したことにより調査空間が継続できたことと、担当者が継続したことから、砂入Ⅱ区と調査杭や調査方法を共有し、同じ遺構ナンバーを使用し、平面的垂直的に同じ調査を行った。

砂入Ⅱ区と大きく異なることは江戸時代の大きな洪水砂を確認した下の層で、上層の遺構を確認でき

なかったことである。砂入Ⅱ区の調査でＳＦ０１はすでに北側に延びており、砂入Ⅲ区の調査区域には入っていない。下層の遺構は砂入Ⅱ区と同様である。遺構は溝と道状遺構である。砂入Ⅱ区から延びているのは、溝のＳＤ１７とＳＤ１８で、道状遺構のＳＦ０２とＳＦ０３も続いている。新たに確認した遺構はＳＤ１９・ＳD20と道状遺構のＳＦ０４である（図版34)。

２．下層の遺構

ＳＤ２０

浅い溝で、洪水砂が堆積していた。方向もほぼ南北方向でＳＤ１８と直交する主軸方向を取っている。律令期以降の新しい時期の溝と思われるが、出土遺物がないことから時期は確定出来ない。しかし、砂入Ⅱ区の洪水状況と同じとすると江戸時代まで下る可能性が高い。幅1.2～1.4mで深さ0.2～0.4mを測る。検出した長さは5.2mである。

ＳＤ１９

小野川旧河道のＳＤ１７の一時期の大きな洪水によって切られているが、本来はＳＤ１８と同じ溝と考えられる。断続していることから遺構番号を変えただけである。小野川もこの付近で流れを南西方向に地形の制約から変える部分で、洪水も多かったと予測される地点である。両方の溝ともに上部を洪水によって削られたもので、時期的にはＳＤ１８の方が古い溝である。下面で検出したことにより図の表現上、ＳＤ１８（ＳＤ１９）の方が切っているように表しているが、時期的には逆で上部を後世の洪水で流されたことによるものである。分流しているのも１時期の洪水によるものであろう。ＳＤ１９は、砂入Ⅱ区の時期区分でいう２期に相当する時期の溝と思われる。溝底にある程度密集して遺物が出土している。遺物同士が接している程度で折り重なったという状況ではない。調査区西から斎串（2014）・田下駄（2020・2022）・刀形（2003）・梯子（2024）・人形（1997）・建築材（2023）・人形（1994）・馬形（2154）・建築材（2019）・須恵器台付き長頸壺（14）・馬形（1999）・斎串（2008）・土師器甕（22）・馬形（2000）・田下駄（2021）・建築材・斎串・馬形（2002）が出土している。他に間に数点の斎串が存在する。祭祀遺物だけでなく、建築材や農具・日常土器が含まれている。

ＳＤ１８も全般的に砂入Ⅱ区と比較すると溝底や溝内の遺物が多く、肩部分や道上の遺物が少ない。また出土遺物の内容も祭祀遺物と比べると他の遺物が多く出土している。№11のＳＤ１８湾曲部でも人形・馬形・斎串とともに曲物が出土している。容器の可能性も求められる。他地点でも土器や田下駄が出土している。

ＳＤ１７

砂入Ⅱ区では明確に祭祀遺物を単位で投棄していなかったが、単位で理解出来る出土状況がある。それでは、人形１点（2150）と斎串Ｄ類が７点（2145・2166他）がひと塊りに、斎串のＡ類・Ｄ類・Ｅ類が２～５点ずつと人形２点が固まっている。砂入Ⅱ区では一束とされる時は同タイプの斎串をまとめていたが、ＳＤ１７では違う種類の斎串をセットにしている点が大きな差異である。確認した場所は、ＳＤ１７が緩やかに蛇行しようとする淀みとなっている部分にあたる。

ＳＦ０２・ＳＦ０３・ＳＦ０４

砂入Ⅱ区と状況に変化はない。同じような感じで遺物が出土している。ＳＤ１７の北側にも道状の平坦面があり、便宜的にＳＦ０４とした。しかし、ＳＤ１７の使用頻度が低いのと比例してＳＦ０４もほとんど使用された場ではなかったようである。

第４節　砂入Ⅳ区

１．概　要

調査区内における土層の堆積は、部分によって多少の変質があるものの基本的には並行堆積で、層の乱れは少ない（図版42）。現在の地表面である茶褐色シルト層より以下は、シルト層と砂層が交互に堆積し、河川の影響を受け続けて形成された状況である。

各堆積層のうち、第４層（淡灰褐色礫混じりシルト）や第７層（茶褐色礫混じりシルト）、第11層（黒褐色細砂混じりシルト）は、マンガンの集積や細砂のラミナなどが認められ、水田土壌層の特徴を呈する。このうち、畦畔などの遺構が確認できたのは、第11層のみであった。各水田土壌層の上面には砂が堆積しており、洪水による水田の廃絶を暗示する。

第９層（褐色シルト層）は比較的安定した堆積で、上面は遺構検出面である。断面からも多数の遺構が確認できた。

掘削した最下層の第12層（暗褐色シルト）は、植物遺体（ピート）を大量に含む無遺物層である。

以上の各堆積層のうち、遺構検出ができた第11層上面と第９層上面を、それぞれ第１遺構面・第２遺構面と呼称する。第１遺構面からは古墳時代、第２遺構面は奈良～平安時代を中心とする遺構がそれぞれ検出された。

第２遺構面の上層にあたる第７層、ならびに２枚の遺構面に挟まれた第10層は遺物包含層で、土器・木器などが出土した。

２．第１遺構面の遺構（図版42）

水　田

調査区のほぼ全域において確認した。畦畔は、調査区中央を東西方向に貫くもの（畦畔０１）と、東部において調査区を南北に横断するもの（畦畔０２）の２条を検出した。また畦畔０２と直行する形で、水田面の段差も見られた。本来は段差の上面に畦畔が設けられていたと考えられる。水田面を区分する機能を考慮して、この段差を畦畔０３と呼称する。

畦畔および水田面は上面を第10層に覆われており、認識は比較的容易であった。畦畔が西側に偏在していることから、大半が流失したと見られ、本来の広がりについては明らかにできなかった。畦畔はすべて同一平面で検出した。遺構に伴う遺物は少ないが、上面を覆う洪水砂の出土遺物などから、古墳時代後期に営まれた水田址と判断した。

なお、水田面上層の洪水砂（第10層）からは主に木器が出土しており、人形（2227～2229）、木皿・曲物類（2232～2237）、木錘（2242）、錐柄（2241）、楔（2244）、机の脚（2239）などがある。

畦畔０１

西部で検出された。調査区の長軸とほぼ並行に、東西方向へ延びる。総延長は36.0mで、最大幅0.80m・最大高0.15mを測る。畦畔の上部は洪水の影響で大半が流失しているが、断面は本来カマボコ形と思われる。杭など芯となる施設は内包しない、土を積み上げただけの構築である。東西の両端は消滅しているほか、遺存部分において明瞭な連接部分を検出できず、水田面の規模や区画の状況を知る手がかりは得られなかった。対応する畦畔についても、平面精査や断面観察などで把握に努めたが、確認でき

なかった。

畦畔０２

調査区東部において、調査区を北東から南西方向に横断する形で検出された。直上の洪水砂によって覆われ、検出は比較的容易であった。総延長は13.3mで、南北とも、さらに調査区外に延びてゆく。最大幅1.25m・良好に遺存する部位で高さは0.20mを測る。断面はカマボコ形を呈する。内部には補強する構造物が見られず堆積も周囲の水田とほぼ同質なことから、田面の土を盛り上げた構築といえる。北部では良好に遺存するが、南部は畦畔の上面が大きく削平されている。

北部壁面から2.0m南では、畦畔０３が連接する。直交して北東方向に延び水田面の区画を示す。一方、反対側にあたる西部では、連接する畦畔を検出できなかった。水口等の施設についても認められなかった。

畦畔０３

調査区の東部に位置する。畦畔０２の北端付近から直交して、南東方向へ延びる。斜面に直交する水田の段差のみが確認され、調査では縁辺に畦畔は存在しなかった。途中9.3mの部分で屈曲を見せ、ほぼ東西に向きを変えて調査区外へと続く。南北の田面におけるレベル差は、最も良好に遺存する西端部分で40cmを測る。田面は東に向かうにつれて緩やかな傾斜を見せる。上層の洪水砂も傾斜に従って厚く堆積するようになる。傾斜は洪水による削平がもたらしたと考えられ、水田の遺存状態に大きな影響を与えている。段差も東側では僅かとなることから、段差上の畦畔は流失した可能性が高い。

段差ならびに畦畔を補強する施設や、水口等の存在については確認できなかった。

３．第２遺構面の遺構（図版43）

Ａ．掘立柱建物

調査区内で確認した掘立柱建物は４棟ある。断面観察で対応する柱穴が見られたが、平面では構成する柱穴の一部を検出しただけで、全容が把握できる建物はなかった。調査区が東西に細長いため、建物はさらに南北方向へ広がると想定される。

長軸方向が北東（ＳＢ０１・０２）と北西（ＳＢ０３・０４）に分かれ、それぞれが近い位置にあるが、群構成や前後関係などは明らかにできなかった。出土遺物は寡少である。

ＳＢ０１

調査区の西部に位置する。調査区内で確認された柱列は南北２間・東西１間分で、断面観察から西方向へ延びてゆく。柱穴の配置状況から、総柱の建物であろう。ＳＡ０１が西側の柱穴列と同一の方向を示し、建物を挟んで東西に延びるが、切り合い関係などは確認できず、一連の遺構とみられる。

南北0.97m以上・東西2.10mをそれぞれ測る。長軸はＮ－67度－Ｅで北北西に向ける。南北・東西ともに柱間距離は0.80～1.20mで、おおむね等間隔を保っている。

柱穴掘り方の形状はおおむね正円を呈する。検出面における直径は25～30cmで、比較的ばらつきが少ない。また深さも20cm前後で、各柱穴ともにほぼ共通した深さであった。

掘立柱建物を構成する柱穴内からは、出土遺物がほとんど見られなかった。須恵器を中心に数点出土したが、いずれも小片で器種・細部の特徴は判別できなかった。

ＳＢ０２

中央部西寄りで検出された。ＳＢ０１と０３の中間に位置し、両者との距離はそれぞれ15m・25mを

測る。建物の南部は確認調査のトレンチによって失われている。東西方向は３間・南北方向１間以上を数える。東側で２個の柱穴を確認しており、総柱の建物と考えられる。

柱穴列はさらに１間程度南へ延びる可能性もあるが、ほぼ現状で確定すると見てよい。南北1.32ｍ以上・東西2.78ｍをそれぞれ測る。長軸はＮ－64度－Ｅを指向する。ともに柱間距離は0.90～1.20ｍで、おおむね等間隔である。

柱穴の掘り方は隅丸方形に近く、検出面での径が一辺30㎝前後を測る。上面の削平が著しい南東部の柱穴は深さが20㎝以下で、わずかに遺存しているだけであった。検出面からはばらつきが見られるものの、水準高から柱穴底までの深度は比較的近く、構築当初には各柱穴とも統一のとれた深さだったと思われる。

検出できた６個のうち、柱穴痕跡の確認できたものはなかった。また礎盤や根がらみの役割を果たす構造物も存在しない。柱穴内から出土遺物は見られなかった。

ＳＢ０３

調査区の東部に位置し、ＳＢ０２が西25ｍ・ＳＢ０４が東15ｍの距離で存在する。調査区の南端近くで検出されたことから、建物の北辺を構成する４基の柱穴のみが調査対象となった。南壁の断面には４基すべてと対応する柱穴の痕跡を確認できたため、東西３間で南へ広がる総柱の掘立柱建物を想定した。

柱列の総延長は6.20ｍで、長軸はＮ－６度－Ｗを指向する。柱間距離は1.60～2.00ｍで、ほぼ等間隔を保っている。

柱穴掘り方の平面はおおむね正円形を呈する。検出面での直径は25～30㎝で、深さは平均して40㎝を測る。２基の柱穴から柱根の痕跡を確認できた。推定される柱根は直径15㎝である。柱穴内から、出土遺物はなかった。

ＳＢ０４

調査区の東部に位置する。４棟のうち最も東にあり、周辺にはピット群が密集する。

検出した柱穴は南北２間分・東西２間分で、それぞれ調査区外へと延びてゆく。Ｌ字状に配置された柵列の可能性もあるが、区外の状況が不明のため掘立柱建物の北西隅部分として報告する。

南北2.33ｍ以上・東西1.73ｍ以上をそれぞれ測る。西側の柱穴列を主軸とした場合、Ｎ－20度－Ｗ：南北方向を指向する。柱間距離は南北方向：1.10ｍ・東西0.68ｍで、東西の柱列が若干広い。

柱穴掘り方の形状は楕円で、直径は20～40㎝、深さは20㎝前後を測る。

内部から柱根の痕跡は確認できなかった。また遺物も出土していない。

Ｂ．柵列

調査区内で確認されたピットのうち、数基が直線に並ぶ柱穴列を柵列と認識した。２条確認されている。

ＳＡ０１

調査区の西部に位置する。調査区内で確認された柱穴は７基で、中央部分の３基はＳＢ０１と重なっている。西方向は断面観察の結果から、さらに調査区外へと延びてゆくが、東方向では連続する柱穴が確認できなかった。

総延長は10.28ｍで、主軸をＮ－66度－Ｅに向ける。柱間距離は0.80～1.20ｍを測り、ＳＢ０１の柱間距離とほぼ一致する。

柱穴掘り方の平面は円形を呈し、掘り方の直径は25～30㎝、深さ30㎝前後を測る。内部から柱根を確

認したものはなかった。遺物は出土していない。

ＳＡ０２

中央からやや東寄りに位置する。南７ｍにはＳＢ０３が存在し、東側には数多くのピット群が存在する。調査区内で確認された柱穴は４基、北方向は断面観察の結果から、調査区外へと延びてゆく。

総延長は5.50ｍで、主軸をＮ－18度－Ｗに向ける。距離は多少離れるが、ＳＢ０４と近似した主軸方向である。柱間距離は1.80～2.20ｍを測る。

柱穴掘り方の形状は円を呈する。掘り方の直径は20～30㎝、深さ40㎝前後を測る。内部から柱根が確認されたものはなかった。遺物は出土していない。

Ｃ．ピット群

建物や柵列の柱穴と認識したもの以外にも、調査区には数多くのピットが存在する。調査区西部に集中しており、中には斎串や完形の土器を内包したものなど、特異な状況を呈するものがある。

ＳＰ０１

調査区の東部北壁に接する形で検出された。西２ｍにはＳＡ０２が近接する。

一部が調査区外へ出てしまうため一部不明な点を残すが、外形はほぼ正円形を呈する。中心軸は南北が0.25ｍ・東西0.50ｍ、現存の最大深度は0.32ｍをそれぞれ測る。底面はほぼ平坦であった。埋土は、黒褐色シルト～シルト質細砂のみで、柱穴等の痕跡は確認できなかった。

埋土からは、完形の斎串が２点（2248・2249）出土した。両者はいずれも底部から浮いた形で検出され、このほかに遺物は見られなかった。木製祭祀具のみが出土した状況は、ピットの性格を考える上で注目される。

砂入Ⅱ区の上層で検出されている、木製祭祀具を埋納した土坑と共通した性格を有する可能性がある。

ＳＰ０２

調査区の東部南壁寄りで検出された。周辺には多数のピット群が密集するほか、西５ｍにはＳＢ０３が、また東８ｍにはＳＢ０４がそれぞれ存在する。

外形はおにぎり状の隅丸三角形で、底辺を南に向ける。規模は、南北方向が0.70ｍ・東西方向が0.55ｍ、最大深度は0.38ｍをそれぞれ測る。底面は平坦であった。埋土は、茶褐色中砂～細砂を呈する。柱穴等の存在は看取できなかった。

埋土の内部からは、土師器杯（243）がほぼ完形の状態で出土した。口縁を上に向けて正位置で検出したが、底部からは25㎝浮き上がっている。平安時代初頭の遺物である。

ＳＰ０３

調査区の東半部、ほぼ中央に位置する。南３ｍにはＳＰ０２が近接する。

外形はほぼ正円形を呈する。中心軸は南北0.78ｍ、東西0.70ｍ、現存の最大深度は0.32ｍを測る。底面は僅かながら擂り鉢状で、中心に向かって深くなる。埋土は灰褐色シルト質細砂で、中央には淡黒褐色シルトが見られ、柱穴の存在を示している。

埋土中央には礎盤として利用された木片（2254）があった。検出面で上端が露出しており、ピットの上面は、ある程度削平を受けている。ピット内からは、ほかの遺物は見られなかった。

ＳＰ０４

調査区の東部に位置する。東１ｍにはＳＢ０４が近接する。外形はほぼ円形を呈すると思われるが、西側を円形のピットによって切られており、一部不明確な部分を残す。規模は南北0.85ｍ、東西0.68ｍ、

現存の最大深度は0.24mをそれぞれ測る。ピットの周壁から底面にかけて浅い擂り鉢状を呈する。埋土は黄褐色シルト質細砂で、中央付近は若干シルト質が強くなる。柱穴等の存在を示す明らかな堆積は見られなかった。

内部からは径15cmの円礫と平安時代初頭の須恵器甕（222）が出土した。甕は横倒しで、円礫は口縁部に接する位置で検出されている。下半部は切り合いを持つピットの影響で欠損しており、口縁部付近だけが遺存する。

ＳＰ０５

調査区の東壁沿いにおいて検出された。南４ｍにはＳＢ０４が存在する。

外形は正円形を呈する。規模は直径が0.50m、深度は0.28mをそれぞれ測る。底面は平坦で、周壁も垂直に近く底部へと達する。埋土は褐色シルト質細砂を呈する。柱穴等の存在は堆積状況から看取できなかった。

底部からは土師器甕の口縁部付近の破片が出土しただけで、他の遺物は含まれていない。

その他

集中的に存在するピットの大半は、配置状況に規則性を見いだすことができなかった。当地における活発な生活の痕跡であるが、存続時期や性格を断定できなかった。なお、複数時期の遺構が、同一平面で検出されている可能性もあろう。しかし調査区の堆積状況では、第９層よりも上層から設けられている遺構はなかった。第９層が安定面として機能していた時期に設けられた傍証と考え、大局的には掘立柱建物などの遺構と近接する時期と理解したい。

第５節　砂入Ｖ区

１．概　要

今年度調査を実施した地点は、昭和62年度に調査を行った砂入Ｉ区の対岸に当たる。今回の調査では第１面～第４面の４時期の遺構面と、第３面と第４面の間に古墳時代前期の包含層を検出し、調査を実施した。

砂入Ｖ区は小野川に向かって南に開く丸谷に対して直交して設定した調査区である。調査区の西端は断面図（図版44）が示すように地山面が急角度に立ち上がり、東側に向かっては緩やかに傾斜を見せはじめている。立地的には調査区西端は山裾の傾斜変換点、中央部から東側にかけては谷部に位置している。

砂入Ｖ区において検出された複数の遺構面は、谷部が洪水砂・湿地堆積物によって埋没してゆく過程において形成されたものである。

山裾の傾斜変換点の周辺では地山面上から砂入Ｖ区最古の遺構である縄文時代前期の遺構が検出されている（第４面）。この時点では谷部はまだ顕著に埋没はしていない。

第４面は縄文時代前期の遺構面である。遺構面は調査区西端の山裾部において検出された。東側を弥生時代～古墳時代にかけての旧河道によって削られており、極めて限定された部分に遺存している。

遺構は不整形な土坑を５基検出した。いずれも、山裾の傾斜変換点に位置している。この内、施工時に盛土下となる部分については上面での検出に留め、２基の土坑を完掘・１基の土坑についてはその南

半分を精査した。

土坑内及び遺構検出面を覆う遺物包含層内からは爪形紋土器、磨り消し紋土器、押型紋等の土器片及び多量の石錘、磨石、剥片等が出土している。

第４面以降、谷部は洪水砂・腐植物などの湿地堆積物によって徐々に埋没して行く。古墳時代前期までには、調査区西半部において標高4.8 m前後となり、南東方向へむけて緩やかに傾斜するが、ほぼ平坦化するものと（図版44中41・44層）と考えられる。

44層からは直径１m前後の倒木１本・株４ヵ所が検出されている。木の時期については詳らかではないが、第３・第４面間において検出された遺物包含層（40層）が古墳時代前期であり、それよりも古い層（44層）に生えていた可能性が高いこと、また、同様の倒木がＩ区においても多数出土しており、年輪年代測定法からは、それらの倒木の時期が弥生時代後期から古墳時代前期であると考えられている。

第３・第４面間において検出された遺物包含層（40層）は調査区西南半部において局地的に検出されている。標高は５m前後である。第３面の水田耕作にともない攪乱され、傾斜変換点に近く、比較的厚く深く堆積した調査区西南半部付近のみが攪乱されず遺存したものと考えられる。

第３面では、奈良時代末から平安時代初頭の道路状遺構・水田・溝・柱穴を検出した。

水田土壌である32層・38層は北西側では標高5.5m前後と高く、南壁では標高は５m前後、南東端では4.6mと低い。北西から南東へ水田に高低差がみられる。

第２面では平安時代中頃から後半にかけての水田・井戸・地震の痕跡（噴砂）を検出した。水田土壌である21層・26層は標高は5.7m～4.7m、第３面と同様に北西から南東へ水田に高低差がみられる。

第１面では平安時代後半から鎌倉時代にかけての水田土壌を検出した。水田土壌である20層は明瞭な畦畔等の検出は出来なかったが、標高は6.0m～5.1m、第２面と同様に北西から南東へ水田に高低差がみられる。粗砂の多い水田土壌中からは刀子や中国製の白磁碗等が出土している。また、この面から出土した木器には、木簡・祭祀具・容器・農具・雑具・用途不明品等がある（2363～2394）。

以下、各面の遺構について述べて行く。

２．第４面の遺構

５基の土坑を検出し、その内の２基の土坑を完掘、１基の土坑についてはその南半分を精査した。

土坑は標高5.8mから5.5mにおいて地山面上より検出されている。

ＳＫ４０１

南北長径約5.0m・東西短径約2.6m・深さ約0.7mを測る不整形な楕円形の土抗である。断面形は中央部が更に一段窪んだ船底状を呈している。

土坑埋土は下層に黄灰色シルト、中層に細砂混じりの褐茶色極細砂、上層には中層との間に黄灰色シルトを挟んで礫混じりの濁った暗茶灰色シルトが堆積している。土坑の上には谷部の洪水堆積物である礫混じりの濁った暗灰色シルトが被覆している。

縄文土器は主に中層から出土している。

ＳＫ４０２

東西長径約5.7m・南北短径約3.7m・深さ約0.7mを測る不整形な楕円形の土坑である。断面形は皿状を呈している。SK401とは切り合い先行する。

土坑埋土は下層に濁った黄茶色極細砂、中層に濁った黄色細砂混じりシルト、上層には礫混じりの濁っ

た暗灰色シルトが堆積している。土壙の最上層には濁った暗灰色シルトが被覆しており、谷部の洪水堆積物であると考えられる。

縄文土器は主に上層と下層から出土している。

ＳＫ４０３

南北長径約4.7m・東西短径約1.5m・深さ約0.4mを測る。不整形な長楕円形の土壙である。断面形は箱形を呈している。SK401とは最上層部分の堆積土が複雑に切り合い、先後関係は不明である。

土坑埋土は下層に濁った黄白色シルト混じり極細砂、上層には濁茶色シルト・細砂混じりの黄灰色シルトが堆積している。

縄文土器は主に上層の濁茶色シルトから出土している。

３．第３面の遺構

道路状遺構

調査区西端部において検出した。山裾の斜面を削って平坦地を造り出したもので、谷の奥に向かって延びる。谷側には部分的に溝を伴っている。道路面の標高は約5.6mである。

道路状遺構の規模は幅約1.5m～約1.8m、検出長約23mを測る。走向は北北東にとっており、南から約15mはN17°Eに、残り８mはやや東に角度を振ってN25°Eに走向をとっている。

溝

北半部において検出しており、幅は約1.1m～約1.2m、深さは道路状遺構側からは25cm前後、水田側からは５cm程度を測る。断面形状は浅い皿状である。

溝内からは多量の土器とともに銅製品が出土している。

道路状遺構面上からは柱穴が検出されているが性格・道路状遺構との関係についても不明である。

道路状遺構よりも東側については水田が広がっていたと考えられる。明瞭な畦畔は検出されてはいないが、調査区南西端では大足、調査区中央付近では畦畔に使用されたと考えられる多量の板材・角材・が検出されている。板材・角材は畦畔の芯材や側板もしくは基部に敷かれたものと考えられる。その散在状況から推して畦畔の土盛りは流失したと考えられるが、板材・角材は調査区南壁からほぼN25°Eの方向に分布しており、道路状遺構と近似した方向性をもつ畦畔が存在したことが想定できる。また、第２面の畦畔についてもやや西側に場所を移しながら同方向に畦畔が検出されている。

図版46では倒木・木の範囲を第３面の遺構図に示しているが、これは前述した様に古墳時代前期に遡る倒木である。水田化前の景観についての資料である。

４．第２面の遺構

水田遺構

水田は９筆以上存在したと考えられるが、遺存状態が悪く、一枚の区画が判明するものは少ない。

水田区画はN20°EからN25°Eの方位をもって並んでおり、区画する個々の畦畔の幅は１m～２m、畦畔の高さは10cmから15cmの高さで遺存している。畦畔の幅については東西方向の畦畔の幅がやや南北方向の畦畔に対して幅広い傾向にある。

水田面の標高は地形に合わせて北から南、西から東へ順次低くなっている。各水田間には比高差が見受けられ、水田Ｃの標高は約5.5m、東に並ぶ水田Ｂ・水田Ａは順次40cm程度の落差がある。また、水

田Ｈと水田Ａは40cm程度、水田Ｈと水田Ｂでは15cm程度、水田Ｂと水田Ｅでは30cm程度の落差が見られる。

個々の水田の区画については、辛うじて中央付近の２筆（水田Ａ・水田Ｂ）において１区画の全体を検出した。水田Ａは南北長約15.5m・東西幅約8.5m、水田Ｂは南北長約14.5m・東西幅約10.0mを測り、概ね長方形を呈している。水田Ａ・水田Ｂともに区画内に更に細い畦畔の痕跡や畦畔に沿う溝の存在が確認されている。２対１もしくは３分割していた可能性が高い。

水田Ｂ・水田Ｃ間には畦畔に沿って幅１ｍ・深さ15cm前後の溝が検出されている。溝は南端が収束しており、水田Ｂに向かって水口をあけている。谷奥からの導水の装置と考えられるが、洪水によって著しく攪乱されており、詳細は不明である。

水田Ｇ及び水田Ｃは第３面における道路状遺構部分に造られた水田である。水田Ｇは幅２ｍ、道路状遺構の幅をほぼ踏襲している。

井戸（ＳＥ０１）

調査区東半で検出している。井戸の構造は宇野分類の『縦桟横板組』・黒崎分類の『土居桁隅柱溝横板落とし込み』に分類される。検出された井戸側は南北方向にはほぼ水平を保つが、東西方向には東に向かって約35°歪み傾いた状態で状態で検出された。全体としては辛うじて井戸部材本来の位置関係を保ってはいるが、斜めに傾いた隅柱の溝から横板が外れてしまっている。土居桁と隅柱はそれぞれ４点揃い、横板については北辺と東辺には各２枚残るが、南辺と西辺には各１枚遺存するのみである。北西の隅柱に接して、水溜めに使用されたと考えられる曲物が検出されている。曲物は井戸の倒壊にともない飛び出したものと考えられ、周辺には他にも曲物の破片が散乱した状態で検出されている。井戸側の西側には板材が検出されている。井戸施設にともなう部材であろう。

井戸の倒壊原因は地震にもとめられる。井戸の中央を割って南北－N13°Ｗ方向に２条の噴砂が走っている。噴砂は標高約4.3m部分の砂層を供給源としており、第１面の水田面には現れていない。地震の時期は９世紀後半から10世紀にかけてと考えられる。また、井戸内には下層の樹木株が見えている。地震の揺れによって下層の埋没していた株に乗り上げたことが井戸の倒壊に更に拍車をかけたものと考えられる。

復元される井戸の規模は内法で約１ｍの正方形、残存高さは側板２枚で約40cm、隅柱高さでは約60cmとなる。井戸掘方については歪みが激しく明確ではないが、南北約2.3m・東西約1.8mの長方形であったと考えられる。深さは現況で約35cmを測り、当初からそれを大きく越えるものではなかったと考えられる。また、曲物は径約60cm・高さ約25cmを測る。

井戸は恐らく側板は３枚組となり、井戸側の高さは約60cm、地下水位が高いことから推して水溜の深さを勘案しても残存する高さを大きく越えない浅い井戸であったと考えられる。

なお、第２面では調査区中央南辺付近でも蒸籠組井戸の井戸枠が１基検出されている。組み合わさった状態の４枚の側板と、周辺で出土した枠板合わせて６枚が出土している。周辺に掘り方はなく、倒壊後に井戸枠だけが移動してしまったものと考えられる。

第２面の水田土壌中からは人形、馬形、田下駄、井戸材、曲物、木簡５点、銅製帯金具、墨書土器、緑釉陶器が出土している。（西口）

第4章　出土遺物

第1節　木　器

1．木　簡

16点出土しており、砂入Ⅰ区、Ⅱ区で各2点（木簡1～4）、砂入Ⅴ区で12点（木簡5～16）をみる。砂入Ⅰ区・Ⅱ区では多量の木製祭祀具を出土しておりながら木簡の出土数は少ない。これに対して砂入Ⅴ区では木製祭祀具の量は少ないながら木簡は多い。

木簡1（332）は上端近くに一対の切欠きを入れた板に3行の文字が確認できるが、墨の残りが悪く判読できるのは「下里郷」のみである。「下里」は砂入Ⅱ区の木簡4（1799）にもみえ、「但馬国太田文」では出石郡下里郷、「和名類聚抄」では資母郷にあたる。現出石郡但東町中山周辺に比定され、出石郷に属する砂入遺跡より出石川沿いに約20km上流にある。

木簡2（333）は板の上端に「交」の1文字を記す。墨の残りは良く肉眼ではっきりと確認できる。

木簡3（1798）は上下を欠損する断片で墨の跡だけが隆起する。5文字のうち「右」と「禁」が読み取れる。禁制木簡の類であろうか。

木簡4（1799）も墨の遺存状態は悪い。1行の文字のうち最下の「下里」にだけ墨が残る。

木簡5（2256）は人形脚か斎串先端部と考えられる断片で、木簡を祭祀具に転用したものであろう。同様な例は袴狭遺跡でも確認されている（大平1995年）。墨の残りは比較的良好で「□朗」と読める。

木簡6（2308）は「蘇民将来」の呪符木簡で上端近くに一対の切欠きを入れた板の両面に墨書にされている。全体に傷みが激しく、下半には亀裂が入る。墨の遺存状態は悪く、かすかに残るのみである。呪符木簡はこの他の2点も含めすべて砂入Ⅴ区から出土している。なお、40点以上の木簡が出土した袴狭遺跡でも呪符木簡は2点を確認するに過ぎない。

木簡7～10（2309～2312）は細長い板に1行墨書されている。墨の遺存状態は悪く文字の判読しにくいものが多いが、2309だけは文字部分の隆起は明瞭である。年号はなく月と日から書き出されている点で共通する。

木簡11（2313）はごく小さな断片で文意は不明であるが墨の残りは良い。

木簡12（2363）は上下を欠損するが墨は比較的良く残っており「造」の下に2行の人名（山代部）がみえる。人名を記した木簡は袴狭遺跡群では「秦部」を筆頭に「物部」「日下部」「額田部」などの姓がみえるが、「山代部」は袴狭遺跡群では初出の姓である

木簡13（2364）は両面に隷書体風の文字が鮮明に残るものの、「土」と「在」以外は釈読できない。

木簡14（2365）は両端を欠損し墨の遺存状態も悪い。2308と同じく「蘇民将来」の呪符であろうか。

木簡15（2366）も「急々如律令」とかろうじて判読できる呪符木簡の下半部である。

木簡16（2367）は上端近くに切欠きを入れた薄板で片面に文字らしき盛り上がりが認められる。切欠き部の裏面にはかすかに紐状の圧迫痕が認められる。

2．祭祀具

砂入遺跡を特徴づけるのは多種大量の木製祭祀具で、斎串と人形、馬形、舟形、鳥形、刀形、剣形、

刀子形、鋤形などの形代とがある。ここではまず、これらの分類を主に行い、出土層をもとにした検討は次章にゆずる。なお、斎串、人形、馬形の分類は混乱を避けるため調査中・整理当初の呼称を踏襲しており必ずしも体系だったものではない（図８）。

斎　串

細長い薄板などの一端を尖らせた串状の製品は素材、形態とも形代に比べ多様である。Ａ～Ｆ類に分類する。Ａ類～Ｅ類が針葉樹を使用するのに対してＦ類は広葉樹を用いる。

Ａ類：細長い薄板の上端よりやや下方に左右一対の切掛けを行うもので、上端からすぐに切掛けを開始するものは稀である。一カ所の切掛けの数は複数となる。上端は圭頭状につくるものが大半を占めるが、水平につくるものもある。下端は両側から削って尖らせるのが通例で、片側から削ることを原則とする人形の脚とは異なるが、まれに片側から削るものもみられる。

Ｂ類：細長い薄板に上下から左右複数対の切掛けを行うものである。上端は圭頭につくるものが通例であるが、袴狭遺跡では水平に切るものも確認している。切掛けは上端に接して開始されるものが多く、圭頭の場合には頭部が菱形に尖る特徴的な形となる。

Ｃ類：薄板ではなく細長い角材を素材とする点で他の斎串と異なる。長大なＣ１類と小型のＣ２類に細分する。Ｃ１類は水平な上端木口から半分に割り裂くように切掛けを入れ、下端を片側から削って尖らせる。Ｃ２類は小型で切掛けは行わない。上端は水平につくるものと圭頭状につくるもの、あるいは細く尖らせるものがある。両者には系統的な関係は認めにくく、別個の形態に分類するのが妥当かもしれない。

Ｄ類：薄板の両端を斜めに切り落としたもので、平面形は通常台形を呈するがまれに平行四辺形のものもある。切掛けは小口側から割り裂くように１ケ～複数入れるが、行わないものもある。

Ｅ類：細長い薄板の側面に小さな切欠きがあるもので、基本形態はＡ類に類似する。切欠きの位置や数は様々である。また、切掛けも片側だけのものや行わないものがある。

Ｆ類：広葉樹を素材とするため遺存状態が悪く全体の形状をうかがうことができるものがほとんど無い。直径数㎝の枝あるいは幹の比較的真っ直ぐな部分を軸方向に数分割し下端を尖らせる。中には分割せずにそのまま用いているものもある。樹皮の遺存するものがあることから剝がさずのまま用いているようである。上端の形状は斜めに切り落としたままで特に何らかの加工を施したようには見受けられない。通常ならば単なる加工木あるいは小さな杭として見過ごされそうな遺物であるが、砂入Ⅱ区での出土状況から初めて斎串として認識した。樹種同定を行ったものはすべてウルシ属であった（第７章参照）。

人　形

「頸部の切欠きの形態」と「手の切掛けの有無」によってＡ類～Ｆ類の６形態に分類する。Ａ類～Ｄ類とＦ類には手の切掛けがあり、「頸部の切欠きの形態」が異なる。

Ａ類：上方、下方とも斜めに切欠くものでいわゆる「撫で肩」となる。

Ｂ類：上方は水平に、下方は斜めに切欠くものでこれも「撫で肩」である。

Ｃ類：上方は斜めに、下方は水平に切欠くものでいわゆる「怒り肩」となる。

Ｄ類：上方は斜めに、下方は水平に切欠く「怒り肩」であるが、上方の切掛けが頭部端付近から始まる。

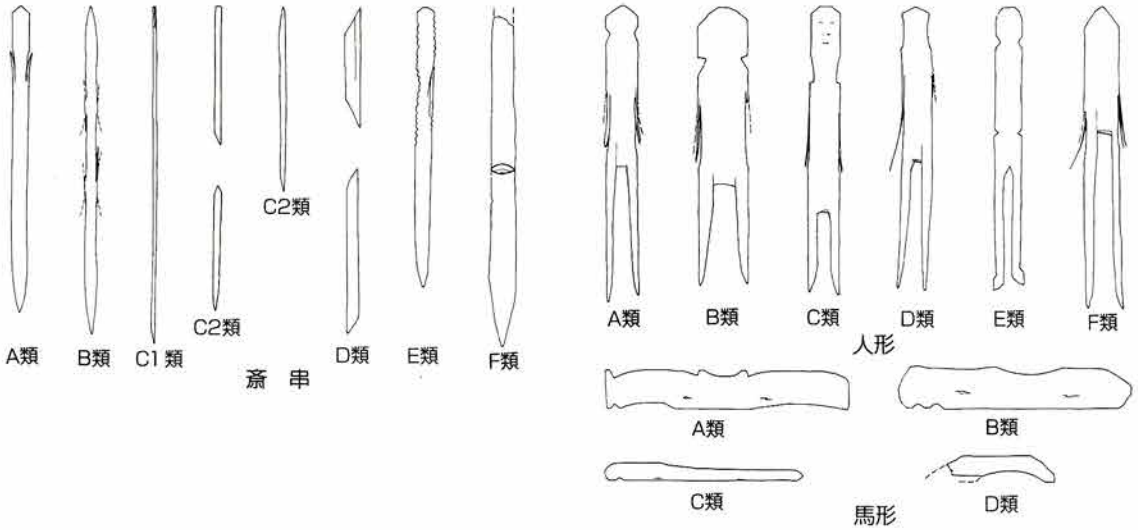


図８　人形・馬形・斎串の分類

Ｅ類：手の切掛けが無い代わりに腰部に切欠きを施し、足を左右に開いた表現をとる。肩は撫で肩となる。砂入遺跡では確認されていないものの袴狭遺跡で１ｍ前後の大型品が出土している。

Ｆ類：肩の切欠きがないものである。顔の表現をもつものがあることから人形とする。

馬　形

「全体の形」と「鞍の表現」によってＡ類～Ｄ類の４形態に分類する。Ａ類～Ｃ類は頭部、胴部、尻部の区別が明瞭で写実的に表現されているものである。

Ａ類：背部を切欠いて「Ｍ」形の鞍を表現する。いわゆる「飾り馬」である。

Ｂ類：背部を弧状に切欠く。いわゆる「裸馬」である。

Ｃ類：背部に切欠きを行わないもの。背部の欠損か判断しかねるものを含む。

Ｄ類：きわめて簡略な表現をとるもので、上辺あるいは下辺に切欠きを入れる。

舟　形

舟形には板状材の表面を溝状にくり抜き丸木舟を模したものと、上面に主軸に直交する溝状の削りや甲板状の突起を作りだし準構造舟を模したものがある（822・1853）。丸木舟を模したものにはくり抜きが浅く狭いもの（652・1502）、広く比較的深いもの（653・1463・1852・2197・2266）、両端を残して全体を相欠仕口状に落とすもの（2267）がある。同じく乗物と考えられている馬形に比べると数少なく、10点を数えるにすぎない。

特殊刀形

刀形・剣形には多種多様なものがあるが、形態のまとまりが強い一群を「特殊刀形」と呼び分ける。特殊刀形は切掛けを行い斎串Ａ類に類似するものと、切掛けを行わないものがある。前者は把頭と切掛けの間の一側縁を端部側から斜めに浅く切欠く（649・958～966・1948）。砂入遺跡で一般的な形態である。これとは別に1464のように一側縁にＶ字形の切欠きを２カ所入れ、反対側を浅く弧状に切欠いて屈曲する把を作ったものがあるが、こちらは袴狭遺跡でまとまって出土している（渡辺1992年）。特殊刀形は滋賀県湖西線ＶＤ、藤原宮でも出土しているが、斎串と報告されている（奈良国立文化財研究所1985年）。ＳＦ０２・０３での出土状況は斎串Ａなどと同様に10本前後が束になって出土しており、先端部を必ずしも片刃の切っ先様にせず両側を削って尖らせていることから、斎串Ａと同様の用法でが想

定される。

他の刀形・剣形

特殊刀形以外の刀形（956・957・967・1662・1715・1849）や剣形（646～648・1716・2322）は点数も少ないうえ形態変化に富んでいる。1715が75cm以上と突出して長いが、他は20～30cmほどである。

刀子形

刀子形は刀形に比べて小型のものを指す。把と刀身の間を小さく切欠いて区別するもの（1536）と刀身と茎をかたどったもの（1662・2322）がある。

鋤　形（1465・1663）

鋤形は一木鋤であり柄頭を少し幅広く作る。

鳥　形（380）

鳥形は1点のみ確認した。側面から見た形で目を墨書する。体部には薄板を後方斜め上から各2枚差し込んで羽を表現していたと考えられる。

紡錘車形（1431・1806・2143）

小円盤にかたどった薄板の中央に孔をあけたのものである。径3～5cm、厚さ0.3cmと軽量であるため実用品ではなく形代とした。

不明形代

何をかたどったものか判断に苦しむが、実用性の低い薄板の製品を不明形代とする。

足？が数本ある人形様のもの（1174）、全体を弧状に作り小孔を穿って勾玉あるいは小動物様の形態となるもの（651・1947）、両側縁の2ヵ所を切欠き田下駄A類4欠式様にかたどったもの（335）などがある。いずれも1～2点に過ぎず、人形や馬形などに比べると影の薄い存在である。　（藤田）

3．田下駄

砂入遺跡や袴狭遺跡では、地下水が豊富なためか古代の木器が何万点も出土している。祭祀具をはじめ各種の木器が出土しているが、その中でも特に田下駄は、用途不明品を除けば祭祀具についで出土数が多く、足板だけでも数百点出土している。

砂入遺跡での出土数は全体から見て少ないものの、袴狭遺跡のものを含めると様々な種類が出土しており、各種類ごとに分類が可能である。各分類については、秋山の分類（秋山1993年）に準じながら現在整理中の袴狭遺跡など未発表分も含めて分類した（図9）。なお、砂入遺跡で見られない田下駄については今回の報告では分類図の提示のみにとどめ袴狭遺跡の報告の中で検討したい。

各分類は次の通りである。まず、枠の有無をもって大別する。秋山の言う「枠」すなわち、足板の下に付ける構造物の有無及びその形式である。枠には、円形枠・台状枠・方形枠の3種類がある。そこで、枠なし形式のものをA類、円形枠付き形式のものをB類、台状枠付き形式のものをC類、方形枠付き形式のものをD類と大別した。つぎに、それぞれの緒孔の数で分類した。孔の数は、無孔・（2孔）・3孔・4孔・6孔のものがある。さらに、それぞれの形式の中で緒孔の形式で緒孔を穿つもの、側縁を切欠くものとに細分することができる。前者をを「孔式」、後者を「欠式」とした。また、足板と枠を固定させる方法として木釘で固定する「木釘留め」、足板の両端に枠を紐で留めるための孔を穿つ「孔留め」、刳り込みを入れた「抉れ留め」、足板の両端で枘をつくり、枠の枘穴と組み合わせて留める「枘留め」、さらに「木釘留めと孔留め併用」がある[註1]。

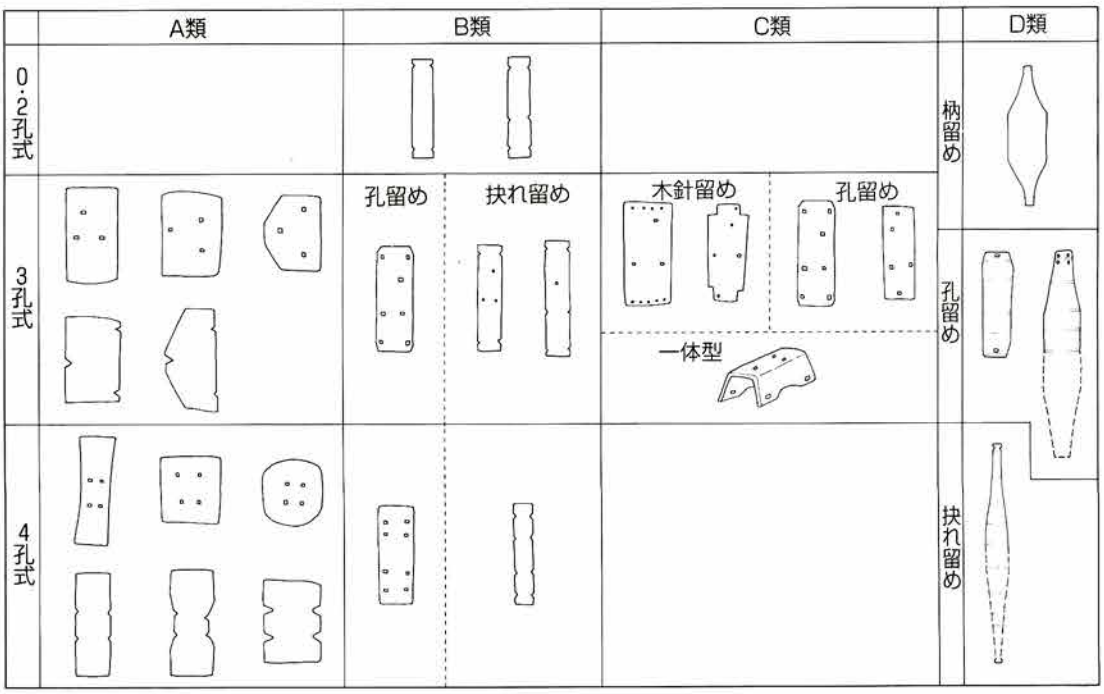


図9　田下駄の分類

これらの田下駄を、民具の例に当てはめると、B類のものは輪樏型ナンバ、C類のものは足駄型田下駄、D類のものは大足に相当しよう。

A類（枠なし形式）

足板に3孔もしくは4孔をもつ。砂入遺跡で出土した田下駄はこの種類のものが大半を占める。「孔式」と「欠式」がある。

A類3孔式（345・1176・1641・2108・2330）

足板の内側に鼻緒孔3孔を穿つ。前壺は中央に寄っている。 345は角を削って先を尖らせ六角をつくる。1641は後壺が3孔あるが、中央のものは左側との緒孔間が狭く、右側に孔を新たにあけたためと考えられる。2108は横長田下駄と思われるが、一端が欠損している可能性もある。これが田下駄であるとすると、前壺が左側に片寄っていて、右端の孔は付け手持縄の紐かけとも考えられる。2330は前壺は右側に片寄っている。全体を手斧で丁寧に削り、周縁を薄く削る。

A類3欠式（14・166・1565・2276・2328・2382・2383）

長方形または台形状の足板に上端1カ所、下端2カ所切欠く。2328は、前壺にあたる切欠きが右側に片寄っているが、その他はすべて中央に寄っている。

A類4孔式（167・1566・1807・2020・2134）

長方形または正方形の足板に4孔穿ち、孔に通した紐で足の甲や踵を縛りつける。隅丸方形のものもある。砂入遺跡でこのタイプの完形のものは2020・2134の2点のみである。緒孔の形は、方形に穿つものと円形に穿つものとがある。1807は、2孔のみ認められる。2020は、鼓形の平面形をしている。

A類4欠式（15・1177・1230・1514・1635・1636・1640・1684・1685・1808・1992・2021・2278～2287
2378～2380）

長方形の足板の上端と下端に、それぞれ2カ所切欠く。1177は他の田下駄と比べると粗雑である。22

83は一端を切欠き、2284・2285は一端に1孔穿つ。付け手持縄の紐かけとも考えられる。しかし、2283の切欠きの端に、切欠きを切り落とそうとした鋸の刃痕が残っていることから、部材からの転用である可能性が高い。2021・2285・2286・2378は鼓形の平面形をしている。2285には削った後に側面を面取りしている。切欠き間の距離は、上側と下側を比べるとほぼ一定している。しかし、1992・2285は上側に比べて下側の距離間が少し広い。

B類（円形枠付き形式）

円形の枠と足板を紐で留める。円形枠は砂入遺跡では出土していないが、袴狭遺跡で出土例がある。足板と円形枠との固定の方法は2種類あり、両端部に紐孔を穿つものと、紐かけの刳り込みをいれるものとがある。

B類無孔式抉れ留め（1681・1810）

長方形の足板の両端をそれぞれ2カ所刳り込むが、緒孔はもたない。これらには円形枠の圧痕がみられないため、円形枠を持つとは断定できず、D類の可能性や田下駄以外の用途も考えるべきかもしれない。1681は幅が狭く足が板からはみ出す。円形枠の横木の可能性もある。1810は長さが69.2cmあり、今回報告した中では最大である。

B類3孔式孔留め（13・1179・1433・2326・2327・2381）

長方形の足板に鼻緒孔を3孔穿ち、両端に円形枠を紐でとめる孔をそれぞれ2カ所穿つ。縦長田下駄。13・2327・2381は前壺が右側に、1179・1433は左側に片寄っている。2326は中央に寄っている。2326・2327の裏面には円形枠を付けた当たりの痕跡が明瞭に認められる。1433は円形枠を付ける紐孔が両端共に上下2孔穿っている。これらの孔は鼻緒孔より小さめで一見木釘孔とも思えるが、裏側の孔と孔の間に紐圧痕が認められる。1433・2381は円形枠の当たりの痕跡がみられないのでC類3孔式孔留めの可能性もある。

B類3孔式抉れ留め（12・164・2277）

長方形の足板に鼻緒孔3孔穿つ。両端部に紐かけをそれぞれ2カ所刳り込む。前壺は、12が右側に、2277が左側に、164が中央に寄っている。164は、前壺に孔を穿つが、後壺は切欠いて紐をかけるタイプのものである。このようなタイプの田下駄は、袴狭遺跡出土の田下駄の中でも稀である。

C類（台状枠付き形式）

この田下駄の枠は、2枚の台形状の枠歯、枠歯間を固定する2本の支軸で構成されている。袴狭遺跡では足板と枠が組合わさったままの状態で出土した例がある。足板と枠歯を木釘で固定する木釘留めが一般的であるが、枠歯に木釘を打たず孔を穿つものもある。この場合、紐で枠歯を固定すると考えられるが、袴狭遺跡で孔に樺皮が残っている例がある。紐か樺皮かどちらでとめるのか不明だが、孔を穿つものを孔留めとする。その他には、木釘留めと孔留め併用のもの、特殊なものとして枠と足板が一体型のものがある。

砂入遺跡周辺で出土するこのタイプの田下駄は、現在確認されているものは全て3孔式のもので、4孔式のものは出土していない。このことから4孔式の田下駄は存在しないと考えられる。また、台形状の枠歯と支軸を固定するために、木釘で留めるものと支軸の端に楔を打ち込んで留めるものとがある。台形状の枠歯のみ出土している場合は、3孔式の田下駄が多いことから全て3孔式の部材として分類した。

C類3孔式木釘留め（6～10・819・1513・1638・2135・2329）

長方形の足板と台形状の枠歯を木釘で留め、枠歯と枠歯を２本の支軸で固定させる。縦長田下駄。６～10は、ばらばらの状態で出土したが木釘の位置関係から復元した。６は足板で鼻緒孔３孔穿つ。前壺は左側に片寄っている。前壺付近には、親指の当たりの痕跡が残る。前壺の右側に１孔穿っているが、もとは左足用の前壺だった可能性もある。両端部には、台形状の枠歯をとめる木釘孔がそれぞれ３孔穿っている。このうち、上端部の３孔及び下端部の中央１孔に木釘が残る。７・８は枠歯と枠歯を固定させる支軸で両端部を凸状にして枘をつくる。７は一端に、８は両端に、枘穴に差し込んだ時に固定するための木釘孔を穿つ。枘の根元には、差し込みによる当たりの痕跡が認められる。９・10は台形状の枠歯である。下端両側には、支軸を差し込むための枘穴を２カ所穿つ。上面には木釘孔が３孔認められ、９は２カ所、10は１カ所木釘が残る。10の木釘は、斜め方向に打ち込んでおり側面に突き出ている。また、下面には、枘穴を通るようにそれぞれ１孔木釘孔が認められる。10は木釘が残っており８の一端がこの枘穴に差し込まれていたものと推測される。歯先は使用のためよく磨耗している。1513は足板のみ残存する。緒孔を３孔穿ち、前壺は左に片寄っている。上端部に１孔、下端部に３孔の木釘孔が認められ、それぞれ１カ所に木釘が残る。下端部には手斧痕が多く認められ、端に向かって薄く削りだしている。下端部木釘孔の上方に２孔穿っているが、何のために孔を穿らせているのかは不明である。

819・1638・2135は台形状の枠歯である。819は上半部のみ残存する。上面に３カ所、側面上端に１カ所木釘孔が認められ、上面の１カ所には木釘が残る。1638は上面に５カ所木釘孔が認められ、そのうち３カ所に木釘が残る。足板と組み合わせる上端部は凹状に削りだしている。側面上端には、小さな孔を穿つ。下端両側には、支軸を差し込むための枘穴２孔を穿つ。2329は上面に３カ所木釘孔が認められ、３カ所ともに木釘が残る。下端両側には、支軸を差し込むための枘穴２孔を穿つ。１孔に枘先が楔を打ち込まれた状態で残っている。

Ｃ類３孔式孔留め（1637・2135・2329・2140・2243）

長方形の足板と台形状の枠歯を両端でそれぞれ１カ所又は２カ所樺皮で留める。袴狭遺跡で出土しているものは３孔式である。砂入遺跡では、台形状の枠歯のみ出土している。1637・2139は上半部のみ残存している。1637の下端中央部の窪みは、足板を樺皮で留めるための孔ではないかと思われる。2139は上端部左右２カ所に孔を穿つ。2135が歯部の破片であろう。2140は、上端部に足板を樺皮で留めるための孔を左右２カ所穿つ。下端には支軸を組み合わせる孔を２カ所穿つ。全体に手斧痕が明瞭に認められる。2243は台形状の枠歯の上半部のみが残存している。足板と組み合わせる上端部は、凹状に削りだしている。樺皮を通す孔は認められないが、上面に木釘孔がないことからこのタイプに分類した。

Ｃ類３孔式木釘留め孔留め併用（５）

長方形の足板と台形状の枠歯を木釘と樺皮併用で留めるタイプの田下駄である。足板は見つからなかった。枠歯は上面に足板を固定するための木釘孔が２孔残り、歯先は使用のためよく磨耗している。5-4は、一部欠損しているため木釘孔は１孔のみ残る。上端には足板と枠歯を固定するために樺皮を通す孔が１カ所、下端には支軸を差し込むための孔を２カ所穿つ。支軸は両端を少し細く削りだし先端部で枘をつくる。他のこのタイプの田下駄が３孔式であることを考えて３孔式に分類した。

Ｃ類部材（1563・1812・2137・2138）

角材の両端を凸状に削りだし枘をつくる。枠歯を固定する支軸である。枘先には楔を両端又は一端に打ち込んで枠歯と固定する。1536・2137は一端に楔が残るが他端は欠損しているため楔の有無は確認できなかった。1812は一端に楔を打ち込んだと思われる割れが残る。2138は両端に楔を打ち込んだ痕は認

められるが、楔は残っていない。枘の側面には枠歯に挿入したときの当たりの痕跡が認められる。

D類（方形枠付き形式）

この田下駄は、二本の支柱と横桟を組み合わせた梯子状の枠に足板を組み合わせて使用するもので、水田作業専用のものである。砂入遺跡で出土しているこのタイプの田下駄は無孔式である。方形枠と足板を固定するために、足板の両端部を枘状に削りだして枠の枘穴に差し込む枘留めのもの、両端部に紐孔を穿つ孔留めのもの、両端部に刳り込みをして紐で固定する抉れ留めものに分類できる。

D類無孔式枘留め（1158・2275）

1158は一端に枘を作り出す。裏側には横桟の当たりと考えられる浅い溝状の圧痕が認められる。2275は長方形の足板の両端部を細く削りだし、枘をつくる。表面裏面共に手斧で丁寧に削りだしている。枠の横桟の痕跡や枘部に枘穴に差し込んだときの当たりの痕跡は認められず、田下駄D類とするには検討の余地がある。

D類方形枠部材（16～19・1813・2176・2177・2184・2273・2274）

2274は方形枠を構成する支柱と横桟が組み合わさった状態で出土した。このタイプの田下駄は、民具例では先端もしくは内側の横桟に枘穴をあけ、足板の両端に枘をつくったものと組み合わせるのが一般的である。この場合、枘穴をあけた横桟間にある横桟の上に足板を乗せる。2274の横桟には枘穴がみられないことから、足板を先端部で組み合わせるのではなく、内側の横桟と組み合わせるものと考えられる。左右の支柱の上面に、横桟と直交する孔がそれぞれ1カ所穿っている。この孔には、紐痕などは認められないが手持ち縄を縛りつける紐孔と考えられる。また、残存する横桟の上面には左右2カ所幅6.5～7.0cm、内側側面には中央に幅6.0cmのごく浅い窪みが認められる。これらは一見すると何かの当たりの痕跡とも思われるが、何に起因するものかはわからない。

19は方形枠の支柱である。片側側面に横桟を組み合わせるための枘穴が13箇あり、第1・6・10穴は貫通している。これと組み合う横桟は出土位置の近似から16・17と想定され、方形枠の大きさは長さ115cm、幅約50cmと復元できる。また、両端に穿たれた引手孔あたりは紐で強く結わえられたためか、筋状の窪みがはっきりと残る。引手孔には木釘がそれぞれ2本打ち込まれており、民具に一般的な縄などの引手以外に、棒状のものが使用されたと思われる。実際、袴狭遺跡や入佐川遺跡では引手孔に細い棒を差し込んだ例が確認されている。

2176も方形枠の支柱である。19に比べるとやや短く横桟を組み合わせる枘穴も5カ所のみである。また、手持ち縄を縛り付ける紐孔も認められない。5箇の枘穴すべてには、横桟の枘が中で折れて残っている。

16～18・1813・2177・2184・2273は、方形枠の横桟である。支柱と組み合わせるため両端を枘状に削りだしている。（岡）

4．その他の木器

砂入遺跡では木簡や祭祀具、田下駄以外の各種木器も少ないながら出土している。その多くは奈良時代～平安時代前半を中心とした時期に帰属すると考えられるが、砂入Ⅳ区や砂入Ⅴ区の遺物包含層などから出土した遺物は帰属時期の判定が困難なものも多く、ここでは時期を問わず一括して扱う。

出土した木器を推定される機能・用途、あるいは形態に基づいて分類し名称を与えると以下のものがあげられる。

1）付　札

2）工　具……錐柄、作業台、掛矢

3）農　具……えぶり、一木鋤、鍬、木錘、穂摘具、田舟、鎌柄、籾掬い

4）容　器……曲物類、木皿、有孔曲物底板、小鉢、箱、漆塗り椀、漆塗り鉢

5）服飾具……下駄、桧扇、扇子状木製品、留針

6）食事具……杓子形木器、箸状木器

7）遊戯具……独楽、ささら

8）発火具……火鑽板

9）その他……木釘、楔、自在、机の脚、支脚、梯子、有孔の栓、軸連結の板、井戸部材、紐掛けのある棒状材、部材、孔あきの板、板状材、棒状材、杭、用途不明

以下では主な木器についての記述と若干の検討を試みる。

1）付　札

短冊形の板に左右一対の切欠きを入れたもので、頭部は水平に切り落とすもの（334）と丸みをもたせるもの（650・2368）がある。2257は頭端部を欠損しているがおそらく前者であろう。334では切欠きの間に撚紐状の押圧痕が2条認められる。

2）工　具

錐柄（2241）は先端側を面取りした丸い棒状材の一端に、錐を差し込む長方形の孔を穿つ。

作業台（820）はカキノキ製で短い柄がつく。片面は強く叩かれて窪んでいる。

掛矢（1175）は形態的には横槌に類似するが、大型で加工が粗雑であることから掛矢とする。針葉樹の芯持ち材を使い、身と握り部に削り込んだ溝をめぐらせる。身の欠損部分が使用部であろうか。

3）農　具

鋤（386）は一木で平坦な身とこれに真っ直ぐに続く丸い柄を作りだしており、身の下半を両面から削って刃としている。身の肩部は左右に張り出さず、鉄製の刃先は装着されなかったようである。樹種同定は行っていないが、集合放射状組織が虎斑状に観察され、大導管が環状に並んだ様子が認められないため、アカガシ亜属であろう。

鍬（2384）は薄手の作りの直柄平鍬で柄を着柄する方形孔を穿つ。身は鉄製の刃先を装着するため左右に肩を張り出している。ムクロジ製。816と1924は鍬の上端部のような形状をなす。広葉樹製。なお、1814は又状に先端が尖るが針葉樹であり、鍬とすれば特殊なものであろう。

えぶり（26・165）は平坦な歯をもつ。柄孔はそれぞれ1ヶと3ヶで、着柄角は直角に近い。

木錘は輪切りにした芯持ち材の中央を両側から円錐形状に削り込むもの（1838）と、輪切りにした芯持ち材を半裁し側縁中央に方形穿孔したもの（2271・2272）に大別される。前者では、丸木面をそのまま残さず粗く面取りしている。針葉樹製。後者は当地域に一般的な形態で、現在も同様な形態のものが使用されている。2271はアカガシ亜属製。2273は木目の詰まったヒノキ製で、輪切りが先か半裁が先かは不明だが、両端面は丁寧に削られている。なお、木錘とは言い難いが類品として1724（断面蒲鉾状に加工された細長い材の中央付近の両側に小さな切欠きを入れたもの）、2242（広葉樹の芯持ち材の側縁

を少し窪めたもの）の２例をあげておく。

穂摘具（2270）はクワの柾目板を用い、刃縁に対して約60度の角度で木目が走るよう木取られている。下半部を欠くが背が直線的で本来平行四辺形を呈していたと想定される。紐孔は２孔あり、浅い溝で結ばれている。穂摘具は滋賀県森浜遺跡の４世紀の例が最新とされており（奈良国立文化財研究所1993年）、形態的にこれに近いものであろう。

田舟（1682）は径20cm弱のスギ丸太を半裁した後、内側をくりぬき、両端の外面をはつって舟形に仕上げている。

鎌柄（1851）は背側にわずかに反りをもたせ、柄尻に山形のやや大きめの突起をつくる。さらにその上にも円柱状の突起を削りだしている。柄頭はわずかにふくらみ、鎌の装着孔は柄軸に対して上辺で約30度、下辺で約60度の角度をもつ。柄の腹面に中央に突起をもつ例は平城京左京一条三坊の出土品に類例があり、「木器集成図録」では確証は無いもののナタ柄とされている（奈良国立文化財研究所1985年）。ここでは一般的な鎌柄としておく。クワ製。

籾掬い（1169）は身の両側を欠いているが、類品が袴狭遺跡でも出土しているので、側面の立ち上がりが高い「塵取り」状の形態を呈するものと復元する。袴狭遺跡群では櫂も数点出土しているが、その他の漁労具は見られないため、農具とした方が理解しやすい。スギ製。

４）容　器

曲物類は30点以上出土しており、砂入遺跡で圧倒的多数を占める祭祀具を除けば田下駄に次ぐ点数を数える。平面形により円形、楕円形、長方形のものがあり、樹種同定を行ったものはすべてヒノキであった。

円形曲物は径20cm以下（13cm以上）の小型品が主で、木釘結合と樺皮結合の２種がある。ただし、底板の周囲に段をめぐらすものは無い。多くは側板が失われており、その場合は結合方法にかかわらず底板と呼ぶが、残存度が低ければ結合方法のわからないものがある。

結合方法と底板の径との関係を検討すると、径16cm以下の円形曲物で確認できる４例はすべて木釘結合である。径18cm以上になると木釘結合２例（最大でも22cm以下）に対して樺皮結合は11例となり、樺皮結合が圧倒的多数を占める。つまり口径が小さいと木釘結合が多く、口径が大きくなると樺皮結合が多くなる。

次に結合方法と底板の木取りとの関係をみる。樺皮結合では最小径（径16cm）の２例と径40cm以上の大型品３例中１例は柾目取りであるが、その間の12例はすべて板目取りで、大型品２例も追柾である。木釘結合では板目取り４例に対し柾目取りも３例あり、樺皮結合に較べ柾目取りが目につく。つまり、樺皮結合では板目取りが主、木釘結合では両者がほぼ拮抗する。

円形曲物に見られる製作痕や使用痕では、底板は一般に表面が平滑に整形され加工痕を残すことは少ないが、樺皮結合の底板２例（1800・1970）にヤリガンナによる削りが認められる。半数近くの底板に不定方向の刃痕が多数見られる。1801では柿渋様の付着物が表面に認められる。樺皮結合の曲物では底板に結合孔の位置決め用の刻線と側板の圧迫痕が認められるものがある。

楕円形曲物（1634・2268・2269）と**長方形曲物**（1752）には完形品は無いが、すべて長さ50cm以上の大型品となる。底板は板目取りされており、結合方法は樺皮結合である。楕円形曲物では底板に側板の圧痕が明瞭に残り、樺皮で強く緊縛されたことがうかがえる。2268では耳がつく。1752にはわずかに底

板が残存している。

有孔曲物底板（349・1803・2375）は容器とは呼べないが、小型の曲物底板の中央に比較的大きな孔をあけたものである。孔は円形というより多角形で、刀子などで削って穿孔する。2375の上下両端は意図的に切り込まれており、この形で完形品とも考えられる。

皿には高台の付くもの（354・2235・2323・2374）と高台の付かない平底の皿（1167・2232～2234）ある。前者では2323以外は、内抉りの無い擬高台である。平底の皿では口縁部が外に開きながら立ち上がるものが認められるが、擬高台付きの皿では口縁部の立ち上がりがほとんど無いものが目につく。しかし、立ち上がりが元から無いのか、摩耗等によって失われたものかは判断しがたい。平底の1167はケヤキ製で口縁部が肥厚し、口径も28cmと他に較べ大振りである。他は針葉樹製（樹種同定したものはヒノキ）で口径は17cm～24cmの間に納まる。なお、皿はすべて横木取りで柾目板を使用している。

箱（1168）は両端にL字形の切欠きをいれ枘を作り出す。互い違いに枘を組み合わせて木釘で固定する。

墨絵のある箱（1841）は長方形の板に墨で模様を描くが、墨はすべて消失し、かすかな凹凸によって不明瞭ながら唐草様の文様が読み取れる。両端に木釘孔があり箱の部材に描いたものと思われる。

漆塗り鉢（1577）は口縁部の一部を残すに過ぎない。口端部から急に厚みを増し、比較的おおぶりな鉢状の容器となるのではなかろうか。

漆塗り椀（1840）は近世河道から出土している。遺存状態が悪く、赤彩の文様は部分的にしか残っていない。

小鉢（1805）は厚みのあるトチの柾目材を刳ったものである。

5）服飾具

下駄には**連歯下駄**（1560・1578）と**差歯下駄**（1819）がある。1578は前緒と後緒の間隔が10cm以下であり、子供用かあるいは特殊な用途に用いられたものであろう。1819は指の跡が強く残るほど使用されているにもかかわらず、歯はすり減っておらず、歯の交換が行われたと推定される。

檜扇（339）は末側がわずかに広がる長方形を呈す。要孔は1孔で末の両側に小さくV字に切欠き、綴じ目の代わりとするが、その下にも小孔がある。スギ製。

檜扇形木器（1988・1991・2147・2211）は、出土位置は異なるが同一個体の可能性がある。一般的な檜扇よりも厚く、不規則な横線が墨書されている。要孔のあるものは3点あるがいずれも末側を欠く。類品が平城宮より出土している（奈良国立文化財研究所1985年）。1991はスギ製。

留針（2385）は細長い棒状製品で頭部は円錐形に尖らせ、身の下部を薄い篦状に加工している。

6）食事具

杓子形木器は2331が典型例で「しゃもじ」と同じ形態をとり、柿渋様の塗装が部分的に残る。1823と2291は身の先端が直線的で篦に近い形態をとり、粗雑な作りである。

箸状木器（2251・2252・2333）は細長い棒状製品で主に円形に近い多角形に削ったものであるが、破損品ということもあって斎串C1類との区別は曖昧である。

7）遊技具

独楽（2209・2210）は針葉樹の芯持ち材を円錐状に尖らせて先端に突起を作る。突起の形態はやや異なる。全面に細かな削りの跡がはっきりと残る。

ささら（2288）は板状材の一側縁に切欠きを連続させ鋸刃状に削りだす。両端を欠き斎串Ｅにも類似するが、厚みがあり切欠きの先端が磨耗しているようにも見受けられるため「ささら」とした。

8）発火具

火鑽板（23・163・2198・2290・2389）は曲物に次いで多く出土している。50cm以上の大型品が目を引く（163）。2389では火鑽臼の中央に凸部を残すものがあり、火鑽杵に竹管状のものが使用された傍証となる。

9）部材など

木釘（1816・1833）は先を細く尖がらせ、反対側に頭を作る。2386は両端を欠く。

楔（2289）は木目の詰まった芯持ち材を半裁し、中央付近から先を丁寧に削って楔形に仕上げている。小型の2244や角材の一端を薄く削った160も楔と考えられようか。

自在（2297）は眼鏡状にかたどり、２孔を大きく穿孔した板状材である。

机の脚（2239）は断面正方形の柱の一端片隅に枘を作りだす。その下の２面にスリット状の枘孔を直交させ、支えの枠木を入れるように細工している。

支脚（1729・2023）は角柱材の一端に出枘を削り出したものである。

梯子（2024）は１例のみ出土している。上下両端と右側縁全体を欠き、残りは悪い。

軸連結の板（336・337・1171・1172・1804）は舟形にかたどった薄板に縦並びの小孔を穿ち、それぞれ細い棒を渡して二枚を連結させたと想定される。連結の細い棒が部分的に残っているものがある。

有孔の栓（2334）は台形の頭部と細い軸からなり、軸の先端を尖らせている。軸の中央には長方形の枘孔を穿つ。

井戸部材はすべて砂入Ｖ区で出土している。黒崎による井戸枠構造の分類に準拠すると（黒崎1995年）、相欠き仕口横板組、土居桁隅柱溝落し込み横板組、井篭横板組の部材が見られる。

相欠き仕口横板組の井戸部材は側板が６枚出土している（2341～2346）。仕口部分はケビキ線を入れ、鋸で引き出している。また、材の両端の切断にも鋸が使用されており、2344の右下隅には鋸の溝跡を明瞭に残す。表裏は平滑に仕上げられている。側板の幅は27cm前後、24cm、22cm弱がそれぞれ２枚ずつある。井戸の大きさは内法で一辺約60cmで、このうち４枚は組合わさった状態で出土している。

土居桁隅柱溝落し込み横板組の井戸（ＳＥ０１）は４枚の土居桁、４本の隅柱、７枚の側板が遺存していた（2347～2361）。写真図版 197の様に４枚の土居桁を方形に組み、四隅の孔に隅柱を立てて、その溝に側板を落とし込む。隅柱のうち対角線上になる２本の枘に穿孔があり、土居桁に通した後、カンヌキを入れて固定したものと思われる。土居桁には桁とほぼ同じ幅の相欠き溝を両端に施すが、厚さが減じるため最も欠損が大きい。側板は両端を斜めに切り落とし隅柱の溝へ収まり易くし、表裏は平滑に仕上げられている。幅は23～27cmで、実測面が井戸の内側になる。井戸の深さは少なくとも側板２枚分で50cm以上、内法で一辺１ｍ強の比較的大きな井戸である。

井篭組の井戸部材は両端部に凹形の仕口をつくった側板１枚である（2299）。他の部材が見あたらないが井戸部材とすれば内法で53cmほどであり、前二者にくらべ規模の小さな井戸となる。

この他、紐掛けのある棒状材、孔あきの板（田下駄の可能性のあるもの含む）、板状材、棒状材、用途不明品など機能、用途を推定しがたいものも出土しているが個別の記述は割愛する。　（藤田）

註1）「切欠き」・「抉れ」・「刳り込み」は同一の加工であるが、ここでは便宜上、緒孔を指す場合「切欠き」、枠との結合を目的としたものを「抉れ」・「刳り込み」と呼んで区別する。

第2節　土　器

土器については砂入Ⅰ区～Ⅲ区、砂入Ⅳ区、砂入Ⅴ区の三地区に分けて記述する。

1．砂入Ⅰ区～Ⅲ区の土器

砂入Ⅰ区～Ⅲ区は一続きの調査区であり、同一の遺構も存在するので、層位的にまとまりをもった遺構単位に記述を行う。

ＳＤ１７～１９、ＳＦ０２～０５、Ⅶ層出土の土器（１～34）

砂入Ⅰ～Ⅲ区で下層に位置づけられる遺構（第５章第１節参照）から出土した。台付き甕の脚部かと思われる４のように古い時期の遺物の混入も若干あるが、出土状況から判断して、大部分は遺構の時期を反映し、７世紀後半（第４四半期）～８世紀前半の時期を考えている。器種構成では須恵器に比べ土師器（甕）の多いことが目立つ。

須恵器

杯Ｇ（５）　口径が９㎝と小さく、口縁部が直立し端部はわずかに外反する。

杯Ｂ蓋（６）　丸みをもつ頂部に偏平な宝珠形の摘みをつける。内面には退化した小さなかえりがつく。外面はヘラケズリされる。

杯Ｉ（７・８）　杯蓋を逆さまにしたような形態の杯である。七日市遺跡で杯Ａと区別されている（兵庫県教育委員会1991年）。底部はやや丸みを持つもの（７）と平らなもの（８）があり、口縁部は内彎気味に立ち上がる。

杯Ａ（10）　平らな底部に外上方に真っ直ぐのびる口縁部を有する。

短頸壺蓋（11）　頂部と口縁部の境は明瞭で、口縁部は直線的に開く。

壺（14）　肩部に稜をもち、体部は算盤玉形を呈する長頸の壺である。体部下半外面はヘラケズリされる。口縁部は大きく外に開き、高台は短く外にふんばる。

甕（12・13）　比較的短い口縁部が外反しながら開く。12では端部が外側に肥厚し外傾する端面をつくる。13では端部付近を屈曲させ水平に近い端面をつくる。

土師器

杯Ａ（9）　丸みをもつ底部から外上方に真っ直ぐのびる口縁部を有する。

甕（１～３・15～33）　最も出土数が多いが、完形もしくは全体の形状が判明するものは少ない。口径15㎝以下の２点は短胴であり、20㎝前後のものは中胴となるものが多いが、19のように短胴のものもある。口縁部内面はハケメ調整するものが多いが、体部内面はヘラケズリのみのものと、ヘラケズリの後ハケメ調整を行うものがある。口縁部は外反して丸く収めるものが多いが、１や26では端面が意識さ

れているようである。23では口縁端部を打ち欠き、鋸歯状としている。33では体部上半を切り、前に引き出して大きく開口させている

鍋（34）　体部は斜め外方に開き、口縁部は水平近くまで大きく開いて垂直に近い端面を持つ。内外面ともハケメ調整している。

ＳＤ０１・０５～０９・砂入Ⅱ～Ⅲ区粗砂層他出土の土器（35～133）

古小野川に比定される流路内に堆積した砂礫層と、砂入Ⅱ～Ⅲ区の自然堤防を構成する土層中から出土した土器で、上層１期・２期（第５章第１節）に相当する。古墳時代初頭～平安時代初頭ぐらいまでの時期幅がある土器が混在している。

古墳時代の土師器

甕（35）　二重口縁をもつ小型の甕である。

高杯（36・38・39・41）　杯部（39）は下半部に稜をもち、内彎しながら斜上方に伸びる。脚部には様々な形態があり、円筒状の脚柱部から裾部が急に広がるもの（36）、裾部が大きくハの字状に広がり円形透かしをもつもの（39・41）などがみられる。

小型鉢（42・43）　手づくねのミニチュア土器で、内外面に指頭圧を残す。

器台（44・45）　44は口縁端部が下方に垂下するが、45は垂下しない。後者では疑凹線をめぐらす。

古墳時代の須恵器

杯蓋（46～48）　46は頂部と口縁部の境に突出する稜を持ち、口縁部端に端面をつくるが、47・48は頂部と口縁部の境に稜を持たず、口縁部は丸く収める。後者では口径が大きく器高は低くなる。

杯身（54）　器高は低く、口縁部は内傾し端面を丸く収める。

高杯（55～57・60）　杯部（55）は平らな底部から真っ直ぐ立ち上がる口縁部を有する。脚部（56・57）は低脚で透かしを持たず、沈線を巡らす。60は深い椀形の身に低い脚をつける。

瓶（58）　体部と頸部の径は大きく、体部中央に櫛描列点文と沈線を巡らす。底部は手回しのケズリの後ナデを施す。

壺（59）　頸部に櫛描波状文、体部上方に櫛描列点文を施す。

飛鳥時代以降の須恵器

杯Ｇ・Ｂ蓋（49～52・61～64）　内面にかえりをもつ49～53では、頂部に丸みを残すもの（50・51）と頂部が平坦なもの（52）があり、口径は９㎝ぐらいから16㎝ぐらいまで各種ある。内面にかえりを持たない61～64では、頂部が平坦で器高が低く口縁端部は小さく垂下するもの（61・62）と、周縁が屈曲し、口縁端部が外方へ垂下するもの（63・64）がある。

ⅢＡ（65～67）　平底もしくはわずかに丸みをもつ底部から直線的あるいはやや外反して外方に開く口縁部を有する。底部と口縁部の境は明瞭である

杯Ａ（68～73・75～79・81）　丸みをもつ底部から内彎して外方へ立ち上がる口縁部を有するもの（70・73）、平らな底部から内彎して外方へ立ち上がる口縁部を有するもの（68・69・71・72・75～77・79）、平らな底部から直線的に外方へ立ち上がる口縁部を有するもの（78）などがある。

杯Ｂ（82～94）　平らな底部から直線的に外方へ立ち上がる口縁部を有する。底部と口縁部の境は明瞭である。高台はほとんど水平で口縁部との境付近につき、丸みを持つものがある。底部はヘラキリされる。89は口径が9.8㎝と最小であるが器高は高い。他は口径13㎝、器高４㎝前後に収まる。

椀（95～98）　丸みをもつ平底の底部に内彎する口縁部と水平で短い高台をつける。97は口縁端部が外反する。底部はすべてヘラキリされる。

高杯（99～100）　杯部は椀形を呈する。脚部は低脚である。

皿Ｂ蓋（101・102）　頂部と周縁部の境が屈曲するもの（101）と屈曲せず丸みをもつ頂部を有するもの（102）がある。

壺（103～109・111・112）　103～107は長頸の壺で、口縁部は大きく外に開くもの（107）と、頸部が短く口縁端部を上方につまみ上げるもの（106）がある。体部は103では肩が横に張り出すが、104や105では肩に稜をもたない。108は口縁部がやや外傾する短頸の壺である。肩部の屈曲は不明瞭で体部下半はヘラケズリされる。112も短頸壺で肩の位置は高く二条の沈線を巡らせ、体部中央も同様とする。高台は底部との境につけ、長く外にふんばる。111は広口の壺で口縁部は外反しながら外に開き、端部はわずかに肥厚する。体部は肩部で屈曲し、広い平底の底部をつける。

甕（110・113・114）　110は口縁部が短く外反し、端部は内外に肥厚する。113は口縁部がほぼ直線的に外に開き、短部は肥厚し外面はわずかに垂下する。114は口縁部が外反しながら大きく開き、端部は上方に肥厚し端面をつくる。底部に杯Ａが癒着している。

横瓶（115・116）　115は口縁部がほぼ直立し端部は丸く収める。116は口縁部が外反し端部に端面を作る。外面には凹線を一条巡らせる。ともに側面は円盤充填法で製作される。

飛鳥時代以降の土師器

杯Ａ（74・80・117・119～121）　口縁部が緩やかに開き端部がわずかに屈曲するもの（117）、平底の底部から下半がやや丸みをもって外に開くもの（74・121）、平底の底部から直線的に開くもの（80・119・120）がある。

皿（118）　平底の底部をもち口縁部の立ち上がりは低い。

小型鉢（122）　手づくねで、内外面に指頭圧を残す。口縁部を外方に屈曲させている。砂入遺跡出土のミニチュア土器の中では最も大きい。

甕・壺（123～131）　短胴と中胴がある。大半は口径は体部径とほぼ同じか体部径の方がやや大きくなる。また、131は体部径が口径よりも明瞭に大きい。内面の調整はヘラケズリが主で、一部にハケメを施すが、129ではすべてハケメ調整される。口縁部は比較的大きく外方に開いて端部を丸く収めるが、端面をもつものもある。126は口縁部が直立する壺である。

鍋（133）　口縁部は外反気味に大きく開いて端部は下方に屈曲する。

ＳＦ０１出土の土器（134・135）

須恵器

高杯　低脚のもの（134）と長脚で脚部に沈線を巡らせるもの（135）がある。

ＳＤ０２・０３出土の土器（136～150）

上層２期（第５章第１節）の流路の中でも、最も新しい流路であるＳＤ０２・０３の最上部の砂質シルト層から木製祭祀具に伴って出土したものである。一部にはＳＤ０１の砂礫層最上部の遺物が混入している可能性がある。ＳＤ１７～１９他出土の土器と同様、須恵器に比べ土師器（甕）が多い。

須恵器

甕（136）　口縁部は外反して開き、外面に櫛描波状文を巡らせる。

杯A（137）　底部破片で外面に漆で「○」を書く。

杯B（138～140）底部は広い平底で口縁部は屈曲して斜め外方に真っ直ぐ伸びる。高台は小さく退化の傾向がみられ、底部との境近くにつく。

壺（141）　112に類似する。短頸壺であろうか。

土師器

甕（142 ～149）　底部まで復元できるものは2例だけであるが、すべて中胴の甕であろう。141が口縁部を丸く収める以外は、口縁部に端面をもち、142と143では上方に小さく突起する。

鍋（150）　口縁部は外反して開き、端部は外傾する端面をもつ。

出土遺構・層位不明の土器（151～217）

砂入Ⅰ区～Ⅲ区で出土遺構や層位が不確実であいまいなものを一括した。古墳時代の土器としては土師器では小型鉢、甕、器台、高杯、壺があり、須恵器では杯身、甕、高杯がある。土師器はおおむね古墳時代初頭～前半のものであり、須恵器は6世紀後半の特徴を有するものである。飛鳥時代～平安時代前半の土器としては須恵器では杯A、杯B、杯B蓋、皿、椀、高杯、壺、甕があり、土師器では杯A、甕がみられる。これらの土器は前述の遺構出土の土器と大きくは変わらない。平安時代後期以降の土器としては黒色土器の椀（209・210）、底部を回転糸切りした須恵器の椀（211）、緑釉陶器の椀（213）、須恵器の片口（214・215）、瓦質土器の羽釜（216）などがみられる。

2．砂入Ⅳ区の土器

ピットを主とする遺構出土のものと遺物包含層（第7層）出土のものがあるが、一括して扱う。

古墳時代の土師器

甕（218）　二重口縁をもつ甕である。幅の広い外反する口縁をもち、口縁下端部は鋭く突出する。器壁は全体に薄い。

低脚杯（219）　脚部は外方に大きく広がる。

須恵器

壺蓋（220）　器高が高く、天井部は丸みをもつ。短頸壺の蓋とした。

甕（221・222）　221は口縁部が軽く外反しながら開き、端部を折り返して肥厚させる。その下端はわずかに垂下する。222も口縁部が外反しながら開くが、端部は上方に肥厚する。

杯A（234）　平らな底部に外上方に真っ直ぐ伸びる口縁部を有する。

杯B（224～231・235）　平らな底部から直線的に外方へ立ち上がる口縁部を有する。底部と口縁部の境は明瞭である。高台はほとんど水平で口縁部との境付近につき、228・229では境に接する。底部はすべてヘラキリされるが、228・229では爪形の圧痕が底部に巡る。

杯B蓋（223）　つまみの無い平坦な頂部から屈曲して口縁部が伸び、周縁でも屈曲する。

ⅢA（242）　平坦な底部からやや丸みをもって口縁部が立ち上がり、端部は外反する。

壺（238～240）　238は短頸の壺で直立した体部から肩部が屈曲して稜をもち、口縁部は内傾して短く立ち上がる。239は双耳壺で肩部に一条の沈線を巡らせる。底部は回転糸切りされる。240は徳利形の壺で輪高台が形骸化している。手付瓶の可能性がある。

土師器

杯A（232・233・236・243）　平らな底部に外上方に真っ直ぐ伸びる口縁部を有する。

鍋（244）　ほぼまっすぐ立ち上がった体部から口縁部が斜め外方に伸びる。内外面ともハケメ調整されている。

この他、包含層から土師器の把手（241）と白磁の碗（237）が出土している。

3．砂入Ⅴ区の土器

砂入Ⅴ区出土の土器は縄文土器の一部を除いて、遺構から出土したものはなく、遺物包含層や水田土壌層あるいは水田を覆う洪水性の砂質シルト層から出土したものが大半である。

縄文土器

縄文土器はＳＫ４０１・ＳＫ４０２（245～253）とこれらを覆う包含層（254～261）から出土しているが、すべて小片である。器面の施文や調整には爪形文、異原体羽状縄文、縄文、条痕文などがある。

爪形文（246・255・256）　比較的直線的な施紋具で連続して刺突している。爪形の施紋は246・255が幅約８㎜で２段、256が幅約５㎜で１段確認できる。内面の調整は条痕と考えられる。

異原体羽状縄文（246・248・254・261）　248は底部破片と考えられるもので、底面形は円形ではなく直線的な二辺が角をもつ。内外面に施紋されている。254は浅い沈線を挟んで上下に施紋され、内面は条痕である。

縄文（257）　口縁部の小片で外面は縄文が施紋されるが、残存部位が僅かで羽状縄文の可能性もある。内面は指押さえの跡が明瞭である。

条痕文（247・249～253・258～260）　表裏条痕が大半であるが、内面をナデで仕上げたものもある（247・258）。条痕の幅はおおむね1.5㎜であるが、261は２㎜とやや広い。

これらの土器は北白川下層Ⅰｂ式あるいは羽島下層Ⅱ式の特徴をもつが爪形の刺突にはやや古い様相もうかがえる。

古墳時代の土師器

甕（262）　二重口縁をもつ甕である。幅の広い外反する口縁をもち、口縁下端部は鋭く突出する。器壁は全体に薄い。

壺（263）　ほぼ直立する幅の広い口縁部をもち、緩やかに屈曲して頸部に続く。

鉢（264）　緩やかに内彎する体部から屈曲して口縁部が短く外方に伸びる。

小型鉢（268）　手づくねのミニチュア土器で、内外面に指頭圧を残す。

飛鳥時代の須恵器

甕（270）　口縁部は斜め外方にまっすぐ伸び、端部近くで直立し外傾する端面をつくる。突帯と凹線で仕切った間をヘラ状工具による並行列線文で埋め、カキメを施す。

提瓶（271）　退化した把手をつける。

高杯（272～274）　低脚で透かしをもたない。杯部は丸みをもって立ち上がり、口縁部が直線的に伸びるもの（272）と、外反するもの（273）がある。

飛鳥時代の土師器

高杯（275）　杯部の下半に緩やかな稜をもち、脚部はハの字形にひろがる。

奈良時代以降の須恵器

杯B蓋（276～285）　傘形の頂部をもつもの（276・282）と、頂部が平坦で器高が低いもの（277～281・283～285）がある。後者ではつまみが偏平化している。

杯B（286～296・305～312・317・318）　平らな底部から直線的に外方へ立ち上がる口縁部を有する。底部と口縁部の境は明瞭である。高台はほとんど水平で290のように口縁部との境に接してつくものとそれよりやや内側につくものがある。底部は288だけは回転ヘラケズリであるが、他はヘラキリされる。口径と器高の関係では、295のように口径が小さく器高の高いもの、310のように口径が小さく器高も低いもの、292のように口径が大きく器高が高いもの、288のように口径が大きく器高が低いものがある。

椀（320～321）　320は佐波理椀の形態を模倣したものであろうか。口縁端部を水平に屈曲させた後、上方へつまみあげる。321は内彎する体部をもち底部は回転糸切りである。

皿A（337～342・344～347・351）　底部が平坦なものと丸みをもつものがある。前者では口縁部がやや外反気味に開くものが多く、後者では直線的である。344では口縁端部を水平に屈曲させている。

壺蓋（313・314）　313は傘形の頂部につまみをつけ、縁部内面には下方に張り出したかえりをもつ。314は短頸壺の蓋で平坦な頂部に宝珠状のつまみをつけ、口縁部は真っ直ぐ下方に伸びる。

壺（319・324・325）　319は回転糸切りされた平坦な底部と体部の境に高台をつける。324も底部は回転糸切りされている。325は徳利形の壺の底部であろう。

円面硯（328・329）　堤部と脚部の破片が各1点みられる。

奈良時代以降の土師器

杯A（297・301・302・304）　297・302は平坦な底部から口縁部が内彎して開く。301・304では底部径が小さく口縁部は斜め外方に直線的に大きく開く。302は内面に漆が付着している。

甕（330～334）　332は口縁部を直線的に長く伸ばし、端部をわずかに外反させる。内面はヘラケズリしている。他は外反気味に開き端部を丸くおさめる。内面はいずれもハケメ調整である。

鍋（354・355）　体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部を外反させ端面をつくる

線刻文土器（269・326・327）　甕の体部に不規則に並行する幾筋かの細い線を刻んでいるが、特に何らかの事物を意図して描いたものではなさそうである。

この他、砂入V区では土師器の竈（353）、須恵器の把手付き鉢（356）、白磁の碗（358）、緑釉陶器の小皿（359）と椀（360）などが出土している。

4．墨書土器

砂入Ⅳ区を除く各調査区から須恵器の杯Bを中心に、杯B蓋、皿に文字を墨書した土器が出土している。多くは底部外面に墨書されているが、内面に墨書されたもある。文字は「井」が最も多く5例を数え、井戸が検出された砂入V区で、このうち4例が出土しているのは、何らかの関連性を考えてしかるべきであろう。他に「福」、「出石二」、「神」、「諸□」、「西」、「閑谷一」などがある。また、墨書ではないが、漆で「○」を書いたものが1例見られる。

5．昭和63年度工事立会地点（図版1－③）出土の土器

砂入遺跡の各調査区より約500m上流の工事立会地点で出土した土器である。古墳時代初頭の壺や高杯などの土師器（362～365）、飛鳥時代～平安時代の杯A、杯A、提瓶などの須恵器（367～371）など砂入遺跡の各調査区から出土している土器と同様なものの他、磁器（372・373）もみられる。（藤田）

第３節　石器・金属器

１．砂入Ⅱ区の石器

石鏃・切目石錘などが数点出土しているが遺構に伴うものは無い。

１・２はサヌカイト製の小型凹基式石鏃である。周辺加工で成形し、基部の抉りは浅い。３はチャート製の不定形石器、４は切目石錘、５は砥石である。砥石の上面は緩やかなカーブをもってきわめて平滑な面を形成しており、面全体を均一に使用したことが推定される。

２．砂入Ⅴ区の石器

ＳＫ４０１・４０２からは削器（７・10)、抉入石器（９)、石錘（16～20・22)、石皿（40)、磨石(37)、砥石（44・45)、台石（46）が出土している。また、縄文時代前期の包含層からは尖頭器（６)、不定型石器（８)、石錘（21・24～34)、磨製石斧（35)、磨石（36・38・39)、砥石（42・43・47）が出土している。ここでは両者をまとめて器種ごとに記述する。

尖頭器（６）は鉄石英製の基部破片と思われるもので、やや不整形な舌状を呈し上部を欠損する。二次加工は右側縁が中心で左側縁には小剥離のみを施すため、両面には素材の剥離面を大きく残す。

削器はサヌカイト製で弧状の刃部をもつもの（７）と直線的な刃部をもつもの（10）がある。

抉入石器（９）は厚手剥片の腹面側に数カ所の抉入部をそれぞれ一撃で形成している。流紋岩製。

石錘（16～34）は最も数多く出土している。扁平な川原石を素材として主にその長軸側の両端を打ち欠いて抉りを作る。打ち欠きは１回で済ませているものもあれば何回もの打ち欠きを繰り返しているものがある。平面形は整った楕円形もあれば、かなり歪なものもあるが、楕円形に近いものがより選ばれている傾向にある。完形品の大きさは長さ６～14cm（平均9.2cm)、幅７～11cm（平均7.9cm)、厚さ1.3～4.6cm（平均2.6cm)、重量90～890ｇ（平均270ｇ）である。

磨製石斧（35）は基部を欠損する。刃部は鋭く研磨されているが左側面側はほとんど研磨されておらず剥離面を大きく残す。ただし、この剥離面の多くは研磨後のもので、再利用を考えるべきかもしれない。凝灰岩製。

磨石では両面を磨き側面に敲打痕のあるもの（36・37）と、全面を磨くもの（38・39）がある。

石皿（40・41）は破損品であるが、41は25cm×30cmほどの長方形状になると予想される。

砥石・台石（42～47）は自然礫の一部に研磨面があるもので、小型のものを砥石、大型のものを台石とした。43には研磨面は無いが一端に数回の打ち欠きが認められる。

この他、砂入Ⅴ区では古墳時代以降の遺構面の調査中にも少なからず石器が出土している（11～15、48～61)。これらは縄文時代前期の石器と大きく変わるところは無く、この時期以外の土器も出土していないことから縄文時代前期の石器と考えられる。

石匙（11）は自然面をもつ黒曜石製剥片の打面側を折り取り、一端に抉りを入れて摘み部としたもので、刃部への二次加工はほとんど施されていない。

削器（12～15）は凝灰岩製とサヌカイト製があり、いずれも剥片の長軸に沿う縁辺に二次加工を施している。二次加工が丁寧な13・15ではやや急角度の刃部に仕上げている。

磨製石斧（53～55）は３点とも欠損品である。54は他とはやや異なる石材が使用されている。

チョピングツール（56）は刃部以外は研磨されており、磨製石斧からの転用品であろう。

石錘（49～52）、**磨石**（57・58）、**砥石**（59～61）は遺構・包含層出土のものと変わりはない。

大型剥片（48）は石器素材として搬入されたものであろう。背面側の剥離痕を見るかぎり全周から剥離が行われている。サヌカイト製。

3．金属器

銅銭、銅製帯金具、鉄刀子、銅製飾金具が出土している。銅銭のみが砂入Ⅱ区からの出土で、それ以外は砂入Ⅴ区から出土している。

銅銭（1）は元寛通寶で径2.4cm。鋳上がりは比較的良い。

銅製帯金具（2）は巡方の裏金具である。3.8cm×3.3cm×0.1cmの板金である。一角を欠損するが、短辺にはそれぞれ3つの鋲受けの小孔を穿ち、うち2孔は鋲が残る。

鉄刀子（3）は切っ先と茎の端を欠損するが10cmを少し越える長さになろう。両関式で刃部は錆による損傷が激しい。。

銅製飾金具（4・5）は蒲鉾形の細長い銅板に等間隔に円孔を並べたもので、1孔に鋲が残っている。同一個体の可能性があるが、出土位置は第1面（5）と第3面の溝（4）に分かれる。

第5章　まとめ

第1節　遺構について

昭和62年度～平成5年度の間の5次の全面調査によって、砂入遺跡では縄文時代前期、古墳時代後期、飛鳥～平安時代の遺構が検出された。ここでは各調査区で検出された遺構の時期を層位および出土遺物によって区分し、現在整理作業中の袴狭遺跡の調査成果も多少盛り込みながら遺構の変遷を概観したい。

1．縄文時代

砂入Ⅴ区で確認された。小野川右岸から北へのびる小さな谷に面した斜面に縄文時代前期の遺物包含層と不整形な土坑が3基検出されている。遺物量は少なく、東側が弥生時代～古墳時代の旧河道で、西側は奈良時代以降の道路状遺構でそれぞれ削られているため、残された遺跡の広がりは限定されている。しかし、礫石錘が数量的にまとまって出土していることや、粘土質の強いシルト層中からかなり大型の礫石器が出土していることから、近接したところに生活拠点があったと想定される。

但馬地域において縄文時代前期あるいはそれ以前の遺跡は神鍋高原やハチ高原のような高原地帯に立地するのが通例であった。砂入遺跡のように沖積地に埋没した遺跡の存在が判明したことで、今後、山地からつながる沖積地の調査の際には、埋没した縄文時代遺跡の存在を想定することも必要となろう。

2．古墳時代

砂入Ⅴ区では前期の遺物包含層が、砂入Ⅳ区では後期の水田畦畔が検出されている。砂入Ⅴ区では木製穂摘具が出土していることから、少なくとも弥生時代末～古墳時代初頭には周辺に水田が開かれていたと推定され、田下駄の一部もこの時期に属するものがあると想定される。

この後、砂入遺跡および袴狭遺跡周辺の沖積低地には継続して水田が営まれていたと想定される。土壌が腐植質を多く含むシルト質土であり、軟弱な地盤であることから、各種多様な田下駄が使用される反面、鋤や鍬などの土掘具はごく少ないという特色をもつ。こうした湿田に対応した農業形態は、近年の調査によって但馬地域に広く分布することが明らかとなりつつある。

3．飛鳥～平安時代

多量の木製祭祀具の出土で砂入遺跡を代表する時代である。砂入Ⅰ区～Ⅲ区での出土状況から下層と上層に大別され、下層はさらに2期に、上層は3期に細分できる。出土遺物から下層は7世紀後半（第4四半期）～8世紀前半に、上層1・2期は8世紀後半～9世紀初頭に、上層3期は9世紀後半～10世紀前半の時期を想定できる。砂入Ⅰ～Ⅲ区については図10にまとめて図示した。なお、砂入Ⅱ・Ⅲ区に関しては更に細分した変遷を後述する。

下層1期

砂入遺跡において木製祭祀具を用いた「祓」が行われる初源である。ＳＤ１８最下層を中心に木製祭祀具の出土が見られる。木製祭祀具は人形、馬形、斎串の3種がそろっており、律令祭祀として完成された形で開始されている。

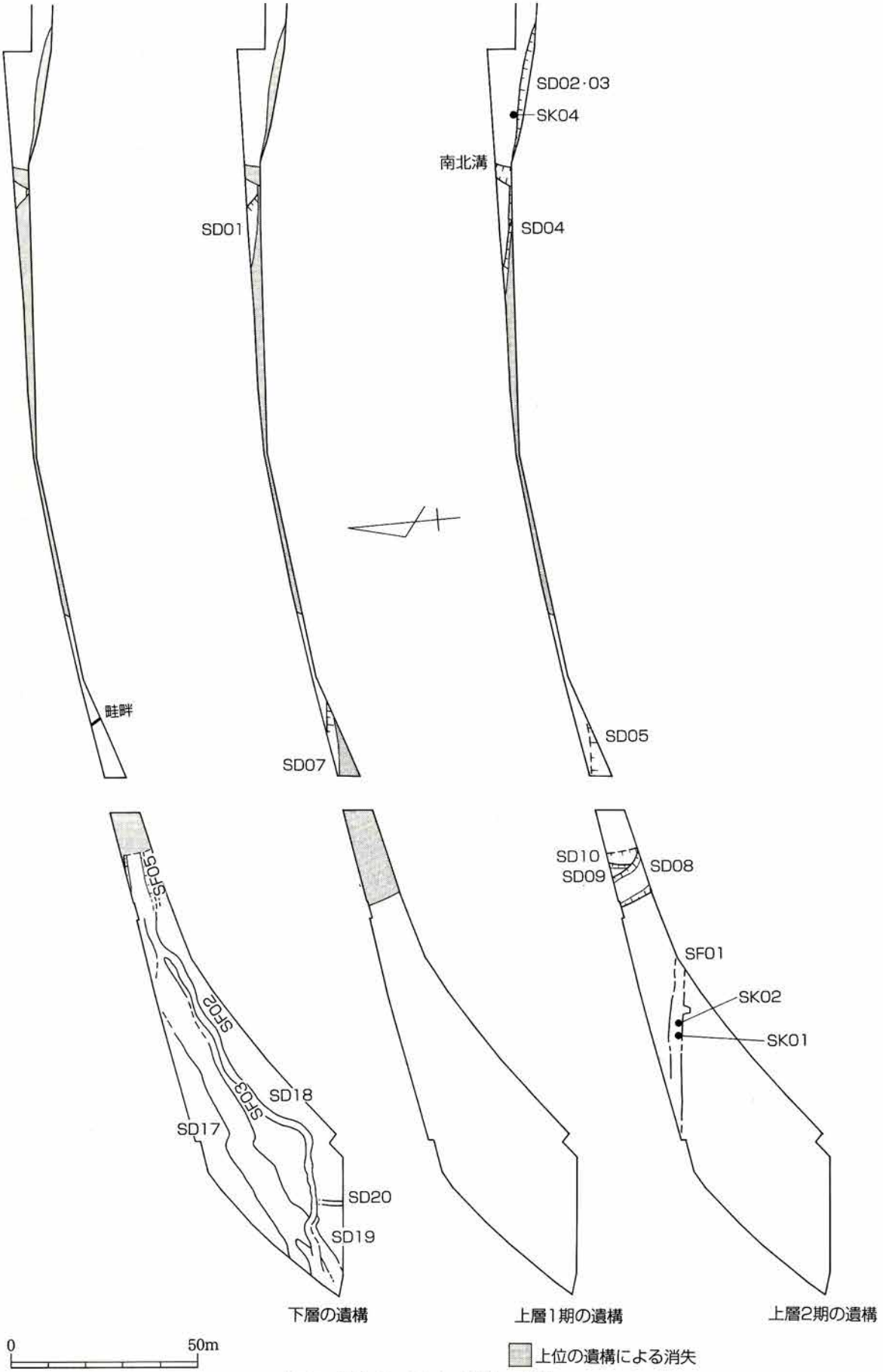


図10　砂入Ⅰ～Ⅲ区の遺構の変遷

また、砂入Ⅰ区の水田出土の農具類と畦畔、砂入Ⅱ区のＳＤ１８最下層出土の農具類の存在によって、前時代に引き続き水田が営まれていることが分かる。農具には鋤・鍬がなく、田下駄だけが確認さている。また板材を杭で固定した畦畔のように、盛土を伴わない畦畔の存在が水田を特徴づける。

下層２期

砂入遺跡において最も活発に木製祭祀具を用いた「祓」がとりおこなわれる時期である。砂入Ⅰ区西端から砂入Ⅲ区にかけてＳＤ１７～ＳＤ２０、ＳＦ０２～ＳＦ０５、木道が検出されている。

ＳＤ１７は幅が６～７ｍあり、深さも１ｍほどあることから旧小野川と考えられる。ＳＤ１８は幅が狭く緩やかに蛇行することから旧小野川本流から分流した流路であろう。

ＳＦ０２～ＳＦ０４は流路脇に枝等を敷設した簡易な道状遺構であり、ＳＦ０５は流路状窪地の肩部で特に人為的な改変は認められない。

木道は低湿地を渡ってＳＦ０５へと至るための簡易な通路と考えられ、ＳＦ０２～ＳＦ０４への通行にも使用されたかもしれない。

これらの遺構のうち特にＳＦ０３とＳＤ１８は活発に祭祀に利用されており、木製祭祀具のまとまりをもった出土状況は祭祀の場がそのまま封入された感がある。出土状況の詳細な検討により、祭祀の形態が水に流す行為を重視するものから、祭祀の場をそのまま残すような形態に変化し、さらに道状遺構が祭祀の場として重視されるようになった段階へと変化してゆくことが想定されており、この点についてはさらに詳しく後述する。

上層１期

砂入Ⅰ区ではこの段階となって古小野川が調査区に流入し様相が一変する。低湿地を深く削り込んでＳＤ０１とＳＤ０７が調査区を斜めに横切って西流するのである。両者は地点が離れていることとＳＤ０７が極めて部分的にしか遺存していなかったことから同一の流路であると断定できないが、上層の中では調査区の東と西で検出された最も古い段階の流れであることは間違いない。これ以降、流路は埋没と新たな流路の形成を繰り返しその位置を変えてゆく。これと並行するように砂入Ⅱ区・Ⅲ区では土砂の堆積が進み自然堤防が形成されてゆく。

ＳＤ０１・ＳＤ０７には簡易な井堰やシガラミによる護岸施設がある。これらは下層のＳＤ１７～ＳＤ２０には見られなかったものである。遺物の出土状況をみると、土器は大半が砂礫層中から出土し、古墳時代から平安時代初頭まで時期幅をもつが、木器は大半が護岸施設周辺か流路最上層の砂質シルト層から出土しており、同時性が高いと考えられる出土状況を示す。

ＳＤ０１・ＳＤ０７の木製祭祀具は下層の特徴を引き継ぎながら、上層の特徴も垣間見せるものであり（次節参照）、砂入Ⅱ区の自然堤防堆積物中の木製祭祀具にも下層の特徴を有するものと、上層の特徴を有するものの２者が認められる。地形環境が激変するだけでなく、祭祀自体にも大きな変化が生じる時期といえよう。

上層２期

砂入Ⅰ区ではＳＤ０１・０７の埋没後、引き続いて活発に古小野川の流路変更が行われる。ＳＤ０２～０５は西流し、ＳＤ０８は蛇行して北流する。それぞれの流路には杭と枝を用いたシガラミによる護岸施設が設けられるが、大量の土砂の堆積には抗するべくもなかったようである。

流路から出土する遺物のうち砂礫層中のものにはＳＤ０１・ＳＤ０７同様に古墳時代初頭の土器のように、木器よりも古い時期のものが多く含まれている。しかし、最上層の砂質シルト層中からシガラミ

にからまって出土する遺物の多くは、流路の存在した時期に近いものであろう。特にＳＤ０２・０３での遺物の出土状況は、古小野川の川辺での「祓」の状況を物語るものである。木製祭祀具と重なるように出土した土師器甕が祭祀に伴うものならば、山形県俵田遺跡のように甕の中に木製祭祀具を入れるというような状況（山形県教育委員会1984年）が想定されるかもしれない。

砂入Ⅱ区では自然堤防が形成され、その上に道路状遺構（ＳＦ０１）が敷設される。砂入Ⅰ区の各流路のシガラミとは使用する材料に大差ないものの、入念な作業が行われている。調査区内で約31m、さらに出石町教育委員会の調査では約40m東でこの続きが確認されており（出石町教育委員会1995年）、幅約2.5m、延長70m以上におよぶ大規模な土木工事である。ＳＦ０１は数回の拡張が行われるが、その間で「祓」が行われ、浅い皿状の窪みに木製祭祀具が一括投棄される（ＳＫ０１～０３）。ＳＫ０１はこうした道路状遺構上での祭祀の最後のもので、これ以降はＳＦ０１は使用されていないと想定される。ＳＫ０１～０３と同様の遺構は砂入Ⅰ区でも見られ、こちらは古小野川の岸辺に一括投棄されている（ＳＫ０４）。

砂入Ⅳ区では柵列を伴う掘立柱建物が４棟以上点在するようになるが、柱穴掘り方の径は30cm以下と小さく、約600 m上流にある荒木遺跡で検出されたような官衙が想定できる規模の建物ではない（出石町教育委員会1993年）。

砂入Ⅴ区では背後の山の斜面を削り幅約1.5mの道路が造成される。谷の奥へ向けて北北東へと走行し、その東側には板材を畦畔の芯としたと思われる水田が広がる。

上層３期

砂入Ⅰ～Ⅳ区ではこの時期の明確な遺構は存在せず、砂入Ⅴ区でのみ、上層２期に継続して道路遺構と水田が存在する。道路遺構は前期と同じ造成面であるが路肩には板材による土留めの造作がある。水田は土盛りによる畦畔によって区画され道路遺構と方向を同じくしている。また、水田の一画あるいはそれとはやや離れて土居桁隅柱溝落し込み横板組の井戸が構築されるが、９世紀後半～10世紀にかけての地震によって倒壊している。

砂入Ⅴ区では上記の井戸の他、相欠仕口横板組の井戸と井籠組の井戸が存在したことが、井戸部材の出土からわかる。周辺の遺構の状況から建物に付随する井戸ではなく、生活用水の確保とは異なった機能を考えるべきかもしれない。砂入Ⅴ区から約１km下流の田多地小谷遺跡でも古小野川右岸に接して奈良時代と想定される井戸状遺構が確認されている（兵庫県教育委員会1983年）。調査範囲が限定されているが、ここでも付近に建物跡が存在した様子は無く、こうした井戸がどのような目的で作られたものなのか、今後、検討してゆく必要があろう。

４．平安時代以降

砂入Ⅰ区では上層２期以降、古小野川本流が大きく北へ蛇行したのち南へ遠ざかっており、その埋没の過程では腐植質が多量に堆積するような低湿な環境下にあったことがうかがえる。

砂入Ⅱ区～Ⅲ区ではＳＦ０１周辺の自然堤防の埋積が進行し近世までには周辺は平坦化している。その過程で、中世～近世のある時期に砂入Ⅱ区では平坦化した自然堤防上を流路が走る。

砂入Ⅴ区での水田は鎌倉時代ぐらいまで継続するが、遺構としては検出されなかった。　　（藤田）

5．砂入Ⅱ区の遺構について

砂入遺跡の中でもⅡ区は祭祀の形態が最も明確にわかる地区である。砂入遺跡全体の流れは前記の遺構の通りであるが、Ⅱ区だけは細分が可能である。よって改めてⅡ区の分類を行った上で、砂入遺跡の変遷と歴史的位置付けを略述してみたい。

大きく上層と下層の２時期に分けられる。その中でさらに小分類することができる。下層の遺構は、前記で下層１期と下層２期に分けられているが、各々の時期が２つに分けることが可能である。特に下層１期では　祭祀形態が変化している。下図の分類でいくと①期と②期である。①期は祭祀遺物が他の木製品とともに堆積した状況を示している。祭祀を近い上流で行ってはいるが、Ⅱ区の原位置で実施したという絶対的な根拠はない。②期では確実に原位置として人形や斎串を束にしてＳＤ１８に流そうとした状態で検出している。『祓』の場所として確実である。祭祀遺物以外には容器と考えられる曲物などがあるにすぎない。①期とは内容が変化しており、堆積状況も異なっている。①期は溝底にぎっしりと詰まった状況で出土しており、遺物の方向性は認められない。だが、②期になると大半は祭祀遺物の頭を下方にして纏めて溝に流す行為が窺われる。そのため、遺物の方向性があり、溝肩に留まった状態

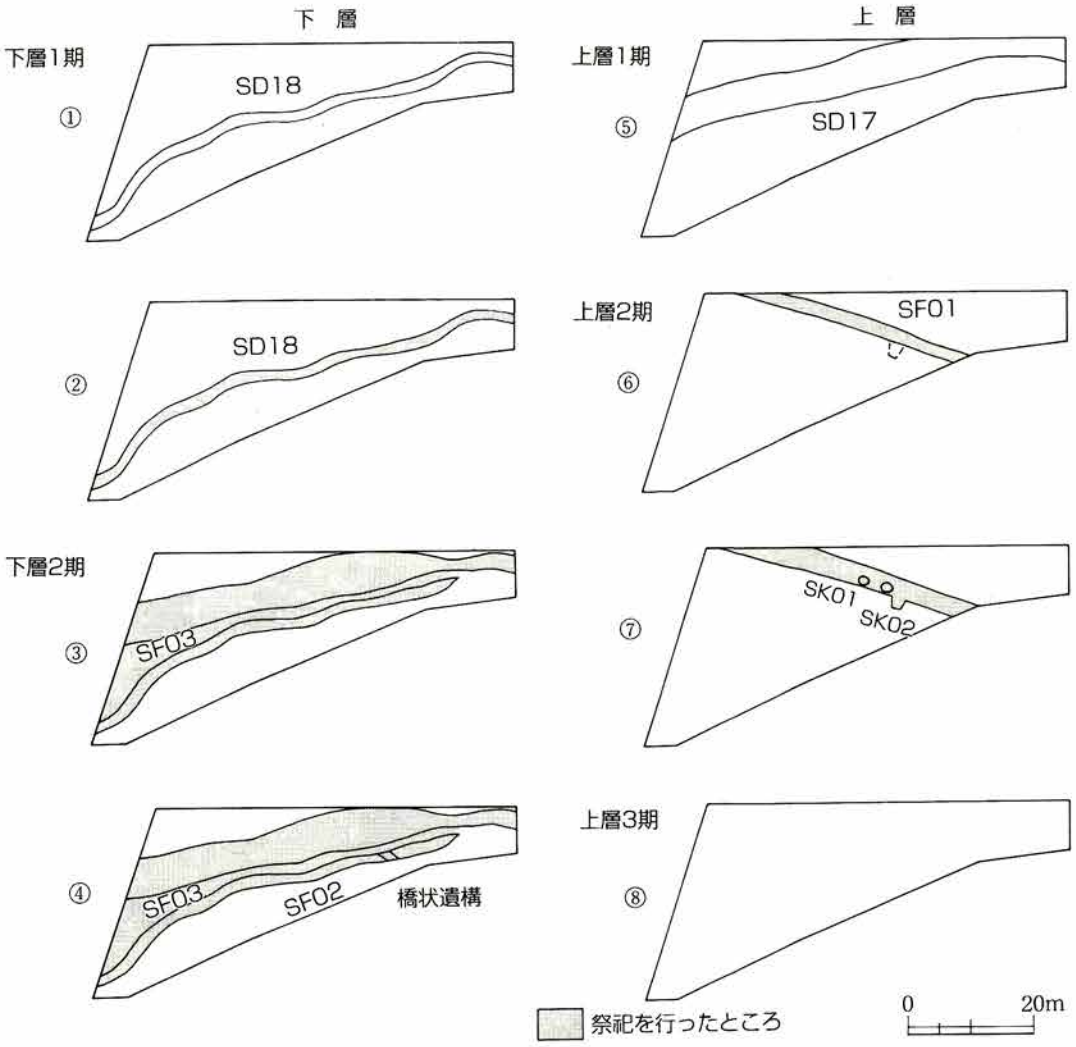


図11　砂入Ⅱ区の遺構の変遷

で洪水砂が被っている。砂が挟まれることによってある程度時期幅が想定できる状態である。

下層２期は砂入Ⅱ区で最も祭祀が行われた盛期を示している。今まで溝を対象として祭祀遺物を流していたのに加えて道が利用されるようになったのが、最も大きな祭祀形態の変化である。祭祀の行われた場所も当然拡大したことになる。ＳＤ１８以外に北側のＳＤ１７やＳＤ１８の両岸が拡大された場所である。洪水砂の間層があることから、数度となく祭祀が繰り返されていたことが明確で、遺物の単位も把握できる資料である。溝の湾曲部が特に多く確認されている。堆積状況でそうなったのかもしれないが、より多く好んで湾曲部を利用していたように思われる。道（ＳＦ０３）を利用した祭祀は道上に人形・斎串・馬形を突き刺して祭祀を行った状況を残している。この状況は、今まで長期間『祓』の場として利用されていたＳＤ１８に橋状遺構を懸けることによって、溝の機能を停止したことにより変化が如実に表れたものと思われる。水に流す場から、形代を立てて祭祀を行う場に変化したことになる。この変化もⅡ区では大きな画期である。そのことから下層２期を③期と④期に分けている。③期は間層が数層あり、廃棄（祭祀時の投棄）単位が把握できることから、さらに小区分が可能であることは確実である。

上層１期の時期は洪水砂が大きく入り込み、自然堤防が形成されていく時期でⅡ区では明確に祭祀は行われておらず、遺構も検出されていない。洪水砂と滞水状態を示すシルト層が堆積しており、出土遺物の変化（大型化・人形の墨書表現）から、遺構はないものの上層の時期と考えられる。

上層２期は再度、Ⅱ区に遺構が築かれる時期である。下層の道とは比較できない大規模な道（ＳＦ０１）である。杭を打ち込み、横木を渡して基礎工事をし、土嚢状の単位のある部分も看取される土の単位によって道部分を積み再度杭を打って枝・材を敷き詰めた丁寧な大規模な作業の遺構である。調査区内を東西に貫いており、両方に延びている。前期に形成された自然堤防を利用して構築されたもので、直線的に続いている。地鎮遺構かと思われる遺構も築かれている。南側に突出部が後に造り足されるとともに南側に拡張している。この拡張の時期によって⑥期と⑦期に分けている。拡張時には祭祀土坑が設けられ、道を作る時・廃棄する時に安寧を願って祭祀を行っている。土坑の時期（開始・終了）を加えると⑦期は３小期に細分できる。上層２期（⑥期・⑦期）の出土遺物の特徴は大型化すること、顔表現が盛んなこと、馬形が含まれないことの大きく３点である。上層２期（⑥期・⑦期）は大きな道（ＳＦ０１）以外に土坑が確認されている。ＳＦ０１の下面には遺構構築時の土坑であるＳＫ０３が築かれている。また、上面には遺構面とともに遺構構築時の土坑であるＳＫ０２と遺構廃絶時の土坑であるＳＫ０１が築かれている。一括性のある出土遺物のある遺構が順に構築され、セット関係や遺物の内容を検討する上に有効である。古い順にＳＫ０３⇨第２遺構面⇨ＳＫ０２⇨ＳＫ０１となる。その出土内容は表４のとおりである。

種別ごとに変化を見てみると、人形はＳＦ０１全般を通して大型である。古い段階のＳＫ０３は刻みだけで、次段階は刻み・墨書半々で、新しいＳＫ０１になると墨書のみになる。斎串も古いＳＫ０３はＡだけであるが、新しくなるとＢが主体となっている。

上層３期はⅡ区では再度洪水砂に覆われ、遺構が認められない時期である。Ⅴ区など小野川右岸に場が移動している。旧河道が近世に至るまで幾つか確認されているだけで、明確な遺構は認められなくなる。

最後に砂入遺跡の時期であるが、律令期の木製祭祀具が主体の祭祀遺跡ということで非常に時期を決定するのに困難な遺跡である。数少ない須恵器などの時期の判る遺物を中心に考え、さらに周辺の遺跡

表4　祭祀土坑の器種構成

出土位置	人形				馬形	斎串			容器		その他遺物
	墨書	刻み	大型	他		A	B	他	曲物	折敷	
ＳＫ０１	１３						6		1		
第２遺構面	1	5			2		4	5		2	刀・鏃・刀子・建築材
ＳＫ０２	6	7					3	1	1	4	
ＳＫ０３		1	1			3					

の消長や木簡などの伴出遺物（特に袴狭遺跡）の年代などを加味して勘案してみる。まず出土遺物から考えると、下層１期はＳＤ18最下層やＳＤ19の底面出土の遺物から７世紀前半でも古い時期（初頭）になるものと思われる。下層２期は砂入遺跡Ⅱ区で最も祭祀行為が盛んだった時期で、飛鳥Ⅳ期を前後する時期と考えられる。そして全く遺構のない上層１期を経て様相が一変する人形などの祭祀遺物も大型化し墨書のものが一括出土するようになる。上層の遺構からは平城宮期の土器が見られ、袴狭遺跡の延暦16(797) 年の紀年銘の木簡が出土しており、８世紀末前後に相当することが想定される。その上層には厚く洪水堆積物が存在し遺構が認められないことからも、10世紀初頭の禁制木簡の時期までは下らないことが確実である。すなわち砂入Ⅱ区の遺構は７世紀初頭から９世紀初頭の約２世紀に渡って営まれた祭祀遺跡と考えられる。

これを周辺の遺跡と比較してみると、小野川上流の荒木遺跡で整然とした大型の掘立柱建物群が検出されており、その時期は７世紀末からの遺跡である。しかし、２時期以上（現状では８世紀前半と９世紀）の存続が確実視され、さらに古くなる可能性も残されている。砂入遺跡の下層１期の時期までは遡り得ないが、盛大に祭祀行為を行っている下層２期の時期には荒木遺跡が営まれていた可能性が十分に考えられる。そして洪水による上下層の遺構の推移と荒木遺跡の消長も同一である。小野川流域の変化を想像する場合、決して偶然とは考えられない。そして上層期になって袴狭遺跡（内田地区）でも新たに官衙遺構が造立し規模も大きくなって祭祀行為を継続したものと思われる。荒木遺跡と袴狭遺跡の遺構の変遷とは大きな糸で関連しているものと思われる。さらに紀年銘の木簡の時期を考慮すると、絶対年代の補完になるものと思われる。（渡辺）

第２節　木製祭祀具について

前節で示されたように、砂入遺跡では飛鳥～平安時代にかけて下層２時期、上層３時期の５時期を区分することができた。特に砂入Ⅰ区～Ⅲ区では、大規模な土砂の堆積があり、それぞれに帰属する遺物も良好に分離されている。以下では、出土状態の良好な砂入Ⅰ区～Ⅲ区の下層と上層１期、上層２期の３時期の木製祭祀具をとりあげ、まずその全般的な変化を概観した後、人形、馬形、斎串のそれぞれについて形態上の変化を中心に検討してゆきたい。

１．木製祭祀具の全般的な変化

砂入Ⅰ区～Ⅲ区の人形、馬形、斎串の３者を中心に、下層と上層１・２期を対比した場合、下層から上層へと次の４つの大きな変化を認めることができる[注1)]。

第１点は、量の減少である。表４に示すように、下層では3000点近い点数（出土層が不確実で集計をひかえたものの大半は、形態から判断して下層に帰属すると考えられるので、2877点を大きく上回ることは確実である。）があるにもかかわらず、上層２期では600点弱と１／５ほどに減少している。調査区域外にどれほどの遺物が埋蔵されているか未知数であり、単純に数量の比較をするのは早計であるが、少なくとも下層の圧倒的多数は今後とも覆ることはないであろう。

第２点は、組成の簡素化である。下層では人形、馬形、斎串以外に舟形、特殊刀形、刀形、刀子形、剣形、鋤形、紡錘車形、不明形代など、必ずしも数は多くないが多様な形代が使用されている。これに対して、上層２期ではわずかに刀形（1715）、鳥形（310）と不明形代（335）各１点をみるだけで、祭祀具組成の簡素化は明白である。なお、舟形については砂入Ⅰ区での機械掘削中に出土した1853が唯一上層２期に帰属する可能性がある。

人形、馬形、斎串の組成比にも大きな変化がある。表5および図12に示すように下層では斎串が約70％を占め、残りの30％を人形と馬形で２分する。人形は馬形よりもやや多く、両者の比は９：８ほどである。上層１期でも下層と同様の組成比を示す。ところが、上層２期では斎串が多数を占めることは変わらないものの組成比は60％弱に減少し、かわって人形が倍増する。馬形は下層、上層１期に比べると組成比で約２／３に減少している。つまり下層～上層１期では人形と馬形は同数に近かったが、上層２

表５　人形・馬形・斎串組成表

	人　形		馬　形		斎　串		合　計
上層２期	177	30.5%	59	10.2%	345	59.4%	581
上層１期	15	16.5%	13	14.3%	63	69.2%	91
下　層	456	15.8%	402	14.0%	2019	70.2%	2877

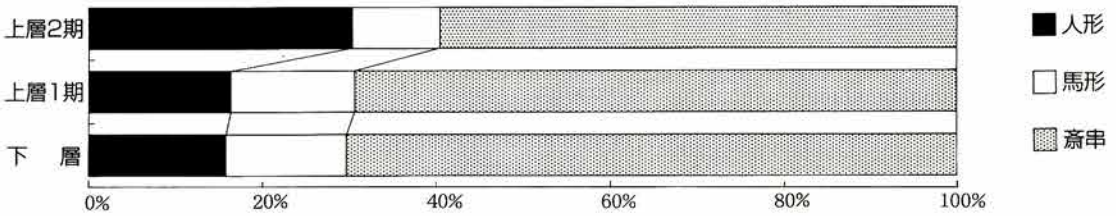


図12　人形・馬形・斎串の組成

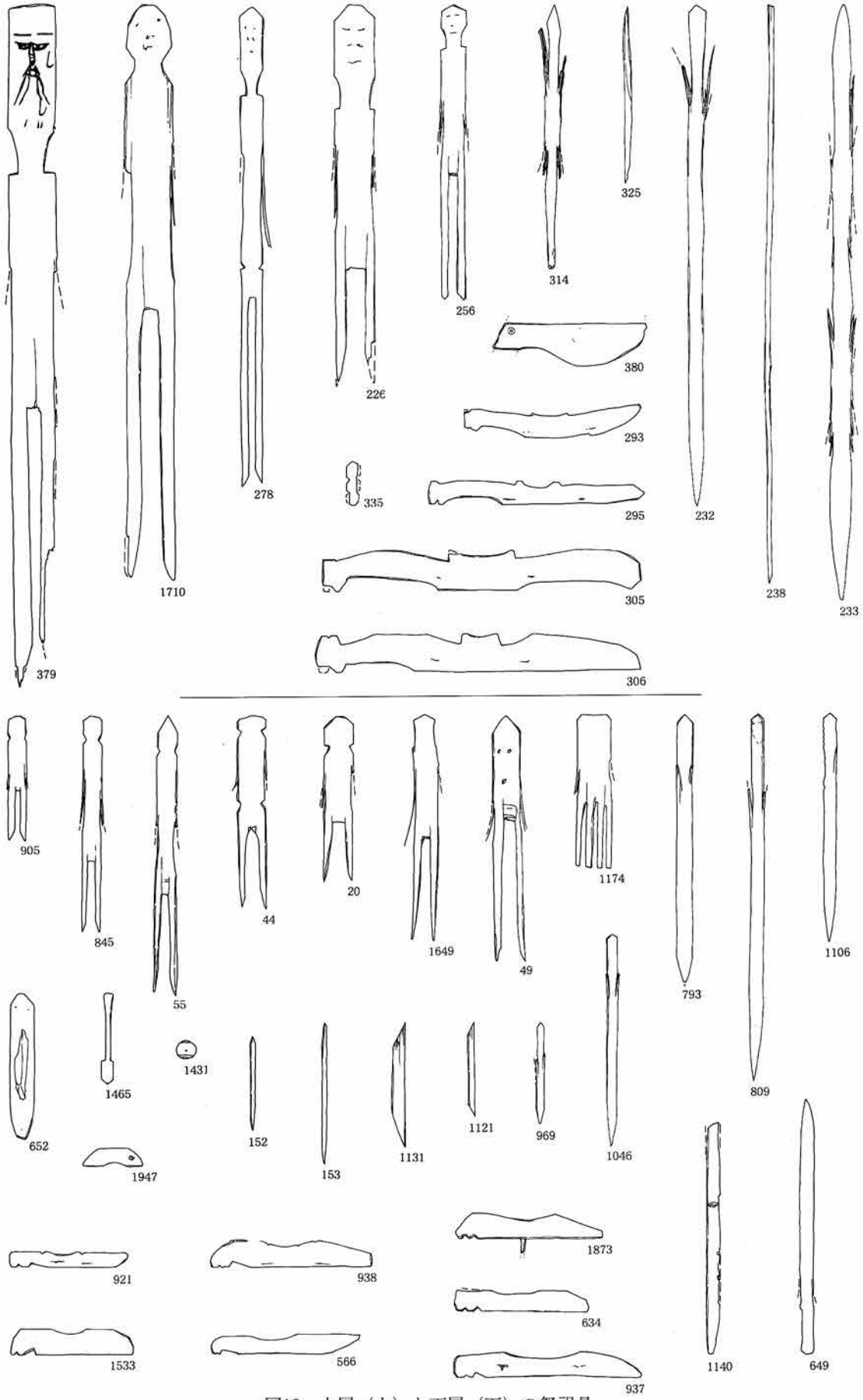


図13　上層（上）と下層（下）の祭祀具

期になると人形は馬形の３倍程にもなる。斎串の減少以上に馬形の減少が顕著である。

ところで、上層２期での馬形の減少にはＳＫ０１・０２・０４の組成を考慮する必要がある。３基とも人形と斎串のみで構成され馬形が欠如するが、これは馬形の減少傾向の延長線上にあり、祭祀具組成が簡素化されていった結果と考えることができる。ＳＫ０１・０２・０４では人形と斎串の組み合わせも異なっている。周辺部の遺物をどこまでそれぞれの遺構に帰属させるかによって多少の差異は生じるが、ＳＫ０１は人形Ｃ類（墨顔）と斎串Ｂ類、ＳＫ０２は人形Ｃ類（墨顔と刻み顔）と斎串Ｂ類・（Ｄ類）、ＳＫ０４は人形Ｃ類（刻み顔）と斎串Ａ・Ｂ・Ｃ類である。

組成簡素化の傾向は、人形、馬形、斎串の形態についても認めることができる。人形ではＡ類中心にＢ・Ｄ・Ｆ類を混じえた組成からＣ類圧倒的優位な組成へ、馬形ではＡ・Ｂ類共存からＡ類単独へ、斎串ではＡ・Ｃ２・Ｄ・Ｅ・Ｆ類からＡ・Ｂ・Ｃ１類へ移行し、形態組成が簡素化される。ただし、斎串ではＢ類・Ｃ１類といった上層２期には見られなかった形態が新たに出現しており、単純に一方向の変化ではない。

第３点は、形代の写実化である。下層では人形に墨書による顔表現は認められず、刀子などで突き刺したり、切りキズをつけて顔を表現するものもわずかである。馬形の切欠きも相対的に小さい。ところが上層２期になると人形では墨書や刀キズによる顔表現が普遍化し、馬形では大きく切欠いて頸部や胴部などを表現しており、より写実性が高くなる。

第４点は祭祀具の長大化である。人形、馬形、斎串のどれをとっても下層よりも上層２期のほうが長さの平均値で1.5倍～３倍の大きさとなっている。ただし、単純に長大化したのではなく、特に人形については20㎝前後の小型品～90㎝近い大型品まで長さの変異に富むようになったととらえるほうが妥当である。

以上のように砂入Ⅰ区～Ⅲ区における木製祭祀具は、量の減少、組成の簡素化、写実化、長大化という４つの点で大きく変移していることが明らかとなった（図13）。こうした傾向の一部ははすでに各地で出土する祭祀具に関して報告されているところであるが、砂入遺跡では層位的にこれを裏付けることができた。

下層と上層２期の木製祭祀具のありかたは連続性よりも断絶といったほうが良いような大きな変化がみられる。この断絶に近い変化を上層１期の資料だけで埋めるには少し無理がある。前節で述べたように下層では幅狭の流路沿いで行われた「祓」が、上層２期では古小野川の川岸へと場所を移している。さらに道路状遺構の上に一括投棄するという特殊な「祓」の実施方法が行われていることなどをみても、下層から上層２期にかけて「祓」の執行のあり方に大きな変化があったことが予想される。　（藤田）

２．人　形

１．形態の変化

砂入遺跡で見られる人形は肩の切欠きの違いによりＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｆの５類に分類される。表６上段および図14上段には、下層～上層２期におけるタイプ別の出土数を示す。

下層では個体数446点のうちＡ類が90％を越え圧倒的多数を占める。他はそれぞれ２％前後にすぎないが、点数にして10点程は確実に存在する。これが上層２期になると個体数177 点のうちＡ類は４％以下にまで減少し、かわってＣ類が95％を越える。下層では少ないながらも一定量をみたＢ・Ｄ・Ｆ類はほとんど皆無に等しい状態となる。ただし、下層と上層２期では同じＣ類と言っても切欠きの形は同一

表6　人形組成表

	人　形　A		人　形　B		人　形　C		人　形　D		人　形　F		合　計
上層２期	6	3.4%	1	0.6%	169	95.5%	1	0.6%	0	0.0%	177
上層１期	7	46.7%	1	6.7%	7	46.7%	0	0.0%	0	0.0%	15
下　　層	420	92.1%	8	1.8%	8	1.8%	11	2.4%	9	1.9%	456
SF02	14	77.8%	0	0.0%	2	11.1%	2	11.1%	0	0.0%	18
SF03	92	92.0%	2	2.0%	0	0.0%	4	4.0%	2	2.0%	100
SD17	14	82.4%	1	5.9%	1	5.9%	1	5.9%	0	0.0%	17
SD18	252	94.7%	4	1.5%	3	1.1%	4	1.5%	3	1.1%	266

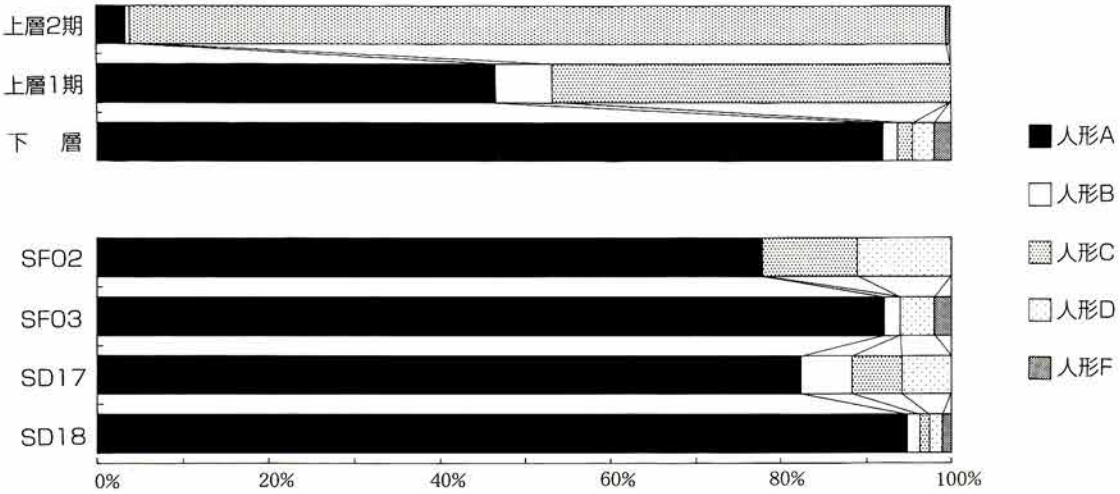


図14　人形の組成

ではない。切欠きの上側の一辺を首筋とすると、下層では首筋が直線的で短いのに対して、上層２期では首筋は緩く弧を描き長いものが多い。

Ｄ類とＦ類は下層にだけに存在し、特に肩に切欠きが無いＦ類は、現在のところ袴狭遺跡でも確認しておらず、特異な形態である。

上層１期ではＡ類とＣ類が45％前後でほぼ同量で、下層と上層２期の過渡期的な様相を示すが、個体数が15点と少ないため、その評価には慎重に望む必要があろう。

次に、下層を代表する遺構としてＳＦ０２、ＳＦ０３、ＳＤ１７、ＳＤ１８とりあげ、形態別の組成比を示したものが表６下段および図14下段である。少数派のＢ・Ｃ・Ｄ・Ｆ類があったりなかったり若干の凹凸が認められるようである。しかし、ＳＤ１７とＳＦ０２では総数が少ないこともあり、必ずしも有為な差があるとはみなしがたい。

２．長さの変化

表７および図15には、下層と上層２期における長さの度数分布、平均値などを示す。ここで明らかなように下層と上層２期では長さのピークがまったく異なり、その差は歴然としてる。

下層では平均長は27cmで、最小15cm、最大が71cm、大半の資料は20cm～40cmに収まる。図17では50cm～70cmの間が上層２期のグラフで隠れているが、この間の資料は無く、飛び離れて70cm代の資料が２点(828、829)存在する。この長さに近い人形は脚部を欠損し全長を知ることができない 480などを含めても数例にすぎない。

上層２期では平均長は56cmで下層の約２倍の長さとなる。最小20cm、最大が94cm、下層に比べ長さの

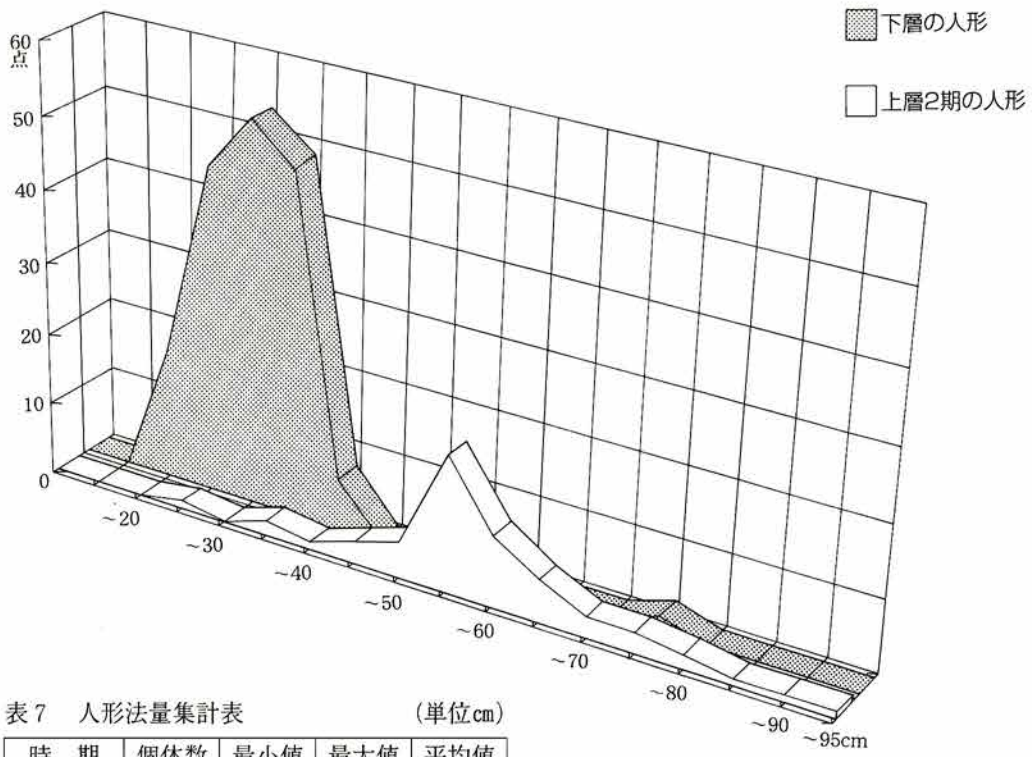


図15　人形の長さの度数分布

表７　人形法量集計表　　（単位cm）

時　期	個体数	最小値	最大値	平均値
上層２期	58	20.8	94.1	56.2
上層１期	1	27.1		
下　　層	173	15.4	71.2	27.2

ばらつきが大きい。図では度数分布のピークは50cm～55cmにあるが、ＳＫ０１～０４出土の人形の大半が55cm～60cmの長さに納まるため、ＳＤ０２・０３などの流路出土の人形に限れば度数分布はもっとなだらかなものとなる。金子は人形の祓において数種類の大きさの人形を組み合わせて使用する例を長岡京などの出土資料や文献史料にもとづいて明らかにしている（金子1985年）。ＳＤ０２・０３やＳＤ０５でほぼ同形同大と思われる人形が２～３点出土していることを考えあわせると、長さのばらつきは組み合わせの反映と考えたい。ただしＳＫ０１～０４では同じ長さの人形が使用される。下層ではＳＦ０３の出土状況にみるようにほぼ同じ長さ、作りのものを10枚前後まとめて使用することが通例であったと考えられる。

上層１期では全長が判明する資料が少ないが、残存部から判断すると、上層２期のように長大なものはなく、下層に近い長さになると推察される。

３．顔表現・頭部形態・腰部の切欠きの等変化

タイプや長さ以外に、人形では顔の表現方法、頭部の形態、腰の切欠き、股部の製作技法などにいくつかの類型があり、時期によって差異が認められるものがある。表８には実測図を掲載した資料について検討した資料数を示す[註2)]。

顔表現には墨で顔を描くもの（墨顔）と刃物で浅く切りキズをつけたり、突き刺して表現するもの（刻み顔）がある。頭部の遺存状態によっては顔表現の有無を判断しにくいものも含まれるが、そうしたものは顔表現が無いものとして扱う。

墨顔の人形は下層と上層１期では皆無であり上層２期になって出現する。特にＣ類に顕著で、Ａ類や

表８　人形属性表

	顔表現							頭部形態							腰切欠き	股部形態	
	墨顔	刻み顔					無し	圭頭	台形	平頭	円頭	砲弾	他	冠		冂	逆V
		221A	221B	211	21	他											
上層２期	32	33	10	9	4	3	13	45	30	14	8	5	0	1	2	79	1
上層１期	0	0	0	2	3	0	5	5	1	0	3	0	0	1	0	4	0
下　層	0	5	0	5	7	2	304	163	22	18	112	0	2	5	6	206	16

Ｂ類には見られない。髭をたくわえ冠をかぶった表現がもっとも多いが、355や1731のように異様な表情のもの、372のように髭がなく女性的な表現をしたものもある。

刻み顔の人形はいずれの時期、いずれの形態にも存在するがやはり下層では少数で全体の６％を占めるに過ぎない。下層の大半の人形では顔表現を行わないのが通例である。上層２期では顔表現を行う人形のほうが行わない人形よりも多くなり、顔表現の割合は墨顔30％、刻み顔57％、顔無し13％となる。さらに上層２期の中でもＳＫ０１、ＳＫ０２、ＳＫ０４では顔表現の割合がそれぞれ異なる。出土状況から最も一括性が高い資料だけをとりあげるとＳＫ０１では12点すべてが墨顔、ＳＫ０２では墨顔６点と刻み顔６点で同数、ＳＫ０４では10点すべてが刻み顔で墨顔は無い。

刻み顔の表現はさらにいくつかに類型化することができる。刻みの位置と数を上から順に数字で現すと〔２２１〕型、〔２１１〕型、〔２１〕型に分類できる。〔２２１〕型には222のように中の２本が中央に寄るものと 227のように上の２本のほぼ真下にくるものがある。前者を〔２２１Ａ〕型、後者を〔２２１Ｂ〕型として区別しておく[註3)]。下層では〔２２１〕型、〔２１１〕型、〔２１〕型のいずれも存在する。〔２１〕型がやや多いともいえるが、３者はほぼ同数といって良い。ただし、〔２２１〕型のうち〔２２１Ｂ〕型だけは認められない。上層２期では〔２２１〕型が８割近くを占めるようになり〔２２１Ｂ〕も見られる。

人形の頭部の形態は山形にかたどった圭頭を基本とするが、その端部を切り落として台形としたもの(台形頭)、全体を平坦に切り落とすもの（平頭)、丸みを持たせたもの（円頭)、砲弾形のものなどがある。下層では頭部形態がそれぞれの中間的な形態のものも多いが、圭頭に次いで円頭が多くこの二者で８割近くを占める。上層２期では圭頭に次いで台形頭が多く、平頭、円頭がこれらに続く。砲弾形は下層には見られず、上層２期に限定されるようである（248など)。また、頭部に突起をかたどるものが下層で５例（289など)、上層２期に１例（27）あり、冠かまげを表現したものと推定している。下層では頭部の左右を切欠いてかたどっており、このうちＳＤ１８最下層の410～412およびＳＤ１８下層550の４点は類似した形態をとる。上層の１点は上方に突出させており上層２期の突起とは異なる。墨書人形には冠を描いたものが少なからずあり、冠が意識されていたことは十分考えられよう。

次に手の切掛けの下、腰にあたる所に左右一対の切欠きを入れたものが散見される。大平は手の切掛けが無い人形では切欠きで表現したとの見解を示しているが（大平1993年)、砂入遺跡ではすべて手の切掛けが存在することから腰を表現した切欠きと考えておきたい。腰の切欠きをもつ人形は８点を数え、人形全体の中ではごく少数である。上層２期では同形同大の２例（279・280)のみ、下層では６例あり(44、903など)、下層により顕著といえようか。

股部分をかたどる際には、大きく分けて二つの方法がある。一つは足先側から２つの割れ目を入れて適当はところで折り取る方法で、折り取り部分には事前に切りキズを入れておく場合が多い。股の形は

冂形になり、こちらが一般的である。もう一つは足先からの二列の割れ目が股のところで合致するよう内側を削る方法で、股の形は逆V形になる。なかには両者の中間的なものもあるが、逆V形はほぼ股際まで削ったものに限定しておく。下層～3期を通じて冂形が主流を占めることには変わりがないが、下層では逆V形が16例あり中間的なものもを含めるともう少し増える。逆V形の股は下層により特有の形態といえるであろう。

以上、検討してきた砂入遺跡出土の人形の特徴の変化を図式化して表すと下のようになる。

	タイプ	長さ	顔の表現	頭部形態	逆V形股
上層2期	C・(A)	長〔平均56㎝〕	刻み・墨・(無)〔221型〕	圭頭・台形	僅少
上層1期	A・C	短	無・刻み	圭頭・円頭	
下層	A・(B～D・F)	短〔平均27㎝〕	無・(刻み)	圭頭・円頭	少数

砂入遺跡出土の人形は下層と上層2期ではタイプ、長さ、顔表現には明確な差異を、頭部形態や股部分の形態にも少なからず差異を認めることができる。両者の差は極端でありその間に漸移性は感じられないが、その間を埋めるものとして上層1期の資料が示唆的である。上層1期の人形はA類とC類がほぼ同数で、あたかもA類主体からC類主体へと変化する過渡期的な様相を示す。長さや他の特徴は下層の様相を踏襲しており、人形の大きな変化がまず肩の切欠き方法から生じた可能性が予測される。資料数が少ないため偶然性は否定できないが、今後、袴狭遺跡などの整理作業の中で再検討してゆきたい。

(藤田)

3．馬　形

1）はじめに

木製祭祀具のなかで人形・斎串とともに大きな割合を占める馬形は、良好な遺存状態の資料だけでも450点を数え、単独の遺跡としては全国有数の出土を誇る。

近年、全国での出土例が増加したことをうけて、その性格や特徴など、実態を解明する試みがなされている。但馬国では、日高町の姫谷遺跡や川岸遺跡などで多量の出土例があり、地方における祭祀のありかたを解明しうる資料が蓄積されてきた。

馬をかたどった木製祭祀具－馬形の性格については、「水神への祈願」、「疫病神・祟り神への乗り物」などの見解があり、近年では律令期に整備された祭祀「祓」に用いられた遺物との解釈がなされている。砂入遺跡は人形をはじめ数多くの祭祀具から、「祓」の行われた遺跡として位置づけられる。しかし馬形の性格や、具体的な用法を明らかにできる手がかりは、十分得られたとは言い難い。

本稿では出土資料の形態を観察することにより、砂入遺跡出土の馬形が有する特徴について検討して、まとめとする。

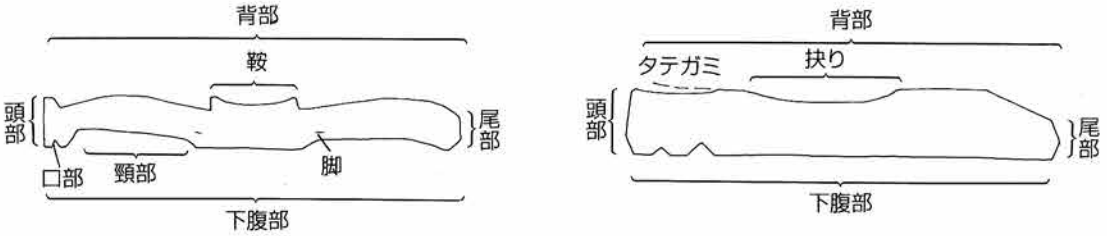


図16　馬形の各部位の呼称

2）砂入遺跡出土の馬形

まず出土した馬形の特徴をまとめる。いずれも長方形の板材を原体として用い、切欠きを加えることで容姿を抽象的に表現する。長辺を馬の体部に、短辺を頭ならびに尾に見立てるなど、各地で認識されているものと形態に大きな違いは見られない。墨描によって顔や手綱などの様子を表したものは1点(291)、また表面に円孔を彫り窪めて目を表現したと見られる資料が2点（415・2117）と少ない。

大きさでは、長辺が15～20cm、短辺が2～4cmを測るものが多い。両者の比率は5：1～10：1の範囲にほぼ納まるが、個体ごとのばらつきは大きく、厳密な企画性は看守できなかった。

木製祭祀具の中でも特に抽象的な表現を持つ馬形は、大きく2形態が知られている。背部の抉りに小さな切欠きを加えて「鞍」を表現した「飾馬」と、「鞍」を持たない「裸馬」である。両者は同時期に登場するのではなく、「裸馬」タイプが先行して出現し、その後「飾馬」タイプが使用される。砂入遺跡では両者のタイプに加えて、A～D類の4形態を確認した。分類について再度略述すると、A類は「飾馬」、B類は「裸馬」、C類は背部に切欠き表現を持たないものを指す。D類は全体の表現が著しく簡略化されたタイプで、今回報告する資料の中では1例（1845）だけ確認した。

使用する板材は厚さが1.5cm以下と薄く、端部をわずかに面取りする以外に立体的な表現は認められない。つまり偏平な板に切欠きを加えることだけで形作られており、切欠きは馬の各部を表現する意図を秘めている。以上の認識に立ち、それぞれの部位に施された表現の観察を行う。なお、各部位の名称については、長方形の板を馬に見立てた点を考慮し、板材の短い辺をそれぞれ頭部・尾部、長辺を背部・下腹部と記述する（図16）。

3）各部位の観察（図17）[註4)]

A．頭部

板材のカットによって、馬の頭から顔にかけてを表現する。形態は以下の4型がある。

1型…背部との隅を切り落とす。辺全体を斜め下方へ切るもの（96・80）と、隅付近を切り落とすもの（367・60）がある。それぞれ直線的なものと、丸みを帯びるものが見られた。

2型…下腹部との隅を切り落とす。1型と同じく、辺全体をカットするもの（1863・1869）と、隅部を切り落とすもの（98・586）がある。

3型…頭部の上下、両方の隅を切るもの(302・86）である。

5型…頭部の辺が直線のままのもの（82・293)。

大半は1型もしくは3型を呈する。わずかに3型が上回るが、両者はほぼ同数といってよい。2型、3型に該当するものは、しっかりした口部を作り出すものが多く、下腹部側の隅を落とすのは口部の表現との深い関連がうかがえる。

B．下腹部

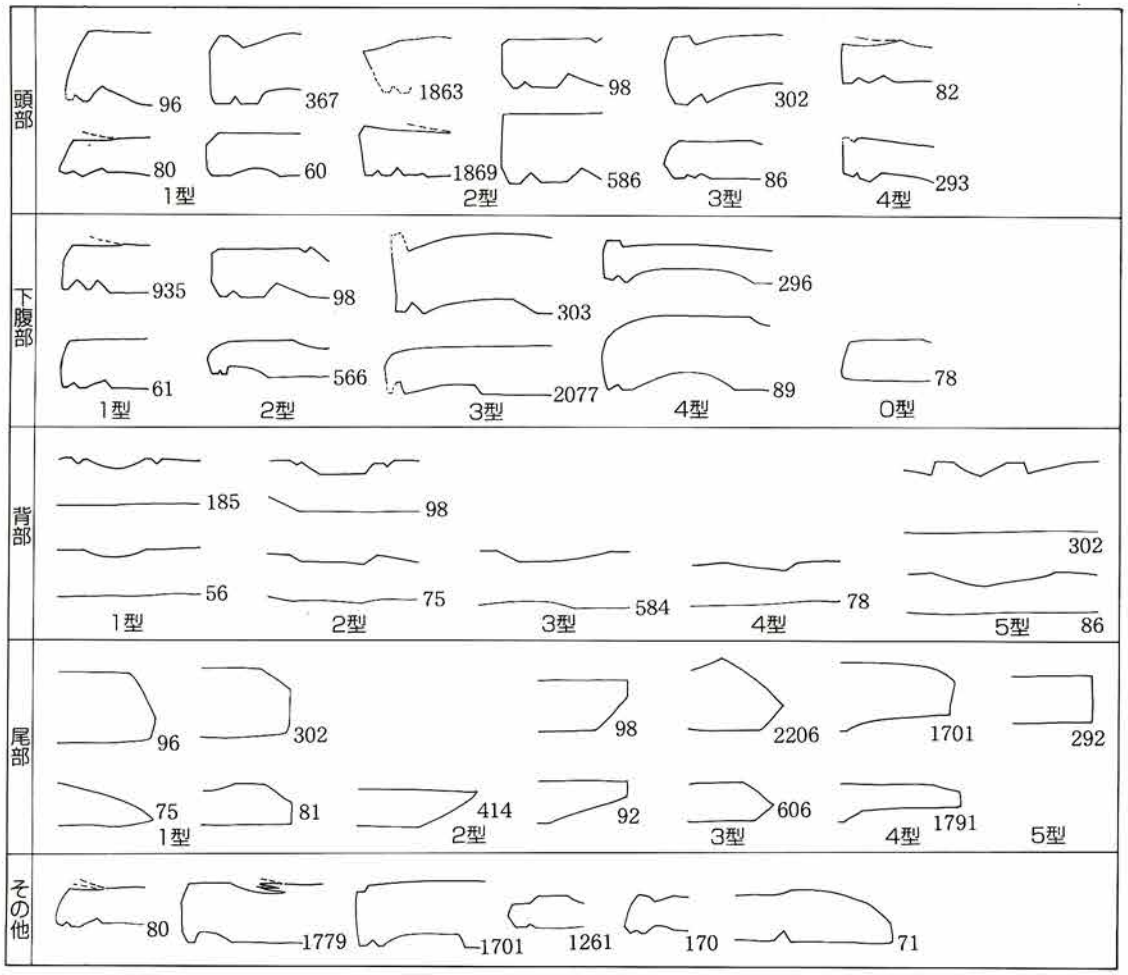


図17　馬形の各部位の分類

頭部側に切欠きを入れることで、頸部を表現する。切欠きを境に頭部側は馬の長い口を現わし、突出する先端に刻みをいれることで、さらに具体性を持たせるものが多い。切欠きは、切り込む方向や形態によって5つに大別できる。

1型…頭部側と尾部側からそれぞれ斜めに切欠くもの(935・61)。切欠きの形状はV字を呈する。

2型…頭部側は下腹部に対して垂直に、尾部側は斜めに切欠くもの（98・566)。口部が方形に突出したような形状となる。尾部側への切欠き幅は、中心近くまで及ぶものまで見られ、バリエーションに富む。なお、口部側が垂直でなくても、尾部側との切欠き幅が極端異なる場合は、この類に含めた。

3型…頭部側を斜めに、尾部側は垂直に切欠く(303・2077)。2型とは逆の形態で切欠きの幅にもばらつきが著しい。幅の長いものは、馬の緩やかで長い頸部を表現したものであろうか。

4型…弓状に長く緩やかに切欠くもの（296・89)。背部に施される抉り（1型）と同じ形態で、切欠きの幅は長い。

0型…口部に切欠きを持たないもの（78)。

事例の9割を占める1～3型は、形態・手法ともに人形の首表現と共通している。撫で肩の人形A類は1型、人形B類は2型に、また3型は怒り肩の人形C類およびD類にそれぞれ相当する。

C．背部

中央を大きく抉りとって、馬のくびれた背中を表現する。また「鞍」表現の有無は、形態分類の大きな指標である。抉り部分の形態から、以下の5型に分類した。

1型…弓状に丸く切欠く（185・56）、もっとも一般的な形態である。抉りの幅は個体によってまちまちで、全長の半分以上におよぶものもある。

2型…逆台形に切欠くもの（98・75）。切り込む角度が垂直に近く、形態が方形を指向するもの（1946）も見られる。

3型…頭部側は垂直に、尾部側は斜めに切欠く（584）。尾部へは直線で斜め上方に切るほか、弓状を呈するものも含める。

4型…頭部側は斜めに、尾部側は垂直に近く切欠く（78）。3型とは逆で、これも前の切欠きが直線的なものと弓状に円弧を描くものがある。

5型…頭部側と尾部側からそれぞれ斜めに切欠くもの（302・86）で、V字形を呈する。

1型は鞍の有無に関わらず最も多く、総数の8割を占める。2型については、切り込む角度が垂直に近く、形態が明らかに方形を指向するもの（1946）がある。B類で多くみられ、単なる裸馬の背とは異なる意図が窺える。

なお、抉りが認められないものは、C類に分類しているが、全く抉りを持たないもの（1779）と、後ろ側の切欠きを作らず、そのまま直線的に尾部にいたるもの（180）が見られる。

D．尾部

板材を切り落とすことで、尻から尾にかけての馬体を表現する。形態は以下の5型にまとめられ、頭部と似た傾向が窺える。

1型…背部との隅を中心に切り落とす。辺の全体を斜め方向に切るもの（96・75）と、隅付近のみをカットするもの（302・81）がある。丸みを帯びるものが多い。

2型…下腹部との隅を中心に切り落とすもので、1型とは逆の形態。辺全体を斜め方向に切り落とすもの（414）と、隅の部分を切り落とすもの（98・92）がある。

3型…尾部の上下、両方の隅を切り落とす（2206・606）。丸く加工するものと直線的に台形を形作るものが見られる。なお背部ならびに下腹部は直線のままで、尾部のみ加工するものだけを、この例とした。

4型…尾部の上端もしくは下端を切り取る。どちらかを尾部の先端まで切って幅を減じたもの（1701・1791）や、連続する下腹部を円形に切り取り、刀形の柄状に整形するもの（305）など、多様な形態が見られる。

5型…尾部の辺が直線のままのもの（292）。

馬の尻にみられる曲線を表現した1型、3型が多く見られる。2型は尾のピンとたった様子を抽象化したものであろうか。4型はA類において割合が増加し、飾馬への形態変化に対応する。

E．その他

一部の馬形において、上記の切欠きのほかに、頭部・尾部の一部において表現を施すものがある。

a．頭部：頭部から背部にかけて、切掛け、段、切欠きといった表現を施す。全体の2割に満たないが、①・②はB類、③はA類に多く見られる点に注目したい。

①切掛け…上頭部に切掛けが認められる。人形の手や斎串の「切掛け」と同様に、1本または複数の切掛けを入れる（80）。たてがみなどを表現した可能性が考えられるが、多数の切掛けを

持つもの（1779）もあり、他の祭祀具と共通する手法として注意を要する。

②段……頭部の先端に段を有する。多くは頭部側と背部のコーナーを、わずかに切り取る（1701）程度だが、中には背部側に大きく切るもの（1261）もある。いずれもB類で確認した。

③切欠き…背部の頭部寄りに切欠きを設け、頭部先端付近を突出させるもの(170)。頭部寄りを切欠くものと、頸部と対称位置に施すものがある。位置から判断して耳の表現と考えられる。

b．下腹部：尾部寄りの下腹部に、切欠きを施すもの（71)。全体の5％程度と、占める割合は僅かある。切欠きの幅が長いものについては、尾部4類と判断し、含めていない。形態にもいくつかの種類が認められたが、個対数が少ないため、細分は控えた。

F．足

薄い板で形作るため自立することは困難で、支脚を用いて立てる報告例が多い。砂入遺跡の馬形も、足の痕跡が全く認められなかったものは25点と全体の1割にも満たず、大半が細い棒状の木を「足」として使用している。足そのものが遺存する例は少ない（1987）が、差し込んだ痕跡から、本数や装着方法などは判断できる。1本足と4本足のものが多く、2、3、5、6本といった変則的なものも少数見られた。

1本足は、下腹部の中央に切り込みを入れ、足を挟み込んで装着する（935・57)。抽象的ではあるが、地面へ突き立てることでしっかりした自立を保つことができる。

4本足のものは側面に2個所ずつの切込みを設け、そこに細い板状の木を差し込んで足とする（96・

表9　馬形組成表

	馬　形　A		馬　形　B		馬　形　C		合　計
上層2期	50	84.7%	8	13.6%	1	1.7%	59
上層1期	7	53.8%	5	38.5%	1	7.7%	13
下　　層	19	4.7%	380	94.5%	3	0.7%	402
SF02	1	3.0%	32	97.0%	0	0.0%	33
SF03	3	3.3%	87	95.6%	1	1.1%	91
SD17	0	0.0%	24	100.0%	0	0.0%	24
SD18	10	5.0%	190	94.5%	1	0.5%	201

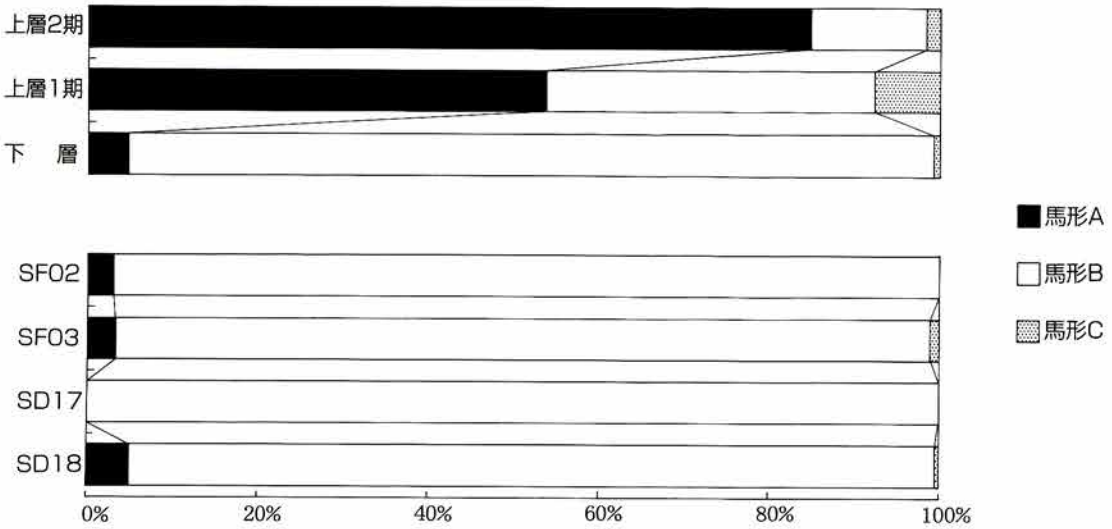


図18　馬形の組成

87)。写実的な形態であるものの、表面の一部を薄く切り取ってさし込むに過ぎないため、長時間立脚を保つことは難しい。

両者はほぼ同数の割合で見られる。大きいものは1本足で支えることが困難なためか、1本足のものは小ぶりのものが多い。

4）各形態における状況

(1) 形態ごとの特徴

出土した馬形の部位における形態について観察を加えてきた。特徴について、出土遺物の大半を占めるA／B類を対比しながら記述する。

全体の出土量のうち9割近くをB類が占めるのに対し、A類は1割強と両者の差は歴然としている。このため単純に比較することは出来ないが、頸部の形態に顕著な違いが現れた。B類では、V字形に切欠く1型が最も多い。続く2型・3型はいずれも1型の半数以下で、1型の占める割合が突出している。対してA類では2型が半数近くを占めるほか、1型・3型が減少し4型の割合が増える。またA型の頸部は全体に切欠き幅が長く、馬の長い首を意識した形態を採る。尾部では、B類の大半が1～3型の抽象的な表現を呈するのに対して、A類では尾部周辺に多くの切欠きを加えることで馬体の丸みを表現した4型の割合が増加する。これらの形態差は、両者の間に抽象から写実への変化を見て取る事ができる。A類の半数以上で認められる「耳」の表現も、写実性を高めた結果と考えたい。

頸部の形態におけるもう一つの特徴として、人形の肩部と共通する点が指摘できる。人形では形態変化の指標となる部位とされるが、馬形の頸部においては撫で肩に似る1型から怒り肩の3型へ変遷がた

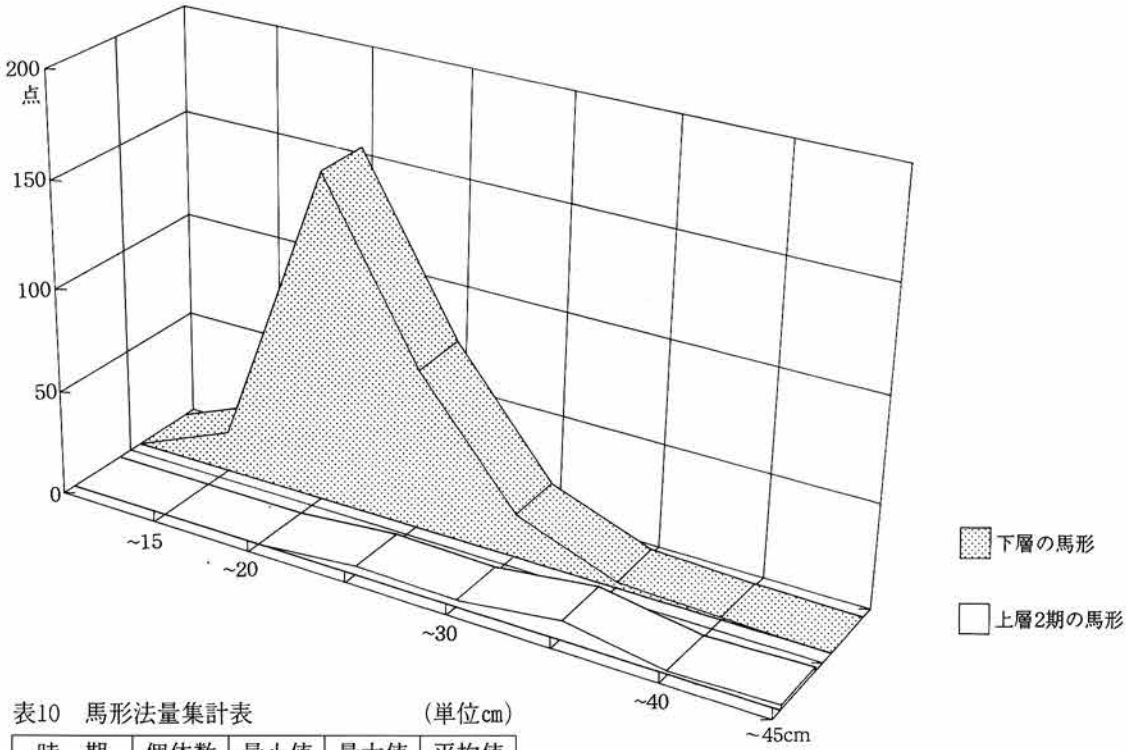


図19　馬形の長さの度数分布

表10　馬形法量集計表　（単位cm）

時　期	個体数	最小値	最大値	平均値
上層2期	20	20.5	44.8	31.4
上層1期	11	13.7	33.6	22.9
下　　層	279	11.7	35.1	19.6

どれる。ただし、出土量の多いＢ類では３型の切欠き幅がまちまちで、Ｖ字に近いものから長いものまで混在している。このほかにも、Ａ類へと通じる形態の馬型Ｂ類は多く、変質過程を推定させる資料も多い。人形のような形態変化の指標となりうるかについては、さらに検討を深める必要があるが、大まかな傾向としてはほぼ同じ変遷をたどるといえよう。

両者の規模については、Ｂ類は全長・幅ともに個体差が少ないのに対して、Ａ類はばらつきが大きい。Ｂ類が個対数の多さにもかかわらず、全長10～35㎝・幅１～６㎝の範囲に分布する一方、Ａ類は全長30㎝を上回る大型品が高い割合を占め、10～55㎝と幅広い分布を示す。Ｂ類では１本足と４本足が同数であったのに対して、Ａ類ではほぼ４本足の割合が著しく増えるが、写実性への対応とともに、長大化によって１本足による立脚が困難になったことが背景と考えられる。

上記をまとめると、Ｂ類とＡ類のあいだには、①表現の写実化　②規模の大型化といった違いが見受けられる。

(2) 時期比定の検討

遺物から出土した資料をもとに各時期への比定を試みる。下層に相当する砂入Ⅱ区ＳＤ１８の下層より出土した馬形は、すべてＢ類であった。同時期の砂入Ⅱ区ＳＦ０２・ＳＦ０３でも、９割以上の高い比率でＢ類が出土していることから、下層にはＢ類の馬形が使われていたと見てよい。一方Ａ類は、上層２期にあたる砂入Ⅰ区ＳＤ０２・０３などでまとまった出土がある。Ｃ類を１点だけ含む以外はすべてＡ類で、この時期にはＡ類へ使用される馬形の形態は変化したことがわかる。

両者の変遷を知る上で注目される資料として、上層１期の砂入Ⅰ区ＳＤ０７における資料（183～188）があげられる。全部で５点の出土した馬形はＢ類とＡ類が混在し、またＢ類にもかかわらず頭部の切込みを持つ（183）ものや、鞍を持ちながらも形態がＢ類に酷似する（186）ものなど、Ａ・Ｂそれぞれの要素が入り混じる。出土した馬形でそれぞれの要素を持つものは少なからず見受けられるが、良好な出土状態のものは少なく、変質の実態は不明瞭な点が多い。ＳＤ０７の出土遺物は点数こそ少ないものの一括性の高い資料として位置づけられるだけに、変質の様子を知る手がかりとして注目できよう。

下層・上層２期にそれぞれの中心を持つＢ類からＡ類への変化は、突発変異ではなく、背景にＢ類の変質を経て起こったと考えられる。上層１期にあたるＳＤ０７の資料は、変質の時期並びに実態の一端を示す資料として、特筆に価する。

５）おわりに

各期の出土状況から、Ｂ類の中心を下層に、Ａ類の中心を上層２期にそれぞれ位置づけた。また、馬形の形態を中心に観察を加えた結果、Ｂ類からＡ類への変遷の過程で「規模の長大化」ならびに「表現の写実化」が看取できた。Ｂ類に対してＡ類は１割程度の出土量である。時間の経過とともに使用量が激減していることになり、砂入遺跡で行われた祭祀における馬形の位置が大きく変化したことを示唆するものである。

Ｂ類からＡ類への変化について一端を素描したが、Ａ類の個対数が少ないこともあって十分に検討できたとは言い難い。砂入遺跡の約500ｍ南に所在する袴狭遺跡では、９世紀を中心とする木製祭祀具が数多く出土しており、Ａ類を中心とする数多くの資料が出土している。今後の資料整理により、馬形における裸馬から飾馬へ変質過程が更に明らかになることを期待したい。　（柏原）

4．斎　串

斎串は砂入遺跡の中で最も多量に出土しており、2500点以上を数える。これについても人形や馬形と同様に下層と上層を対比しながら検討を行い、次いで、下層に関してもう少し細かな検討を加えたい。なお、図表ではＣ１類とＣ２類を一括してＣ類として扱っているが、実際には、下層と上層１期はすべてＣ２類で、上層２期は大半がＣ１類で、若干のＣ２類を含む。

表11及び図20で明らかなように、下層では斎串Ａ類が75％を占め、残りは斎串Ｃ類～Ｆ類である。斎串Ｆ類は破損が著しく、登録されなかったものの中にもかなり含まれているので、実数はこれ以上に増える。Ｃ類ではすべて小型のＣ２類であり、Ｃ１類とＢ類は存在しない。

これに対して上層２期ではＡ類が10％以下に減少し、代わってＣ類（Ｃ１類）が主役の座を占めるようになる。下層で見られなかったＢ類もＡ類以上に安定して出現する反面、Ｃ２類やＤ～Ｆ類はほとんど見られなくなる。上層でＣ２類とした資料は、例えば325のように両端が鋭く尖り箸に近い形態のものであり、468～475のような下層のＣ２類とは見た目にも異なっている。同じ系譜とみなす必要はないかもしれない。

下層と上層２期の間の上層１期では、いまだＢ類は見られず、Ａ類とＣ２類、Ｄ類だけで構成される。Ｃ２類とＤ類は一括出土分であり、全体の数量が少ないこともあって、ここでは全体の半数を占めているが、調査範囲が狭く、組成のすべてを反映していない可能性が高い。

次に長さをみると、Ａ類では下層、上層２期とも最小値（約10～13㎝）と最大値（約57～69㎝）に大

表11　斎串組成表

	斎串Ａ		斎串Ｂ		斎串Ｃ		斎串Ｄ		斎串Ｅ		斎串Ｆ		合計
上層２期	34	9.9%	49	14.2%	259	75.1%	2	0.6%	1	0.3%	0	0.0%	345
上層１期	24	38.1%	0	0.0%	16	25.4%	23	36.5%	0	0.0%	0	0.0%	63
下　層	1526	75.6%	0	0.0%	115	5.7%	133	6.6%	20	1.0%	225	11.1%	2019
SF02	77	73.3%	0	0.0%	15	14.3%	6	5.7%	2	1.9%	5	4.8%	105
SF03	235	59.6%	0	0.0%	54	13.7%	31	7.9%	2	0.5%	72	18.3%	394
SD17	52	64.2%	0	0.0%	0	0.0%	23	28.4%	5	6.2%	1	1.2%	81
SD18	924	77.8%	0	0.0%	42	3.5%	63	5.3%	11	0.9%	147	12.4%	1187

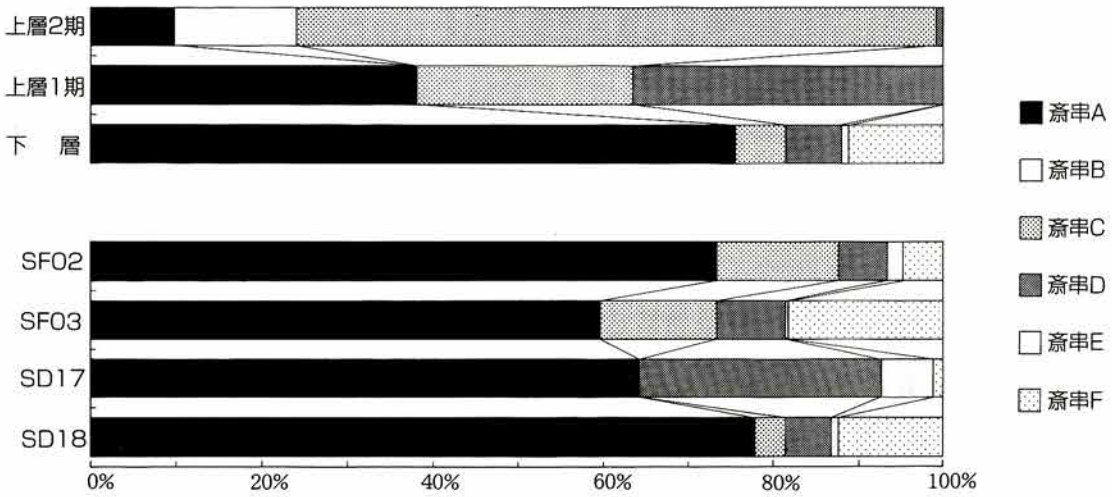


図20　斎串の組成

表12　斎串法量集計表　　（単位 cm）

種別	時期	個体数	最小値	最大値	平均値	種別	時期	個体数	最小値	最大値	平均値
斎串A	上層２期	6	13.6	68.8	33.9	斎串D	上層２期	1	25.5		
	上層１期	8	10.3	57.7	37.1		上層１期	15	14.9	17.7	15.9
	下　層	491	13.9	69	37.7		下　層	97	10.4	29.4	15.2
斎串B	上層２期	15	36.4	86.1	57.2	斎串E	上層２期	1	28.8		
斎串C	上層２期	12	21.1	86.8	64.6		下　層	6	13	35.4	23.7
	上層１期	4	14.5	15.6	15.0						
	下　層	33	11.6	24.1	16.1	特殊刀形	下　層	14	23	37.5	33.1

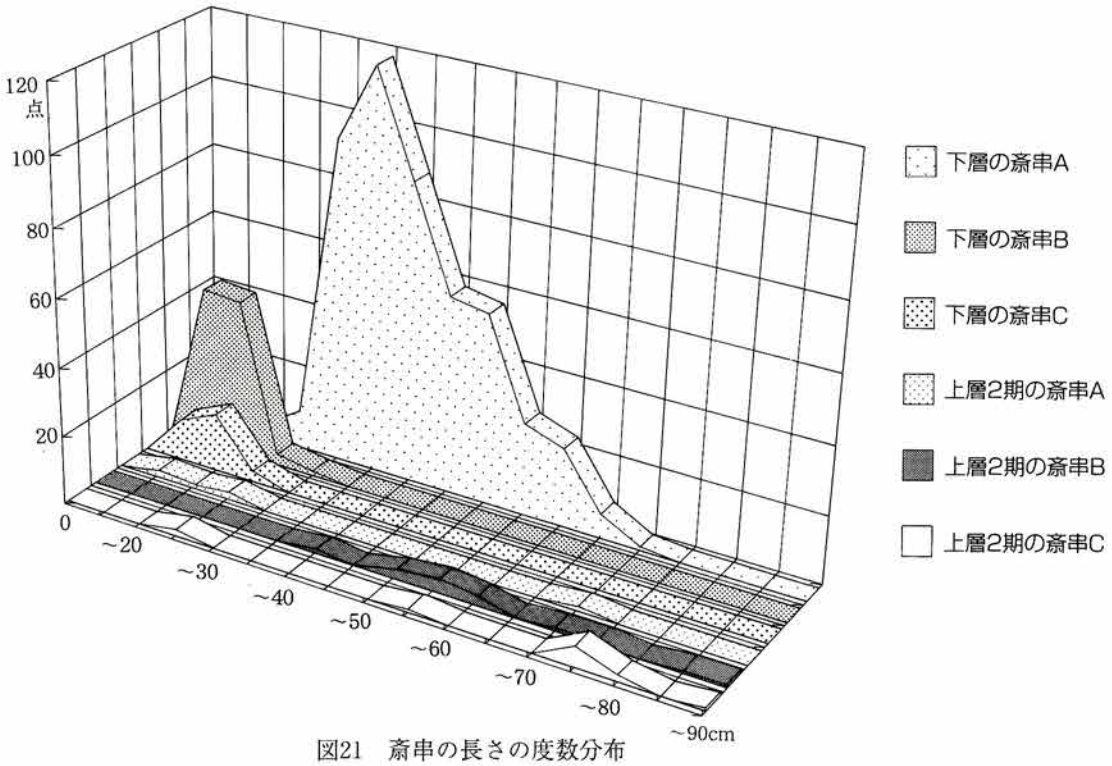


図21　斎串の長さの度数分布

きな差はなく、平均値で上層がやや長い程度である。C類では、下層がC２類のみ、上層２期がC１類が主体であることから、平均値で50cm以上の差を生じている。下層ではD類とC２類の長さは平均で15cmほどでほぼ同じ長さである。ちなみに、A類に類似した特殊刀形は平均長33cmで、長さにおいてもA類に近い。

以上をまとめると、下層の段階ではA類を中心に小型のC２類やD類をはじめ多様な斎串が使用されていた。これが上層２期になると、C２類やD～F類が欠落する反面、祭祀具全体の長大化の流れの中で、C１類とB類が新たに出現し組成の中心となる。そして、これにA類を加えた３者が、新たな斎串のセットを構成するようになる。　（藤田）

註１）以下の統計データは登録遺物すべてを対象とし、一部の未登録遺物も加えて集計した。
註２）それぞれの刻みは目・鼻・口あるいは眉を表現したものであろうが、位置関係によって何に相当するか微妙なところがある。また、実測図にはこれ以外のパターンもあるが、遺存状態にも左右されるので特にとりあげない。
註３）実測図を掲載した資料だけを扱っているため、若干の漏れがあるが大きな傾向は変わらない。
註４）形態の諸例については、基本的にA類、B類から１点づつ選んだ。併記した番号の前者がA類、後者がB類の例を示す。

第3節　おわりに

昭和63年から始まった小野川放水路事業に関連する発掘調査は、9年の歳月を経て、平成8年度に終了し、ようやく一つの節目を迎えることができた。

砂入遺跡の第1次全面調査に入る前には、人形や斎串が多少は出るようだ、ぐらいの認識しかなかったが、調査を重ねる毎に新たな発見と驚きがあり、砂入遺跡、あるいは袴狭遺跡群と言えば夥しいほどの木製祭祀具で全国的に注目される遺跡となった。当初はひょっとしたらというぐらいの思いしかなかった出石郡衙や第1次但馬国府の存在も、それらを十分検討しうる様々な遺構、遺物を検出することができた。

調査が長期にわたったことや、調査担当者の交代、木器の分類や整理作業の方針が一定しなかったことなどによって、これまで紹介してきた遺物量や年代観に曲折があったことは申し訳なく思っている。本報告が一応の整理を終えた段階での、担当者の責務としての情報の提示である。しかし、なお、遺構や遺物に関する検討、あるいは事実報告すら不十分な点が多いことは承知している。そうした点に関しては、今後、刊行を予定している小野川放水路事業関連の報告書の中で、補えるものは各調査担当者の責任において補足してゆきたいと考えているのでご了解願いたい。

本報告の終わりにあたって、木製祭祀具の遺物量と年代という二つの問題をとりあげ、簡単ながら今後にむけての課題としたい。

砂入遺跡の性格を考える時、木製祭祀具の量は避けて通れない問題である。但馬地域には木製祭祀具を出土する遺跡が多くあり、人形、馬形、斎串の揃った遺跡は袴狭遺跡群に属する4遺跡を含めて11遺跡を数える（渡辺1992年）。豊岡盆地周辺には木器の保存環境に適した低湿な土地が広く分布しており、これが祭祀具を含む木器全般が多いことの一因ではあろう。金子は但馬地域における木製祭祀具出土遺跡の集中から、但馬国における七瀬川の存在を想定した（金子・加賀見1980年）。しかし、砂入遺跡のように単独遺跡での膨大な量の使用の状況が明らかになったことで、但馬国一国だけの問題では理解しきれない面があるように思う。

地方官衙に関連する遺跡で、木製祭祀具が比較的多く出土している遺跡は、遠江国では伊場遺跡（浜松市教育委員会1978年）、信濃国では屋代遺跡群（宮島1995年）、出羽国では俵田遺跡（山形県教育委員会1984年）などが知られている。他の遺跡に比べ、確かに木製祭祀具の量は多いとはいえ、砂入遺跡に匹敵するようなものは見られない。砂入遺跡のような状況が特殊で、何らかのしかるべき意味付けをすべきなものなのか、それとも、本来流されて散逸すべき木製祭祀具が原位置近くにとどまったため、このように多量の出土をみたのであろうか。

次に、砂入遺跡の木製祭祀具は当初から祓の道具立てとして人形、馬形、斎串のセットで構成され、それぞれの形も一部を除いてごく一般的なものである。中央で体系化された大祓をほぼ忠実に模倣したといえる。大祓は676（天武五）年の記録がその開始を示すと考えられており、中央での最古の出土例は、現在のところ藤原宮下層運河出土（680年代）のものと考えられている（金子1980年）。砂入遺跡における祭祀の開始が7世紀初頭まで遡りうるかという点についてはなお検討の余地を残すが、7世紀後半（第4四半期）～8世紀初頭には最も祭祀が盛行すると考えうるのではなかろうか。とすれば、中央での祓の開始と時を経ずして、地方でも同様な祭祀が盛大に行われたことになる。「日本書紀」や「続日本紀」には、天武朝以降、しばしば諸国に令を発して大祓を行わせた記述があり、砂入遺跡での祓は、

第一義的にはそうした令に沿って行われたとみるのが妥当で、木製祭祀具のセット関係からも、律令的祭祀の中で捉えられるべきものであろう。しかし、下層に伴う土器は少ない上、但馬地域での土器編年の問題、共伴関係の評価など今後とも検討が必要であろう。

この他にも、多くの課題があり、特に袴狭遺跡、荒木遺跡などの周辺遺跡との関係の中で砂入遺跡をとらえることが重要となるが、それらは、今後の報告書に期することにしたい。

最後になりましたが、降り積もる雪や、但馬地方特有の悪天候をいとわず、長い間の発掘調査に従事してくださいました尾上孝雄・恵美子夫妻をはじめとする多くの地元作業員の皆さん、調査を一貫して請負い、円滑な進行に努力いただいた（株）川嶋工務店の皆さんには、心からお礼を申し上げます。ありがとうございました。

（藤田）

引用文献

秋山浩三　1993年「大足の再検討」『考古学研究』第40巻第３号 p.p.53～79

出石町教育委員会　1995年『袴狭遺跡内田地区発掘調査概報　袴狭遺跡周辺官衙関係遺跡の調査』

大平　茂　1993年「木製人形年代考（上）」『古文化談叢第30集（中）古文化談叢発刊20周年小田富士雄代表還暦記念論集（Ⅱ）』p.p.567 ～591 九州古文化研究会

大平　茂　1995年「兵庫・袴狭遺跡」『木簡研究第17号』p.p.68～70　木簡学会編

岡田文男　1994年「木器保存処理のマニュアル化の試み」『京都市埋蔵文化財研究所研究紀要第１号』p.p.109 ～117

金子裕之　1980年「古代の木製模造品」『奈文研研究論集Ⅳ』p.p. 1 ～28

金子裕之　1985年「平城京と祭場」『国立歴史民族博物館研究報告第７集　共同研究「古代の祭祀と信仰」』p.p.219～290

金子裕之・加賀見省一　1980年「特異な木製模造品を出土した兵庫県姫谷遺跡」『月刊文化財』202号 p.p.48～52

北浦弘人　1986年『池ノ内遺跡』加茂川改良工事関係埋蔵文化財発掘調査団

黒崎　直　1995年「藤原京の井戸」『文化財論叢Ⅰ』p.p.293～308　奈良国立文化財研究所編

小寺　誠　1993年『出石町史第４巻資料編Ⅱ補遺（考古編）』p.p. 2 ～67

奈良国立文化財研究所　1985年『木器集成図録近畿古代編』

奈良国立文化財研究所　1993年『木器集成図録近畿原始編』

西尾太加二　1990年「自然乾燥した出土木材のＰＥＧ含浸実験Ⅰ」『研究紀要Ⅲ』静岡県埋蔵文化財センター　p.p.279 ～289

西口圭介　1988年「兵庫・砂入遺跡」『木簡研究第10号』p.p.45　木簡学会編

西口圭介　1994年「兵庫・砂入遺跡」『木簡研究第16号』p.p.88～90　木簡学会編

浜松市教育委員会　1987年『伊場遺跡遺物篇１』

兵庫県教育委員会　1983年『田多地小谷遺跡　－六方川災害復旧工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』

兵庫県教育委員会　1991年『七日市遺跡（Ⅰ）－第３分冊－（飛鳥・奈良・平安時代遺跡の調査）』

宮島義和　1995年「更埴市屋代遺跡群の祭祀遺物　－木製祭祀遺物の変遷　飛鳥・奈良・平安－」『長野県考古学会誌76　p.p.15～22　長野県考古学会

山形県教育委員会　1984年『俵田遺跡第２次発掘調査報告書』

渡辺　昇　1990年「兵庫・砂入遺跡」『木簡研究第12号』p.p.91　木簡学会編

渡辺　昇　1992年「兵庫県の律令期祭祀遺跡について」『兵庫の歴史』第28号 p.p.28～43

表13　木器一覧表

No.	器　種	長さ	幅	厚さ	備　考	区	出土遺構・層位	登録No.
1	孔あきの板	(51.3)	18.8	2.7		Ⅰ	畦畔	2755
2	部材	(110.5)	11.4	4.3		Ⅰ	畦畔	307
3	杭	83.2	9.6	6.1	表面を細かく削った円柱状の部材を分割	Ⅰ	畦畔	303
4	板状材	(48.1)	15.1	3.5		Ⅰ	畦畔	2788
5	台状枠(釘＋孔留)	30.5	24.5	12.0	枠南の歯先は磨耗	Ⅰ	暗褐色ピート層	71
6	田下駄C(3孔・釘留)	40.9	11.1	1.7	足形の窪み。一部木釘残。前壺の1孔は補助孔か転用によるもの？	Ⅰ	暗褐色ピート層	7
7	台状枠支軸	42.9	4.8	1.8	枘に木釘孔あり	Ⅰ	暗褐色ピート層	6
8	台状枠支軸	42.9	4.8	1.8	木釘残存	Ⅰ	暗褐色ピート層	58
9	台状枠南(釘留)	28.6	17.1	2.9	刃先は磨耗。一部木釘残存	Ⅰ	暗褐色ピート層	62
10	台状枠南(釘留)	28.3	16.0	2.9	刃先は磨耗	Ⅰ	暗褐色ピート層	56
11	孔あきの板	(26.2)	9.9	1.5		Ⅰ	暗褐色ピート層	30
12	田下駄B(3孔・抉留)	51.7	11.8	2.7	上側抉りを結ぶ針描き線あり(左面)	Ⅰ	暗褐色ピート層	26
13	田下駄B(3孔・孔留)	38.0	10.3	1.6	表面は平滑	Ⅰ	暗褐色ピート層	3
14	田下駄A(3欠)	48.5	13.5	1.7	下端はイキか？	Ⅰ	暗褐色ピート層	65
15	田下駄A(4欠)	43.4	12.0	1.4		Ⅰ	暗褐色ピート層	67
16	方形枠横桟	41.1	2.6	1.3	枘断面は方形	Ⅰ	暗褐色ピート層	57
17	方形枠横桟	(39.1)	3.2	0.9	枘断面は方形	Ⅰ	暗褐色ピート層	59
18	方形枠横桟	(42.9)	2.9	1.7	枘断面は方形	Ⅰ	暗褐色ピート層	1007
19	方形枠支柱	115.9	3.4	3.7	引き手孔に木釘各2本を打つ。上側引き手孔の周辺は筋状の圧痕が強く残る	Ⅰ	暗褐色ピート層	46
20	人形B	22.7	4.2	0.7	左2・右2	Ⅰ	暗褐色ピート層	50
21	用途不明	11.5	8.2	3.1		Ⅰ	SF05	60
22	用途不明	(16.3)	3.5	0.8	上端左縁は両刃に削る	Ⅰ	SF05	1076
23	火鑽板	24.4	3.2	2.0	臼部はすべて炭化	Ⅰ	SF05	1086
24	用途不明	(40.1)	2.9	2.1	貫通する錐孔2ヶあり	Ⅰ	SF05	61
25	部材	45.4	30.4	5.0		Ⅰ	SF05	2
26	えぶり	59.3	13.4	2.1	枘穴の角度は直角に近い	Ⅰ	SF05	27
27	人形A	(18.2)	1.6	0.5	左2・右1・頭部両側を切欠く	Ⅰ	SF05	2488
28	人形A	(11.2)	2.9	0.5	左2・右1	Ⅰ	SF05	360
29	人形A	(12.9)	2.2	0.4	左1・右1	Ⅰ	SF05	364
30	人形A	(14.3)	3.1	0.3	左1・右1	Ⅰ	SF05	2178
31	人形A	(15.6)	2.3	0.5	左3・右1	Ⅰ	SF05	374
32	人形A	(14.1)	2.7	0.8	左3・右4	Ⅰ	SF05	384
33	人形A	(16.0)	3.2	0.7	左2・右3	Ⅰ	SF05	2479
34	人形A	(14.7)	2.4	0.6	左?・右?	Ⅰ	SF05	2477
35	人形A	(16.0)	1.7	0.8	左1・右?	Ⅰ	SF05	348
36	人形A	21.3	2.7	0.7	左?・右1	Ⅰ	SF05	2213
37	人形A	22.0	3.2	0.4	刻顔・左1・右1	Ⅰ	SF05	391
38	人形F	19.7	0.0	0.3	左2・右2・39と類似	Ⅰ	SF05	393
39	人形F	21.1	2.6	0.6	左1・右1	Ⅰ	SF05	2224
40	人形A	(15.4)	3.2	0.5	腰有・左1・右2	Ⅰ	SF05	2416
41	人形A	(19.8)	4.0	0.6	腰有・左1・右1	Ⅰ	SF05	358
42	人形A	21.6	2.7	0.6	左3・右3	Ⅰ	SF05	388
43	人形A	24.2	(2.0)	0.6	左?・右1	Ⅰ	SF05	2177
44	人形A	26.7	3.8	0.5	腰有・左1・右1	Ⅰ	SF05	367
45	人形A	26.8	(2.7)	0.4	左?・右2	Ⅰ	SF05	386
46	人形A	26.6	2.4	0.5	左2・右1・脚先は外側から切り落とす	Ⅰ	SF05	394
47	人形A	(24.9)	3.5	0.6	左2・右1	Ⅰ	SF05	387
48	人形A	29.2	3.6	0.5	左2・右1	Ⅰ	SF05	2223
49	人形F	33.5	3.9	1.1	刻顔・左2・右2	Ⅰ	SF05	376
50	人形A	30.9	4.9	1.0	左3・右2	Ⅰ	SF05	381
51	人形A	31.0	4.0	0.5	左3・右3	Ⅰ	SF05	398
52	人形A	33.3	4.4	0.8	左1・右1	Ⅰ	SF05	357
53	人形A	31.2	2.7	0.5	左2・右3	Ⅰ	SF05	349
54	人形A	38.5	2.9	0.4	左2・右2	Ⅰ	SF05	356
55	人形A	38.6	2.8	0.6	左2・右3	Ⅰ	SF05	353
56	馬形B	14.4	3.0	0.6	脚0	Ⅰ	SF05	2292
57	馬形B	15.4	2.8	0.6	脚1・口部の切り込み無しか？	Ⅰ	SF05	366
58	馬形B	15.1	3.2	0.8	脚1	Ⅰ	SF05	361
59	馬形B	13.5	3.5	0.5	脚0	Ⅰ	SF05	2092
60	馬形B	16.6	3.4	0.7	脚1	Ⅰ	SF05	2714
61	馬形B	16.5	3.2	0.7	脚1	Ⅰ	SF05	2405
62	馬形B	14.8	3.7	0.5	脚1	Ⅰ	SF05	373
63	馬形B	16.6	3.8	0.7	脚1	Ⅰ	SF05	382
64	馬形B	16.1	3.1	0.5	脚1	Ⅰ	SF05	350
65	馬形B	17.3	3.0	0.4	脚0	Ⅰ	SF05	2014

No.	器　種	長さ	幅	厚さ	備　考	区	出土遺構・層位	登録No.
66	馬形B	17.2	3.2	0.8	脚1	I	SF05	359
67	馬形B	17.7	3.9	0.8	脚1	I	SF05	355
68	馬形B	17.0	2.4	0.4	脚0	I	SF05	352
69	馬形B	18.5	2.6	0.9	脚5（腹1・側4）	I	SF05	2411
70	馬形B	18.3	3.1	0.8	脚1	I	SF05	2182
71	馬形B	19.0	3.4	0.8	脚1	I	SF05	363
72	馬形B	18.8	3.4	0.5	脚1	I	SF05	379
73	馬形B	17.8	3.2	0.3	脚4・口部の切り込み無しか？	I	SF05	346
74	馬形B	18.4	3.6	0.3	脚0・口部の切り込み無しか？	I	SF05	2123
75	馬形B	18.3	3.1	1.2	脚1	I	SF05	2481
76	馬形B	16.4	2.5	0.8	脚4	I	SF05	2410
77	馬形B	17.8	2.3	0.6	脚1	I	SF05	2247
78	馬形B	17.3	2.6	0.4	脚0・口部の切り込み無しか？	I	SF05	2227
79	馬形B	18.3	2.7	0.3	脚1・口部の切り込み無しか？	I	SF05	2483
80	馬形B	17.1	2.6	0.9	脚0・鬣2	I	SF05	380
81	馬形B	14.8	2.8	0.6	脚1・鬣1	I	SF05	2180
82	馬形B	15.8	2.8	0.4	脚1・鬣2	I	SF05	2181
83	馬形B	18.9	2.9	6.5	脚0	I	SF05	2225
84	馬形B	19.3	2.8	0.6	脚1	I	SF05	377
85	馬形B	(14.8)	4.4	0.8	脚1	I	SF05	2412
86	馬形B	22.0	2.6	0.5	脚4	I	SF05	389
87	馬形B	21.2	3.3	0.6	脚4	I	SF05	354
88	馬形B	(9.5)	2.3	0.5	脚4？	I	SF05	371
89	馬形B	24.1	4.9	0.7	脚4	I	SF05	2226
90	馬形B	24.0	4.1	0.4	脚1	I	SF05	368
91	馬形B	23.7	3.0	0.6	脚4・鬣2	I	SF05	344
92	馬形B	21.2	2.8	0.8	脚4	I	SF05	397
93	馬形B	25.9	2.5	0.7	脚0	I	SF05	351
94	馬形B	22.3	2.9	0.9	脚4	I	SF05	2407
95	馬形B	22.1	4.6	0.9	脚4	I	SF05	365
96	馬形A	21.4	4.9	0.8	脚4	I	SF05	378
97	馬形A	19.1	3.7	0.8	脚4	I	SF05	2404
98	馬形A	18.7	3.4	1.1	脚4	I	SF05	375
99	馬形D	(16.0)	3.2	0.7	脚？	I	SF05	2704
100	斎串A	20.0	2.3	0.3	左3・右3	I	SF05	390
101	斎串A	20.8	2.0	0.3	左3・右2	I	SF05	2430
102	斎串A	20.5	1.3	0.3	左1・右1	I	SF05	2194
103	斎串A	23.0	1.6	0.4	左?・右1	I	SF05	2170
104	斎串A	24.5	2.0	0.3	左1・右2	I	SF05	2193
105	斎串A	25.8	2.5	0.2	左1・右1	I	SF05	2168
106	斎串A	25.6	1.4	0.6	左1・右?	I	SF05	2212
107	斎串A	25.2	1.5	0.4	左1・右1	I	SF05	2176
108	斎串A	25.8	1.6	0.7	左3・右2	I	SF05	2191
109	斎串A	24.7	1.8	0.1	左2・右2	I	SF05	2167
110	斎串A	28.3	2.0	0.2	左2・右1	I	SF05	2165
111	斎串A	29.2	1.6	0.2	左1・右1	I	SF05	2220
112	斎串A	29.3	1.8	0.2	左1・右1	I	SF05	2154
113	斎串A	29.6	2.1	0.3	左1・右1	I	SF05	2197
114	斎串A	30.0	1.7	0.5	左1・右1	I	SF05	2218
115	斎串A	31.3	2.1	0.3	左1・右2	I	SF05	2236
116	斎串A	32.6	1.5	0.4	左3・右?	I	SF05	2324
117	斎串A	31.2	1.5	0.6	左1・右1	I	SF05	2160
118	斎串A	(21.0)	2.0	0.3	左?・右1	I	SF05	399
119	斎串A	(21.1)	1.6	0.4	左1・右2	I	SF05	2700
120	斎串A	(11.0)	1.1	0.4	左?・右?・頭部水平	I	SF05	2628
121	斎串A	(9.6)	1.3	0.4	左?・右?・頭部水平	I	SF05	2581
122	斎串A	33.0	1.4	0.3	左2・右2	I	SF05	2175
123	斎串A	34.0	2.0	0.2	左3・右3	I	SF05	2164
124	斎串A	34.0	1.9	0.2	左3・右2	I	SF05	2157
125	斎串A	34.8	1.7	0.4	左?・右?	I	SF05	2192
126	斎串A	33.5	2.0	0.3	左1・右1	I	SF05	2166
127	斎串A	32.3	1.7	0.4	左1・右1	I	SF05	2159
128	斎串A	33.0	1.4	0.4	左2・右2	I	SF05	2152
129	斎串A	35.1	2.3	0.3	左1・右1	I	SF05	2195
130	斎串A	35.4	1.9	0.5	左?・右3	I	SF05	2211
131	斎串A	36.3	1.6	0.6	左2・右2	I	SF05	2027
132	斎串A	38.4	1.8	0.5	左2・右3	I	SF05	2196
133	斎串A	38.8	1.6	0.4	左?・右3	I	SF05	2232
134	斎串A	38.6	1.8	0.3	左2・右2	I	SF05	2158

No.	器　種	長さ	幅	厚さ	備　考	区	出土遺構・層位	登録No.
135	斎串A	38.3	2.0	0.4	左2・右2	I	SF05	2210
136	斎串A	38.9	1.9	0.4	左4・右2	I	SF05	2156
137	斎串A	40.3	1.3	0.4	左3・右3	I	SF05	2233
138	斎串A	39.3	1.5	0.5	左2・右2	I	SF05	2169
139	斎串A	39.2	2.6	1.4	左?・右?	I	SF05	2205
140	斎串A	40.6	1.4	0.4	左1・右1	I	SF05	2155
141	斎串A	51.1	2.0	0.7	左?・右?	I	SF05	2130
142	斎串A	56.6	3.2	0.4	左5・右1	I	SF05	2235
143	斎串A	57.4	1.9	0.4	左3・右3	I	SF05	2234
144	斎串A	41.5	1.9	0.2	左3・右3	I	SF05	2163
145	斎串A	40.8	1.9	0.4	左2・右2	I	SF05	2153
146	斎串A	39.6	1.4	1.1	左1・右1	I	SF05	2025
147	斎串A	42.5	2.1	0.7	左1・右2	I	SF05	2161
148	斎串A	44.8	2.5	0.6	左1・右1	I	SF05	2219
149	斎串A	43.4	2.0	1.0	左1・右2	I	SF05	2198
150	斎串A	45.6	2.3	0.4	左3・右3	I	SF05	2162
151	斎串A	46.6	2.2	0.4	左2・右2	I	SF05	2138
152	斎串C2	13.3	0.7	0.4	上端は圭頭に下端は尖らせる	I	SF05	2471
153	斎串C2	19.6	0.8	0.4	両端を鋭く尖らせる	I	SF05	2635
154	斎串D	12.1	1.2	0.5	上1	I	SF05	2719
155	斎串D	13.0	1.7	0.3	上0	I	SF05	2672
156	斎串D	12.7	1.0	0.5	上0	I	SF05	2507
157	斎串D	23.3	1.7	0.6	上1	I	SF05	2633
158	斎串D	17.4	1.4	0.6	上0	I	SF05	2634
159	斎串D	16.2	1.3	0.5	上0・人形の脚の可能性もあり	I	SF05	2671
160	楔？	21.6	7.4	4.1		I	SF05	2547
161	用途不明	(31.2)	5.4	1.0	本来は直であるが、折れて曲がる	I	木道周辺	2703
162	用途不明	43.0	2.1	0.5	一端を切っ先状に尖らせる	I	SF05	2588
163	火鑽板	(54.9)	5.3	2.9	火鑽臼周辺の削り込みが良く残存	I	木道周辺	2760
164	田下駄B(3孔・抉留)	41.8	8.7	1.2	裏側に円形枠の圧痕あり。後壺は切欠き	I	SF05	2531
165	えぶり	41.1	6.3	1.5	刃縁側は全損の可能性あり	I	木道周辺	2532
166	田下駄A(3欠)	35.2	17.8	1.7	山形	I	木道周辺	2535
167	田下駄A(4孔)	36.4	(16.2)	1.4		I	木道周辺	2140
168	人形C	(26.5)	2.9	0.5	刻顔・左3・右4・A類に近い	I	SD01	225
169	人形C	(18.1)	4.3	0.4	刻顔・左?・右1	I	SD01	224
170	馬形A	13.7	2.2	0.6	脚？(腹縁に1？)	I	SD01	1693
171	人形C	27.1	3.6	0.8	刻顔・左1・右1	I	SD07	1899
172	人形B	(20.4)	3.0	0.5	左?・右?	I	SD07	1859
173	人形C	(20.5)	2.2	0.3	左2・右2	I	SD07	1898
174	人形A	(17.9)	(1.7)	0.3	左1・右3	I	SD07	1868
175	人形A	(23.4)	2.7	0.4	左3・右3	I	SD07	256
176	人形A	(22.0)	2.3	0.4	左1・右1	I	SD07	1886
177	人形A	(22.6)	3.1	0.6	刻顔・左1・右1	I	SD07	1909
178	人形C	(23.4)	2.6	0.6	刻顔・左1・右1・頭部両側を切欠く	I	SD07	283
179	馬形B	21.7	1.9	0.3	脚4	I	SD07	1867
180	馬形C	21.0	1.9	0.5	脚4	I	SD07	293
181	馬形B	23.2	3.7	0.7	脚4	I	SD07	267
182	馬形B	24.6	4.3	1.0	脚4	I	SD07	1960
183	馬形B	24.2	2.6	0.4	脚4	I	SD07	1890
184	馬形B	25.8	4.0	0.5	脚4	I	SD07	1894
185	馬形A	20.6	3.0	0.9	脚0	I	SD07	262
186	馬形A	24.8	3.0	0.5	脚4	I	SD07	1872
187	馬形A	18.9	3.3	0.4	脚4	I	SD07	1891
188	馬形A	33.6	3.8	0.7	脚0	I	SD07	277
189	斎串A	57.7	1.9	0.3	左3・右2	I	SD07	281
190	斎串A	49.5	2.0	0.8	左1・右1	I	SD07	288
191	斎串A	46.7	1.5	0.9	左1・右1	I	SD07	1925
192	斎串A	38.6	2.2	0.6	左?・右2	I	SD07	1896
193	斎串A	35.0	2.4	0.2	左2・右2	I	SD07	1897
194	斎串A	(32.9)	2.0	0.6	左?・右2	I	SD07	1873
195	斎串A	30.2	1.7	0.3	左?・右?	I	SD07	1885
196	斎串A	29.1	1.6	0.2	左1・右1	I	SD07	258
197	斎串A	(11.2)	1.1	0.8	左?・右?	I	SD07	1911
198	斎串A	(12.8)	2.0	0.5	左?・右?	I	SD07	1932
199	斎串A	10.3	1.5	0.2	左1・右1	I	SD07	1803
200	斎串A	(43.0)	1.5	0.7	左?・右?	I	SD07	1907
201	斎串C1	(18.6)	1.2	0.5		I	SD07	276
202	斎串C2	14.5	0.7	0.4	頭部は平坦	I	SD07	1835
203	斎串C2	14.5	0.7	0.4	頭部は平坦	I	SD07	1841

No.	器　種	長さ	幅	厚さ	備　考	区	出土遺構・層位	登録No.
204	斎串C2	15.6	0.8	0.4	頭部は平坦	I	SD07	1819
205	斎串C2	15.4	0.8	0.4	頭部は平坦	I	SD07	1838
206	斎串C1	(12.0)	0.6	0.5		I	SD07	1825
207	斎串D	17.7	1.1	0.3	上2	I	SD07	1836
208	斎串D	15.5	0.5	0.5	上0	I	SD07	1842
209	斎串D	16.2	0.7	0.4	上1	I	SD07	1823
210	斎串D	17.0	0.9	0.3	上0	I	SD07	1853
211	斎串D	16.0	0.8	0.4	上0	I	SD07	1828
212	斎串D	16.1	0.6	0.4	上2	I	SD07	1834
213	斎串D	15.5	0.5	0.5	上1	I	SD07	1839
214	斎串D	16.7	1.0	0.5	上1	I	SD07	1837
215	斎串D	15.6	1.0	0.4	上1	I	SD07	1824
216	斎串D	16.2	0.8	0.4	上2	I	SD07	2789
217	斎串D	15.4	1.0	0.2	上1	I	SD07	261
218	斎串D	15.3	0.9	0.5	上3	I	SD07	1821
219	斎串D	16.2	1.1	0.4	上2	I	SD07	1840
220	斎串D	14.9	0.9	0.4	上1	I	SD07	1820
221	斎串D	14.9	0.9	0.4	上1	I	SD07	1822
222	人形C	52.5	5.8	0.6	刻顔・左1・右1	I	SK04	77
223	人形C	51.8	5.8	0.5	刻顔・左1・右1	I	SK04	119
224	人形C	53.9	5.7	0.5	刻顔・左2・右2	I	SK04	120
225	人形C	52.3	5.6	0.7	刻顔・左2・右2	I	SK04	121
226	人形C	52.0	5.4	0.5	刻顔・左2・右2	I	SK04	128
227	人形C	61.6	4.5	0.6	刻顔・左2・右3	I	SK04	117
228	人形C	(12.3)	4.1	0.8	刻顔・左?・右?	I	SK04	74
229	人形C	(43.2)	2.2	0.5	刻顔・左2・右2	I	SK04	1210
230	人形C	(42.6)	3.4	0.5	刻顔・左2・右3	I	SK04	116
231	人形C	(48.7)	5.8	0.8	刻顔・左2・右2	I	SK04	114
232	斎串A	68.8	2.0	0.5	左5・右5	I	SK04	1187
233	斎串B	82.0	2.9	0.4	左3?／2?／1?／3／3・右3／4?／3／3	I	SK04	1186
234	斎串B	56.8	2.2	0.7	左2／1／1／1・右2／1／1／1	I	SK04	122
235	斎串B	(43.9)	1.4	1.0	左3／2／1／2・右4／1／1／1	I	SK04	111
236	斎串B	(30.2)	1.5	0.7	左2／1・右3／1	I	SK04	110
237	斎串C1	86.8	0.8	0.5		I	SK04	129
238	斎串C1	79.8	0.8	0.5		I	SK04	126
239	斎串C1	77.5	1.1	0.6		I	SK04	1214
240	斎串C1	70.9	0.8	0.5		I	SK04	124
241	斎串C1	72.3	0.7	0.8		I	SK04	125
242	斎串C1	72.0	0.8	0.7	切掛け2	I	SK04	1177
243	斎串C1	72.0	0.8	0.5		I	SK04	1178
244	斎串C1	70.7	0.9	0.5		I	SK04	1180
245	斎串C1	(68.0)	1.0	0.4		I	SK04	1209
246	斎串C1	(46.4)	0.8	0.5		I	SK04	1182
247	斎串C2	21.1	0.5	0.4		I	SK04	2787
248	人形C	(27.0)	3.9	0.8	墨顔・左3・右3	I	SD02・03	1
249	人形C	(31.8)	5.0	0.4	墨顔・左3・右1	I	SD02・03	109
250	人形C	(31.2)	4.9	0.6	墨顔・左2・右1	I	SD02・03	1736
251	人形C	(35.9)	3.9	0.4	墨顔・左5・右5	I	SD02・03	1737
252	人形C	(37.7)	4.1	0.6	墨顔・左3・右3	I	SD02・03	1139
253	人形C	(38.0)	3.5	0.8	墨顔・左5・右4	I	SD02・03	101
254	人形C	(39.5)	6.2	0.6	墨顔・左?・右2	I	SD02・03	1730
255	人形C	44.2	3.5	0.6	刻顔・左4・右3	I	SD02・03	1146
256	人形C	40.6	3.5	0.4	刻顔・左2・右2	I	SD02・03	155
257	人形C	(46.9)	4.4	0.4	刻顔・左3・右2	I	SD02・03	181
258	人形C	(37.9)	3.8	0.3	左2・右2	I	SD02・03	232
259	人形C	(32.3)	3.7	0.7	刻顔・左3・右3	I	SD02・03	196
260	人形C	(41.0)	3.6	0.4	左1・右1	I	SD02・03	1512
261	人形C	(36.3)	2.3	0.7	刻顔・左4・右4	I	SD02・03	199
262	人形C	46.3	3.0	0.8	刻顔・左4・右4	I	SD02・03	189
263	人形C	(28.9)	3.8	0.4	左2・右2	I	SD02・03	236
264	人形C	(25.7)	2.3	0.4	刻顔・左1・右1	I	SD02・03	1644
265	人形C	(32.5)	3.8	0.6	刻顔・左2・右2	I	SD02・03	131
266	人形C	(34.0)	3.6	0.5	刻顔・左1・右1	I	SD02・03	186
267	人形C	(32.7)	2.8	0.8	刻顔・左1・右1	I	SD02・03	137
268	人形C	41.2	2.4	0.5	刻顔・左2・右2	I	SD02・03	210
269	人形C	(37.8)	(4.2)	0.9	刻顔・左1・右?	I	SD02・03	1168
270	人形C	(41.7)	4.0	0.5	左3・右?	I	SD02・03	86
271	人形C	52.2	3.6	0.5	刻顔・左2・右2	I	SD02・03	171
272	人形C	52.6	3.3	0.7	刻顔・左1・右1	I	SD02・03	138

No.	器　種	長さ	幅	厚さ	備　　考	区	出土遺構・層位	登録No.
273	人形C	52.9	4.4	1.2	左2・右2	I	SD02・03	226
274	人形C	53.1	3.5	0.7	刻顔・左2・右2	I	SD02・03	1153
275	人形C	(53.4)	5.2	0.7	刻顔・左1・右1	I	SD02・03	92
276	人形C	44.4	5.3	0.6	左1・右1	I	SD02・03	1679
277	人形C	(43.6)	3.8	0.5	刻顔・左3・右3	I	SD02・03	204
278	人形C	62.8	2.6	0.6	刻顔・左2・右2	I	SD02・03	216
279	人形C	66.0	3.1	0.5	刻顔・腰有・左1・右3	I	SD02・03	217
280	人形C体部	(51.4)	3.6	0.7	腰有・左1・右1	I	SD02・03	213
281	人形C	67.8	3.6	0.4	刻顔・左1・右1	I	SD02・03	206
282	人形C	(49.1)	2.8	0.5	刻顔・左?・右1	I	SD02・03	207
283	人形C	(53.6)	5.7	0.6	刻顔・左2・右2	I	SD02・03	175
284	人形C	65.8	5.4	0.7	刻顔・左3・右3	I	SD02・03	164
285	人形C	(66.0)	5.8	0.9	刻顔・左2・右2	I	SD02・03	214
286	人形C	74.2	5.9	0.8	刻顔・左1・右1	I	SD02・03	222
287	人形C	76.8	4.6	0.8	刻顔・左1・右1	I	SD02・03	150
288	人形C	85.3	5.8	0.9	刻顔・左1・右1	I	SD02・03	141
289	人形C	(53.3)	8.0	0.9	刻顔・左3・右3	I	SD02・03	215
290	人形C体部	(65.5)	8.3	0.9	左1・右1	I	SD02・03	221
291	馬形A	26.3	2.7	0.5	脚4・両面に目・手綱・鞍を墨書	I	SD02・03	1735
292	馬形A	22.0	3.2	0.6	脚4	I	SD02・03	192
293	馬形A	24.6	2.9	0.6	脚4	I	SD02・03	1753
294	馬形A	23.4	2.7	0.5	脚4	I	SD02・03	1137
295	馬形A	30.2	3.0	0.8	脚4	I	SD02・03	183
296	馬形A	29.4	2.8	0.9	脚4	I	SD02・03	156
297	馬形A	30.1	3.8	0.4	脚4	I	SD02・03	211
298	馬形A	31.2	3.1	0.6	脚4	I	SD02・03	153
299	馬形A	32.5	3.1	0.5	脚4	I	SD02・03	185
300	馬形C？	33.8	2.9	0.7	脚4・鞍欠損か？	I	SD02・03	202
301	馬形A	33.3	3.7	0.8	脚4・表側に削り痕あり	I	SD02・03	1254
302	馬形A	32.0	4.0	0.5	脚4・鬣1・表側に刀傷あり	I	SD02・03	132
303	馬形A	33.8	5.4	0.7	脚4	I	SD02・03	163
304	馬形A	35.0	2.0	0.9	脚4	I	SD02・03	209
305	馬形A	43.8	4.3	0.7	脚4	I	SD02・03	151
306	馬形A	44.8	5.0	0.8	脚4	I	SD02・03	198
307	斎串A	(15.0)	1.5	0.4	左1・右1	I	SD02・03	1563
308	斎串A	(18.9)	1.6	0.4	左1・右1	I	SD02・03	1616
309	斎串A	(37.6)	2.2	0.4	左3・右3	I	SD02・03	1634
310	斎串A	(51.8)	3.8	0.6	左1／3・右1／3	I	SD02・03	142
311	斎串A	(57.1)	2.6	0.7	左?・右?	I	SD02・03	195
312	斎串A	(15.8)	2.1	0.5	左3・右3	I	SD02・03	1286
313	斎串B	(26.3)	2.0	0.8	左2・右2	I	SD02・03	1643
314	斎串B	36.4	2.3	0.6	左5／7・右5?／4	I	SD02・03	135
315	斎串B	(40.3)	2.5	0.8	左1／1・右3／2	I	SD02・03	1664
316	斎串B	(45.3)	3.0	0.7	左5／1／5・右1／3／3	I	SD02・03	1725
317	斎串B	(70.3)	2.5	1.1	左2／2／2／2／1・右2／2／1／1／1	I	SD02・03	134
318	斎串B	56.6	1.6	0.5	左3／2／2／2・右3／3／2／3	I	SD02・03	220
319	斎串B	(57.4)	2.1	0.7	左4／3／3・右4／3／2	I	SD02・03	176
320	斎串B	(50.0)	2.0	0.7	左3／1／1／1・右1／1／1／1	I	SD02・03	1651
321	斎串B	(48.1)	1.7	0.5	左2／2／2／2・右1／2／1／2	I	SD02・03	1009
322	斎串C1	(39.8)	0.7	0.5		I	SD02・03	1645
323	斎串C1	(33.0)	0.8	0.6		I	SD02・03	1517
324	斎串C1	(28.1)	0.7	0.4		I	SD02・03	1474
325	斎串C2	24.4	0.9	0.4	両端を鋭く尖らせる	I	SD02・03	1467
326	斎串C？	40.7	0.8	0.7	多角形の断面	I	SD02・03	1455
327	斎串C1	(43.5)	0.8	0.4		I	SD02・03	177
328	斎串C1	53.4	1.0	0.4		I	SD02・03	1417
329	斎串C1	(56.4)	0.8	0.5		I	SD02・03	1157
330	斎串C1	(64.0)	1.0	0.5		I	SD02・03	1700
331	斎串C1	73.9	0.8	0.7		I	SD02・03	1699
332	木簡（０３２型式）	(18.5)	4.9	0.5	下端は切断	I	SD02・03	1738
333	木簡（０１１型式）	14.2	4.1	0.5		I	SD02・03	1734
334	付札	11.2	3.4	0.6	切り込み部に圧痕	I	SD02・03	238
335	不明形代	6.0	1.6	0.4	田下駄様	I	SD02・03	1777
336	軸連結の板	17.5	3.3	0.3	上側の孔に棒状木片が遺存	I	SD02・03	184
337	軸連結の板	16.9	2.4	0.4	孔に棒状木片が遺存	I	SD02・03	1389
338	紐かけのある棒状材	(14.2)	3.1	2.9	くびれ部中央は磨耗	I	SD02・03	1071
339	檜扇	20.1	2.0	0.3	末側に切り込みによる綴り目。本側に要孔	I	SD02・03	1245
340	用途不明	9.8	0.7	0.5		I	SD02・03	1556
341	用途不明	(14.4)	1.4	1.1		I	SD02・03	1036

No.	器　種	長さ	幅	厚さ	備　　考	区	出土遺構・層位	登録No.
342	用途不明	(18.2)	1.9	0.7		Ⅰ	SD02・03	1649
343	紐かけのある棒状材	26.2	1.4	1.6	抉りは2面のみ	Ⅰ	SD02・03	1174
344	用途不明	(11.1)	2.5	1.0		Ⅰ	SD02・03	1074
345	田下駄A(3孔)	33.1	11.7	1.3	舟形	Ⅰ	SD02・03	161
346	棒状材	126.2	2.3	2.3		Ⅰ	SD02・03	1698
347	用途不明	(13.4)	(1.8)	0.7	小孔2ヶあり	Ⅰ	SD02・03	1034
348	用途不明	(18.3)	6.3	0.5		Ⅰ	SD02・03	1672
349	有孔曲物底板	復径	18.6	0.9		Ⅰ	SD02・03	1129
350	円形曲物底板	復径	9.0	0.6		Ⅰ	SD02・03	1059
351	円形曲物底板(木釘結合)	復径	13.4	0.8		Ⅰ	SD02・03	1024
352	円形曲物底板(樺皮結合)	復径	19.0	0.6		Ⅰ	SD02・03	1259
353	円形曲物底板(樺皮結合)	径	20.1	0.8	中央に小孔あり	Ⅰ	SD02・03	187
354	擬高台付皿	復径	19.4	1.9		Ⅰ	SD02・03	1221
355	人形C	80.2	4.0	0.7	墨顔・左1・右1・356と同形同寸か	Ⅰ	SD05	269
356	人形C体部	(71.8)	3.8	0.5	左1・右1	Ⅰ	SD05	268
357	人形C	(45.2)	3.5	0.5	左2・右1	Ⅰ	SD05	2761
358	人形C	(28.9)	4.5	0.5	刻顔・左1・右1	Ⅰ	SD05	2769
359	人形C	(28.2)	3.7	0.5	刻顔・左1・右1	Ⅰ	SD05砂礫	1968
360	人形C	20.8	(2.5)	0.5	刻顔・左2・右2	Ⅰ	SD05砂礫	1965
361	人形C	22.5	(2.5)	0.5	左?・右1	Ⅰ	SD05	1775
362	斎串A	32.7	2.2	0.5	左3・右3	Ⅰ	SD05砂礫	1966
363	斎串B	45.8	1.6	0.5	左5／5／4／4・右6／6／4／4	Ⅰ	SD05砂礫	1964
364	斎串C？	(19.4)	1.2	0.9		Ⅰ	SD05	241
365	斎串E	28.8	1.7	0.6	左0・右0	Ⅰ	SD05砂礫	2096
366	馬形A？	(14.9)	3.2	0.5	脚？・368.369と類似	Ⅰ	SD05	2773
367	馬形A	28.2	4.0	0.9	脚0	Ⅰ	SD05	2770
368	馬形A	(40.8)	2.8	0.7	脚4	Ⅰ	SD05	2771
369	馬形A	40.0	3.6	0.5	脚4	Ⅰ	SD05	2768
370	人形C	(13.9)	(2.4)	0.4	墨顔・左?・右?	Ⅰ	SD08	2151
371	人形A	(13.3)	3.0	0.3	左2・右2	Ⅰ	SD08砂礫	1996
372	人形C	(27.1)	4.1	0.5	墨顔・左?・右2・女性的な顔表現	Ⅰ	SD08砂礫	313
373	人形C	30.8	3.1	0.6	左?・右?	Ⅰ	SD08	309
374	人形C	31.2	2.3	0.3	左2・右2	Ⅰ	SD08	2277
375	人形C	38.8	6.1	0.7	墨顔・左3・右3	Ⅰ	SD08	2150
376	人形C	(41.0)	4.3	0.9	刻顔・左3・右2	Ⅰ	SD08	324
377	人形B	(43.4)	3.7	0.7	刻顔・左?・右?	Ⅰ	SD08	1985
378	人形C	(48.7)	3.9	0.7	刻顔・左1・右3	Ⅰ	SD08	1986
379	人形C	94.1	6.6	0.5	墨顔・左1・右1	Ⅰ	SD08砂礫	314
380	鳥形	22.3	(5.9)	0.6	両面に目を墨書。表裏各2ヶの薄板の差し込み痕あり	Ⅰ	SD08砂礫	2028
381	斎串C1	(13.2)	0.6	0.7		Ⅰ	SD08	331
382	刀形?	(25.7)	2.1	0.5	茎をかたどる	Ⅰ	SD08	2069
383	斎串B	(38.8)	1.0	0.6	左4／2／2?・右3／3／2?	Ⅰ	SD08	325
384	斎串B	(67.7)	2.0	0.7	左1／1／1／1・右1／1／1／1	Ⅰ	SD08砂礫	2042
385	斎串B	72.9	2.0	0.4	左5／3／4?／2／4?／3・右3／4／3／3／3?／3?	Ⅰ	SD08	2767
386	一木鋤	(39.2)	17.3	2.6	身の先端を削り刃をつける	Ⅰ	SD08	310
387	板状材	(25.8)	5.9	0.5		Ⅰ	SD08砂礫	2078
388	人形C	(36.8)	6.0	0.5	左2・右1	Ⅰ	SD09砂礫	2075
389	人形C	60.4	5.0	0.8	左4・右4・砲弾状の頭部	Ⅰ	SD09砂礫	2093
390	人形C	71.4	4.1	0.4	左2・右2	Ⅰ	SD09	2285
391	斎串C？	(20.2)	1.2	0.4		Ⅰ	SD09	2260
392	斎串B	(45.5)	2.1	0.7	左1・右1	Ⅰ	SD09	340
393	板状材	(14.6)	2.5	0.2		Ⅰ	SD09	2282
394	用途不明	9.6	3.4	0.6		Ⅰ	SD09	338
395	人形A	(19.4)	2.3	0.4	左3・右1	Ⅱ	SD18最下層	3959
396	人形A	33.4	4.0	0.5	左3・右3	Ⅱ	SD18最下層	3313
397	人形A	36.0	3.8	0.7	左3・右3	Ⅱ	SD18最下層	2181
398	人形A	(23.9)	2.8	0.3	刻顔・左?・右3	Ⅱ	SD18最下層	4052
399	人形A	33.9	3.0	0.4	左4・右3	Ⅱ	SD18最下層	3868
400	人形A	(12.1)	3.8	0.2	左?・右?	Ⅱ	SD18最下層	4047
401	人形A	(24.2)	3.3	0.3	左1・右3	Ⅱ	SD18最下層	3319
402	人形A	(28.3)	3.1	0.3	左1・右4	Ⅱ	SD18最下層	2362
403	人形A	33.9	5.0	0.3	左2・右?	Ⅱ	SD18最下層	4065
404	人形A	(18.6)	3.4	0.5	左2・右2	Ⅱ	SD18最下層	2127
405	人形A	(18.0)	3.7	0.6	左3・右4	Ⅱ	SD18最下層	3961
406	人形A	21.3	2.9	0.3	左3・右5	Ⅱ	SD18最下層	2156
407	人形A	23.5	2.6	0.7	左2・右2	Ⅱ	SD18最下層	2368
408	人形A	19.3	2.3	0.4	左?・右3	Ⅱ	SD18最下層	3320

No.	器　種	長さ	幅	厚さ	備　考	区	出土遺構・層位	登録No.
409	人形A	(17.0)	3.8	0.3	左3・右2	Ⅱ	SD18最下層	3316
410	人形A	(15.0)	2.7	0.5	左2・右2・頭部両側を切欠く	Ⅱ	SD18最下層	3322
411	人形A	19.3	2.5	0.5	左2・右1・頭部両側を切欠く	Ⅱ	SD18最下層	2112
412	人形A	(14.7)	2.6	0.5	刻顔・左1・右3・頭部両側を切欠く	Ⅱ	SD18最下層	3292
413	馬形B	22.5	2.6	0.4	脚4	Ⅱ	SD18最下層	3502
414	馬形B	25.1	2.4	0.7	脚1・鬣1	Ⅱ	SD18最下層	2449
415	馬形B	31.2	3.0	0.4	脚4	Ⅱ	SD18最下層	2447
416	馬形B	21.0	4.7	0.7	脚4	Ⅱ	SD18最下層	2383
417	馬形B	29.7	2.6	0.7	脚4	Ⅱ	SD18最下層	3478
418	馬形B	14.9	1.9	0.3	脚1	Ⅱ	SD18最下層	3484
419	馬形B	17.5	2.2	0.4	脚1	Ⅱ	SD18最下層	3515
420	馬形B	16.5	2.8	0.4	脚1	Ⅱ	SD18最下層	3516
421	馬形B	17.4	2.6	0.4	脚4？	Ⅱ	SD18最下層	3466
422	馬形B	19.5	3.4	0.6	脚4	Ⅱ	SD18最下層	3527
423	馬形B	20.3	3.5	0.4	脚4	Ⅱ	SD18最下層	2398
424	馬形B	21.3	2.8	0.4	脚1	Ⅱ	SD18最下層	2580
425	馬形B	19.5	3.2	0.3	脚1	Ⅱ	SD18最下層	3982
426	馬形B	(14.8)	2.3	0.4	脚1？・鬣1	Ⅱ	SD18最下層	3980
427	斎串A	27.2	1.4	0.3	左1・右2	Ⅱ	SD18最下層	3404
428	斎串A	29.6	1.5	0.4	左2・右5	Ⅱ	SD18最下層	3433
429	斎串A	30.5	1.5	0.3	左2・右2	Ⅱ	SD18最下層	3405
430	斎串A	30.8	1.8	0.3	左2・右3	Ⅱ	SD18最下層	497
431	斎串A	32.4	1.6	0.4	左2・右2	Ⅱ	SD18最下層	755
432	斎串A	35.2	1.6	0.2	左5・右5	Ⅱ	SD18最下層	3438
433	斎串A	34.4	1.6	0.4	左3・右4	Ⅱ	SD18最下層	3392
434	斎串A	41.0	2.0	0.5	左2・右2	Ⅱ	SD18最下層	3419
435	斎串A	38.6	2.5	0.6	左2・右2	Ⅱ	SD18最下層	3418
436	斎串A	39.5	1.8	0.4	左?・右3	Ⅱ	SD18最下層	3421
437	斎串A	(33.9)	1.4	0.6	左1・右1	Ⅱ	SD18最下層	3968
438	斎串A	31.2	1.2	0.3	左2・右2	Ⅱ	SD18最下層	897
439	斎串A	(30.4)	2.5	0.4	左2・右2	Ⅱ	SD18最下層	3965
440	斎串A？	(23.7)	1.8	0.7	左?・右1	Ⅱ	SD18最下層	866
441	斎串A	51.8	1.4	0.4	左1・右1	Ⅱ	SD18最下層	3422
442	斎串A	49.8	1.7	0.4	左3・右3	Ⅱ	SD18最下層	496
443	斎串A	46.8	1.9	0.4	左2・右2	Ⅱ	SD18最下層	281
444	斎串A	53.5	1.7	0.3	左4・右3	Ⅱ	SD18最下層	279
445	斎串F	32.2	2.5	1.2		Ⅱ	SD18最下層	808
446	斎串D	16.0	0.7	0.5	上0	Ⅱ	SD18最下層	2074
447	斎串D	15.0	1.4	0.4	上11	Ⅱ	SD18最下層	3459
448	斎串D	14.6	1.3	0.4	上12	Ⅱ	SD18最下層	803
449	斎串A？	(46.4)	2.1	0.2		Ⅱ	SD18最下層	230
450	斎串A？	(39.9)	2.2	0.4		Ⅱ	SD18最下層	895
451	斎串A？	(51.0)	1.7	1.3		Ⅱ	SD18最下層	59
452	斎串A？	(34.2)	2.1	0.4		Ⅱ	SD18最下層	243
453	斎串E	13.0	1.6	0.3	左?・右?	Ⅱ	SD18最下層	3181
454	斎串E	(19.4)	1.4	0.4	左?・右1	Ⅱ	SD18最下層	3596
455	斎串E	(17.7)	2.4	0.6	左?・右?	Ⅱ	SD18最下層	3462
456	斎串D	12.3	1.0	0.4	上0	Ⅱ	SD18最下層	802
457	斎串D	16.4	1.3	0.3	上1	Ⅱ	SD18最下層	252
458	斎串D	17.5	1.6	0.2	上0	Ⅱ	SD18最下層	601
459	斎串D	15.9	0.8	0.7	上0	Ⅱ	SD18最下層	251
460	斎串D	12.5	1.0	0.4	上4	Ⅱ	SD18最下層	3186
461	斎串D	11.9	0.9	0.3	上3	Ⅱ	SD18最下層	3187
462	斎串D	12.3	1.6	0.4	上2	Ⅱ	SD18最下層	3125
463	斎串D	14.6	1.5	0.2	上4	Ⅱ	SD18最下層	790
464	斎串D	13.2	1.5	0.3	上11	Ⅱ	SD18最下層	2055
465	斎串D	16.8	1.2	0.3	上7	Ⅱ	SD18最下層	804
466	斎串D	15.5	1.4	0.3	上6	Ⅱ	SD18最下層	798
467	斎串D	15.0	1.3	0.4	上4	Ⅱ	SD18最下層	3188
468	斎串C2	15.7	0.5	0.5		Ⅱ	SD18最下層	277
469	斎串C2	15.6	0.6	0.4		Ⅱ	SD18最下層	2083
470	斎串C2	15.5	0.6	0.5		Ⅱ	SD18最下層	268
471	斎串C2	15.7	0.7	0.3		Ⅱ	SD18最下層	269
472	斎串C2	16.5	0.7	0.2		Ⅱ	SD18最下層	265
473	斎串C2	(14.0)	0.8	0.4		Ⅱ	SD18最下層	3387
474	斎串C2	14.8	0.7	0.6		Ⅱ	SD18最下層	3378
475	斎串C2	16.3	0.7	0.3		Ⅱ	SD18最下層	267
476	斎串F	(15.1)	2.1	0.7		Ⅱ	SD18最下層	2048
477	斎串F	(20.1)	2.1	1.0		Ⅱ	SD18最下層	73

No.	器　種	長さ	幅	厚さ	備　考	区	出土遺構・層位	登録No.
478	孔あきの板	33.5	(11.7)	1.5		Ⅱ	SD18最下層	2791
479	孔あきの板	40.2	(4.5)	1.6		Ⅱ	SD18最下層	3870
480	人形D	(42.6)	4.6	0.5	左?・右?	Ⅱ	SD18	2289
481	人形B	(43.2)	3.1	0.5	左2・右3	Ⅱ	SD18	2352
482	人形A	(23.2)	2.3	0.5	左2・右3	Ⅱ	SD18	3566
483	人形A	(14.5)	2.3	0.3	左3・右3	Ⅱ	SD18	2684
484	人形C	(19.2)	2.3	0.5	刻顔・左2・右2	Ⅱ	SD18	3318
485	人形A	22.0	2.8	0.4	左2・右2	Ⅱ	SD18	2168
486	人形A	(24.2)	3.7	0.7	左3・右4	Ⅱ	SD18	3329
487	人形A	(19.7)	4.1	0.5	左4・右?	Ⅱ	SD18	3558
488	人形A	(20.2)	3.7	0.4	左?・右5	Ⅱ	SD18	3557
489	人形脚	(19.6)	2.0	0.3		Ⅱ	SD18	3377
490	人形A	(16.5)	2.4	0.4	左3・右3	Ⅱ	SD18	3345
491	人形A	(15.3)	2.2	0.5	左4・右?	Ⅱ	SD18	3572
492	人形A	(9.0)	2.6	0.4	左?・右?	Ⅱ	SD18	3576
493	人形A	(14.1)	2.5	0.4	左2・右3	Ⅱ	SD18	3568
494	人形A	(13.2)	2.3	0.4	左1・右1	Ⅱ	SD18	3578
495	人形A	(18.6)	3.7	0.5	左2・右5	Ⅱ	SD18	3577
496	人形A	31.7	2.5	0.5	左3・右4	Ⅱ	SD18	3550
497	人形A	29.7	2.8	0.3	左1・右4	Ⅱ	SD18	3347
498	人形A	(29.3)	4.1	0.7	左1・右3	Ⅱ	SD18	3202
499	人形A	28.0	3.1	0.5	左4・右5	Ⅱ	SD18	3374
500	人形A	22.4	3.0	0.6	左1・右3	Ⅱ	SD18	3209
501	人形A	(19.1)	2.2	0.3	左5・右2	Ⅱ	SD18	3570
502	人形A	(22.0)	2.2	0.3	左3・右2	Ⅱ	SD18	3559
503	人形A	22.4	3.4	0.5	左3・右4	Ⅱ	SD18	3553
504	人形A	29.7	3.5	0.6	左3・右3	Ⅱ	SD18	3354
505	人形A	30.4	2.7	0.4	左4・右1	Ⅱ	SD18	3352
506	人形A	30.2	2.6	0.3	左4・右3	Ⅱ	SD18	3351
507	人形A	29.3	2.5	0.4	左3・右2	Ⅱ	SD18	3356
508	人形A	31.5	2.5	0.6	左2・右3	Ⅱ	SD18	3355
509	人形A	30.2	2.6	0.4	左5・右2	Ⅱ	SD18	3324
510	人形A	25.0	3.2	0.6	左3・右3	Ⅱ	SD18	3349
511	人形A	25.9	2.0	0.9	左5・右4	Ⅱ	SD18	3383
512	人形A	(28.0)	4.2	0.5	左4・右4	Ⅱ	SD18	3552
513	人形A	33.3	4.3	0.6	左8・右5	Ⅱ	SD18	3551
514	人形A	(28.4)	2.2	0.6	左3・右3	Ⅱ	SD18	3555
515	人形A	(25.8)	2.5	0.5	左1・右1	Ⅱ	SD18	3556
516	人形A	(22.1)	2.3	0.4	左?・右3	Ⅱ	SD18	3554
517	人形A	(21.0)	2.7	0.6	左2・右3	Ⅱ	SD18	3563
518	人形A	(22.4)	2.7	0.4	左4・右3	Ⅱ	SD18	3562
519	人形A	(19.0)	2.7	0.4	左3・右3	Ⅱ	SD18	3571
520	人形A	21.1	3.0	0.5	左4・右4	Ⅱ	SD18	3560
521	人形A	(23.6)	2.8	0.5	左?・右2	Ⅱ	SD18	3575
522	人形A	(21.1)	2.4	1.1	左3・右4	Ⅱ	SD18	3342
523	人形A	(21.5)	2.8	0.5	左4・右4	Ⅱ	SD18	2167
524	人形A	25.0	3.4	0.4	左2・右2	Ⅱ	SD18	3372
525	人形A	(22.0)	2.6	0.2	左2・右2	Ⅱ	SD18	3375
526	人形A	(19.1)	3.3	0.5	左1・右1	Ⅱ	SD18	3376
527	人形A	(20.2)	3.9	0.6	左5・右6	Ⅱ	SD18	3561
528	人形A	(20.8)	3.6	0.6	左4・右4	Ⅱ	SD18	3286
529	人形A	(18.3)	3.1	0.6	左4・右2	Ⅱ	SD18	3287
530	人形A	(18.5)	3.7	0.4	刻顔・左2・右?	Ⅱ	SD18	3290
531	人形A	(16.3)	2.7	0.4	左3・右5	Ⅱ	SD18	3569
532	人形A	(21.8)	2.9	0.5	左1・右1	Ⅱ	SD18	3385
533	人形A	(23.3)	3.2	0.8	刻顔・?左1・右1	Ⅱ	SD18	2251
534	人形A	22.5	3.3	0.5	左2・右2	Ⅱ	SD18	3330
535	人形A	23.7	3.2	0.4	左2・右3	Ⅱ	SD18	3331
536	人形A	(26.1)	3.5	0.5	左?・右2	Ⅱ	SD18	3332
537	人形A	21.2	2.7	0.6	左2・右3	Ⅱ	SD18	3564
538	人形D	22.4	2.7	0.5	左3・右3	Ⅱ	SD18	3344
539	人形A	23.6	2.1	0.4	左2・右5	Ⅱ	SD18	3350
540	人形A	21.2	2.6	0.3	左2・右3	Ⅱ	SD18	3205
541	人形A	19.8	3.0	0.7	左2・右1	Ⅱ	SD18	3274
542	人形A	19.1	1.9	0.3	左1・右1	Ⅱ	SD18	3293
543	人形A	17.9	2.1	0.4	左2・右2	Ⅱ	SD18	3210
544	人形A	18.7	1.9	0.4	左2・右4	Ⅱ	SD18	3206
545	人形A	(16.4)	2.1	0.3	左3・右1	Ⅱ	SD18	3116
546	人形A	(13.5)	2.4	0.5	左3・右2	Ⅱ	SD18	3567

No.	器　種	長さ	幅	厚さ	備　考	区	出土遺構・層位	登録No.
547	人形A	(12.9)	2.9	0.4	左1・右1	Ⅱ	SD18	2351
548	人形A	(14.8)	3.6	0.4	刻顔・左3・右1	Ⅱ	SD18	2349
549	人形A	(18.4)	3.1	0.6	左?・右?	Ⅱ	SD18	3325
550	人形A	(17.2)	2.5	0.6	左3・右?・頭部両側を切欠く	Ⅱ	SD18	3285
551	人形A	(10.1)	1.5	0.3	左?・右3	Ⅱ	SD18	2164
552	人形A	(10.1)	1.8	0.4	左?・右?	Ⅱ	SD18	3573
553	人形A	(7.0)	1.8	0.3	左1・右1	Ⅱ	SD18	2301
554	人形A	(7.5)	2.4	0.2	左?・右?	Ⅱ	SD18	3574
555	人形A	(9.9)	2.4	0.3	左?・右?	Ⅱ	SD18	3579
556	人形A	(9.6)	2.2	0.3	左?・右?	Ⅱ	SD18	3565
557	人形A	(26.6)	4.4	0.8	左3・右3	Ⅱ	SD18	3328
558	人形A	(21.6)	5.2	0.6	刻顔・左3・右2	Ⅱ	SD18	3341
559	人形F	31.6	4.0	0.5	腰有・左2・右?	Ⅱ	SD18	2350
560	馬形B	17.8	2.5	0.9	脚4	Ⅱ	SD18	3117
561	馬形B	16.2	1.6	0.3	脚1	Ⅱ	SD18	3480
562	馬形B	17.4	1.7	0.2	脚4	Ⅱ	SD18	3493
563	馬形B	16.0	1.6	0.4	脚1	Ⅱ	SD18	3490
564	馬形B	16.2	2.2	0.3	脚4	Ⅱ	SD18	3514
565	馬形B	17.6	1.8	0.3	脚1	Ⅱ	SD18	3485
566	馬形B	20.5	2.4	0.6	脚1・鬣1	Ⅱ	SD18	2405
567	馬形B	21.1	3.8	0.8	脚1	Ⅱ	SD18	3489
568	馬形B	19.8	2.5	0.5	脚1	Ⅱ	SD18	2524
569	馬形B	20.9	2.2	0.6	脚4	Ⅱ	SD18	3510
570	馬形B	19.5	2.6	0.3	脚1	Ⅱ	SD18	2503
571	馬形B	17.7	2.5	0.5	脚4	Ⅱ	SD18	3465
572	馬形B	25.8	3.1	0.8	脚4	Ⅱ	SD18	3589
573	馬形B	26.1	2.5	0.5	脚4	Ⅱ	SD18	2420
574	馬形B	27.1	2.9	0.8	脚1	Ⅱ	SD18	2575
575	馬形B	25.0	2.9	0.6	脚1・鬣1	Ⅱ	SD18	3166
576	馬形B	24.7	3.1	0.7	脚1・鬣1	Ⅱ	SD18	3754
577	馬形B	26.3	3.3	1.0	脚4?	Ⅱ	SD18	3588
578	馬形B	18.3	2.6	0.5	脚2	Ⅱ	SD18	3491
579	馬形B	16.5	2.1	0.4	脚1	Ⅱ	SD18	3506
580	馬形B	15.6	2.8	0.5	脚?	Ⅱ	SD18	3590
581	馬形B	18.9	2.5	0.5	脚1	Ⅱ	SD18	3302
582	馬形B	18.3	3.3	0.6	脚4	Ⅱ	SD18	3165
583	馬形B	16.2	3.3	0.6	脚4	Ⅱ	SD18	3301
584	馬形B	19.6	3.9	0.9	脚4	Ⅱ	SD18	3497
585	馬形B	20.6	3.8	0.5	脚1	Ⅱ	SD18	3520
586	馬形B	20.8	4.7	0.8	脚4	Ⅱ	SD18	2587
587	馬形B	20.0	3.6	0.8	脚4	Ⅱ	SD18	3581
588	馬形B	19.6	2.4	0.7	脚1	Ⅱ	SD18	3594
589	馬形B	14.9	3.4	0.6	脚1	Ⅱ	SD18	3592
590	馬形B	18.3	2.9	0.7	脚3(腹1・側2)	Ⅱ	SD18	3528
591	馬形B	(16.9)	3.4	0.5	脚?	Ⅱ	SD18	2624
592	馬形B	14.1	4.0	0.6	脚4	Ⅱ	SD18	3118
593	馬形B	18.8	3.0	0.5	脚1	Ⅱ	SD18	3500
594	馬形B	19.2	1.9	0.5	脚1	Ⅱ	SD18	2377
595	馬形B	18.3	1.3	0.5	脚1	Ⅱ	SD18	3525
596	馬形B	15.7	1.8	0.7	脚1	Ⅱ	SD18	3488
597	馬形B	16.2	2.1	0.8	脚1	Ⅱ	SD18	3587
598	馬形B	14.7	2.2	0.4	脚1・鬣2	Ⅱ	SD18	2514
599	馬形B	15.4	3.1	0.5	脚1	Ⅱ	SD18	3229
600	馬形B	15.8	2.6	0.4	脚1	Ⅱ	SD18	2541
601	馬形B	17.8	3.2	0.6	脚1	Ⅱ	SD18	2507
602	馬形B	18.2	3.6	0.5	脚4	Ⅱ	SD18	2517
603	馬形B	19.2	3.5	0.4	脚2	Ⅱ	SD18	2542
604	馬形B	18.3	2.8	0.5	脚1	Ⅱ	SD18	2582
605	馬形B	17.5	3.6	0.7	脚6(側各3)	Ⅱ	SD18	3499
606	馬形B	29.7	2.4	0.6	脚4	Ⅱ	SD18	2381
607	馬形B	19.8	3.2	0.5	脚4・鬣3	Ⅱ	SD18	2600
608	馬形B	19.3	2.3	0.5	脚?	Ⅱ	SD18	3300
609	馬形B	19.3	2.3	0.5	脚4・鬣2	Ⅱ	SD18	3495
610	馬形B	19.5	2.6	0.6	脚4・鬣4	Ⅱ	SD18	3593
611	馬形B	20.4	2.8	0.9	脚1	Ⅱ	SD18	3845
612	馬形B	21.1	3.2	0.7	脚1・鬣1	Ⅱ	SD18	3508
613	馬形B	18.4	2.1	0.8	脚1	Ⅱ	SD18	3479
614	馬形B	20.5	2.1	0.4	脚1	Ⅱ	SD18	3501
615	馬形B	19.8	2.6	0.3	脚1	Ⅱ	SD18	3477

No.	器　種	長さ	幅	厚さ	備　考	区	出土遺構・層位	登録No.
616	馬形B	19.7	3.5	0.8	脚1	Ⅱ	SD18	3486
617	馬形B	20.1	3.7	0.9	脚1	Ⅱ	SD18	3473
618	馬形B	17.6	2.4	0.5	脚4・鬣1	Ⅱ	SD18	2522
619	馬形B	17.3	2.8	0.7	脚2・鬣3	Ⅱ	SD18	3475
620	馬形B	16.0	2.9	0.4	脚1・鬣1	Ⅱ	SD18	3299
621	馬形B	18.6	2.1	0.5	脚1	Ⅱ	SD18	3507
622	馬形B	14.9	2.8	0.4	脚1	Ⅱ	SD18	3303
623	馬形B	16.4	2.3	0.5	脚1	Ⅱ	SD18	3585
624	馬形B	15.7	2.6	0.5	脚1・鬣2	Ⅱ	SD18	3586
625	馬形B	16.6	2.7	0.4	脚1・鬣3	Ⅱ	SD18	3583
626	馬形B	16.3	3.0	0.6	脚1	Ⅱ	SD18	3582
627	馬形B	17.1	3.5	0.6	脚4	Ⅱ	SD18	3591
628	馬形B	18.2	3.7	0.5	脚4	Ⅱ	SD18	3297
629	馬形B	13.6	3.4	0.7	脚1	Ⅱ	SD18	3231
630	馬形B	17.4	3.2	0.4	脚1	Ⅱ	SD18	2408
631	馬形B	19.0	3.2	0.4	脚4	Ⅱ	SD18	3482
632	馬形B	18.4	2.6	0.5	脚4	Ⅱ	SD18	2411
633	馬形B	17.8	2.5	0.8	脚1	Ⅱ	SD18	3496
634	馬形B	18.8	2.8	0.5	脚1・鬣2	Ⅱ	SD18	3470
635	馬形B	25.4	3.1	0.4	脚2	Ⅱ	SD18	3481
636	馬形B	19.6	3.5	0.5	脚1？	Ⅱ	SD18	3298
637	馬形B	18.5	3.8	1.0	脚4？	Ⅱ	SD18	3296
638	馬形B	19.4	3.1	0.5	脚4	Ⅱ	SD18	3476
639	馬形B	(19.1)	3.1	0.6	脚1・鬣2	Ⅱ	SD18	3584
640	馬形B	(18.9)	5.7	0.9	脚1？	Ⅱ	SD18	3580
641	馬形B	(11.0)	1.7	0.5	脚？	Ⅱ	SD18	2635
642	馬形B	(9.6)	2.7	0.7	脚4？	Ⅱ	SD18	3973
643	馬形B	(15.6)	3.2	0.2	脚4？	Ⅱ	SD18	2550
644	馬形B	(7.2)	1.9	0.5	脚1？	Ⅱ	SD18	4037
645	馬形B	(17.5)	2.3	0.4	脚1・鬣2	Ⅱ	SD18	3978
646	剣形	22.5	2.9	0.8	茎をかたどる	Ⅱ	SD18	3247
647	剣形	30.1	2.1	0.5	茎をかたどる	Ⅱ	SD18	3244
648	剣形	30.8	2.0	0.3	柄をかたどる	Ⅱ	SD18	3535
649	特殊刀形	35.4	1.9	0.5	左2・右2	Ⅱ	SD18	3245
650	付札	(21.8)	3.0	0.6		Ⅱ	SD18	3191
651	不明形代	8.1	2.2	0.4	勾玉様	Ⅱ	SD18	2663
652	舟形	19.8	3.3	0.7		Ⅱ	SD18	3252
653	舟形	28.3	3.4	1.5		Ⅱ	SD18	3194
654	斎串A	19.8	1.4	0.2	左2・右3	Ⅱ	SD18	3595
655	斎串A	20.9	1.8	0.4	左2・右4	Ⅱ	SD18	3123
656	斎串A	26.4	1.2	0.5	左4・右3	Ⅱ	SD18	3416
657	斎串A	26.7	1.5	0.3	左2・右2	Ⅱ	SD18	3819
658	斎串A	26.4	1.3	0.2	左3・右3	Ⅱ	SD18	3457
659	斎串A	27.8	1.7	0.3	左4・右4	Ⅱ	SD18	3434
660	斎串A	27.5	1.8	0.4	左7・右7	Ⅱ	SD18	3444
661	斎串A	28.2	1.2	0.3	左2・右3	Ⅱ	SD18	884
662	斎串A	28.9	1.6	0.3	左3・右3	Ⅱ	SD18	1814
663	斎串A	29.1	1.6	0.2	左5・右4	Ⅱ	SD18	3453
664	斎串A	27.9	1.3	0.4	左3・右1	Ⅱ	SD18	410
665	斎串A	28.0	1.4	0.1	左5・右5	Ⅱ	SD18	3412
666	斎串A	28.7	1.5	0.3	左4・右2	Ⅱ	SD18	3396
667	斎串A	27.8	1.8	0.4	左3・右3	Ⅱ	SD18	275
668	斎串A	28.9	1.8	0.2	左5・右5	Ⅱ	SD18	278
669	斎串A	27.5	2.1	0.9	左4・右2	Ⅱ	SD18	3665
670	斎串A	27.1	2.0	0.4	左3・右3	Ⅱ	SD18	3398
671	斎串A	30.1	1.3	0.3	左4・右5	Ⅱ	SD18	271
672	斎串A	29.7	1.9	0.5	左3・右3	Ⅱ	SD18	3446
673	斎串A	30.6	1.3	0.4	左3・右3	Ⅱ	SD18	1918
674	斎串A	30.5	1.4	0.2	左2・右3	Ⅱ	SD18	3390
675	斎串A	29.0	1.5	0.5	左3・右1	Ⅱ	SD18	3399
676	斎串A	28.7	1.6	0.3	左5・右5	Ⅱ	SD18	3439
677	斎串A	32.7	1.7	0.4	左2・右2	Ⅱ	SD18	1934
678	斎串A	31.5	1.5	0.5	左4・右4	Ⅱ	SD18	3430
679	斎串A	31.9	1.6	0.3	左3・右3	Ⅱ	SD18	3437
680	斎串A	30.0	1.6	0.4	左8・右1	Ⅱ	SD18	3401
681	斎串A	30.4	1.4	0.3	左5・右5	Ⅱ	SD18	3448
682	斎串A	31.5	1.5	0.3	左1・右1	Ⅱ	SD18	3415
683	斎串A	30.7	1.3	0.3	左1・右1	Ⅱ	SD18	3815
684	斎串A	29.7	1.4	0.2	左2・右1	Ⅱ	SD18	3400

No.	器　種	長さ	幅	厚さ	備　考	区	出土遺構・層位	登録No.
685	斎串A	29.0	1.6	0.3	左4・右4	Ⅱ	SD18	3410
686	斎串A	30.8	1.9	0.3	左2・右1	Ⅱ	SD18	460
687	斎串A	30.0	1.8	0.4	左5・右5	Ⅱ	SD18	1844
688	斎串A	28.9	1.9	0.2	左4・右4	Ⅱ	SD18	3436
689	斎串A	30.6	2.1	0.3	左4・右3	Ⅱ	SD18	3435
690	斎串A	32.0	2.0	0.5	左3・右4	Ⅱ	SD18	3454
691	斎串A	31.3	1.6	0.3	左2・右2	Ⅱ	SD18	3787
692	斎串A	32.5	1.5	0.2	左3・右2	Ⅱ	SD18	3414
693	斎串A	33.9	1.5	0.4	左3・右4	Ⅱ	SD18	3790
694	斎串A	32.5	1.2	0.3	左1・右3	Ⅱ	SD18	3397
695	斎串A	34.7	1.7	0.5	左4・右4	Ⅱ	SD18	3850
696	斎串A	(15.3)	1.8	0.2	左1・右1	Ⅱ	SD18	619
697	斎串A	31.0	1.9	0.4	左3・右2	Ⅱ	SD18	3786
698	斎串A	31.2	1.5	0.5	左3・右3	Ⅱ	SD18	407
699	斎串A	32.6	1.6	0.3	左2・右2	Ⅱ	SD18	274
700	斎串A	32.9	1.7	0.3	左3・右3	Ⅱ	SD18	272
701	斎串A	32.9	1.6	0.3	左4・右3	Ⅱ	SD18	270
702	斎串A	32.5	1.7	0.3	左4・右5	Ⅱ	SD18	273
703	斎串A	34.4	1.2	0.3	左2・右1	Ⅱ	SD18	1888
704	斎串A	33.8	1.6	0.4	左4・右3	Ⅱ	SD18	3449
705	斎串A	34.8	1.5	0.4	左2・右2	Ⅱ	SD18	3820
706	斎串A	33.9	1.6	0.2	左1・右1	Ⅱ	SD18	464
707	斎串A	36.0	1.4	0.2	左4・右4	Ⅱ	SD18	1818
708	斎串A	39.7	1.5	0.2	左3・右4	Ⅱ	SD18	1801
709	斎串A	39.6	1.6	0.6	左1・右1	Ⅱ	SD18	401
710	斎串A	46.1	1.2	0.7	左2・右1	Ⅱ	SD18	254
711	斎串A	47.2	0.9	0.6	左2・右1	Ⅱ	SD18	255
712	斎串A	39.1	1.4	0.3	左2・右2	Ⅱ	SD18	459
713	斎串A	42.1	1.6	0.4	左3・右9	Ⅱ	SD18	406
714	斎串A	42.1	1.6	0.3	左1・右1	Ⅱ	SD18	404
715	斎串A	43.4	1.4	0.5	左2・右2	Ⅱ	SD18	1804
716	斎串A	45.4	1.2	0.3	左3・右2	Ⅱ	SD18	3426
717	斎串A	41.8	1.3	0.4	左3・右3	Ⅱ	SD18	1852
718	斎串A	(35.7)	1.2	0.5	左1・右2	Ⅱ	SD18	1929
719	斎串A	41.2	1.3	0.4	左1・右2	Ⅱ	SD18	1886
720	斎串A	41.5	1.1	0.4	左4・右3	Ⅱ	SD18	1820
721	斎串A	39.7	1.3	0.3	左3・右1	Ⅱ	SD18	1943
722	斎串A	36.5	1.4	0.3	左4・右3	Ⅱ	SD18	3389
723	斎串A	40.5	1.6	0.3	左2・右3	Ⅱ	SD18	3799
724	斎串A	45.8	1.2	0.4	左1・右3	Ⅱ	SD18	3966
725	斎串A	44.3	1.3	0.5	左6・右3	Ⅱ	SD18	515
726	斎串A	44.8	1.5	0.2	左3・右2	Ⅱ	SD18	403
727	斎串A	44.5	1.7	0.3	左4・右4	Ⅱ	SD18	402
728	斎串A	46.6	1.6	0.6	左3・右2	Ⅱ	SD18	311
729	斎串A	50.2	1.4	0.6	左3・右3	Ⅱ	SD18	3427
730	斎串A	49.4	1.5	0.2	左4・右4	Ⅱ	SD18	3788
731	斎串A	49.7	1.4	0.4	左4・右2	Ⅱ	SD18	3425
732	斎串A	48.5	1.5	0.3	左3・右2	Ⅱ	SD18	518
733	斎串A	49.1	1.4	0.3	左4・右3	Ⅱ	SD18	3423
734	斎串A	50.4	1.8	0.4	左2・右2	Ⅱ	SD18	1889
735	斎串A	49.0	2.1	0.5	左2・右1	Ⅱ	SD18	1853
736	斎串A	46.1	1.9	0.4	左1・右2	Ⅱ	SD18	513
737	斎串A	(38.8)	1.6	0.5	左3・右4	Ⅱ	SD18	1851
738	斎串A	(38.5)	2.0	0.4	左2・右3	Ⅱ	SD18	886
739	斎串A	(41.3)	2.4	0.4	左1・右3	Ⅱ	SD18	1798
740	斎串A	55.5	1.6	0.3	左2・右2	Ⅱ	SD18	898
741	斎串A	59.0	1.8	0.4	左1・右1	Ⅱ	SD18	932
742	斎串A	56.0	1.9	0.4	左2・右2	Ⅱ	SD18	3800
743	斎串A	63.8	1.3	0.7	左1・右1	Ⅱ	SD18	1825
744	斎串A	33.5	1.7	0.2	左2・右?	Ⅱ	SD18	3818
745	斎串A	35.1	1.6	0.5	左2・右2	Ⅱ	SD18	276
746	斎串A	31.7	2.2	0.7	左?・右2	Ⅱ	SD18	517
747	斎串A	31.1	1.8	0.7	左4・右4	Ⅱ	SD18	1854
748	斎串A	33.1	2.0	0.2	左4・右4	Ⅱ	SD18	1920
749	斎串A	32.0	1.6	0.4	左1・右2	Ⅱ	SD18	1927
750	斎串A	37.0	1.8	0.4	左5・右2	Ⅱ	SD18	1928
751	斎串A	34.2	1.8	0.2	左2・右3	Ⅱ	SD18	3402
752	斎串A	(36.9)	1.8	0.5	左2・右2	Ⅱ	SD18	190
753	斎串A	29.4	2.0	0.3	左4・右3	Ⅱ	SD18	264

No.	器　種	長さ	幅	厚さ	備　考	区	出土遺構・層位	登録No.
754	斎串A	29.7	1.6	0.3	左2・右2	Ⅱ	SD18	245
755	斎串A	32.9	1.5	0.3	左3・右5	Ⅱ	SD18	263
756	斎串A	32.1	1.7	0.6	左1・右3	Ⅱ	SD18	244
757	斎串A	33.6	2.0	0.6	左4・右4	Ⅱ	SD18	3452
758	斎串A	39.1	1.9	0.3	左1・右1	Ⅱ	SD18	1799
759	斎串A	38.0	1.8	0.4	左3・右3	Ⅱ	SD18	1887
760	斎串A	41.8	2.0	0.8	左3・右3	Ⅱ	SD18	1917
761	斎串A	43.2	1.8	0.5	左3・右3	Ⅱ	SD18	1959
762	斎串A	39.5	1.8	0.4	左?・右2	Ⅱ	SD18	3789
763	斎串A	42.2	2.0	0.2	左4・右4	Ⅱ	SD18	3420
764	斎串A	39.3	2.0	0.5	左2・右2	Ⅱ	SD18	3793
765	斎串A	37.8	2.2	0.4	左4・右4	Ⅱ	SD18	1797
766	斎串A	38.4	2.4	0.3	左2・右2	Ⅱ	SD18	1800
767	斎串A	36.9	2.1	0.3	左4・右2	Ⅱ	SD18	1802
768	斎串A	40.2	2.3	0.1	左2・右1	Ⅱ	SD18	1803
769	斎串A	(37.3)	2.2	0.5	左?・右2	Ⅱ	SD18	3791
770	斎串A	40.4	1.8	0.4	左3・右3	Ⅱ	SD18	1812
771	斎串A	54.1	2.8	0.4	左3・右3	Ⅱ	SD18	3428
772	斎串A	51.0	2.1	0.3	左2・右2	Ⅱ	SD18	3429
773	斎串A	53.2	2.4	0.6	左2・右3	Ⅱ	SD18	465
774	斎串A	49.8	1.8	0.4	左3・右10	Ⅱ	SD18	3802
775	斎串A	50.5	1.9	0.4	左4・右4	Ⅱ	SD18	1921
776	斎串A	49.6	1.8	0.3	左2・右2	Ⅱ	SD18	1843
777	斎串A	(39.8)	1.9	0.5	左3・右2	Ⅱ	SD18	1882
778	斎串A	42.0	2.2	0.4	左2・右2	Ⅱ	SD18	3752
779	斎串A	(56.0)	2.1	0.3	左3・右3	Ⅱ	SD18	1949
780	斎串A	63.5	1.9	0.4	左2・右2	Ⅱ	SD18	887
781	斎串A	(19.0)	3.5	0.5	左?・右?	Ⅱ	SD18	3278
782	斎串A	24.9	1.4	0.6	左1・右3	Ⅱ	SD18	62
783	斎串A	26.1	1.7	0.4	左2・右2	Ⅱ	SD18	63
784	斎串A	28.7	1.8	0.2	左2・右1	Ⅱ	SD18	188
785	斎串A	28.6	1.4	0.4	左3・右3	Ⅱ	SD18	75
786	斎串A	41.5	2.5	0.5	左2・右2	Ⅱ	SD18	56
787	斎串A	40.4	2.4	0.4	左2・右4	Ⅱ	SD18	58
788	斎串A	42.9	2.2	0.3	左7・右4	Ⅱ	SD18	69
789	斎串A	(37.9)	1.9	0.6	左2・右3	Ⅱ	SD18	68
790	斎串A	36.9	2.4	0.3	左4・右4	Ⅱ	SD18	57
791	斎串A	37.5	2.4	0.4	左4	Ⅱ	SD18	66
792	斎串A	35.7	2.1	0.3	左3・右3	Ⅱ	SD18	261
793	斎串A	36.7	2.1	0.5	左4・右3	Ⅱ	SD18	256
794	斎串A	46.0	1.9	0.8	左3・右3	Ⅱ	SD18	250
795	斎串A	40.8	2.2	0.3	左2・右3	Ⅱ	SD18	64
796	斎串A	(31.7)	1.9	0.3	左3・右4	Ⅱ	SD18	242
797	斎串A	36.4	0.9	0.4	左3・右1	Ⅱ	SD18	258
798	斎串A	38.5	1.7	0.4	左1・右2	Ⅱ	SD18	262
799	斎串A	36.8	1.6	0.3	左2・右3	Ⅱ	SD18	70
800	斎串A	37.8	1.8	0.3	左3・右5	Ⅱ	SD18	259
801	斎串A	(32.8)	1.6	0.2	左4・右5	Ⅱ	SD18	71
802	斎串A	41.5	1.2	0.7	左4・右2	Ⅱ	SD18	253
803	斎串A	41.7	1.6	0.3	左2・右4	Ⅱ	SD18	249
804	斎串A	46.2	1.7	0.6	左2・右2	Ⅱ	SD18	248
805	斎串A	44.9	1.4	0.5	左2・右2	Ⅱ	SD18	257
806	斎串A	44.0	1.8	0.4	左2・右2	Ⅱ	SD18	247
807	斎串A	42.8	1.8	0.2	左2・右1	Ⅱ	SD18	141
808	斎串A	43.5	1.9	0.4	左3・右4	Ⅱ	SD18	55
809	斎串A	50.2	1.9	0.5	左1・右2	Ⅱ	SD18	260
810	斎串A	31.8	2.5	0.2	左4・右3	Ⅱ	SD18	3451
811	斎串A	31.1	2.6	0.2	左2・右2	Ⅱ	SD18	3792
812	斎串A	35.0	2.3	0.6	左4・右4	Ⅱ	SD18	3801
813	斎串A	36.1	2.5	0.6	左2・右2	Ⅱ	SD18	514
814	斎串A	41.5	2.9	0.7	左4・右2	Ⅱ	SD18	3849
815	斎串A	56.8	2.9	0.5	左2・右2	Ⅱ	SD18	1919
816	鍬?	(11.1)	(4.8)	1.6		Ⅱ	SD18	3866
817	板状材	6.8	3.0	0.3		Ⅱ	SD18	2661
818	用途不明	(18.1)	2.9	0.5		Ⅱ	SD18	3865
819	台状枠欄(釘+孔留)	(15.9)	(6.6)	2.7		Ⅱ	SD18	2806
820	作業台	22.8	7.0	3.2		Ⅱ	SD18	2788
821	板状材	(32.7)	(5.3)	1.2		Ⅱ	SD18	3464
822	舟形	39.5	3.3	2.1		Ⅱ	SD18	3869

No.	器　種	長さ	幅	厚さ	備　考	区	出土遺構・層位	登録No.
823	人形A	32.4	3.6	0.4	左2・右2	Ⅱ	SD18	2223
824	人形A	32.0	2.5	0.5	左1・右2	Ⅱ	SD18	3614
825	人形A	32.6	3.6	0.7	左2・右3	Ⅱ	SD18	2232
826	人形A	32.9	4.1	0.6	刻顔・左5・右4	Ⅱ	SD18	2345
827	人形A	(43.2)	3.2	0.3	左3・右3	Ⅱ	SD18	2280
828	人形A	70.5	3.1	0.7	刻顔・左3・右3	Ⅱ	SD18	2288
829	人形A	71.2	3.0	0.6	左3・右3	Ⅱ	SD18	3155
830	人形A	32.6	2.7	0.4	左4・右2	Ⅱ	SD18	3323
831	人形A	31.2	2.7	0.6	左2・右3	Ⅱ	SD18	3340
832	人形A	(28.7)	3.1	0.5	刻顔・左3・右3	Ⅱ	SD18	2285
833	人形A	(20.0)	2.4	0.3	左7・右4	Ⅱ	SD18	3373
834	人形A	27.7	1.8	0.4	左3・右1	Ⅱ	SD18	2239
835	人形A	17.9	2.5	0.5	左4・右4	Ⅱ	SD18	2253
836	人形A	(21.6)	2.1	0.4	左3・右3	Ⅱ	SD18	2234
837	人形A	22.2	1.5	0.2	左3・右2・839.840.856と接合	Ⅱ	SD18	2233
838	人形A	17.3	1.7	0.2	左2・右1	Ⅱ	SD18	2363
839	人形A	23.3	1.5	0.3	左3・右3・837.840.856と接合	Ⅱ	SD18	2228
840	人形A	23.1	1.9	0.4	左6・右2・837.839.856と接合	Ⅱ	SD18	3359
841	人形A	23.8	2.4	0.5	左3・右4	Ⅱ	SD18	3366
842	人形体部	(14.3)	1.8	0.4		Ⅱ	SD18	3381
843	人形A	32.0	2.5	0.4	左2・右2	Ⅱ	SD18	2281
844	人形A	32.2	2.7	0.2	左3・右2	Ⅱ	SD18	2282
845	人形A	30.0	2.5	0.3	左2・右2	Ⅱ	SD18	2222
846	人形A	30.0	2.8	0.4	左1・右2	Ⅱ	SD18	3616
847	人形A	30.1	2.6	0.2	左3・右3	Ⅱ	SD18	3615
848	人形A	29.9	2.8	0.3	左2・右2	Ⅱ	SD18	3600
849	人形A	29.5	2.9	0.3	左1・右1	Ⅱ	SD18	3613
850	人形A	29.9	2.8	0.4	左7・右10	Ⅱ	SD18	2235
851	人形A	(16.6)	2.4	0.5	左?・右?	Ⅱ	SD18	2267
852	人形A	33.6	3.0	0.4	刻顔・左2・右1	Ⅱ	SD18	2204
853	人形A	33.5	2.8	0.6	左2・右2	Ⅱ	SD18	3327
854	人形A体部	(24.8)	2.8	0.4	左7・右2	Ⅱ	SD18	2339
855	人形A	29.2	2.6	0.6	刻顔・左4・右4	Ⅱ	SD18	3364
856	人形A	30.3	2.7	0.2	左3・右2	Ⅱ	SD18	3379
857	人形A	30.0	2.7	0.5	左3・右4	Ⅱ	SD18	3365
858	人形A	(21.8)	2.6	0.6	左3・右5	Ⅱ	SD18	3371
859	人形A	30.9	2.3	0.7	左2・右2・839.840.840と接合	Ⅱ	SD18	2247
860	人形A	(17.8)	2.3	0.2	左1・右1	Ⅱ	SD18	2229
861	人形A	(18.1)	2.7	0.6	左1・右1	Ⅱ	SD18	2361
862	人形A	(14.7)	2.9	0.4	左1・右1	Ⅱ	SD18	2304
863	人形D	(14.7)	3.1	0.3	左2・右3	Ⅱ	SD18	3337
864	人形A	(17.9)	2.5	0.4	左?・右2	Ⅱ	SD18	3339
865	人形A	(20.6)	3.1	0.5	左1・右1	Ⅱ	SD18	3333
866	人形A	(19.8)	2.6	0.4	左3・右2	Ⅱ	SD18	3361
867	人形A	(25.3)	2.3	0.3	左2・右2	Ⅱ	SD18	3358
868	人形A	(18.7)	2.7	0.3	左3・右3	Ⅱ	SD18	3382
869	人形A	(9.9)	2.7	0.3	左?・右?	Ⅱ	SD18	3370
870	人形A	(16.1)	2.6	0.6	左2・右2	Ⅱ	SD18	3369
871	人形A	(18.4)	3.5	0.4	左?・右1	Ⅱ	SD18	2306
872	人形A	25.7	3.6	0.4	左2・右2	Ⅱ	SD18	2308
873	人形A	27.8	2.7	0.4	左4・右4	Ⅱ	SD18	3357
874	人形A	22.3	4.0	0.3	左1・右1	Ⅱ	SD18	2258
875	人形A	(20.6)	4.5	0.6	刻顔・左3・右2	Ⅱ	SD18	2284
876	人形A	(20.3)	5.0	0.7	左2・右2	Ⅱ	SD18	2231
877	人形A	25.5	4.8	0.4	左2・右2	Ⅱ	SD18	2221
878	人形A	34.4	3.6	0.6	左2・右1	Ⅱ	SD18	2227
879	人形A	26.0	3.8	0.6	左2・右2	Ⅱ	SD18	2240
880	人形A	25.8	2.8	1.1	左1・右1	Ⅱ	SD18	2220
881	人形A	(12.2)	3.2	0.3	左2・右?	Ⅱ	SD18	3659
882	人形A	26.1	3.5	0.6	左3・右3	Ⅱ	SD18	2271
883	人形A	(24.6)	2.1	0.7	左2・右2	Ⅱ	SD18	2131
884	人形A	(17.5)	1.8	0.3	左3・右2	Ⅱ	SD18	2230
885	人形A	(18.4)	2.2	0.6	左2・右2	Ⅱ	SD18	3367
886	人形A	(30.4)	2.4	0.8	左2・右2	Ⅱ	SD18	2266
887	人形A	(21.0)	2.2	0.6	左2・右4	Ⅱ	SD18	3326
888	人形A	(21.5)	2.6	0.2	左?・右?	Ⅱ	SD18	2226
889	人形A	(16.3)	3.0	0.4	左5・右?	Ⅱ	SD18	2270
890	人形A	(19.1)	3.3	0.3	左2・右?	Ⅱ	SD18	2141
891	人形A	(18.5)	2.8	0.8	左2・右4	Ⅱ	SD18	2140

No	器　種	長さ	幅	厚さ	備　　考	区	出土遺構・層位	登録No
892	人形A	21.5	2.9	0.7	左5・右7	Ⅱ	SD18	2130
893	人形A	24.3	3.1	0.5	左1・右3	Ⅱ	SD18	3368
894	人形A	26.2	3.4	0.3	左2・右2	Ⅱ	SD18	2121
895	人形A	36.6	2.9	0.5	左3・右6	Ⅱ	SD18	2193
896	人形A	(25.7)	4.6	0.6	左3・右?	Ⅱ	SD18	3338
897	人形A	31.3	5.1	0.7	左2・右2	Ⅱ	SD18	2310
898	人形A	32.4	2.1	0.5	左1・右1	Ⅱ	SD18	3643
899	人形A	29.4	2.6	0.4	刻顔・左3・右?	Ⅱ	SD18	2120
900	人形B	(31.3)	2.6	0.6	左1・右1	Ⅱ	SD18	2348
901	人形A	29.5	3.1	0.6	左3・右2	Ⅱ	SD18	2346
902	人形B	38.5	4.3	0.6	刻顔・左2・右2	Ⅱ	SD18	2347
903	人形F	32.0	3.6	0.5	刻顔・腰有・左2・右2	Ⅱ	SD18	3314
904	人形A	18.4	2.5	0.5	左3・右4	Ⅱ	SD18	3360
905	人形A	17.2	2.5	0.5	左2・右4	Ⅱ	SD18	3362
906	人形A	17.8	2.8	0.4	左2・右3	Ⅱ	SD18	3363
907	人形A	18.8	3.0	0.5	左2・右2	Ⅱ	SD18	3380
908	馬形A	32.0	4.1	0.4	脚4	Ⅱ	SD18	2401
909	馬形B	32.8	4.5	0.6	脚4	Ⅱ	SD18	3622
910	馬形B	18.5	2.5	0.5	脚3（腹1・側2）	Ⅱ	SD18	3472
911	馬形B	17.3	2.2	0.4	脚3（腹1・側2）	Ⅱ	SD18	3526
912	馬形B	17.5	1.9	0.5	脚2	Ⅱ	SD18	2512
913	馬形B	17.6	2.0	0.5	脚2	Ⅱ	SD18	2505
914	馬形B	17.6	2.1	0.6	脚2	Ⅱ	SD18	2583
915	馬形B	18.4	2.4	0.5	脚4	Ⅱ	SD18	2506
916	馬形B	18.2	3.1	0.8	脚4	Ⅱ	SD18	3619
917	馬形B	18.6	2.3	0.4	脚4	Ⅱ	SD18	3620
918	馬形B	17.3	2.2	0.4	脚4	Ⅱ	SD18	3612
919	馬形B	18.1	2.1	0.6	脚1？	Ⅱ	SD18	3611
920	馬形B	16.5	2.3	0.5	脚4	Ⅱ	SD18	2396
921	馬形A	16.3	2.1	0.9	脚4	Ⅱ	SD18	2556
922	馬形B	(16.8)	2.8	0.5	脚0	Ⅱ	SD18	3975
923	馬形B	18.3	2.4	0.6	脚3（腹1・側2）	Ⅱ	SD18	2585
924	馬形B	18.1	2.9	0.8	脚3（腹1・側2）	Ⅱ	SD18	3618
925	馬形B	18.1	2.6	0.6	脚1	Ⅱ	SD18	2389
926	馬形B	(8.3)	3.4	0.3	脚？	Ⅱ	SD18	2397
927	馬形B	24.5	2.7	0.6	脚4	Ⅱ	SD18	2399
928	馬形B	20.8	2.7	1.0	脚4	Ⅱ	SD18	2578
929	馬形B	20.3	2.9	0.7	脚4	Ⅱ	SD18	3608
930	馬形B	21.9	3.1	0.6	脚4	Ⅱ	SD18	2379
931	馬形B	21.6	3.2	0.4	脚1	Ⅱ	SD18	2380
932	馬形B	22.0	(2.6)	0.4	脚4？	Ⅱ	SD18	3467
933	馬形B	19.5	3.3	0.9	脚1	Ⅱ	SD18	3628
934	馬形B	23.0	5.0	0.5	脚1	Ⅱ	SD18	2566
935	馬形A	17.9	3.3	0.6	脚1・鬣4	Ⅱ	SD18	2557
936	馬形A	19.3	3.3	0.8	脚2	Ⅱ	SD18	4044
937	馬形B	26.0	3.2	1.0	脚4	Ⅱ	SD18	2431
938	馬形A	23.3	3.6	0.5	脚4	Ⅱ	SD18	2555
939	馬形B	19.2	3.3	0.4	脚4・鬣1	Ⅱ	SD18	2584
940	馬形B	19.4	4.4	0.6	脚1	Ⅱ	SD18	2528
941	馬形B	15.2	2.9	0.5	脚1	Ⅱ	SD18	2481
942	馬形B	18.1	3.6	0.4	脚2	Ⅱ	SD18	2427
943	馬形B	20.6	3.8	0.3	脚1	Ⅱ	SD18	2376
944	馬形B	17.9	3.1	0.5	脚1	Ⅱ	SD18	3512
945	馬形B	20.1	4.2	0.9	脚4	Ⅱ	SD18	3621
946	馬形B	17.8	3.7	0.9	脚2	Ⅱ	SD18	2393
947	馬形B	17.6	2.0	0.7	脚2	Ⅱ	SD18	2565
948	馬形B	17.3	3.0	0.7	脚1	Ⅱ	SD18	2392
949	馬形B	24.7	3.8	0.7	脚4	Ⅱ	SD18	2400
950	馬形B	22.5	3.5	0.6	脚4	Ⅱ	SD18	2572
951	馬形B	15.1	2.5	0.5	脚4	Ⅱ	SD18	2378
952	馬形A	21.4	3.6	0.8	脚4？	Ⅱ	SD18	3230
953	馬形A	19.2	3.2	0.5	脚1	Ⅱ	SD18	2552
954	馬形B	19.5	2.7	0.6	脚1	Ⅱ	SD18	3610
955	不明形代	10.1	3.0	0.3		Ⅱ	SD18	2651
956	刀形	23.0	1.4	0.2		Ⅱ	SD18	2650
957	刀形	23.4	1.4	0.3		Ⅱ	SD18	2649
958	特殊刀形	35.0	1.5	0.4	左2・右2	Ⅱ	SD18	555
959	特殊刀形	35.3	2.3	0.4	左3・右2	Ⅱ	SD18	543
960	特殊刀形	35.1	2.1	0.2	左3・右4	Ⅱ	SD18	556

No.	器　種	長さ	幅	厚さ	備　考	区	出土遺構・層位	登録No.
961	特殊刀形	37.5	1.9	0.6	左3・右2	Ⅱ	SD18	536
962	特殊刀形	35.4	1.6	0.3	左2・右2	Ⅱ	SD18	566
963	特殊刀形	34.2	2.2	0.3	左3・右3	Ⅱ	SD18	562
964	特殊刀形	35.3	1.7	0.6	左3・右3	Ⅱ	SD18	546
965	特殊刀形	36.1	2.1	0.6	左2・右2	Ⅱ	SD18	544
966	特殊刀形	37.3	1.9	0.4	左3・右2	Ⅱ	SD18	545
967	刀形	25.0	1.2	0.5		Ⅱ	SD18	2655
968	剣形?	(31.9)	2.2	0.3		Ⅱ	SD18	2653
969	斎串A	13.9	1.0	0.2	左3・右4	Ⅱ	SD18	975
970	斎串A	17.9	1.4	0.3	左3・右3	Ⅱ	SD18	214
971	斎串A	18.4	2.1	0.4	左2・右3	Ⅱ	SD18	213
972	斎串A	29.6	1.3	0.3	左1・右2	Ⅱ	SD18	550
973	斎串A	28.2	1.3	0.3	左4・右4	Ⅱ	SD18	1807
974	斎串A	28.2	1.5	0.4	左1・右4	Ⅱ	SD18	542
975	斎串A	28.5	1.0	0.5	左3・右2	Ⅱ	SD18	3634
976	斎串A	29.2	1.3	0.4	左4・右5	Ⅱ	SD18	46
977	斎串A	28.9	1.0	0.3	左1・右3	Ⅱ	SD18	3642
978	斎串A	30.0	1.1	0.4	左2・右2	Ⅱ	SD18	1809
979	斎串A	31.5	1.2	0.2	左2・右2	Ⅱ	SD18	3649
980	斎串A	28.6	1.5	0.5	左2・右2	Ⅱ	SD18	3623
981	斎串A	29.9	1.3	0.2	左3・右3	Ⅱ	SD18	3624
982	斎串A	30.0	1.5	0.2	左5・右5	Ⅱ	SD18	3440
983	斎串A	30.1	1.4	0.2	左3・右3	Ⅱ	SD18	434
984	斎串A	28.7	1.3	0.3	左3・右2	Ⅱ	SD18	499
985	斎串A	28.9	1.0	0.2	左1・右1	Ⅱ	SD18	3413
986	斎串A	29.5	1.4	0.4	左2・右3	Ⅱ	SD18	502
987	斎串A	30.3	1.4	0.2	左4・右4	Ⅱ	SD18	3409
988	斎串A	31.2	1.4	0.4	左4・右4	Ⅱ	SD18	3442
989	斎串A	28.4	1.1	0.2	左3・右3	Ⅱ	SD18	3393
990	斎串A	29.7	1.3	0.2	左5・右5	Ⅱ	SD18	3411
991	斎串A	28.7	1.4	0.2	左3・右4	Ⅱ	SD18	3403
992	斎串A	35.0	1.4	0.5	左3・右3	Ⅱ	SD18	1811
993	斎串A	34.5	1.4	0.5	左4・右3	Ⅱ	SD18	551
994	斎串A	34.3	1.5	0.4	左3・右3	Ⅱ	SD18	548
995	斎串A	33.2	1.7	0.2	左4・右3	Ⅱ	SD18	366
996	斎串A	37.4	1.4	0.5	左5・右2	Ⅱ	SD18	107
997	斎串A	36.3	1.5	0.3	左4・右5	Ⅱ	SD18	468
998	斎串A	39.9	1.7	0.4	左2・右2	Ⅱ	SD18	196
999	斎串A	35.4	1.4	0.3	左2・右2	Ⅱ	SD18	317
1000	斎串A	41.2	1.3	0.8	左?・右3	Ⅱ	SD18	208
1001	斎串A	41.8	1.0	0.4	左2・右2	Ⅱ	SD18	327
1002	斎串A	39.8	1.7	0.6	左3・右2	Ⅱ	SD18	303
1003	斎串A	32.9	1.6	0.3	左3・右3	Ⅱ	SD18	310
1004	斎串A	36.8	1.1	0.5	左2・右2	Ⅱ	SD18	306
1005	斎串A	37.1	1.2	0.5	左1・右2	Ⅱ	SD18	455
1006	斎串A	36.5	1.5	0.2	左4・右4	Ⅱ	SD18	1906
1007	斎串A	39.1	1.4	0.3	左3・右1	Ⅱ	SD18	924
1008	斎串A	48.8	1.4	0.2	左2・右2	Ⅱ	SD18	522
1009	斎串A	49.6	1.6	0.5	左3・右3	Ⅱ	SD18	539
1010	斎串A	49.4	1.3	0.5	左2・右2	Ⅱ	SD18	547
1011	斎串A	49.9	1.3	0.4	左3・右3	Ⅱ	SD18	554
1012	斎串A	49.8	2.0	0.5	左1・右3	Ⅱ	SD18	110
1013	斎串A	50.4	1.6	0.4	左3・右1	Ⅱ	SD18	563
1014	斎串A	49.4	1.9	0.5	左3・右2	Ⅱ	SD18	537
1015	斎串A	49.2	1.4	0.2	左2・右3	Ⅱ	SD18	552
1016	斎串A	50.0	1.5	0.3	左3・右3	Ⅱ	SD18	3633
1017	斎串A	50.2	1.3	0.3	左2・右2	Ⅱ	SD18	3597
1018	斎串A	50.1	1.6	0.6	左3・右2	Ⅱ	SD18	3637
1019	斎串A	49.3	1.8	0.3	左3・右3	Ⅱ	SD18	3639
1020	斎串A	50.5	1.6	0.3	左2・右3	Ⅱ	SD18	3599
1021	斎串A	49.0	1.5	0.2	左5・右4	Ⅱ	SD18	3631
1022	斎串A	47.4	1.5	0.3	左3・右2	Ⅱ	SD18	3629
1023	斎串A	49.9	1.4	0.3	左2・右2	Ⅱ	SD18	3630
1024	斎串A	49.4	1.3	0.3	左3・右3	Ⅱ	SD18	3627
1025	斎串A	21.9	1.7	0.3	左1・右2	Ⅱ	SD18	316
1026	斎串A	27.8	1.7	0.3	左2・右4	Ⅱ	SD18	564
1027	斎串A	31.8	1.9	0.6	左2・右2	Ⅱ	SD18	3658
1028	斎串A	29.4	1.6	0.2	左5・右3	Ⅱ	SD18	3632
1029	斎串A	27.4	1.3	0.5	左4・右3	Ⅱ	SD18	3660

No.	器　種	長さ	幅	厚さ	備　考	区	出土遺構・層位	登録No.
1030	斎串A	28.8	1.6	0.3	左3・右3	Ⅱ	SD18	3646
1031	斎串A	27.6	1.7	0.1	左2・右2	Ⅱ	SD18	3626
1032	斎串A	29.7	1.5	0.3	左1・右1	Ⅱ	SD18	3625
1033	斎串A	29.6	1.5	0.5	左5・右3	Ⅱ	SD18	3651
1034	斎串A	29.2	1.6	0.4	左2・右4	Ⅱ	SD18	1923
1035	斎串A	26.9	1.1	0.3	左1・右1	Ⅱ	SD18	3657
1036	斎串A	31.9	1.8	0.5	左3・右4	Ⅱ	SD18	3652
1037	斎串A	27.6	1.7	0.3	左3・右4	Ⅱ	SD18	3653
1038	斎串A	28.4	1.5	0.4	左3・右5	Ⅱ	SD18	3650
1039	斎串A	32.3	2.0	0.7	左4・右4	Ⅱ	SD18	106
1040	斎串A	34.8	1.7	0.3	左4・右5	Ⅱ	SD18	1839
1041	斎串A	27.9	1.9	0.4	左3・右2	Ⅱ	SD18	1992
1042	斎串A	27.4	1.7	0.2	左4・右3	Ⅱ	SD18	453
1043	斎串A	26.5	1.5	0.2	左4・右6	Ⅱ	SD18	3441
1044	斎串A	29.8	1.8	0.2	左4・右5	Ⅱ	SD18	3406
1045	斎串A	28.6	1.6	0.3	左5・右4	Ⅱ	SD18	3388
1046	斎串A	29.3	1.4	0.2	左3・右4	Ⅱ	SD18	3408
1047	斎串A	28.7	1.9	0.1	左2・右2	Ⅱ	SD18	481
1048	斎串A	27.1	1.7	0.2	左3・右4	Ⅱ	SD18	3391
1049	斎串A	27.3	1.6	0.2	左3・右4	Ⅱ	SD18	3394
1050	斎串A	29.0	1.8	0.3	左6・右6	Ⅱ	SD18	3395
1051	斎串A	28.2	1.4	0.2	左4・右3	Ⅱ	SD18	3417
1052	斎串A	29.7	1.6	0.3	左7・右8	Ⅱ	SD18	3443
1053	斎串A	30.7	1.5	0.3	左4・右4	Ⅱ	SD18	3407
1054	斎串A	49.6	1.8	0.2	左5・右3	Ⅱ	SD18	4048
1055	斎串A	49.7	1.4	0.2	左4・右3	Ⅱ	SD18	221
1056	斎串A	49.8	1.5	0.5	左1・右2	Ⅱ	SD18	3424
1057	斎串A	48.1	1.5	0.2	左3・右1	Ⅱ	SD18	3609
1058	斎串A	43.2	1.5	0.6	左3・右3	Ⅱ	SD18	430
1059	斎串A	49.6	1.9	0.3	左2・右2	Ⅱ	SD18	1913
1060	斎串A	49.3	1.9	0.4	左3・右3	Ⅱ	SD18	489
1061	斎串A	(47.3)	1.3	0.3	左3・右2	Ⅱ	SD18	3645
1062	斎串A	(44.6)	1.0	0.4	左3・右2	Ⅱ	SD18	3636
1063	斎串A	(51.6)	1.1	0.5	左2・右?	Ⅱ	SD18	88
1064	斎串A	52.5	1.0	0.4	左2・右2	Ⅱ	SD18	413
1065	斎串A	55.1	1.3	0.3	左3・右3	Ⅱ	SD18	109
1066	斎串A	61.4	1.7	0.3	左2・右2	Ⅱ	SD18	87
1067	斎串A	30.4	2.6	0.3	左4・右5	Ⅱ	SD18	1905
1068	斎串A	35.3	2.2	0.5	左4・右4	Ⅱ	SD18	559
1069	斎串A	34.2	1.9	0.5	左2・右?	Ⅱ	SD18	1975
1070	斎串A	36.9	1.7	0.3	左2・右7	Ⅱ	SD18	1993
1071	斎串A	36.1	2.4	0.6	左4・右8	Ⅱ	SD18	1991
1072	斎串A	34.2	2.1	0.2	左1・右2	Ⅱ	SD18	885
1073	斎串A	36.5	2.2	0.4	左2・右5	Ⅱ	SD18	1833
1074	斎串A	42.2	2.2	0.3	左2・右2	Ⅱ	SD18	3635
1075	斎串A	42.8	2.1	0.2	左1・右4	Ⅱ	SD18	1908
1076	斎串A	39.3	2.0	0.3	左3・右3	Ⅱ	SD18	320
1077	斎串A	42.0	1.8	0.3	左5・右4	Ⅱ	SD18	4050
1078	斎串A	38.0	2.0	0.6	左2・右2	Ⅱ	SD18	431
1079	斎串A	41.8	2.1	0.5	左2・右2	Ⅱ	SD18	870
1080	斎串A	(49.6)	2.2	0.4	左2・右2	Ⅱ	SD18	84
1081	斎串A	49.5	2.0	0.3	左3・右2	Ⅱ	SD18	553
1082	斎串A	49.3	2.4	0.4	左2・右2	Ⅱ	SD18	558
1083	斎串A	49.8	2.3	0.5	左3・右1	Ⅱ	SD18	565
1084	斎串A	50.1	2.2	0.3	左5・右1	Ⅱ	SD18	561
1085	斎串A	50.1	1.7	0.2	左2・右3	Ⅱ	SD18	1806
1086	斎串A	48.1	1.8	0.6	左3・右3	Ⅱ	SD18	519
1087	斎串A	48.4	1.9	0.6	左3・右3	Ⅱ	SD18	538
1088	斎串A	50.1	2.7	0.6	左9・右3	Ⅱ	SD18	1834
1089	斎串A	50.0	2.9	0.5	左5・右5	Ⅱ	SD18	3638
1090	斎串A	50.3	2.8	0.7	左3・右3	Ⅱ	SD18	3617
1091	斎串A	49.3	2.6	0.3	左2・右3	Ⅱ	SD18	3598
1092	斎串A	63.7	2.0	0.3	左3・右2	Ⅱ	SD18	305
1093	斎串A	61.5	2.1	0.4	左4・右5	Ⅱ	SD18	495
1094	斎串A	60.1	2.1	0.3	左3・右4	Ⅱ	SD18	91
1095	斎串A	49.2	2.6	0.5	左2・右4	Ⅱ	SD18	1907
1096	斎串A	56.2	1.2	0.8	左1・右2	Ⅱ	SD18	318
1097	斎串A	54.6	2.2	0.5	左1・右1	Ⅱ	SD18	105
1098	斎串A	54.5	2.9	0.6	左4・右4	Ⅱ	SD18	437

№	器　種	長さ	幅	厚さ	備　考	区	出土遺構・層位	登録№
1099	斎串A	47.3	2.1	0.2	左2・右3	Ⅱ	SD18	209
1100	斎串A	45.1	2.8	0.6	左5・右3	Ⅱ	SD18	1904
1101	斎串A	(42.4)	2.4	0.4	左4・右4	Ⅱ	SD18	3647
1102	斎串A？	(15.3)	2.5	0.6		Ⅱ	SD18	2029
1103	斎串E	(6.2)	1.3	0.3	左?・右?	Ⅱ	SD18	4036
1104	斎串E	31.0	1.4	0.3	左?・右?	Ⅱ	SD18	557
1105	斎串E	29.5	1.7	0.6	左?・右1	Ⅱ	SD18	3605
1106	斎串E	31.1	1.7	0.4	左?・右1	Ⅱ	SD18	3656
1107	斎串E	(27.2)	1.6	0.4	左?・右?	Ⅱ	SD18	780
1108	斎串E	35.4	2.0	0.2	左3・右1	Ⅱ	SD18	96
1109	斎串C1	(46.8)	0.8	0.7		Ⅱ	SD18	777
1110	斎串C2	14.8	0.5	0.4		Ⅱ	SD18	197
1111	斎串C2	15.2	0.6	0.4		Ⅱ	SD18	202
1112	斎串C2	19.8	0.8	0.6		Ⅱ	SD18	218
1113	斎串D	10.4	1.4	0.1	上0	Ⅱ	SD18	500
1114	斎串D	14.4	0.8	0.3	上0	Ⅱ	SD18	3604
1115	斎串D	13.3	0.8	0.2	上0	Ⅱ	SD18	212
1116	斎串D	15.2	1.2	0.3	上0	Ⅱ	SD18	2064
1117	斎串D	19.9	1.0	0.2	上0	Ⅱ	SD18	346
1118	斎串D	20.0	1.2	0.2	上0	Ⅱ	SD18	2067
1119	斎串D	17.9	1.0	0.2	上0	Ⅱ	SD18	2
1120	斎串D	12.9	0.9	0.3	上0	Ⅱ	SD18	48
1121	斎串D	13.1	0.9	0.2	上7	Ⅱ	SD18	2057
1122	斎串D	14.1	0.8	0.2	上6	Ⅱ	SD18	49
1123	斎串D	13.4	1.4	0.4	上7	Ⅱ	SD18	4058
1124	斎串D	13.4	1.1	0.6	上9	Ⅱ	SD18	446
1125	斎串D	14.4	1.6	0.3	上6	Ⅱ	SD18	527
1126	斎串D	14.3	1.4	0.2	上13	Ⅱ	SD18	2070
1127	斎串D	16.6	1.5	0.2	上3	Ⅱ	SD18	3606
1128	斎串D	16.6	1.1	0.3	上4	Ⅱ	SD18	3654
1129	斎串D	17.0	1.2	0.4	上7	Ⅱ	SD18	85
1130	斎串D	19.3	1.3	0.3	上7	Ⅱ	SD18	2069
1131	斎串D	17.2	1.7	0.2	上13	Ⅱ	SD18	2071
1132	斎串D	18.7	1.1	0.2	上7	Ⅱ	SD18	484
1133	斎串D	18.9	1.6	0.2	上10	Ⅱ	SD18	485
1134	斎串D	14.5	1.2	0.2	上10	Ⅱ	SD18	50
1135	斎串F	34.6	2.3	1.3		Ⅱ	SD18	211
1136	斎串F	(16.1)	1.7	0.9		Ⅱ	SD18	967
1137	斎串F	38.1	2.3	0.9		Ⅱ	SD18	823
1138	斎串F	(24.5)	1.7	1.1		Ⅱ	SD18	361
1139	斎串F	33.2	2.1	1.1		Ⅱ	SD18	815
1140	斎串F	(32.0)	1.7	0.5		Ⅱ	SD18	364
1141	斎串F	(25.2)	1.9	0.6		Ⅱ	SD18	814
1142	斎串F	(17.3)	2.1	0.7		Ⅱ	SD18	962
1143	斎串F	30.4	1.5	1.5		Ⅱ	SD18	966
1144	斎串F	(21.6)	1.8	0.6		Ⅱ	SD18	946
1145	斎串F	(28.6)	1.8	0.8		Ⅱ	SD18	390
1146	斎串F	(13.2)	1.7	0.5		Ⅱ	SD18	216
1147	斎串F	42.0	2.4	0.8		Ⅱ	SD18	81
1148	斎串F	(15.4)	1.5	0.7		Ⅱ	SD18	28
1149	斎串F	(20.4)	1.8			Ⅱ	SD18	3016
1150	斎串F	(24.0)	2.9	0.9		Ⅱ	SD18	820
1151	斎串F	(29.4)	2.7	0.8		Ⅱ	SD18	821
1152	斎串F	(25.1)	2.4	1.1		Ⅱ	SD18	2001
1153	斎串F	34.8	1.4	1.0		Ⅱ	SD18	826
1154	斎串F	(33.2)	2.6	1.1		Ⅱ	SD18	2911
1155	斎串F	(24.7)	2.3	1.2		Ⅱ	SD18	52
1156	斎串F	(14.7)	2.8	1.4		Ⅱ	SD18	487
1157	斎串F	(18.0)	2.2	0.9		Ⅱ	SD18	2891
1158	斎串F	(14.1)	2.7	1.0		Ⅱ	SD18	480
1159	斎串F	(32.4)	2.0	1.3		Ⅱ	SD18	2913
1160	斎串F	40.5	2.0	0.9		Ⅱ	SD18	483
1161	斎串F	(11.3)	2.4	1.0		Ⅱ	SD18	482
1162	斎串F	(26.3)	1.7	1.1		Ⅱ	SD18	827
1163	斎串F	35.7	1.7	1.1		Ⅱ	SD18	488
1164	斎串F	(21.6)	1.6	1.4		Ⅱ	SD18	479
1165	円形曲物底板(樺皮結合)	復径	19.0	0.6		Ⅱ	SD18	2700
1166	円形曲物側板(木釘結合)	径	15.4	5.4		Ⅱ	SD18	3531
1167	皿	径・高	28.0	1.7		Ⅱ	SD18	3534

No.	器　種	長さ	幅	厚さ	備　考	区	出土遺構・層位	登録No.
1168	箱	13.8	(5.5)	0.8		Ⅱ	SD18	2702
1169	籾掬い	23.4	(7.5)			Ⅱ	SD18	2701
1170	用途不明	(11.2)	1.4	0.4		Ⅱ	SD18	2666
1171	軸連結の板	26.3	2.6	0.8		Ⅱ	SD18	2662
1172	軸連結の板	24.8	2.6	0.6		Ⅱ	SD18	2660
1173	用途不明	21.4	2.0	0.4		Ⅱ	SD18	2656
1174	不明形代	21.0	4.7	0.4	多脚	Ⅱ	SD18	3250
1175	掛矢	50.0	9.4	8.3		Ⅱ	SD18	2789
1176	田下駄A(3孔)	30.3	(4.5)	1.3		Ⅱ	SD18	2845
1177	田下駄A(4欠)	(33.2)	7.5	1.7		Ⅱ	SD18	2812
1178	孔あきの板	50.2	10.5	1.3		Ⅱ	SD18	4056
1179	田下駄B(3孔・孔留)	39.5	(9.4)	1.5		Ⅱ	SD18	2811
1180	部材	31.9	8.0	2.2		Ⅱ	SD18	2849
1181	部材	(19.5)	5.2	1.4		Ⅱ	SD18	2844
1182	用途不明	67.0	2.0	2.1		Ⅱ	SD18	3156
1183	用途不明	(67.7)	4.1	0.9		Ⅱ	SD18	3152
1184	用途不明	17.7	6.5	(5.6)		Ⅱ	SD18	2787
1185	人形A	22.4	2.4	0.1	左1・右2	Ⅱ	SF03	2125
1186	人形A	25.7	2.9	0.3	左2・右2	Ⅱ	SF03	2154
1187	馬形B	(11.6)	2.8	0.4	脚？	Ⅱ	SF03	2486
1188	馬形B	22.7	2.5	0.4	脚2？(片側のみ？)	Ⅱ	SF03	2487
1189	斎串A	34.6	1.3	0.4	左4・右4	Ⅱ	SF03	1847
1190	斎串A	34.1	1.3	0.3	左3・右2	Ⅱ	SF03	1861
1191	斎串A	34.0	1.3	0.3	左3・右3	Ⅱ	SF03	1849
1192	斎串A	34.4	1.5	0.3	左4・右2	Ⅱ	SF03	1867
1193	斎串A	31.5	2.2	0.2	左5・右5	Ⅱ	SF03	1863
1194	斎串A	34.7	2.3	0.3	左1・右3	Ⅱ	SF03	865
1195	斎串A	38.3	2.2	0.4	左2・右2	Ⅱ	SF03	1862
1196	斎串A	37.1	2.4	0.3	左2・右3	Ⅱ	SF03	1859
1197	斎串A	37.3	2.3	0.3	左2・右?	Ⅱ	SF03	1850
1198	斎串A	37.3	1.7	0.4	左2・右2	Ⅱ	SF03	1865
1199	斎串A	36.8	1.7	0.4	左2・右2	Ⅱ	SF03	1864
1200	斎串A	38.0	1.0	0.5	左3・右3	Ⅱ	SF03	1866
1201	斎串A	36.4	1.3	0.4	左3・右3	Ⅱ	SF03	1848
1202	斎串A	36.8	1.0	0.3	左1・右1	Ⅱ	SF03	1874
1203	斎串A	36.6	1.1	0.2	左2・右2	Ⅱ	SF03	1857
1204	斎串A	36.3	1.4	0.2	左3・右4	Ⅱ	SF03	1858
1205	斎串A	36.3	1.4	0.3	左2・右4	Ⅱ	SF03	1860
1206	斎串A	38.2	1.4	0.3	左3・右2	Ⅱ	SF03	1855
1207	斎串A	37.3	1.4	0.2	左2・右2	Ⅱ	SF03	1856
1208	斎串C2	17.7	0.5	0.3		Ⅱ	SF03	2109
1209	人形A	25.6	2.9	0.5	左2・右2	Ⅱ	SF03	2152
1210	斎串A	(27.5)	1.2	0.3	左2・右2	Ⅱ	SF03	1875
1211	斎串A	34.3	1.7	0.4	左1・右3	Ⅱ	SF03	1958
1212	斎串A	38.1	1.4	0.5	左2・右2	Ⅱ	SF03	1964
1213	斎串A	37.1	1.2	0.5	左3・右2	Ⅱ	SF03	1914
1214	斎串A	36.0	2.4	0.4	左3・右2	Ⅱ	SF03	1963
1215	人形A	30.8	2.9	0.7	左2・右3	Ⅱ	SF03	2278
1216	人形A	34.8	2.6	0.7	左4・右2	Ⅱ	SF03	2275
1217	馬形B	22.6	3.1	0.4	脚1	Ⅱ	SF03	2491
1218	人形A	25.8	2.5	0.3	左2・右?	Ⅱ	SF03	2158
1219	人形A	25.6	2.5	0.2	左3・右2	Ⅱ	SF03	2274
1220	馬形B	23.5	2.8	0.5	脚2	Ⅱ	SF03	2490
1221	人形A	(15.8)	2.0	0.2	左1・右1	Ⅱ	SF03	2367
1222	人形D	(22.0)	3.4	0.5	左2・右4	Ⅱ	SF03	2157
1223	人形A	(13.5)	4.0	0.4	左?・右?	Ⅱ	SF03	2273
1224	人形A	32.0	3.0	0.4	左3・右4	Ⅱ	SF03	2279
1225	人形A	(20.4)	(2.6)	0.5	左4・右?	Ⅱ	SF03	2124
1226	馬形B	23.9	2.8	0.3	脚2	Ⅱ	SF03	2446
1227	人形脚	(11.2)	0.9	0.5		Ⅱ	SF03	369
1228	斎串A	39.9	1.9	0.5	左5・右3	Ⅱ	SF03	4059
1229	斎串A	41.4	1.9	0.3	左4・右3	Ⅱ	SF03	4060
1230	田下駄A(4欠)	42.5	11.6	1.6		Ⅱ	SF03	2809
1231	人形A	32.5	3.5	0.6	左4・右3	Ⅱ	SF03	2212
1232	馬形B	14.0	2.8	0.6	脚1	Ⅱ	SF03	2543
1233	馬形B	16.7	2.0	0.7	脚2？	Ⅱ	SF03	2598
1234	馬形B	23.7	2.9	0.5	脚1	Ⅱ	SF03	2540
1235	馬形B	(18.2)	1.8	0.4	脚1	Ⅱ	SF03	2544
1236	人形A	20.3	2.6	0.6	左3・右3	Ⅱ	SF03	2214

№	器　種	長さ	幅	厚さ	備　考	区	出土遺構・層位	登録№
1237	人形A	(18.0)	1.9	0.4	左1・右1	Ⅱ	SF03	2237
1238	人形A	(18.1)	3.4	0.3	左2・右2	Ⅱ	SF03	2370
1239	人形A	(21.8)	2.8	0.2	左?・右?	Ⅱ	SF03	2261
1240	人形A	22.3	1.8	0.4	左2・右2	Ⅱ	SF03	2366
1241	人形A	23.1	1.8	0.4	左2・右2	Ⅱ	SF03	2207
1242	人形D	(21.4)	2.5	0.7	左2・右3	Ⅱ	SF03	2371
1243	人形F	26.0	2.9	0.7	刻顔・左4・右5	Ⅱ	SF03	2340
1244	人形F	25.4	2.1	0.5	左3・右1	Ⅱ	SF03	2341
1245	人形A	(14.5)	2.3	0.2	左3・右3	Ⅱ	SF03	2241
1246	人形A	21.1	1.7	0.5	左2・右2	Ⅱ	SF03	2146
1247	人形A	22.0	2.2	0.4	左2・右2	Ⅱ	SF03	2145
1248	人形A	23.1	1.9	0.2	左3・右2	Ⅱ	SF03	2148
1249	人形A	(14.2)	2.9	0.4	左2・右3	Ⅱ	SF03	3275
1250	不明形代	14.8	1.8	0.5	かせ様	Ⅱ	SF03	2434
1251	馬形B	15.6	2.0	0.4	脚4	Ⅱ	SF03	2521
1252	馬形B	24.5	2.1	0.6	脚1	Ⅱ	SF03	3522
1253	馬形B	20.3	2.3	0.8	脚4	Ⅱ	SF03	2567
1254	馬形B	19.7	1.6	0.5	脚2	Ⅱ	SF03	2571
1255	馬形B	19.7	1.8	0.6	脚2	Ⅱ	SF03	2570
1256	馬形B	18.0	3.3	0.8	脚5（腹1・側4）	Ⅱ	SF03	3487
1257	馬形B	20.4	4.1	0.9	脚4？	Ⅱ	SF03	3529
1258	馬形B	19.8	2.9	0.5	脚4	Ⅱ	SF03	3521
1259	馬形B	28.3	3.3	0.5	脚4	Ⅱ	SF03	2569
1260	馬形B	26.5	3.4	0.8	脚4	Ⅱ	SF03	2568
1261	馬形B	17.5	2.2	1.2	脚4	Ⅱ	SF03	3511
1262	馬形B	19.8	3.4	0.8	脚4	Ⅱ	SF03	3518
1263	馬形B	14.8	1.8	0.4	脚1	Ⅱ	SF03	4046
1264	馬形B	20.0	3.1	0.6	脚4	Ⅱ	SF03	2589
1265	馬形B	16.3	2.5	0.6	脚1	Ⅱ	SF03	3216
1266	馬形B	17.7	2.9	0.4	脚1	Ⅱ	SF03	2493
1267	馬形B	19.5	3.4	0.3	脚1	Ⅱ	SF03	2562
1268	馬形B	26.9	2.9	0.7	脚4	Ⅱ	SF03	2573
1269	馬形B	17.6	3.0	0.5	脚1	Ⅱ	SF03	2485
1270	馬形B	17.2	2.3	0.5	脚1	Ⅱ	SF03	3505
1271	馬形B	19.5	3.8	0.7	脚1・鬣1	Ⅱ	SF03	3519
1272	馬形B	17.6	2.9	0.6	脚1・鬣2	Ⅱ	SF03	2483
1273	馬形B	18.1	2.4	0.6	脚1・鬣2	Ⅱ	SF03	2488
1274	馬形B	18.1	2.9	0.6	脚1・鬣6	Ⅱ	SF03	2484
1275	斎串A	27.6	1.8	0.2	左4・右5	Ⅱ	SF03	937
1276	斎串A	29.2	1.7	0.4	左5・右4	Ⅱ	SF03	935
1277	斎串A	27.4	1.8	0.6	左?・右3	Ⅱ	SF03	939
1278	斎串A	29.2	1.7	0.3	左1・右1	Ⅱ	SF03	1950
1279	斎串A	31.7	1.5	0.2	左4・右3	Ⅱ	SF03	19
1280	斎串A	31.7	1.4	0.3	左4・右4	Ⅱ	SF03	940
1281	斎串A	32.2	1.7	0.5	左2・右3	Ⅱ	SF03	941
1282	斎串A	33.0	2.0	0.2	左2・右3	Ⅱ	SF03	139
1283	斎串A	32.9	0.6	0.2	左2・右2	Ⅱ	SF03	9
1284	斎串A	34.8	0.6	0.2	左1・右3	Ⅱ	SF03	12
1285	斎串A	47.4	2.0	0.3	左5・右3	Ⅱ	SF03	1872
1286	斎串A	39.8	2.1	0.3	左2・右2	Ⅱ	SF03	18
1287	斎串A	33.0	1.5	0.2	左3・右2	Ⅱ	SF03	1828
1288	斎串A	33.7	1.5	0.3	左1・右3	Ⅱ	SF03	1870
1289	斎串A	37.6	1.4	0.2	左4・右7	Ⅱ	SF03	1868
1290	斎串A	35.3	1.8	0.3	左5・右4	Ⅱ	SF03	936
1291	斎串A	35.5	1.5	0.4	左5・右2	Ⅱ	SF03	938
1292	斎串A	36.5	1.5	0.2	左3・右2	Ⅱ	SF03	1951
1293	斎串A	(24.7)	1.6	0.7	左2・右?	Ⅱ	SF03	3281
1294	斎串A	(17.4)	1.5	0.3	左1・右2	Ⅱ	SF03	3280
1295	斎串D	14.4	1.5	0.4	上0	Ⅱ	SF03	138
1296	斎串D	13.3	1.7	0.3	上12	Ⅱ	SF03	2068
1297	斎串D	29.4	2.9	0.4	上?	Ⅱ	SF03	2659
1298	斎串D	16.8	1.7	0.2	上10	Ⅱ	SF03	2077
1299	斎串F	(15.0)	1.8	1.8		Ⅱ	SF03	2016
1300	斎串C2	20.0	0.7	0.3		Ⅱ	SF03	779
1301	斎串C2	19.9	0.8	0.5		Ⅱ	SF03	789
1302	円形曲物底板	径	15.5	0.8		Ⅱ	SF03	2695
1303	円形曲物底板	径	19.2	1.1		Ⅱ	SF03	3254
1304	紐かけのある棒状材	(63.5)	4.5	2.5		Ⅱ	SF03	3154
1305	人形A	(18.4)	2.9	0.7	左2・右1	Ⅱ	SF03	4053

No.	器　種	長さ	幅	厚さ	備　考	区	出土遺構・層位	登録No.
1306	人形B	(27.4)	2.5	0.9	左2・右3	Ⅱ	SF03	3200
1307	人形D	31.9	4.0	0.6	腰有・左4・右5	Ⅱ	SF03	4054
1308	斎串A？	(29.8)	1.8	0.2	左2・右1	Ⅱ	SF03	377
1309	馬形B	18.3	2.5	0.4	脚1	Ⅱ	SF03	3222
1310	馬形C	24.2	3.0	0.5	脚0	Ⅱ	SF03	2574
1311	馬形B	20.0	4.4	0.8	脚5？(腹1？・側4)	Ⅱ	SF03	3217
1312	馬形B	23.6	3.4	0.5	脚1	Ⅱ	SF03	3220
1313	馬形B	(21.0)	2.7	0.6	脚4	Ⅱ	SF03	2404
1314	馬形A	26.0	3.4	0.6	脚4？	Ⅱ	SF03	3221
1315	斎串A	69.0	1.4	0.2	左2・右2	Ⅱ	SF03	379
1316	斎串A	39.9	1.8	0.3	左5・右5	Ⅱ	SF03	3138
1317	斎串A	40.0	2.5	0.6	左3・右4	Ⅱ	SF03	921
1318	斎串A	19.6	1.3	0.3	左1・右1	Ⅱ	SF03	3233
1319	斎串D	14.2	1.0	0.2	上0	Ⅱ	SF03	3829
1320	斎串D	12.6	0.9	0.1	上0	Ⅱ	SF03	2082
1321	斎串F	(15.5)	2.2	0.7		Ⅱ	SF03	2054
1322	人形A	23.5	2.2	0.3	左1・右?	Ⅱ	SF03	2119
1323	人形A	25.8	2.7	0.3	左2・右2	Ⅱ	SF03	2118
1324	人形A	21.6	2.7	0.5	左2・右2	Ⅱ	SF03	2135
1325	人形A	28.1	2.9	0.5	左3・右2	Ⅱ	SF03	2115
1326	人形A	27.3	3.2	0.8	左2・右2	Ⅱ	SF03	2139
1327	人形A	26.2	4.2	0.6	左3・右4	Ⅱ	SF03	2201
1328	人形A	(19.2)	3.0	0.5	左2・右3	Ⅱ	SF03	2133
1329	人形A	25.5	3.5	0.4	左2・右2	Ⅱ	SF03	2136
1330	人形A	27.2	3.4	0.8	左7・右2	Ⅱ	SF03	2122
1331	人形A	27.0	2.5	0.3	左2・右2	Ⅱ	SF03	2123
1332	人形A	(28.1)	2.4	0.4	左2・右1	Ⅱ	SF03	2217
1333	人形A	26.6	2.2	0.5	左2・右2	Ⅱ	SF03	2182
1334	人形A	28.2	4.5	0.6	左7・右3	Ⅱ	SF03	2200
1335	人形A	33.7	3.8	0.8	左2・右2	Ⅱ	SF03	2192
1336	人形A	27.4	2.1	0.4	左1・右2	Ⅱ	SF03	2202
1337	人形A	37.6	2.1	0.4	左1・右2	Ⅱ	SF03	2194
1338	人形A	21.5	(2.9)	0.5	左3・右?	Ⅱ	SF03	2126
1339	人形A	25.5	2.8	0.3	左2・右3	Ⅱ	SF03	2137
1340	人形A	(21.4)	3.8	0.8	左2・右2	Ⅱ	SF03	2144
1341	人形A	23.4	2.3	0.3	左3・右3	Ⅱ	SF03	2277
1342	人形A	22.3	2.4	0.6	左2・右2	Ⅱ	SF03	2276
1343	馬形B	23.8	2.9	0.4	脚1	Ⅱ	SF03	2395
1344	馬形B	24.3	2.3	0.8	脚4	Ⅱ	SF03	2455
1345	馬形B	21.7	3.3	0.5	脚4	Ⅱ	SF03	2442
1346	馬形B	18.7	3.0	0.5	脚4	Ⅱ	SF03	2448
1347	馬形B	22.2	3.0	0.9	脚4	Ⅱ	SF03	2441
1348	馬形B	21.2	2.8	0.9	脚4	Ⅱ	SF03	2432
1349	馬形B	20.3	2.6	0.6	脚4	Ⅱ	SF03	2438
1350	馬形B	22.4	3.0	0.5	脚4	Ⅱ	SF03	2436
1351	馬形B	22.9	3.0	0.5	脚4	Ⅱ	SF03	2439
1352	馬形B	18.2	2.8	0.6	脚1	Ⅱ	SF03	2391
1353	馬形B	16.9	3.2	0.3	脚1	Ⅱ	SF03	2423
1354	馬形B	(9.1)	2.9	0.6	脚1？	Ⅱ	SF03	2385
1355	馬形B	19.8	3.2	0.5	脚4・鬣5	Ⅱ	SF03	2390
1356	馬形B	18.9	3.2	0.5	脚1	Ⅱ	SF03	2387
1357	馬形B	20.7	2.8	0.7	脚1	Ⅱ	SF03	2504
1358	馬形B	(18.2)	3.0	0.4	脚1	Ⅱ	SF03	2414
1359	馬形B	15.2	2.4	0.3	脚1	Ⅱ	SF03	2511
1360	馬形B	13.7	2.0	0.4	脚1	Ⅱ	SF03	2394
1361	馬形B	17.7	2.5	0.6	脚1	Ⅱ	SF03	2435
1362	馬形B	16.6	2.4	0.6	脚1	Ⅱ	SF03	2417
1363	馬形B	25.4	2.9	0.7	脚4	Ⅱ	SF03	2388
1364	馬形B	16.7	3.7	0.7	脚4	Ⅱ	SF03	2440
1365	斎串A	55.0	0.9	0.3	左2・右2	Ⅱ	SF03	158
1366	斎串A	56.0	1.4	0.2	左2・右1	Ⅱ	SF03	156
1367	斎串A	57.3	1.4	0.3	左1・右1	Ⅱ	SF03	164
1368	斎串A	58.0	1.7	0.3	左2・右?	Ⅱ	SF03	166
1369	斎串A	56.3	1.5	0.3	左2・右2	Ⅱ	SF03	159
1370	斎串A	(45.5)	1.0	0.4	左2・右2	Ⅱ	SF03	157
1371	斎串A	41.3	1.1	0.5	左1・右2	Ⅱ	SF03	165
1372	斎串A	(15.0)	0.9	0.4	左4・右2	Ⅱ	SF03	160
1373	斎串？	(28.2)	2.9	0.7		Ⅱ	SF03	664
1374	斎串A	30.7	0.9	0.2	左1・右3	Ⅱ	SF03	175

No.	器　種	長さ	幅	厚さ	備　考	区	出土遺構・層位	登録No.
1375	斎串A	31.1	0.9	0.3	左1・右1	Ⅱ	SF03	180
1376	斎串A	29.4	1.7	0.3	左4・右4	Ⅱ	SF03	181
1377	斎串A	30.9	1.6	0.2	左4・右4	Ⅱ	SF03	178
1378	斎串A	30.4	1.5	0.5	左2・右3	Ⅱ	SF03	917
1379	斎串A	30.6	1.1	0.3	左3・右7	Ⅱ	SF03	919
1380	斎串A	31.3	2.1	0.2	左1・右1	Ⅱ	SF03	910
1381	斎串A	29.5	2.1	0.2	左3・右2	Ⅱ	SF03	909
1382	斎串A	29.8	2.2	0.5	左3・右2	Ⅱ	SF03	154
1383	斎串A	25.5	1.9	0.2	左3・右6	Ⅱ	SF03	907
1384	斎串A	43.8	2.2	0.5	左2・右2	Ⅱ	SF03	144
1385	斎串A	43.9	2.4	0.5	左2・右4	Ⅱ	SF03	153
1386	斎串A	39.7	2.2	0.3	左3・右4	Ⅱ	SF03	149
1387	斎串A	41.0	2.5	0.4	左4・右3	Ⅱ	SF03	150
1388	斎串A	40.1	2.1	0.6	左2・右2	Ⅱ	SF03	194
1389	斎串A	37.5	2.0	0.4	左2・右4	Ⅱ	SF03	871
1390	斎串A	36.8	1.5	0.3	左3・右5	Ⅱ	SF03	1808
1391	斎串A	34.8	1.7	0.2	左4・右4	Ⅱ	SF03	177
1392	斎串A	36.0	1.7	0.4	左2・右2	Ⅱ	SF03	176
1393	斎串A	30.0	2.9	0.5	左6・右4	Ⅱ	SF03	918
1394	斎串A	31.6	2.8	0.3	左3・右6	Ⅱ	SF03	872
1395	斎串A	36.9	2.6	0.4	左2・右2	Ⅱ	SF03	148
1396	斎串E	(22.0)	2.6	0.3	左?	Ⅱ	SF03	835
1397	斎串D	(12.3)	1.9	0.4	上0	Ⅱ	SF03	286
1398	斎串D	(17.3)	1.1	0.6	上0	Ⅱ	SF03	289
1399	斎串D	15.0	1.4	0.4	上0	Ⅱ	SF03	292
1400	斎串D	15.5	1.5	0.4	上1	Ⅱ	SF03	293
1401	斎串D	17.0	1.1	0.4	上0	Ⅱ	SF03	296
1402	斎串D	15.7	1.2	0.5	上3	Ⅱ	SF03	146
1403	斎串D	16.9	1.3	0.6	上0	Ⅱ	SF03	793
1404	斎串D	16.1	1.7	0.4	上1	Ⅱ	SF03	796
1405	斎串D	16.9	1.5	0.2	上3	Ⅱ	SF03	797
1406	斎串C2	15.5	1.3	0.4		Ⅱ	SF03	690
1407	斎串C2	(15.4)	0.8	0.6		Ⅱ	SF03	691
1408	斎串C2	14.3	0.9	0.8		Ⅱ	SF03	681
1409	斎串C2	15.6	0.6	0.6		Ⅱ	SF03	778
1410	斎串C2	15.2	0.8	0.7		Ⅱ	SF03	689
1411	斎串C2	12.2	0.6	0.5		Ⅱ	SF03	786
1412	斎串C2	(13.3)	0.6	0.7		Ⅱ	SF03	682
1413	斎串C2	(14.0)	0.7	0.7		Ⅱ	SF03	683
1414	斎串C2	14.9	0.6	0.6		Ⅱ	SF03	785
1415	斎串C？	11.2	0.7	0.6		Ⅱ	SF03	699
1416	斎串C2	11.6	0.6	0.5		Ⅱ	SF03	698
1417	斎串D	11.4	0.9	0.3	上0	Ⅱ	SF03	794
1418	斎串C2	15.9	0.8	0.5		Ⅱ	SF03	697
1419	斎串C2	(10.0)	0.9	0.3		Ⅱ	SF03	3100
1420	斎串C2	23.1	0.5	0.5		Ⅱ	SF03	155
1421	斎串F	(13.1)	1.8	0.7		Ⅱ	SF03	818
1422	斎串F	(12.2)	1.5	0.7		Ⅱ	SF03	822
1423	斎串F	(19.0)	2.3	0.8		Ⅱ	SF03	829
1424	斎串C2	14.5	0.6	0.6		Ⅱ	SF03	287
1425	斎串C2	(15.6)	0.9	0.7		Ⅱ	SF03	290
1426	斎串C2	(15.2)	0.9	0.4		Ⅱ	SF03	285
1427	斎串C2	13.8	0.4	0.4		Ⅱ	SF03	283
1428	斎串F	44.5	1.9	0.9		Ⅱ	SF03	830
1429	斎串F	(15.3)	1.7	0.6		Ⅱ	SF03	816
1430	斎串F	(17.0)	1.7	0.6		Ⅱ	SF03	828
1431	紡錘車形	2.7	2.3	0.3		Ⅱ	SF03	2664
1432	板状材	26.5	2.9	0.8		Ⅱ	SF03	2652
1433	出ト駄B(3孔・孔留)	30.3	10.7	2.2	結合孔は縦並び	Ⅱ	SF03	2808
1434	人形C？	32.9	3.6	0.2	左?・右?	Ⅱ	SF02	4039
1435	人形A	(28.4)	2.5	0.6	刻顔・左3・右2	Ⅱ	SF02	2265
1436	人形A	27.6	3.3	0.4	左4・右4	Ⅱ	SF02	2264
1437	人形A	27.5	3.2	0.4	刻顔・左2・右4	Ⅱ	SF02	2259
1438	人形C？	(24.8)	3.6	0.3	左?・右?	Ⅱ	SF02	4040
1439	人形A体部	(21.2)	(1.3)	0.2	左5・右?	Ⅱ	SF02	2669
1440	人形A	(17.6)	2.0	0.5	左1・右3	Ⅱ	SF02	2359
1441	人形A	16.4	1.4	0.3	左2・右2	Ⅱ	SF02	2358
1442	人形A	22.3	2.3	0.3	左2・右2	Ⅱ	SF02	4051
1443	人形D	(6.7)	2.8	0.2	左?・右?	Ⅱ	SF02	3272

No.	器　種	長さ	幅	厚さ	備　考	区	出土遺構・層位	登録No.
1444	馬形B	14.7	2.3	0.5	脚1	Ⅱ	SF02	2546
1445	馬形B	(15.5)	2.2	0.5	脚4	Ⅱ	SF02	3277
1446	馬形B	(18.7)	2.1	0.2	脚0	Ⅱ	SF02	3276
1447	馬形B	19.0	2.1	0.5	脚0	Ⅱ	SF02	2586
1448	馬形B	20.8	2.2	0.5	脚4	Ⅱ	SF02	3523
1449	馬形B	20.5	3.2	0.5	脚4	Ⅱ	SF02	2471
1450	馬形B	20.6	3.2	0.3	脚4	Ⅱ	SF02	2472
1451	馬形B	18.8	2.6	0.7	脚1	Ⅱ	SF02	2518
1452	馬形B	20.0	2.6	0.6	脚4	Ⅱ	SF02	2476
1453	馬形B	23.5	2.9	0.5	脚2？	Ⅱ	SF02	2474
1454	馬形B	11.7	1.7	0.4	脚1	Ⅱ	SF02	2510
1455	馬形B	(17.3)	2.6	0.6	脚1	Ⅱ	SF02	2462
1456	馬形B	16.2	2.9	0.4	脚1	Ⅱ	SF02	2515
1457	馬形B	20.5	3.6	0.6	脚1	Ⅱ	SF02	2508
1458	馬形B	19.1	3.7	0.5	脚4	Ⅱ	SF02	2475
1459	馬形B	18.5	3.7	0.8	脚4	Ⅱ	SF02	2419
1460	馬形B	23.7	3.9	0.4	脚4	Ⅱ	SF02	2513
1461	馬形B	23.0	3.6	0.7	脚4	Ⅱ	SF02	2470
1462	馬形B	20.1	4.9	0.7	脚1・鬣2	Ⅱ	SF02	2473
1463	舟形	33.5	3.9	2.0		Ⅱ	SF02	2674
1464	特殊刀形	(11.3)	1.7	0.2		Ⅱ	SF02	2676
1465	鋤形	12.5	1.6	0.3		Ⅱ	SF02	3248
1466	斎串C2	15.1	0.6	0.4		Ⅱ	SF02	864
1467	斎串C2	13.5	0.6	0.3		Ⅱ	SF02	3900
1468	斎串D	14.2	0.9	0.2	上0	Ⅱ	SF02	2079
1469	斎串D	17.4	1.1	0.2	上7	Ⅱ	SF02	2078
1470	斎串D	15.7	1.3	0.2	上6	Ⅱ	SF02	2080
1471	斎串D	15.6	1.3	0.4	上3	Ⅱ	SF02	2060
1472	斎串D	13.9	0.5	0.4	上4	Ⅱ	SF02	2061
1473	斎串A	49.6	1.3	0.4	左3・右3	Ⅱ	SF02	1892
1474	斎串A	(52.0)	1.6	0.6	左1・右4	Ⅱ	SF02	1925
1475	斎串A	46.1	2.3	0.7	左3・右3	Ⅱ	SF02	1931
1476	斎串A	49.4	1.2	0.2	左1・右3	Ⅱ	SF02	1936
1477	斎串A	50.0	1.9	0.7	左3・右3	Ⅱ	SF02	1926
1478	斎串A	42.7	1.2	0.4	左2・右3	Ⅱ	SF02	1974
1479	斎串A	29.8	1.3	0.3	左3・右3	Ⅱ	SF02	3232
1480	斎串A	31.7	1.7	0.2	左2・右5	Ⅱ	SF02	1983
1481	斎串A	32.3	1.9	0.2	左4・右3	Ⅱ	SF02	1985
1482	斎串A	27.3	1.8	0.3	左2・右2	Ⅱ	SF02	3178
1483	斎串A	29.0	1.1	0.4	左7・右6	Ⅱ	SF02	1890
1484	斎串A	33.8	2.0	0.2	左4・右3	Ⅱ	SF02	1902
1485	斎串A	36.3	2.3	0.4	左3・右2	Ⅱ	SF02	1900
1486	斎串A	29.3	1.6	0.3	左4・右1	Ⅱ	SF02	1896
1487	斎串A	29.1	1.8	0.4	左5・右5	Ⅱ	SF02	1981
1488	斎串A	31.0	1.1	0.3	左1・右2	Ⅱ	SF02	1903
1489	斎串A	25.6	1.9	0.3	左6・右7	Ⅱ	SF02	1898
1490	斎串A	31.4	1.7	0.2	左3・右5	Ⅱ	SF02	1973
1491	斎串A	31.8	1.7	0.3	左2・右4	Ⅱ	SF02	1978
1492	斎串A	32.4	1.8	0.3	左2・右2	Ⅱ	SF02	1979
1493	斎串A	31.4	1.9	0.3	左5・右2	Ⅱ	SF02	1984
1494	斎串A	31.7	1.7	0.2	左2・右2	Ⅱ	SF02	1935
1495	斎串A	31.5	1.5	0.3	左2・右3	Ⅱ	SF02	1982
1496	斎串A	33.9	1.7	0.3	左1・右2	Ⅱ	SF02	1824
1497	斎串？	17.6	1.4	0.2		Ⅱ	SF02	3175
1498	円形曲物底板(樺皮結合)	復径	16.0	0.6		Ⅱ	SF02	2689
1499	馬形？	(9.0)	2.7	0.3		Ⅱ	SF02	3306
1500	馬形B	(15.3)	3.4	0.9	脚1・鬣1	Ⅱ	SF02	3223
1501	馬形B	17.9	2.9	0.6	脚4	Ⅱ	SF02	3295
1502	舟形	22.9	3.1	0.7		Ⅱ	SF02	2673
1503	斎串A	(57.1)	2.5	0.7	左2・右2	Ⅱ	SF02	3147
1504	斎串A	(28.1)	2.2	0.2	左4・右2	Ⅱ	SF02	3148
1505	斎串？	16.7	1.6	0.2		Ⅱ	SF02	3176
1506	斎串E	15.1	1.1	0.2	左0	Ⅱ	SF02	3461
1507	斎串F	10.8	1.6	0.5		Ⅱ	SF02	3177
1508	斎串C2	(16.5)	0.7	0.3		Ⅱ	SF02	3279
1509	斎串C2	24.1	0.6	0.4		Ⅱ	SF02	788
1510	斎串C2	14.8	0.5	0.4		Ⅱ	SF02	2084
1511	斎串？	25.3	1.2	0.9		Ⅱ	SF02	3149
1512	板状材	(27.4)	3.3	0.5		Ⅱ	SF02	3192

No.	器　種	長さ	幅	厚さ	備　　考	区	出土遺構・層位	登録No.
1513	出下駄C(3孔・釘留)	39.8	14.1	1.7		Ⅱ	SF02	3146
1514	出下駄A(4欠)	64.5	(8.1)	1.3		Ⅱ	SF02	3145
1515	人形A	(11.9)	2.8	0.2	左1・右2	Ⅱ	SD18上層	2155
1516	人形A	23.3	2.6	0.6	左2・右4	Ⅱ	SD18上層	3335
1517	人形A	(20.3)	(3.9)	0.5	左?・右?	Ⅱ	SD18上層	3204
1518	人形B	(17.0)	2.8	0.4	左3・右2	Ⅱ	SD18上層	2343
1519	人形A	(18.1)	3.2	0.5	左4・右4	Ⅱ	SD18上層	3336
1520	人形A	22.2	1.5	0.4	左2・右3	Ⅱ	SD18上層	3334
1521	人形A	20.8	1.9	0.6	左2・右1	Ⅱ	SD18上層	3863
1522	人形A	32.4	3.2	0.5	左2・右2	Ⅱ	SD18上層	2191
1523	人形A	33.9	2.6	0.3	左2・右2	Ⅱ	SD18上層	2364
1524	人形A	29.1	2.9	0.2	左3・右2	Ⅱ	SD18上層	2199
1525	人形A	34.0	3.5	0.4	左?・右2	Ⅱ	SD18上層	3958
1526	馬形B	24.8	2.9	0.9	脚1	Ⅱ	SD18上層	3503
1527	馬形B	23.8	3.0	0.5	脚1	Ⅱ	SD18上層	3483
1528	馬形B?	20.4	(1.8)	0.5	脚4	Ⅱ	SD18上層	2638
1529	馬形B	16.5	(2.0)	0.6	脚1	Ⅱ	SD18上層	3827
1530	馬形B	15.4	1.8	0.7	脚1	Ⅱ	SD18上層	2594
1531	馬形A	20.3	3.6	0.9	脚4	Ⅱ	SD18上層	3227
1532	馬形B	17.5	1.8	0.5	脚1	Ⅱ	SD18上層	2478
1533	馬形B	16.9	3.3	0.7	脚1	Ⅱ	SD18上層	2406
1534	馬形B	13.4	2.7	0.4	脚1	Ⅱ	SD18上層	3228
1535	馬形B	13.7	3.2	0.5	脚1・鬣1	Ⅱ	SD18上層	3471
1536	刀子形	15.1	1.4	0.4	一対の小さな切欠き	Ⅱ	SD18上層	3843
1537	斎串A	14.8	1.7	0.2	左2・右2	Ⅱ	SD18上層	585
1538	斎串A	25.4	2.1	0.3	左4・右4	Ⅱ	SD18上層	3841
1539	斎串A	29.6	1.3	0.4	左4・右3	Ⅱ	SD18上層	3447
1540	斎串A	29.3	1.3	0.4	左3・右3	Ⅱ	SD18上層	1846
1541	斎串A	31.7	1.5	0.3	左6・右5	Ⅱ	SD18上層	3455
1542	斎串A	30.6	1.4	0.2	左4・右3	Ⅱ	SD18上層	3450
1543	斎串A	31.0	2.2	0.2	左5・右5	Ⅱ	SD18上層	3445
1544	斎串A	33.2	1.8	0.3	左6・右2	Ⅱ	SD18上層	1938
1545	斎串A	(37.5)	2.4	0.3	左3・右2	Ⅱ	SD18上層	1945
1546	斎串A	50.2	1.7	0.2	左3・右2	Ⅱ	SD18上層	3753
1547	斎串A	47.9	2.3	0.4	左3・右2	Ⅱ	SD18上層	116
1548	斎串A	54.5	2.1	0.4	左2・右1	Ⅱ	SD18上層	113
1549	斎串A	58.5	2.5	0.4	左4・右5	Ⅱ	SD18上層	115
1550	斎串A	60.5	2.1	0.4	左3・右4	Ⅱ	SD18上層	3157
1551	斎串D	15.7	1.8	0.7	上11	Ⅱ	SD18上層	2081
1552	斎串D	20.1	2.0	0.2	上0	Ⅱ	SD18上層	3460
1553	斎串C2	11.6	0.6	0.4		Ⅱ	SD18上層	2092
1554	斎串E	(25.2)	1.5	0.3	左0	Ⅱ	SD18上層	836
1555	斎串F	(9.5)	3.8	1.0		Ⅱ	SD18上層	2654
1556	斎串F	42.1	2.1	0.8		Ⅱ	SD18上層	3463
1557	用途不明	46.7	3.1	0.7		Ⅱ	SD18上層	3601
1558	出下駄D(無孔・ホゾ	(37.0)	(5.4)	1.2	裏側に横桟?の圧迫痕	Ⅱ	SD18上層	3258
1559	部材	37.6	2.5	2.2		Ⅱ	SD18上層	2803
1560	下駄	27.8	10.5	3.1		Ⅱ	SD18上層	3257
1561	円形曲物底板(木釘結合)	復径	19.0	1.2		Ⅱ	SD18上層	3255
1562	円形曲物底板(木釘結合)	径	17.0	0.6		Ⅱ	SD18上層	2686
1563	台状枠支軸	(26.3)	2.9	2.8		Ⅱ	SD18上層	3836
1564	用途不明	17.9	5.0	3.3		Ⅱ	SD18上層	2848
1565	出下駄A(3欠)	(33.5)	13.8	2.6		Ⅱ	SD18上層	2807
1566	出下駄A(4孔)	37.4	(11.6)	2.1		Ⅱ	SD18上層	2796
1567	孔あきの板	74.6	17.5	1.8		Ⅱ	SD18上層	3158
1568	棒状材	(81.0)	3.3	3.1		Ⅱ	SD18上層	3136
1569	人形A	23.5	3.4	0.4	左2・右3	Ⅱ	黒色粘土・黒色シルト層	3291
1570	馬形	(7.4)	2.0	0.2	脚4?	Ⅱ	黒色粘土・黒色シルト層	3976
1571	馬形B	18.6	3.2	0.5	脚4	Ⅱ	黒色粘土・黒色シルト層	3225
1572	馬形B	20.6	2.1	0.5	脚1	Ⅱ	黒色粘土・黒色シルト層	2459
1573	馬形B	24.1	3.8	0.5	脚4	Ⅱ	黒色粘土・黒色シルト層	3226
1574	用途不明	19.1	3.7	0.3		Ⅱ	黒色粘土・黒色シルト層	2677
1575	部材	(45.0)	2.4	3.3		Ⅱ	黒色粘土・黒色シルト層	4063
1576	板状材	(31.4)	8.7	0.9		Ⅱ	黒色粘土・黒色シルト層	2842
1577	漆塗り鉢	復径	33.8		内外面黒色漆	Ⅱ	黒色粘土・黒色シルト層	2785
1578	下駄	15.3	(6.5)	5.1		Ⅱ	黒色粘土・黒色シルト層	2681
1579	用途不明	34.9	6.6	4.9		Ⅱ	黒色粘土・黒色シルト層	2847
1580	人形C	(20.8)	(2.8)	0.7	刻顔・左?・右?	Ⅱ	暗褐色ピート層	3164
1581	人形A	(7.3)	(2.7)	0.5	左?・右?	Ⅱ	暗褐色ピート層	2283

No.	器　種	長さ	幅	厚さ	備　考	区	出土遺構・層位	登録No.
1582	人形C	26.2	3.3	0.6	左4・右3	Ⅱ	暗褐色ピート層	2294
1583	人形A	18.5	1.6	0.3	左1・右1	Ⅱ	暗褐色ピート層	2356
1584	人形A	(23.4)	2.2	0.3	左3・右2	Ⅱ	暗褐色ピート層	3198
1585	人形B	(13.1)	2.8	0.2	左2・右?	Ⅱ	暗褐色ピート層	3317
1586	人形A	(17.1)	2.9	0.7	左3・右3	Ⅱ	暗褐色ピート層	3985
1587	人形A	(20.0)	(2.7)	0.6	左2・右?	Ⅱ	暗褐色ピート層	3273
1588	人形A	25.8	(2.5)	0.4	腰有・左2・右?	Ⅱ	暗褐色ピート層	3315
1589	人形A	(22.2)	3.6	0.4	左3・右2	Ⅱ	暗褐色ピート層	3321
1590	人形F	36.3	4.0	0.8	刻顔・左4・右5	Ⅱ	暗褐色ピート層	3137
1591	馬形B	17.3	2.2	0.4	脚4	Ⅱ	暗褐色ピート層	3498
1592	馬形B	15.2	2.7	0.3	脚2	Ⅱ	暗褐色ピート層	3170
1593	馬形B	14.8	2.7	0.4	脚2	Ⅱ	暗褐色ピート層	3172
1594	馬形B	21.3	2.2	0.6	脚4	Ⅱ	暗褐色ピート層	2450
1595	馬形B	21.6	2.7	0.5	脚5？(側に3と2？)	Ⅱ	暗褐色ピート層	3494
1596	馬形B	24.7	3.1	0.6	脚4	Ⅱ	暗褐色ピート層	3492
1597	馬形B	21.2	2.4	0.8	脚4	Ⅱ	暗褐色ピート層	3171
1598	馬形B	21.4	2.6	0.8	脚4	Ⅱ	暗褐色ピート層	2545
1599	馬形B	21.6	2.6	0.5	脚4・鬣3	Ⅱ	暗褐色ピート層	3469
1600	馬形B	25.1	2.3	0.5	脚4	Ⅱ	暗褐色ピート層	3167
1601	馬形B	16.7	2.3	0.4	脚1	Ⅱ	暗褐色ピート層	2467
1602	馬形B	14.7	2.7	0.5	脚2	Ⅱ	暗褐色ピート層	3509
1603	馬形B	21.8	3.0	0.6	脚4	Ⅱ	暗褐色ピート層	3169
1604	馬形B	17.6	2.9	0.6	脚4	Ⅱ	暗褐色ピート層	2599
1605	馬形A？	27.8	5.0	0.6	脚4	Ⅱ	暗褐色ピート層	2558
1606	馬形B	16.9	1.8	0.7	脚1	Ⅱ	暗褐色ピート層	3474
1607	馬形B	16.8	2.5	0.7	脚1	Ⅱ	暗褐色ピート層	3142
1608	馬形B	16.5	3.1	0.5	脚1	Ⅱ	暗褐色ピート層	3168
1609	馬形B	18.1	2.8	0.6	脚1	Ⅱ	暗褐色ピート層	3468
1610	馬形B	18.3	3.6	0.6	脚1	Ⅱ	暗褐色ピート層	3143
1611	馬形B	26.2	4.5	0.5	脚1	Ⅱ	暗褐色ピート層	3304
1612	斎串A	35.4	1.3	0.4	左3・右3	Ⅱ	暗褐色ピート層	301
1613	斎串A	35.7	1.2	0.5	左3・右3	Ⅱ	暗褐色ピート層	299
1614	斎串A	30.3	1.5	0.4	左3・右4	Ⅱ	暗褐色ピート層	3456
1615	斎串A	30.4	1.6	0.6	左6・右2	Ⅱ	暗褐色ピート層	123
1616	斎串A	32.0	1.7	0.3	左4・右10	Ⅱ	暗褐色ピート層	1829
1617	斎串A	33.4	1.7	0.4	左6・右5	Ⅱ	暗褐色ピート層	3139
1618	斎串A	40.9	1.8	0.8	左2・右2	Ⅱ	暗褐色ピート層	1956
1619	斎串A	44.5	1.6	0.6	左3・右5	Ⅱ	暗褐色ピート層	1961
1620	斎串A	44.8	2.2	0.6	左3・右4	Ⅱ	暗褐色ピート層	1960
1621	斎串A	(53.1)	2.5	0.7	左2・右2	Ⅱ	暗褐色ピート層	1962
1622	斎串A	(37.1)	1.9	0.4	左3・右2	Ⅱ	暗褐色ピート層	1955
1623	斎串A	35.1	1.8	0.6	左10・右11	Ⅱ	暗褐色ピート層	126
1624	斎串A	35.3	1.6	0.5	左5・右3	Ⅱ	暗褐色ピート層	124
1625	斎串A	38.3	1.8	0.4	左6・右3	Ⅱ	暗褐色ピート層	300
1626	斎串A	39.5	2.0	0.7	左2・右4	Ⅱ	暗褐色ピート層	1795
1627	斎串A	34.8	2.3	0.4	左3・右6	Ⅱ	暗褐色ピート層	297
1628	斎串A	33.4	2.3	0.4	左5・右4	Ⅱ	暗褐色ピート層	2000
1629	斎串A	50.7	2.2	0.3	左3・右3	Ⅱ	暗褐色ピート層	168
1630	斎串A	(17.2)	2.0	0.3	左?・右?	Ⅱ	暗褐色ピート層	3141
1631	斎串E	(19.6)	1.9	0.7	左?・右?	Ⅱ	暗褐色ピート層	837
1632	斎串D	12.0	1.2	0.2	上6	Ⅱ	暗褐色ピート層	2059
1633	斎串D	18.8	1.5	0.5	上3	Ⅱ	暗褐色ピート層	2075
1634	楕円形曲物底板	(69.2)	(15.2)	1.2	側板の圧痕明瞭に残る	Ⅱ	暗褐色ピート層	3160
1635	田下駄A(4欠)	(39.2)	(4.9)	3.1		Ⅱ	暗褐色ピート層	4064
1636	田下駄A(4欠)	42.5	22.0	1.3		Ⅱ	暗褐色ピート層	2795
1637	台状枠歯？	(22.5)	(4.3)	2.1	結合方法不明	Ⅱ	暗褐色ピート層	2813
1638	台状枠歯(釘留)	29.5	12.7	2.7		Ⅱ	暗褐色ピート層	2814
1639	孔あきの板	28.8	(6.6)	1.8		Ⅱ	暗褐色ピート層	2802
1640	田下駄A(4欠)	25.8	11.2	1.5		Ⅱ	暗褐色ピート層	2799
1641	田下駄A(3孔)	35.4	15.4	2.2		Ⅱ	暗褐色ピート層	2794
1642	板状材	(39.0)	9.4	2.4		Ⅱ	暗褐色ピート層	2786
1643	部材	30.6	8.6	2.1		Ⅱ	暗褐色ピート層	2838
1644	人形A	16.6	1.5	0.4	左3・右3	Ⅱ	SD17	3208
1645	人形A	(14.3)	2.7	0.4	左2・右2	Ⅱ	SD17	3289
1646	人形A	(14.1)	2.2	0.5	左?・右?	Ⅱ	SD17	3288
1647	人形A	(17.3)	2.5	0.3	左?・右?	Ⅱ	SD17	2142
1648	人形A	36.3	2.6	0.5	左2・右2	Ⅱ	SD17	2365
1649	人形D	31.1	3.4	0.3	左3・右3	Ⅱ	SD17	2374
1650	馬形B	19.8	3.4	0.6	脚1	Ⅱ	SD17	2458

No.	器　種	長さ	幅	厚さ	備　考	区	出土遺構・層位	登録No.
1651	馬形B	24.5	4.0	0.5	脚4	Ⅱ	SD17	2445
1652	馬形B	20.5	3.8	0.7	脚4	Ⅱ	SD17	2593
1653	馬形B	(18.8)	2.4	0.9	脚4	Ⅱ	SD17	2443
1654	馬形B	26.5	4.7	0.7	脚4	Ⅱ	SD17	2596
1655	馬形B	14.8	2.3	0.5	脚1	Ⅱ	SD17	3219
1656	馬形B	20.6	2.4	0.6	脚4	Ⅱ	SD17	2536
1657	馬形B	21.3	4.7	0.8	脚4	Ⅱ	SD17	2533
1658	馬形B	21.5	4.1	1.0	脚1	Ⅱ	SD17	2532
1659	馬形B	19.5	4.2	0.9	脚4	Ⅱ	SD17	2534
1660	馬形B	28.2	4.3	0.8	脚4	Ⅱ	SD17	2444
1661	馬形B	35.1	4.7	0.3	脚4	Ⅱ	SD17	2597
1662	刀形	(14.4)	2.3	0.5	柄をかたどる。切先欠損	Ⅱ	SD17	3243
1663	鋤形	(12.0)	1.5	0.4		Ⅱ	SD17	3249
1664	斎串A	(18.7)	2.2	0.4	左2・右2	Ⅱ	SD17	3183
1665	斎串A	(20.3)	2.0	0.8	左?・右?	Ⅱ	SD17	3185
1666	斎串A	(23.3)	1.4	0.3	左2・右2	Ⅱ	SD17	3182
1667	斎串A	24.2	1.8	0.5	左4・右3	Ⅱ	SD17	1966
1668	斎串A	40.7	1.5	0.4	左1・右3	Ⅱ	SD17	1954
1669	斎串A	32.3	1.4	0.4	左4・右4	Ⅱ	SD17	1940
1670	斎串A	28.6	2.1	0.5	左3・右3	Ⅱ	SD17	1944
1671	斎串?	(11.8)	1.9	0.3		Ⅱ	SD17	3988
1672	斎串D	11.0	0.7	0.4	上0	Ⅱ	SD17	3830
1673	斎串D	13.2	1.5	0.4	上0	Ⅱ	SD17	3190
1674	斎串D	15.6	1.3	0.4	上0	Ⅱ	SD17	3189
1675	斎串D	13.2	1.2	0.2	上7	Ⅱ	SD17	2076
1676	斎串D	15.7	1.5	0.6	上6	Ⅱ	SD17	2065
1677	斎串D	(16.5)	1.2	0.4	上0	Ⅱ	SD17	2063
1678	斎串D	17.3	1.3	0.5	上0	Ⅱ	SD17	2066
1679	斎串E	(9.9)	1.4	0.3	左?・右?	Ⅱ	SD17	833
1680	斎串E	(7.6)	2.1	0.5	左?・右?	Ⅱ	SD17	3184
1681	田下駄B(無孔・抉留)	35.0	5.7	1.5		Ⅱ	SD17	3150
1682	田船	93.4	19.3	9.5		Ⅱ	SD17	3842
1683	曲物側板	(63.2)	4.3	0.6		Ⅱ	SD17	3161
1684	田下駄A(4欠)	38.3	12.1	1.2		Ⅱ	SD17	2792
1685	田下駄A(4欠)	41.6	13.1	2.1		Ⅱ	SD17	2798
1686	円形曲物底板(樺皮結合)	復径	41.0	0.7		Ⅱ	SF01-7層	2693
1687	斎串B	(42.2)	1.6	0.3	左4／4・右4／2	Ⅱ	SF01-7層	3458
1688	馬形B	(11.6)	4.1	0.6	脚4?	Ⅱ	SF01-7層	2422
1689	馬形B	21.7	4.8	0.7	脚4?	Ⅱ	SF01-7層	3513
1690	馬形B	15.0	2.1	0.5	脚1・鬣2	Ⅱ	SF01-7層	2452
1691	人形A	22.0	(1.9)	0.4	左3・右?	Ⅱ	SF01-7層	3969
1692	人形A	(19.2)	(1.8)	0.3	左?・右0	Ⅱ	SF01-7層	2671
1693	人形C	(32.7)	5.0	0.6	墨顔・左3・右5	Ⅱ	SF01-7層	2292
1694	人形C	52.7	3.7	0.6	左?・右2	Ⅱ	SF01-7層	2296
1695	曲物側板(樺皮結合)	(28.0)	5.8	0.6		Ⅱ	SF01-7層	2720
1696	円形曲物(樺皮結合)	径	19.6	2.2		Ⅱ	SF01-7層	3533
1697	円形曲物底板	復径	19.0	0.4		Ⅱ	SF01-7層	2687
1698	曲物側板	(9.4)	2.7	0.3		Ⅱ	SF01-7層	2688
1699	斎串?	(24.7)	2.0	0.3		Ⅱ	SF01-7層	2672
1700	馬形?	(8.0)	2.9	0.6		Ⅱ	SF01-7層	2631
1701	馬形B	33.4	4.4	0.4	脚4	Ⅱ	SF01-7層	2469
1702	斎串A	39.0	1.9	0.3	左?・右?	Ⅱ	SF01-7層	1813
1703	棒状材	(77.7)	4.9	1.9		Ⅱ	SF01-7層	3153
1704	人形C	50.9	4.2	0.9	左?・右2	Ⅱ	SK03	3133
1705	人形C	(32.2)	6.2	0.9	左3・右4	Ⅱ	SK03	2300
1706	斎串A	13.6	1.2	0.3	左3・右3	Ⅱ	SK03	3135
1707	斎串A	13.6	1.2	0.4	左2・右3	Ⅱ	SK03	3134
1708	斎串A	35.7	1.4	0.2	左1・右1	Ⅱ	SK03	1899
1709	人形C	73.2	4.2	0.4	刻顔・左2・右3	Ⅱ	SF01第2遺構面	3211
1710	人形A	79.5	6.5	0.5	刻顔・左5・右5	Ⅱ	SF01第2遺構面	3212
1711	人形C	49.0	4.0	0.5	刻顔・左3・右3	Ⅱ	SF01第2遺構面	2298
1712	人形C	(35.4)	4.7	0.6	刻顔・左1・右3	Ⅱ	SF01第2遺構面	2297
1713	人形C	46.8	3.3	0.5	刻顔・左3・右2	Ⅱ	SF01第2遺構面	2295
1714	人形C	(50.4)	4.5	0.3	墨顔・左5・右11	Ⅱ	SF01第2遺構面	3310
1715	刀形	(74.3)	3.5	0.7		Ⅱ	SF01第2遺構面	3246
1716	剣形	(14.8)	2.3	0.3		Ⅱ	SF01第2遺構面	2658
1717	斎串A	(17.2)	1.2	0.4	左2・右2	Ⅱ	SF01第2遺構面	709
1718	斎串B	(20.3)	1.1	0.3	左2／2・右2／3	Ⅱ	SF01第2遺構面	313
1719	斎串B	(51.8)	1.8	0.5	左3／4／3・右2／4?／4?	Ⅱ	SF01第2遺構面	782

№	器　種	長さ	幅	厚さ	備　考	区	出土遺構・層位	登録№
1720	斎串B	86.1	2.0	0.4	左3／3／0／3・右3／3／2?／3	Ⅱ	SF01第2遺構面	3234
1721	馬形？	(18.3)	3.1	0.7		Ⅱ	SF01第2遺構面	2629
1722	馬形B	20.5	4.3	0.5	脚4・鬣1	Ⅱ	SF01第2遺構面	2479
1723	板状材	(23.8)	1.8	0.5		Ⅱ	SF01第2遺構面	715
1724	紐かけのある棒状材	26.9	3.1	2.2		Ⅱ	SF01第2遺構面	2843
1725	斎串？	(26.2)	(1.9)	0.7		Ⅱ	SF01第2遺構面	567
1726	斎串C1？	(24.4)	0.7	0.5		Ⅱ	SF01第2遺構面	775
1727	用途不明	30.3	2.8	0.3		Ⅱ	SF01第2遺構面	784
1728	斎串C1？	(30.8)	0.6	0.4		Ⅱ	SF01第2遺構面	774
1729	支脚	25.3	7.2	5.9		Ⅱ	SF01第2遺構面	2837
1730	曲物側板	(29.3)	4.4	0.4		Ⅱ	SF01第2遺構面	2699
1731	人形C	53.9	3.2	0.3	墨顔・左6・右5	Ⅱ	SK02	3540
1732	人形C	58.6	3.1	0.3	墨顔・左5・右6	Ⅱ	SK02	3539
1733	人形C	58.0	3.6	0.4	墨顔・左12・右4	Ⅱ	SK02	3541
1734	人形C	51.5	4.0	0.3	墨顔・左4・右5	Ⅱ	SK02	3307
1735	人形C	49.6	3.8	0.3	墨顔・左5・右4	Ⅱ	SK02	3309
1736	人形C	(36.1)	4.2	1.0	墨顔・左4・右4	Ⅱ	SK02	3542
1737	人形C	48.3	4.1	0.6	刻顔・左2・右3	Ⅱ	SK02	3545
1738	人形C	50.1	4.1	0.5	刻顔・左4・右2	Ⅱ	SK02	3546
1739	円形曲物底板(樺皮結合)	復径	42.0	0.8		Ⅱ	SK02	2716
1740	曲物側板	(32.8)	6.5	0.6		Ⅱ	SK02	2714
1741	曲物側板(樺皮結合)	(32.2)	2.6	0.6		Ⅱ	SK02	4062
1742	人形C	50.9	4.9	0.4	刻顔・左2・右3	Ⅱ	SK02	3543
1743	人形C	52.9	4.4	0.5	刻顔・左2・右2	Ⅱ	SK02	3308
1744	人形C	51.1	4.4	0.4	刻顔・左4・右4	Ⅱ	SK02	3311
1745	人形C	52.6	3.9	0.6	刻顔・左5・右5	Ⅱ	SK02	3547
1746	斎串B	59.0	1.4	0.4	左0／0／4／2・右2／2／4／4	Ⅱ	SK02	1832
1747	斎串B	65.8	1.7	0.3	左1／1／2・右3／3／2	Ⅱ	SK02	1730
1748	人形C	(24.1)	3.2	0.8	刻顔・左1・右2	Ⅱ	SK02	2344
1749	斎串B？	(25.5)	2.1	1.0	左2・右2	Ⅱ	SK02	4045
1750	斎串D	25.5	1.6	0.4	上0	Ⅱ	SK02	3822
1751	曲物側板(樺皮結合)	(31.7)	7.3	0.5		Ⅱ	SK02	2694
1752	長方形曲物	(61.4)	8.9	0.5	底板は極一部遺存	Ⅱ	SK02	2694
1753	斎串B	45.8	1.6	0.3	左2／0／3／2・右3／4／2／2	Ⅱ	SK01	3238
1754	斎串B	45.9	1.7	0.3	左3／2／3／4・右3／4／4／2	Ⅱ	SK01	3239
1755	斎串B	50.5	1.9	0.6	左3／3／3／3・右4／3／3／4	Ⅱ	SK01	3235
1756	斎串B	50.7	1.5	0.5	左3／3／3／3・右3／3／1／3	Ⅱ	SK01	3236
1757	斎串B	51.9	1.7	0.3	左3／4?／4／4・右3／4／4／4?	Ⅱ	SK01	3237
1758	斎串B	52.0	1.8	0.2	左3／3?／3／4・右3／4／3／3	Ⅱ	SK01	3240
1759	人形C	(47.4)	5.2	0.3	墨顔・左5・右4・曲物側板に転用	Ⅱ	SK01	3544
1760	人形C	50.7	5.1	0.9	墨顔・左4・右4	Ⅱ	SK01	3270
1761	人形C	59.9	4.3	0.5	墨顔・左1・右1	Ⅱ	SK01	3259
1762	人形C	62.6	3.9	0.5	墨顔・左2・右3	Ⅱ	SK01	3268
1763	人形C	64.3	4.2	0.6	墨顔・左1・右1	Ⅱ	SK01	3260
1764	用途不明	(18.0)	2.2	0.5		Ⅱ	SK01	3548
1765	円形曲物底板(樺皮結合)	復径	25.0	0.5	人形を側板とする	Ⅱ	SK01	3253
1766	人形C	61.5	2.8	0.3	墨顔・左2・右3	Ⅱ	SK01	3269
1767	人形C	57.2	2.6	0.3	墨顔・左3・右3	Ⅱ	SK01	3261
1768	人形C	56.5	3.0	0.3	墨顔・左3・右3	Ⅱ	SK01	3267
1769	人形C	55.1	3.0	0.4	墨顔・左3・右3	Ⅱ	SK01	3266
1770	人形C	57.9	2.7	0.3	墨顔・左3・右3	Ⅱ	SK01	3265
1771	人形C	57.7	2.6	0.3	墨顔・左3・右3	Ⅱ	SK01	3262
1772	人形C	57.4	2.9	0.4	墨顔・左1・右3	Ⅱ	SK01	3264
1773	人形C	57.2	2.8	0.3	墨顔・左3・右3	Ⅱ	SK01	3263
1774	人形C	(22.9)	2.4	0.6	左?・右?	Ⅱ	粗砂	3839
1775	人形C	(27.7)	3.3	0.6	墨顔・左3・右3	Ⅱ	粗砂	2291
1776	人形C	(23.0)	6.2	1.0	刻顔・左?・右?	Ⅱ	粗砂	2332
1777	馬形C？	23.0	3.0	0.6	脚4・背部欠損か？	Ⅱ	粗砂	3826
1778	馬形B	18.4	3.1	0.7	脚4	Ⅱ	粗砂	3173
1779	馬形C	28.3	3.8	0.6	脚4・鬣6	Ⅱ	粗砂	3224
1780	馬形A	24.4	4.7	0.8	脚4	Ⅱ	粗砂	2560
1781	人形A	(26.5)	4.2	0.7	左1・右1	Ⅱ	粗砂	4043
1782	人形C	(27.9)	3.5	0.7	左?・右2	Ⅱ	粗砂	2299
1783	人形C	56.7	3.4	0.4	刻顔・左3・右2	Ⅱ	粗砂	3312
1784	馬形B	18.0	2.1	0.6	脚1？	Ⅱ	粗砂	3214
1785	馬形A	(18.2)	2.8	0.7	脚4？	Ⅱ	粗砂	2465
1786	馬形A？	(10.4)	2.8	0.6	脚？	Ⅱ	粗砂	3991
1787	馬形B	18.4	2.3	0.4	脚4？・鬣1	Ⅱ	粗砂	3215
1788	馬形B	19.7	4.1	0.4	脚4	Ⅱ	粗砂	2529

No.	器　種	長さ	幅	厚さ	備　考	区	出土遺構・層位	登録No.
1789	馬形A	(21.5)	2.6	0.6	脚4？	Ⅱ	粗砂	3197
1790	馬形B	17.8	3.3	0.4	脚4	Ⅱ	粗砂	3174
1791	馬形B	(19.9)	2.4	0.6	脚1	Ⅱ	粗砂	2525
1792	馬形B	(22.0)	3.7	0.7	脚4	Ⅱ	粗砂	4067
1793	斎串D	14.2	0.7	0.6	上4	Ⅱ	粗砂	2072
1794	斎串A	15.9	1.2	0.5	左3	Ⅱ	粗砂	1965
1795	斎串A	14.5	1.1	0.2	左1・右1	Ⅱ	粗砂	1941
1796	斎串A	42.5	1.5	0.2	左1・右2	Ⅱ	粗砂	1976
1797	棒状材	(25.4)	1.8	1.3		Ⅱ	粗砂	4002
1798	木簡（０８１型式）	(11.5)	2.9	0.3		Ⅱ	粗砂	3536
1799	木簡（０９１型式）	(15.6)	3.3	0.5		Ⅱ	粗砂	3864
1800	円形曲物（樺皮結合）	径	17.9	2.7	底板内面をヤリガ゛ンナで削る	Ⅱ	粗砂	3530
1801	円形曲物底板	復径	15.0	0.9	片面に黒色付着物	Ⅱ	粗砂	4066
1802	円形曲物底板（樺皮結合）	(13.8)	(3.5)	0.4		Ⅱ	粗砂	3938
1803	有孔曲物底板（樺皮結合）	復径	18.8	0.6		Ⅱ	粗砂	4055
1804	軸連結の板	23.6	3.7	0.4	2点1組	Ⅱ	粗砂	2680
1805	鉢	復径・高	9.8	4.4		Ⅱ	粗砂	2706
1806	紡錘車形	5.8	(4.5)	0.4		Ⅱ	粗砂	3061
1807	田下駄A（4孔）	28.5	(7.5)	1.5		Ⅱ	粗砂	4061
1808	田下駄A（4欠）	55.1	(9.1)	1.6		Ⅱ	粗砂	2793
1809	紐かけのある棒状材	49.9	3.9	1.4		Ⅱ	粗砂	3151
1810	田下駄B（無孔・抉留）	69.2	15.3	1.9		Ⅱ	粗砂	3159
1811	部材	28.5	4.4	3.6	台状枠の一種か？	Ⅱ	粗砂	2797
1812	台状枠支輪	32.9	2.2	1.9		Ⅱ	粗砂	3193
1813	方形枠横桟	41.1	3.0	1.3		Ⅱ	粗砂	2790
1814	鍬？	(16.6)	(5.8)	1.7		Ⅱ	粗砂	4057
1815	用途不明	16.0	2.3	0.6		Ⅱ	粗砂	2667
1816	木釘	15.1	2.4	1.6		Ⅱ	粗砂	2855
1817	紐かけのある棒状材	(38.6)	3.3	0.7		Ⅱ	粗砂	2179
1818	紐かけのある棒状材	(31.9)	3.4	2.4		Ⅱ	粗砂	3196
1819	下駄	22.2	10.9	2.1	厚さは足板の厚さ	Ⅱ	粗砂	3537
1820	用途不明	18.6	3.5	1.6		Ⅱ	粗砂	3195
1821	板状材	(23.3)	6.9	1.2		Ⅱ	粗砂	2851
1822	用途不明	15.7	8.8	6.9		Ⅱ	粗砂	2835
1823	杓子形木器	(23.5)	3.7	0.4		Ⅱ	粗砂	4049
1824	板状材	21.7	2.2	0.5		Ⅱ	粗砂	3241
1825	板状材	17.0	2.0	0.7		Ⅱ	粗砂	3282
1826	板状材	18.1	2.8	0.7	一端を圭頭につくる	Ⅱ	粗砂	869
1827	人形C	(12.2)	(4.6)	0.3	刻顔・左?・右?	Ⅱ	灰色砂層	3840
1828	人形C？	(26.7)	5.0	0.5	刻顔・左?・右?	Ⅱ	灰色砂層	3199
1829	人形C	(48.6)	4.9	0.4	墨顔・左5・右?	Ⅱ	近世河道	3823
1830	斎串B	60.7	1.6	0.2	左5／2／3／3・右2／2／4／2	Ⅱ	近世河道	3825
1831	斎串B	60.5	1.8	0.4	左5／4／3／4?・右4／4／5／4	Ⅱ	近世河道	3824
1832	斎串C2	19.5	0.5	0.3		Ⅱ	近世河道	3828
1833	木釘	29.9	2.2	2.0		Ⅱ	灰色砂層	3256
1834	板状材	(61.6)	4.5	0.4		Ⅱ	灰色砂層	2721
1835	板状材	(19.3)	2.3	0.4		Ⅱ	灰色砂層	3831
1836	用途不明	26.4	4.6	0.5		Ⅱ	近世河道	3832
1837	部材	(12.5)	6.7	4.3		Ⅱ	近世河道	3834
1838	木錘	19.1	4.3	4.8		Ⅱ	灰色砂層	3835
1839	鞘	15.0	3.5	1.2		Ⅱ	灰色砂層	4001
1840	漆塗り椀	復径・高	14.6	9.0	黒地赤彩	Ⅱ	灰色砂層	3538
1841	墨絵のある木箱	38.2	(6.1)	1.1		Ⅱ	灰色砂層	3549
1842	人形A	(11.4)	2.6	0.5	左4・右3	Ⅱ	確認トレンチ	3294
1843	馬形B	26.9	2.5	0.6	脚1・鬣1	Ⅱ	表採	2590
1844	馬形B	20.6	2.7	0.9	脚4	Ⅱ	表採	3524
1845	馬形D	(11.4)	2.2	0.7	脚0	砂Ⅱ	不明	2297
1846	人形C	(25.5)	3.9	0.5	左?・右2	Ⅱ	確認トレンチ	3271
1847	人形C	(28.0)	3.2	0.4	刻顔・左4・右2	Ⅱ	機械掘削	3201
1848	人形A	17.6	1.9	0.4	左2・右2	Ⅱ	機械掘削	2166
1849	刀形	19.5	1.5	0.6	左2	Ⅱ	確認トレンチ	3242
1850	人形C	(35.3)	5.0	0.8	刻顔・左1・右2	Ⅱ	機械掘削	3203
1851	鎌柄	(31.4)	4.2	2.2		砂Ⅱ	SD06	1720
1852	舟形	27.6	6.7	2.0		Ⅱ	表採	3251
1853	舟形	49.4	10.7	4.2		砂Ⅱ	機械掘削	1002
1854	人形A	(8.9)	2.6	0.3	左?・右?	Ⅱ	層位不明	3810
1855	人形A	(14.2)	2.6	0.6	左1・右3	Ⅱ	層位不明	2159
1856	人形A	24.7	(1.4)	0.4	左?・右1	Ⅱ	層位不明	3721
1857	人形D	(16.6)	2.4	0.3	左1・右1	Ⅱ	層位不明	2303

№	器　種	長さ	幅	厚さ	備　考	区	出土遺構・層位	登録№
1858	人形A	(14.4)	3.5	0.3	左1・右1	Ⅱ	層位不明	2243
1859	人形D	23.6	1.6	0.2	左3・右2	Ⅱ	層位不明	2250
1860	人形A	28.0	2.8	0.4	左3・右3	Ⅱ	層位不明	3213
1861	人形A	32.6	3.4	0.5	左5・右4	Ⅱ	層位不明	3207
1862	人形A	(28.2)	4.0	0.3	左6・右6	Ⅱ	層位不明	2160
1863	馬形A	(14.1)	(2.0)	0.6	脚？	Ⅱ	層位不明	2640
1864	馬形B	16.4	2.2	0.5	脚4	Ⅱ	層位不明	3218
1865	馬形B	15.5	2.3	0.4	脚1？	Ⅱ	層位不明	3808
1866	馬形B	17.3	2.5	0.7	脚4	Ⅱ	層位不明	3761
1867	馬形B	18.7	2.7	0.7	脚1・鬣1	Ⅱ	層位不明	3768
1868	馬形？	20.8	(3.0)	0.9	脚4	Ⅱ	層位不明	3774
1869	馬形B	21.8	3.3	0.8	脚1・鬣1	Ⅱ	層位不明	3504
1870	馬形B	25.6	5.7	0.6	脚4・鬣3	Ⅱ	層位不明	2496
1871	馬形B	14.2	2.5	0.7	脚0	Ⅱ	層位不明	2579
1872	馬形B	16.8	2.5	0.5	脚1	Ⅱ	層位不明	2499
1873	馬形B	20.4	3.4	1.0	脚1	Ⅱ	層位不明	3305
1874	馬形B	20.3	3.7	0.8	脚1・鬣1	Ⅱ	層位不明	3762
1875	馬形B	21.9	3.7	0.7	脚4	Ⅱ	層位不明	2498
1876	馬形B	(12.1)	2.8	0.7	脚？	Ⅱ	層位不明	3837
1877	斎串C2	11.5	0.7	0.7		Ⅱ	層位不明	3755
1878	斎串C2	11.1	(0.7)	0.4		Ⅱ	層位不明	3838
1879	斎串C2	14.0	1.0	0.7		Ⅱ	層位不明	2104
1880	斎串C2	16.0	0.5	0.6		Ⅱ	層位不明	240
1881	斎串D	13.1	1.3	0.4	上0	Ⅱ	層位不明	800
1882	斎串D	16.0	0.9	0.7	上0	Ⅱ	層位不明	3756
1883	斎串D	18.0	1.3	0.7	上0	Ⅱ	層位不明	3812
1884	斎串D	18.1	1.6	0.4	上1	Ⅱ	層位不明	3760
1885	斎串D	12.7	2.1	0.4	上6	Ⅱ	層位不明	791
1886	斎串D	14.6	1.3	0.4	上5	Ⅱ	層位不明	801
1887	斎串D	17.1	1.3	0.3	上3	Ⅱ	層位不明	3816
1888	斎串D	25.5	1.8	0.4	上8	Ⅱ	層位不明	799
1889	斎串A	23.5	1.3	0.4	左2・右2	Ⅱ	層位不明	883
1890	斎串A	26.4	1.6	0.5	左2・右2	Ⅱ	層位不明	3813
1891	斎串A	27.7	1.9	0.4	左2・右2	Ⅱ	層位不明	3668
1892	斎串A	28.7	1.8	0.6	左4・右5	Ⅱ	層位不明	881
1893	斎串A	30.7	1.6	0.3	左?・右2	Ⅱ	層位不明	3817
1894	斎串A	31.4	1.6	0.5	左2・右2	Ⅱ	層位不明	3667
1895	斎串A	30.2	1.6	0.3	左4・右4	Ⅱ	層位不明	3751
1896	斎串A	(26.3)	1.7	0.2	左1・右3	Ⅱ	層位不明	3677
1897	斎串A	(28.5)	1.7	1.0	左2・右2	Ⅱ	層位不明	1885
1898	斎串A	(30.7)	1.3	0.3	左2・右?	Ⅱ	層位不明	3716
1899	斎串A	63.8	1.9	0.4	左5・右3	Ⅱ	層位不明	877
1900	斎串A	50.2	1.7	0.2	左3・右3	Ⅱ	層位不明	876
1901	斎串A	49.5	2.5	0.3	左2・右2	Ⅱ	層位不明	3663
1902	斎串A	43.5	1.5	0.3	左?・右4	Ⅱ	層位不明	3664
1903	斎串A	40.7	1.5	0.4	左2・右2	Ⅱ	層位不明	3759
1904	斎串A	39.9	1.9	0.3	左3・右3	Ⅱ	層位不明	3662
1905	斎串A	37.9	1.7	0.4	左1・右3	Ⅱ	層位不明	174
1906	斎串A	34.2	1.8	0.2	左4・右4	Ⅱ	層位不明	3821
1907	斎串A	41.7	1.7	1.0	左3・右2	Ⅱ	層位不明	878
1908	斎串A	45.6	1.7	0.3	左3・右3	Ⅱ	層位不明	1876
1909	斎串A	(23.4)	1.8	0.5	左?・右2	Ⅱ	層位不明	3782
1910	斎串A	(12.3)	1.5	0.4	左?・右?	Ⅱ	層位不明	605
1911	斎串A	36.1	1.4	0.2	左2・右2	Ⅱ	層位不明	882
1912	斎串A	36.7	1.7	0.4	左3・右4	Ⅱ	層位不明	3757
1913	斎串A	31.1	1.8	0.6	左4・右3	Ⅱ	層位不明	642
1914	斎串A	36.9	1.4	0.4	左4・右4	Ⅱ	層位不明	3661
1915	斎串A	37.7	1.5	0.4	左?・右1	Ⅱ	層位不明	880
1916	斎串A	30.5	2.3	0.4	左3・右4	Ⅱ	層位不明	893
1917	斎串A	(29.3)	2.4	1.2	左1・右2・刻顔あり？	Ⅱ	層位不明	735
1918	斎串A	38.8	3.0	0.3	左3・右5	Ⅱ	層位不明	879
1919	斎串A	46.2	2.5	0.3	左5・右2	Ⅱ	層位不明	3696
1920	斎串A	(20.8)	2.3	0.3	左2・右3	Ⅱ	層位不明	3689
1921	斎串A	(18.4)	1.5	0.4	左?・右?	Ⅱ	層位不明	3764
1922	斎串E	36.2	1.4	0.6	左3・右3	Ⅱ	層位不明	781
1923	斎串E	(14.7)	1.3	0.3	左?・右?	Ⅱ	層位不明	1334
1924	鍬？	(9.6)	(3.9)	1.6		Ⅱ	層位不明	2722
1925	孔あきの板	(21.0)	(5.0)	1.1		Ⅱ	層位不明	2801
1926	円形曲物底板(樺皮結合)	復径	16.0	0.6		Ⅱ	層位不明	2717

No.	器　種	長さ	幅	厚さ	備　　考	区	出土遺構・層位	登録No.
1927	円形曲物底板(樺皮結合)	復径	18.0	0.5		Ⅱ	層位不明	2696
1928	円形曲物底板(樺皮結合)	復径	17.8	0.6		Ⅱ	層位不明	2719
1929	人形A	22.4	1.5	0.3	左2・右1	Ⅲ	SD18	332
1930	人形A	15.4	1.9	0.4	左2・右2	Ⅲ	SD18	589
1931	人形F	20.1	2.7	0.4	刻顔？・左1・右2	Ⅲ	SD18	582
1932	人形C	30.3	(1.0)	0.2	左?・右4	Ⅲ	SD18	318
1933	人形A？	30.7	(2.4)	0.2	左2・右?	Ⅲ	SD18	321
1934	人形A	36.3	5.0	0.5	左1・右2	Ⅲ	SD18	181
1935	人形A	34.5	3.7	0.9	腰有・左1・右1	Ⅲ	SD18	587
1936	人形A	32.9	3.2	0.5	左3・右1	Ⅲ	SD18	170
1937	馬形A	12.3	2.8	0.7	脚1	Ⅲ	SD18	327
1938	馬形B	20.1	2.1	1.0	脚1	Ⅲ	SD18	229
1939	馬形B	20.6	3.2	0.7	脚4	Ⅲ	SD18	230
1940	馬形B	(17.8)	2.8	0.6	脚0	Ⅲ	SD18	844
1941	馬形？	24.8	4.3	0.4	脚4	Ⅲ	SD18	325
1942	馬形？	24.8	(2.6)	0.7	脚4	Ⅲ	SD18	317
1943	馬形	19.0	(3.0)	0.6	脚1	Ⅲ	SD18	580
1944	馬形B	19.1	2.5	0.7	脚4	Ⅲ	SD18	228
1945	馬形B	26.7	3.3	1.0	脚4	Ⅲ	SD18	588
1946	馬形B	25.6	3.7	1.0	脚1・鬃2	Ⅲ	SD18	896
1947	不明形代	8.2	2.4	0.3	勾玉様	Ⅲ	SD18	312
1948	特殊刀形	35.3	1.6	0.5	左6・右4	Ⅲ	SD18	900
1949	刀子形	16.6	1.5	0.6	茎をかたどる	Ⅲ	SD18	578
1950	斎串A	25.6	1.7	0.4	左2・右1	Ⅲ	SD18	573
1951	斎串A	29.1	2.1	0.4	左2・右2	Ⅲ	SD18	172
1952	斎串A	37.2	1.8	0.2	左4・右2	Ⅲ	SD18	329
1953	斎串A	36.9	1.8	0.6	左2・右2	Ⅲ	SD18	175
1954	斎串A	36.9	1.8	0.4	左3・右2	Ⅲ	SD18	176
1955	斎串A	47.4	2.0	0.5	左2・右2	Ⅲ	SD18	177
1956	斎串A	(20.8)	1.9	0.6	左3・右3	Ⅲ	SD18	574
1957	斎串A	(23.6)	2.2	0.6	左2・右2	Ⅲ	SD18	571
1958	斎串A	56.1	2.2	0.7	左2・右3	Ⅲ	SD18	899
1959	斎串A	(54.9)	2.0	0.5	左4・右?	Ⅲ	SD18	328
1960	斎串A	33.9	1.3	0.5	左2・右2	Ⅲ	SD18	570
1961	斎串A	47.4	1.1	0.5	左2・右2	Ⅲ	SD18	577
1962	斎串A	47.5	1.2	0.4	左1・右3	Ⅲ	SD18	330
1963	斎串A	(31.5)	2.2	0.6	左3・右4	Ⅲ	SD18	586
1964	斎串A	31.6	1.4	0.5	左1・右3	Ⅲ	SD18	173
1965	斎串C2	(12.6)	0.7	0.5		Ⅲ	SD18	227
1966	斎串D	14.4	0.9	0.7	上0	Ⅲ	SD18	581
1967	斎串D	13.3	1.3	0.6	上0	Ⅲ	SD18	585
1968	用途不明	8.9	3.3	0.6		Ⅲ	SD18	341
1969	部材	(27.8)	3.1	1.2		Ⅲ	SD18	326
1970	円形曲物(樺皮結合)	径	18.0	5.3	底板内面をヤリガ゛ンナで削る	Ⅲ	SD18	883
1971	円形曲物(樺皮結合)	径	16.2	5.2		Ⅲ	SD18	882
1972	孔あきの板	41.7	6.2	1.0	両端の孔に木釘残	Ⅲ	SD18	168
1973	人形A	(21.3)	4.2	0.5	左3・右3	Ⅲ	SD18上層	507
1974	人形A	18.2	2.7	0.6	左2・右2	Ⅲ	SD18上層	347
1975	馬形B	15.4	2.3	0.6	脚1	Ⅲ	SD18上層	185
1976	馬形B	(20.4)	2.7	0.7	脚4	Ⅲ	SD18上層	897
1977	馬形B	20.2	4.5	0.5	脚4・鬃2	Ⅲ	SD18上層	484
1978	斎串A	14.7	1.5	0.5	左2・右2	Ⅲ	SD18上層	483
1979	斎串A	(35.8)	2.4	0.5	左4・右3	Ⅲ	SD18上層	496
1980	斎串A	(30.9)	1.7	0.7	左2・右2	Ⅲ	SD18上層	208
1981	斎串A	36.1	1.5	0.4	左2・右1	Ⅲ	SD18上層	481
1982	斎串A	26.8	1.2	0.3	左3・右3	Ⅲ	SD18上層	210
1983	斎串F	(17.9)	2.1	1.3		Ⅲ	SD18上層	898
1984	斎串C2	(15.6)	0.5	0.5		Ⅲ	SD18上層	350
1985	斎串D	13.0	1.1	0.3	上0	Ⅲ	SD18上層	479
1986	斎串D	13.5	1.4	0.3	上0	Ⅲ	SD18上層	354
1987	斎串D	12.2	1.3	0.3	上9	Ⅲ	SD18上層	355
1988	檜扇形木器	(24.9)	2.5	0.4	横線を墨書	Ⅲ	SD18上層	942
1989	人形D	27.7	3.6	0.6	左2・右1	Ⅲ	SF02	506
1990	斎串D	15.2	1.3	0.4	上0	Ⅲ	SF02	80
1991	檜扇形木器	(12.4)	3.0	0.3	横線を墨書	Ⅲ	SF02	886
1992	出ド駄A(4欠)	35.2	12.8	2.0		Ⅲ	SF02	85
1993	部材	(43.4)	4.4	2.0		Ⅲ	SF02	84
1994	人形D	(13.1)	1.7	0.5	左2・右2	Ⅲ	SD19	307
1995	人形A	(6.5)	2.6	0.3	左?・右?	Ⅲ	SD19	302

No.	器　種	長さ	幅	厚さ	備　考	区	出土遺構・層位	登録No.
1996	人形A	21.5	3.0	0.3	左3・右3	Ⅲ	SD19	525
1997	人形A	26.6	3.1	0.6	左3・右2	Ⅲ	SD19	508
1998	馬形B	20.3	2.2	0.8	脚1	Ⅲ	SD19	523
1999	馬形B	14.8	2.4	0.4	脚0	Ⅲ	SD19	509
2000	馬形B	20.4	2.2	0.5	脚1	Ⅲ	SD19	944
2001	馬形B	(15.3)	3.0	0.6	脚1	Ⅲ	SD19	521
2002	馬形B	19.5	3.8	0.4	脚0	Ⅲ	SD19	522
2003	刀子形	16.6	1.8	0.5	茎をかたどる	Ⅲ	SD19	885
2004	斎串A	36.0	2.5	0.3	左?・右2	Ⅲ	SD19	268
2005	斎串A	(41.7)	2.8	0.3	左4・右4	Ⅲ	SD19	259
2006	斎串A	41.1	2.8	0.7	左2・右3	Ⅲ	SD19	262
2007	斎串A	(26.3)	1.6	0.7	左2・右3	Ⅲ	SD19	516
2008	斎串A	24.7	2.0	0.3	左2・右2	Ⅲ	SD19	514
2009	斎串A	25.8	1.6	0.5	左2・右2	Ⅲ	SD19	265
2010	斎串A	26.3	1.5	0.5	左3・右2	Ⅲ	SD19	266
2011	斎串A	26.6	1.1	0.6	左2・右2	Ⅲ	SD19	299
2012	斎串A	52.7	1.2	0.4	左2・右3	Ⅲ	SD19	263
2013	斎串C2	38.8	0.9	0.6		Ⅲ	SD19	267
2014	斎串A	33.1	1.4	0.3	左3・右4	Ⅲ	SD19	285
2015	斎串A	35.8	1.2	0.4	左5・右2	Ⅲ	SD19	261
2016	斎串A	32.7	1.3	0.6	左2・右2	Ⅲ	SD19	260
2017	斎串D？	(15.5)	1.8	0.5	上0	Ⅲ	SD19	306
2018	孔あきの板	(19.3)	4.1	1.6		Ⅲ	SD19	526
2019	部材	29.3	5.0	1.2		Ⅲ	SD19	273
2020	田下駄A(4孔)	49.3	15.3	1.8		Ⅲ	SD19	274
2021	田下駄A(4欠)	45.3	15.5	1.5		Ⅲ	SD19	891
2022	孔あきの板	(51.8)	11.4	1.8		Ⅲ	SD19	520
2023	支脚	55.7	6.5	5.5		Ⅲ	SD19	513
2024	梯子	(141.1)	(3.7)	5.4		Ⅲ	SD19	902
2025	斎串C2	(14.3)	0.8	0.8		Ⅲ	SF03	568
2026	人形A	(16.6)	1.9	0.5	左2・右2	Ⅲ	SF03	459
2027	人形A	22.4	2.1	0.2	左1・右1	Ⅲ	SF03	437
2028	人形A	(17.2)	2.4	0.4	左2・右2	Ⅲ	SF03	451
2029	人形A	26.5	2.5	0.4	左3・右3	Ⅲ	SF03	458
2030	人形A	28.0	3.2	0.7	左5・右3	Ⅲ	SF03	457
2031	人形A	28.1	2.9	0.4	左4・右4	Ⅲ	SF03	442
2032	人形A	26.9	2.6	0.6	左2・右1	Ⅲ	SF03	796
2033	人形A	25.9	2.8	0.3	左2・右2	Ⅲ	SF03	809
2034	人形A	29.2	2.8	0.3	左2・右2	Ⅲ	SF03	812
2035	人形A	21.6	3.1	0.5	左3・右4	Ⅲ	SF03	463
2036	人形A	22.4	3.0	0.4	左2・右2	Ⅲ	SF03	808
2037	人形A	23.1	3.1	0.4	左2・右2	Ⅲ	SF03	806
2038	人形A	(18.9)	3.0	0.4	左2・右3	Ⅲ	SF03	805
2039	人形A	28.0	3.0	0.5	左2・右2	Ⅲ	SF03	793
2040	人形A	24.6	2.9	0.5	左3・右3	Ⅲ	SF03	804
2041	人形A	26.3	3.1	0.3	左2・右2	Ⅲ	SF03	813
2042	馬形B	18.8	2.5	0.5	脚1	Ⅲ	SF03	465
2043	馬形B	18.8	2.4	0.8	脚1	Ⅲ	SF03	461
2044	馬形B	19.2	3.2	0.8	脚1	Ⅲ	SF03	464
2045	斎串A？	(29.0)	2.0	0.3	左3・右3	Ⅲ	SF03	860
2046	斎串？	(20.8)	1.2	0.4		Ⅲ	SF03	864
2047	斎串？	(27.9)	1.8	0.4		Ⅲ	SF03	861
2048	斎串？	(36.0)	1.8	0.3		Ⅲ	SF03	859
2049	斎串A	57.4	1.8	0.3	左5・右3	Ⅲ	SF03	460
2050	斎串A	(48.3)	3.1	1.0	左4・右3	Ⅲ	SF03	794
2051	斎串E	(52.0)	1.6	0.1	左4・右2	Ⅲ	SF03	814
2052	斎串A	36.7	1.6	0.6	左2・右2	Ⅲ	SF03	470
2053	斎串A	46.0	1.3	0.4	左?・右?	Ⅲ	SF03	455
2054	斎串A	55.3	1.2	0.3	左2・右2	Ⅲ	SF03	433
2055	斎串A	57.5	1.4	0.5	左3・右2	Ⅲ	SF03	473
2056	斎串A	55.0	1.4	0.3	左1・右1	Ⅲ	SF03	467
2057	斎串A	(51.5)	1.1	0.3	左2・右2	Ⅲ	SF03	471
2058	斎串A	56.4	1.3	0.6	左3・右3	Ⅲ	SF03	476
2059	斎串A	55.6	1.2	0.4	左1・右2	Ⅲ	SF03	466
2060	斎串A	54.8	0.9	0.3	左2・右2	Ⅲ	SF03	432
2061	斎串A	56.4	1.5	0.5	左2・右4	Ⅲ	SF03	474
2062	斎串A	58.0	1.4	0.4	左2・右?	Ⅲ	SF03	469
2063	斎串A	56.3	1.4	0.5	左4・右4	Ⅲ	SF03	475
2064	斎串A	(31.7)	1.4	0.3	左2・右1	Ⅲ	SF03	807

No.	器　種	長さ	幅	厚さ	備　考	区	出土遺構・層位	登録No.
2065	斎串A	(27.0)	1.5	0.3	左1・右2	Ⅲ	SF03	802
2066	斎串A	25.4	1.9	0.4	左2・右2	Ⅲ	SF03	811
2067	斎串C2	21.1	0.6	0.6		Ⅲ	SF03	449
2068	斎串D	(11.1)	1.2	0.3	上?	Ⅲ	SF03	803
2069	斎串D	17.8	1.2	0.3	上1	Ⅲ	SF03	879
2070	斎串D	14.7	1.4	0.4	上0	Ⅲ	SF03	840
2071	斎串D	17.0	2.0	0.5	上0	Ⅲ	SF03	941
2072	斎串C2?	(15.1)	1.1	0.5		Ⅲ	SF03	839
2073	斎串C2	(10.1)	0.6	0.3		Ⅲ	SF03	445
2074	用途不明	9.4	12.1	8.0		Ⅲ	SF03	831
2075	人形A	20.3	5.5	0.6	左3・右1	Ⅲ	SF03	383
2076	人形A	27.7	(3.7)	0.6	腰有・左?・右1	Ⅲ	SF03	384
2077	馬形B	29.9	3.4	0.4	脚4	Ⅲ	SF03	378
2078	斎串A	(32.4)	2.6	0.4	左3・右3	Ⅲ	SF03	376
2079	斎串A	(55.5)	2.2	0.4	左2・右3	Ⅲ	SF03	377
2080	斎串A	(39.5)	2.1	0.4	左3・右3	Ⅲ	SF03	373
2081	斎串A	41.8	2.2	0.3	左3・右3	Ⅲ	SF03	370
2082	斎串A	47.8	2.4	0.2	左2・右?	Ⅲ	SF03	381
2083	斎串A	(40.0)	2.0	0.5	左5・右3	Ⅲ	SF03	372
2084	斎串A	(36.1)	2.5	0.5	左2・右2	Ⅲ	SF03	379
2085	斎串C2?	(15.1)	0.7	0.3		Ⅲ	SF03	394
2086	斎串D	(14.1)	0.9	0.3	上?	Ⅲ	SF03	388
2087	斎串D	15.8	1.2	0.5	上3	Ⅲ	SF03	385
2088	斎串D	16.0	1.0	0.4	上0	Ⅲ	SF03	387
2089	斎串D	15.3	0.9	0.3	上0	Ⅲ	SF03	389
2090	斎串D	17.3	1.4	0.3	上0	Ⅲ	SF03	390
2091	斎串D	15.6	0.9	0.2	上0	Ⅲ	SF03	393
2092	斎串D	18.1	0.9	0.5	上0	Ⅲ	SF03	392
2093	斎串D	18.7	0.9	0.3	上0	Ⅲ	SF03	391
2094	円形曲物底板(木釘結合)	径	16.2	0.7		Ⅲ	SF03	884
2095	人形D	(14.6)	2.5	0.3	左1・右?	Ⅲ	SF03	401
2096	人形A	15.9	5.4	0.7	左1・右1	Ⅲ	SF03	405
2097	人形A	22.0	5.7	0.5	左1・右1	Ⅲ	SF03	406
2098	馬形B	(13.7)	1.8	0.9	脚0	Ⅲ	SF03	424
2099	斎串A	(36.1)	1.5	0.7	左2・右2	Ⅲ	SF03	408
2100	斎串A	42.9	1.5	0.5	左3・右2	Ⅲ	SF03	413
2101	斎串A	44.7	1.2	0.5	左1・右1	Ⅲ	SF03	414
2102	斎串A	44.5	1.7	0.3	左3・右3	Ⅲ	SF03	418
2103	斎串A	40.4	1.6	0.6	左3・右1	Ⅲ	SF03	417
2104	斎串A	44.5	2.1	0.4	左2・右3	Ⅲ	SF03	407
2105	斎串A	45.2	2.1	0.2	左2・右4	Ⅲ	SF03	426
2106	斎串A	44.2	2.2	0.2	左4・右2	Ⅲ	SF03	416
2107	斎串A	44.1	(2.6)	0.5	左?・右2	Ⅲ	SF03	415
2108	出ト駄A(3孔)	49.7	12.2	1.9	ト端側欠損の可能性あり	Ⅲ	SF03	365
2109	人形A	21.5	3.5	0.6	左4・右4	Ⅲ	SF03	279
2110	人形A	(26.8)	5.1	0.6	左1・右1	Ⅲ	SF03	366
2111	部材	32.0	10.8	1.4		Ⅲ	SF03	284
2112	部材	32.1	11.4	2.5		Ⅲ	SF03	269
2113	馬形B	18.6	2.8	0.6	脚1	Ⅲ	SF03	462
2114	馬形B	18.3	2.9	0.6	脚1	Ⅲ	SF03	472
2115	馬形B	31.2	3.4	0.6	脚4	Ⅲ	SF03	367
2116	人形D	25.1	1.8	0.5	刻顔・左1・右1	Ⅲ	黒褐色ピート層	361
2117	馬形B	22.9	2.1	0.8	脚1	Ⅲ	黒褐色ピート層	359
2118	馬形B	25.1	2.8	0.6	脚4	Ⅲ	黒褐色ピート層	179
2119	円形曲物底板(木釘結合)	径	17.0	0.5		Ⅲ	黒褐色ピート層	360
2120	斎串A	37.4	1.3	0.4	左2・右2	Ⅲ	黒褐色ピート層	218
2121	斎串A	26.5	1.7	0.6	左1・右2	Ⅲ	黒褐色ピート層	216
2122	斎串A	33.6	2.8	0.5	左3・右1	Ⅲ	黒褐色ピート層	215
2123	斎串A	38.1	1.5	0.2	左3・右2	Ⅲ	黒褐色ピート層	217
2124	板状材	(17.6)	2.5	0.6		Ⅲ	黒褐色ピート層	232
2125	斎串E	(25.0)	2.3	0.4	左0・右0	Ⅲ	黒褐色ピート層	214
2126	斎串D	15.3	1.5	0.4	上0	Ⅲ	黒褐色ピート層	239
2127	斎串E	(13.0)	2.2	0.5	左?・右0	Ⅲ	黒褐色ピート層	213
2128	人形A	(15.0)	3.1	0.8	左1・右?	Ⅲ	黒褐色ピート層	195
2129	人形C	42.2	3.4	0.7	左2・右2	Ⅲ	黒褐色ピート層	196
2130	馬形B	16.1	2.8	0.6	脚4	Ⅲ	黒褐色ピート層	478
2131	馬形B	17.1	3.9	0.6	脚4	Ⅲ	黒褐色ピート層	477
2132	馬形B	18.9	3.5	0.7	脚1・鬣2	Ⅲ	黒褐色ピート層	66
2133	用途不明	32.0	12.6	1.2		Ⅲ	黒褐色ピート層	65

No.	器　種	長さ	幅	厚さ	備　考	区	出土遺構・層位	登録No.
2134	田下駄A(4孔)	22.4	21.8	1.3		Ⅲ	黒褐色ピート層	69
2135	台状枠歯？	44.2	(4.5)	2.0	2139の歯部か？	Ⅲ	機械立ち割り	73
2136	部材	31.3	3.9	1.8		Ⅲ	機械立ち割り	71
2137	台状枠支軸	(35.5)	2.4	2.8		Ⅲ	機械立ち割り	74
2138	台状枠支軸	38.2	3.3	2.0		Ⅲ	機械立ち割り	70
2139	台状枠歯(孔留)	42.9	(9.1)	2.1		Ⅲ	機械立ち割り	67
2140	台状枠歯(孔留)	43.4	15.3	3.1		Ⅲ	機械立ち割り	68
2141	馬形A	(18.4)	2.8	0.4	脚4	Ⅲ	SF04	559
2142	馬形A	21.0	4.2	0.8	脚4	Ⅲ	SF04	550
2143	紡錘車形	3.1	(3.0)	0.3		Ⅲ	SF04	557
2144	用途不明	6.7	3.4	1.4		Ⅲ	SF04	558
2145	斎串D	14.6	1.2	0.3	上4	Ⅲ	SD17	130
2146	円形曲物底板(木釘結合)	復径	15.6	0.7		Ⅲ	SF04	552
2147	檜扇形木器	(25.4)	25.4	0.5	横線を墨書	Ⅲ	SF04	943
2148	人形B	(13.1)	1.2	0.5	左?・右1	Ⅲ	SD17	489
2149	人形A	(17.9)	3.7	0.3	左?・右?	Ⅲ	SD17	845
2150	人形A	30.4	2.8	0.5	左2・右2	Ⅲ	SD17	142
2151	人形A	30.8	2.4	0.4	左1・右2	Ⅲ	SD17	159
2152	人形A	31.1	2.7	0.5	左2・右2	Ⅲ	SD17	160
2153	馬形B	17.7	3.7	0.6	脚1	Ⅲ	SD17	492
2154	馬形B	19.7	2.5	0.5	脚4	Ⅲ	SD17	530
2155	馬形B	(20.9)	3.0	1.3	脚1	Ⅲ	SD17	800
2156	馬形B	21.4	3.0	0.6	脚1	Ⅲ	SD17	397
2157	馬形？	(17.1)	2.8	0.6	脚4？	Ⅲ	SD17	207
2158	馬形B	26.8	4.1	0.4	脚4	Ⅲ	SD17	853
2159	馬形B	(31.3)	4.9	0.8	脚4	Ⅲ	SD17	395
2160	斎串A	25.2	1.3	0.3	左2・右2	Ⅲ	SD17	92
2161	斎串A	24.9	1.3	0.3	左2・右2	Ⅲ	SD17	91
2162	斎串A	33.7	1.5	0.6	左1・右1	Ⅲ	SD17	198
2163	斎串A	34.5	1.2	0.4	左1・右2	Ⅲ	SD17	90
2164	斎串E	(32.2)	1.6	0.6	左1・右1	Ⅲ	SD17	94
2165	斎串D	13.1	1.2	0.2	上0	Ⅲ	SD17	131
2166	斎串D	12.2	1.3	0.3	上0	Ⅲ	SD17	78
2167	斎串D	11.3	1.3	0.3	上0	Ⅲ	SD17	77
2168	斎串D	14.0	1.1	0.3	上0	Ⅲ	SD17	93
2169	斎串D	13.8	1.2	0.3	上2	Ⅲ	SD17	79
2170	斎串D	14.7	1.3	0.3	上1	Ⅲ	SD17	81
2171	斎串D	12.2	1.3	0.3	上8	Ⅲ	SD17	87
2172	斎串D	13.0	1.2	0.3	上1	Ⅲ	SD17	89
2173	斎串D	16.8	1.4	0.3	上9	Ⅲ	SD17	86
2174	用途不明	(25.2)	(2.8)	2.3		Ⅲ	SD17	182
2175	用途不明	(29.0)	6.3	2.7		Ⅲ	SD17	178
2176	方形枠支柱	56.6	3.2	3.3		Ⅲ	SD17	166
2177	方形枠横桟	(20.9)	1.5	1.3		Ⅲ	SD17	945
2178	馬形B	21.8	3.1	0.5	脚4	Ⅲ	SD16	242
2179	馬形B	26.0	1.6	1.3	脚0	Ⅲ	SD16	202
2180	馬形B	20.3	3.4	0.5	脚4・鬣1	Ⅲ	SD16	205
2181	馬形B	15.7	3.9	1.4	脚4・鬣1	Ⅲ	SD16	286
2182	斎串A	(23.1)	1.4	0.3	左4・右3	Ⅲ	SD16	244
2183	斎串A	30.9	1.8	0.5	左2・右4	Ⅲ	SD16	246
2184	方形枠横桟？	37.6	1.8	1.8		Ⅲ	SD16	519
2185	馬形B	26.1	2.8	0.8	脚4	Ⅲ	灰白色粗砂・粗砂	534
2186	馬形B	18.9	4.2	0.9	脚4	Ⅲ	灰白色粗砂・粗砂	538
2187	馬形B	22.7	4.7	0.6	脚4	Ⅲ	灰白色粗砂・粗砂	531
2188	斎串A	49.8	2.4	0.4	左4・右3	Ⅲ	灰白色粗砂・粗砂	539
2189	斎串A	25.8	1.2	0.5	左1・右2	Ⅲ	灰白色粗砂・粗砂	152
2190	斎串A	29.6	1.3	0.4	左5・右6	Ⅲ	灰白色粗砂・粗砂	532
2191	斎串A	34.5	2.2	0.4	左2・右2	Ⅲ	灰白色粗砂・粗砂	540
2192	斎串D	13.7	1.3	0.4	上0	Ⅲ	灰白色粗砂・粗砂	193
2193	斎串D	14.4	1.2	0.4	上9	Ⅲ	灰白色粗砂・粗砂	487
2194	用途不明	(27.0)	(4.8)	1.1		Ⅲ	灰白色粗砂・粗砂	191
2195	円形曲物底板(樺皮結合)	復径	17.0	0.5		Ⅲ	灰白色粗砂・粗砂	102
2196	部材	36.7	9.4	5.6	部材の転用	Ⅲ	灰白色粗砂・粗砂	545
2197	舟形	39.6	7.2	2.7	部材の再利用	Ⅲ	灰白色粗砂・粗砂	169
2198	火鑽板	(52.5)	5.2	1.5		Ⅲ	灰白色粗砂・粗砂	83
2199	人形C	(67.7)	12.2	1.2	左?・右2	Ⅲ	排水溝	876
2200	人形D	(27.7)	3.5	0.8	左2・右2	Ⅲ	排水溝	894
2201	人形A	(14.6)	3.6	0.4	左3・右1	Ⅲ	排水溝	105
2202	人形B	(18.4)	4.3	0.6	左2・右4	Ⅲ	排水溝	106

No.	器　種	長さ	幅	厚さ	備　考	区	出土遺構・層位	登録No.
2203	馬形B	21.4	2.8	0.6	脚4	Ⅲ	排水溝	488
2204	馬形B	(21.7)	3.5	0.6	脚4	Ⅲ	排水溝	107
2205	馬形B	21.3	3.4	0.8	脚4	Ⅲ	排水溝	895
2206	馬形A	24.0	4.3	1.0	脚4・鬣1	Ⅲ	排水溝	480
2207	馬形A	18.1	3.8	0.6	脚4？	Ⅲ	排水溝	190
2208	馬形	18.8	(1.6)	0.4	脚1	Ⅲ	排水溝	503
2209	独楽	8.0	4.6	3.8		Ⅲ	排水溝	888
2210	独楽	5.0	3.9	3.3		Ⅲ	排水溝	889
2211	檜扇形木器	(11.2)	2.7	0.4		Ⅲ	排水溝	887
2212	人形C	27.9	(1.1)	0.2	左?・右3	Ⅲ	排水溝	499
2213	斎串A	(29.0)	1.6	0.7	左1・右1	Ⅲ	排水溝	192
2214	斎串？	(23.0)	3.5	1.1		Ⅲ	排水溝	188
2215	紐かけのある棒状材	29.9	1.7	1.6		Ⅲ	排水溝	901
2216	紐かけのある棒状材	(25.7)	3.5	3.5		Ⅲ	排水溝	505
2217	人形A	27.0	2.0	0.4	左2・右2	Ⅲ	機械掘削	237
2218	人形D	(20.0)	3.4	0.4	左2・右2	Ⅲ	機械掘削	235
2219	人形A	19.8	2.9	0.3	左2・右3	Ⅲ	機械掘削	236
2220	斎串A	32.5	2.0	0.4	左2・右3	Ⅲ	機械掘削	223
2221	斎串A	38.6	2.0	0.8	左2・右2	Ⅲ	機械掘削	224
2222	斎串A	41.6	1.5	0.3	左2・右2	Ⅲ	機械掘削	226
2223	斎串A	32.3	1.6	0.3	左?・右3	Ⅲ	機械掘削	219
2224	斎串A	25.6	1.9	0.4	左2・右2	Ⅲ	機械掘削	222
2225	斎串D	18.9	1.4	0.4	上5	Ⅲ	機械掘削	294
2226	斎串D	11.8	1.2	0.3	上0	Ⅲ	機械掘削	293
2227	人形C	(20.0)	38.0	0.8	墨顔・左?・右?	Ⅳ	第10層	13
2228	人形C	(18.8)	4.2	0.6	刻顔・左?・右?	Ⅳ	第10層	7
2229	人形C？	(17.8)	1.9	0.7	左?・右?	Ⅳ	第10層	17
2230	馬形？	(18.5)	4.1	0.8		Ⅳ	第10層	16
2231	馬形？	25.6	(2.1)	0.4	脚4	Ⅳ	排水溝	24
2232	皿	復径・高	18.0	1.1		Ⅳ	第10層	10
2233	皿	復径・高	17.5	1.5		Ⅳ	第10層	26
2234	皿	復径・高	18.0	1.0	内面は傷み著しい。口縁端を欠く	Ⅳ	第10層	11
2235	擬高台付皿	径	18.0	1.5	口縁端を欠く	Ⅳ	第10層	12
2236	円形曲物底板(樺皮結合)	復径	54.0	0.7	側板のアタリあり	Ⅳ	第10層	8
2237	円形曲物底板(樺皮結合)	(13.3)	2.9	0.6		Ⅳ	第10層	6
2238	用途不明	21.1	5.7	1.9		Ⅳ	第10層	3
2239	机の脚	18.0	3.6	3.5		Ⅳ	第10層	2
2240	部材	17.5	2.4	2.5		Ⅳ	第10層	4
2241	錐柄	(22.5)	1.9	1.6	孔の深さ約2.7cm	Ⅳ	第10層	5
2242	木錘？	16.6	3.8	3.5	傷み激しい	Ⅳ	第10層	25
2243	台状枠歯？	(21.0)	(3.9)	1.6	結合方法不明	Ⅳ	第10層	1
2244	楔	5.6	1.8	1.0		Ⅳ	第10層	15
2245	板状材	(19.2)	4.8	1.8		Ⅳ	第12層	18
2246	板状材	14.5	3.4	2.0		Ⅳ	第10層	9
2247	用途不明	13.7	3.0	1.1	左側面に圧迫痕あり	Ⅳ	第10層	14
2248	斎串A	39.0	1.5	0.6	左3・右3	Ⅳ	ＳＰ０１	28
2249	斎串A	39.0	2.5	0.5	左3・右3	Ⅳ	ＳＰ０１	27
2250	用途不明	6.1	2.3	2.1		Ⅳ	柵列ピット	19
2251	箸？	(29.0)	0.9	0.6		Ⅳ	ピット	20
2252	箸？	(21.7)	0.8	0.7		Ⅳ	ピット	21
2253	用途不明	(28.6)	4.1	2.3	先端尖る	Ⅳ	ピット	23
2254	部材	15.6	10.0	6.7	臍穴あり	Ⅳ	ＳＰ０３	22
2255	人形C	(37.0)	4.5	0.8	左1・右1	確	間組工区立会表採	29
2256	木簡(０３３型式)	(7.5)	(1.6)	0.4	人形？に転用か	Ⅴ	第３面	14
2257	付札(０３２型式)	(15.8)	3.8	0.7		Ⅴ	第３面	10
2258	人形C	(26.1)	3.8	0.6	刻顔・左6・右4	Ⅴ	第３面	346
2259	人形D	(11.5)	3.1	0.7	左?・右?	Ⅴ	第３面	293
2260	馬形A	22.5	4.4	0.9	脚4	Ⅴ	第３面	226
2261	馬形A	(20.2)	4.8	0.7	脚4？	Ⅴ	第３面	344
2262	馬形A	32.1	3.2	0.7	脚4？・表側の口部～腹部にかけて削り	Ⅴ	第３面	343
2263	馬形B？	21.5	3.2	1.2	胴部で折れか？	Ⅴ	第３面	285
2264	馬形	15.0	(2.4)	0.5	脚0	Ⅴ	第３面	235
2265	斎串A	36.8	2.1	0.6	左6・右4	Ⅴ	第３面	207
2266	舟形	(24.1)	3.1	1.3		Ⅴ	第３面	305
2267	舟形	(17.0)	3.0	0.7		Ⅴ	第３面	218
2268	楕円形曲物底板	(40.1)	(8.4)	1.2	耳付き	Ⅴ	第３面	347
2269	楕円形曲物底板	(61.9)	(12.9)	1.0		Ⅴ	第３面	374
2270	穂摘具	(15.3)	4.6	1.0	使用のためか刃がこぼれている	Ⅴ	第３面	339
2271	木錘	16.5	5.4	2.7	部分的に樹皮残存	Ⅴ	第３面	209

No.	器　種	長さ	幅	厚さ	備　　考	区	出土遺構・層位	登録No.
2272	木錘	18.1	6.8	3.7	全体に刃痕あり	V	第３面	261
2273	方形枠横桟	(50.2)	4.0	0.8		V	第３面	240
2274	方形枠	(8.9)	44.8	3.2	横桟の上面に２カ所、側面内側の中央に１カ所浅い凹部あり	V	第３面	312
2275	田下駄Ｄ(無孔・ホゾ留)	49.5	13.5	2.2	表裏面に手斧痕。枠との結合痕跡は不明	V	第３面	292
2276	田下駄Ａ(3欠)	31.0	20.5	2.0		V	第３面	238
2277	田下駄Ｂ(3孔・抉留)	36.3	10.0	1.5		V	第３面	197
2278	田下駄Ａ(4欠)	34.5	13.1	1.7	下端に刃痕あり	V	第３面	322
2279	田下駄Ａ(4欠)	36.9	9.6	2.2	表側に手斧痕。２つの切欠きに紐圧痕	V	第３面	287
2280	田下駄Ａ(4欠)	48.9	11.9	1.7		V	第３面	326
2281	田下駄Ａ(4欠)	48.4	13.7	1.3		V	第３面	257
2282	田下駄Ａ(4欠)	48.5	11.6	1.6		V	第３面	325
2283	田下駄Ａ(4欠)	43.3	10.8	1.5	上端に刃痕あり	V	第３面	324
2284	田下駄Ａ(4欠)	64.9	12.7	1.7		V	第３面	427
2285	田下駄Ａ(4欠)	65.8	13.6	1.8	両側面を面取りする。相対する切欠き間に刻線あり。上端を薄く削る	V	第３面	390
2286	田下駄Ａ(4欠)	63.8	13.0	1.3	表側は手斧痕が明瞭	V	第３面	381
2287	田下駄Ａ(4欠)	54.1	8.2	1.6	刃痕若干あり	V	第３面	54
2288	ささら	(17.2)	1.8	0.8	片側面を鋸歯状に削る	V	第３面	317
2289	楔	18.9	6.7	2.6	全面に加工痕が明瞭に残る	V	第３面	307
2290	火鑽板	(25.4)	4.2	2.2		V	第３面	208
2291	杓子形木器	30.5	6.8	1.7	身を平坦に削る	V	第３面	366
2292	用途不明	(6.4)	(2.4)	0.7		V	第３面	332
2293	用途不明	(7.7)	4.3	0.8		V	第３面	195
2294	用途不明	(14.5)	2.7	1.2		V	第３面	198
2295	棒状材	(45.4)	1.6	1.4	全体を細かく削る	V	第３面	251
2296	部材	30.8	(12.5)	2.3		V	第３面	60
2297	自在	28.5	7.4	2.4	くびれ部分側面を面取りする。表側上半に無数の擦痕あり	V	第３面	286
2298	用途不明	12.5	4.9	4.6	丸材の両端を削り細くする	V	第３面	313
2299	井戸枠材	66.5	16.2	4.2	表側全面に手斧痕跡が残る。一端に結合痕あり	V	第３面	446
2300	紐かけのある棒状材	55.8	6.2	2.6		V	第３面	297
2301	孔あきの板	(62.1)	(9.3)	2.4	右側面中央が浅く窪む	V	第３面	429
2302	孔あきの板	47.7	8.0	1.7		V	第３面	260
2303	部材	67.0	15.7	4.5	孔は２段に穿つ	V	第３面	419
2304	部材	(106.3)	3.1	1.6	表側全体を削る。下端部は摩滅する	V	第３面	418
2305	孔あきの板	(114.5)	15.0	2.6	上端は摩滅する	V	第３面	432
2306	孔あきの板	117.3	15.2	1.8		V	第３面	385
2307	孔あきの板	(78.3)	16.3	2.3	丸材の外側を利用し粗く穿孔、下端は手斧で面取りする	V	第３面	388
2308	木簡(０３９型式)	(28.0)	3.6	0.4		V	第２面	5
2309	木簡(０１９型式)	(15.2)	2.3	0.5		V	第２面	13
2310	木簡(０１９型式)	(12.1)	2.5	0.3		V	第２面	4
2311	木簡(０８１型式)	(18.4)	2.0	0.5		V	第２面	6
2312	木簡(０１９型式)	(8.3)	(2.1)	0.4		V	第２面	7
2313	木簡(０８１型式)	(3.1)	(1.3)	0.2		V	第２面	8
2314	人形Ｃ	(19.3)	7.0	0.7	墨顔・左?・右?	V	第２面	444
2315	人形Ｃ	(12.0)	3.7	0.5	墨顔・左?・右?・傷みで鼻以下の墨痕は不明瞭	V	第２面	9
2316	人形Ｃ？	(8.4)	(2.7)	0.4	墨顔・左?・右?	V	第２面	128
2317	人形Ｃ	32.4	4.1	0.7	左3・右4	V	第２面	180
2318	人形Ａ	(24.2)	6.7	1.3	腰有・左?・右2・頭部両側を切欠く	V	第２面	341
2319	馬形Ａ	21.9	3.2	0.8	脚４	V	第２面	302
2320	斎串Ｅ	(13.8)	2.8	0.6	左右10～11の切欠きは大部分欠損する	V	第２面	186
2321	刀形?	(27.0)	1.8	0.7	茎をかたどる	V	第２面	331
2322	剣形	(21.9)	2.7	0.4	茎を型どり、身に小孔を穿つ。その上方に若干の刃痕あり	V	第２面	203
2323	高台付皿	復径・高	23.0	2.6	１／４残存。傷み激しい	V	第２面	151
2324	板状材	41.0	(9.8)	1.2	側面中央を小さく切欠く。表側には一部加工痕が残る	V	第２面	179
2325	円形曲物底板(木釘結合)	径	13.6	0.8	木釘の孔は３ヶ。表側に多数の刃痕あり。	V	第２面	134
2326	田下駄Ｂ(3孔・孔留)	34.5	9.1	1.5	裏側に円形枠の圧痕が残る	V	第２面	299
2327	田下駄Ｂ(3孔・孔留)	40.8	10.0	1.3	左足用。表側に親指の、裏側に円形枠の圧痕が残る	V	第２面	177
2328	田下駄Ａ(3欠)	29.8	15.7	2.7		V	第２面	182
2329	台状枠歯(釘留)	39.4	14.0	3.1	全体に手斧痕が残る。木釘孔は３ヶ所。	V	第２面	143
2330	田下駄Ａ(3孔)	25.7	13.0	2.4	左足用。加工痕が良く残る。表側の一部に刃痕あり	V	第２面	355

No.	器　種	長さ	幅	厚さ	備　考	区	出土遺構・層位	登録No.
2331	杓子形木器	17.6	4.5	0.6	全体に漆様の塗布があるが身側面は剥落している	V	第２面	126
2332	斎串Ｃ2	17.9	0.7	0.6		V	第２面	245
2333	箸？	(22.2)	1.0	1.0	細い丸棒に削りだす	V	第２面	350
2334	有孔の栓	25.0	4.0	2.7	頭部と軸の境に圧痕あり	V	第２面	171
2335	用途不明	19.3	(3.8)	1.0	上端に削りだした突帯は磨滅している	V	第２面	301
2336	用途不明	(14.2)	2.2	0.7		V	第２面	129
2337	用途不明	43.1	10.4	4.3		V	第２面	123
2338	人形頭部	(13.4)	(2.9)	0.4		V	第２面	191
2339	板状材	(18.5)	6.6	0.9		V	第２面	137
2340	用途不明	14.5	6.4	2.1	右側面に焦げ痕あり	V	第２面	133
2341	井戸枠材	101.8	21.5	5.0	仕口部に結合による圧痕あり	V	第２面	400
2342	井戸枠材	102.7	26.9	5.0	仕口部に結合による圧痕あり	V	第２面	401
2343	井戸枠材	102.3	21.6	5.0	仕口部にケビキ線と結合による圧痕あり	V	第２面	405
2344	井戸枠材	102.3	24.0	5.0	仕口部に結合による圧痕あり	V	第２面	416
2345	井戸枠材	102.5	27.4	4.8	仕口部に結合による圧痕あり	V	第２面	403
2346	井戸枠材	101.1	24.0	4.9	仕口部に結合による圧痕あり	V	第２面	404
2347	井戸材	(70.7)	13.1	14.2		V	SE01	434
2348	井戸材	(76.3)	14.2	13.7		V	SE01	435
2349	井戸材	(70.0)	14.0	14.0		V	SE01	436
2350	井戸材	(65.0)	13.0	13.2		V	SE01	433
2351	井戸材	(123.0)	17.2	4.5		V	SE01	398
2352	井戸材	137.2	14.8	3.0		V	SE01	442
2353	井戸材	(118.2)	16.4	3.9		V	SE01	441
2354	井戸材	(120.0)	15.8	4.3	手斧痕残る	V	SE01	440
2355	井戸材	105.3	25.0	4.7		V	SE01	437
2356	井戸材	108.4	24.8	4.1		V	SE01	439
2357	井戸材	107.0	23.5	4.0		V	SE01	399
2358	井戸材	106.9	27.1	4.3		V	SE01	402
2359	井戸材	107.5	23.8	4.2		V	SE01	445
2360	井戸材	105.3	23.8	4.4		V	SE01	438
2361	井戸材	(97.0)	19.5	3.2		V	SE01	397
2362	円形曲物側板	径	56.7	22.5	２個体が重なる。釘穴は確認できず。内側全体に罫引き線を入れる	V	SE01	447
2363	木簡（０８１型式）	(12.4)	3.5	0.5		V	第１面	1
2364	木簡（０１９型式）	(10.4)	(2.1)	0.2		V	第１面	2
2365	木簡（０８１型式）	(11.6)	2.2	0.4		V	第１面	3
2366	木簡（０１９型式）	(12.3)	(3.6)	0.3		V	第１面	11
2367	木簡（０３２型式）	24.0	(2.9)	0.5	切欠き部裏側に紐痕あり	V	第１面	90
2368	付札（０３２型式）	10.2	3.4	0.8		V	第１面	33
2369	人形？	(8.2)	(2.8)	0.3	墨顔・絵字の可能性もある	V	第１面	12
2370	人形Ａ	(8.6)	2.9	0.5	腰有・手の切掛け無しか？	V	第１面	104
2371	人形Ｃ	(21.0)	(3.4)	0.4	墨顔・左?・右?	V	第１面	84
2372	斎串Ｂ	(29.1)	3.9	0.7	左4・右3	V	第１面	108
2373	人形Ａ？	(16.5)	(2.6)	0.6	左?・右?	V	第１面	18
2374	擬高台付皿	復径・高	23.4	2.3	内外面に無数の刃痕あり	V	第１面	78
2375	有孔曲物底板（樺皮結合）	復径	19.0	0.5	縁に罫引き線が巡る。両端を切欠く	V	第１面	73
2376	円形曲物底板（樺皮結合）	径	18.9	0.4	側板の結合痕が弱く残る	V	第１面	50
2377	円形曲物底板（木釘結合）	径	21.6	0.8	中央付近に刃痕あり	V	第１面	29
2378	田下駄Ａ（4欠）	58.5	12.4	1.2	やや鼓形に型どる	V	第１面	413
2379	田下駄Ａ（4欠）	57.7	15.4	1.4	両端・両側面は縁が丸みを帯びる	V	第１面	414
2380	田下駄Ａ（4欠）	55.5	13.6	1.6	表側は凸部を削る。両端に刃痕あり	V	第１面	410
2381	田下駄Ｂ（3孔・孔留）	38.5	9.8	1.7	左足用。下壺の裏側に圧痕あり	V	第１面	86
2382	田下駄Ａ（3欠）	37.2	16.3	2.3		V	第１面	337
2383	田下駄Ａ（3欠）	30.9	15.9	2.9	全体に刃痕あり	V	第１面	65
2384	鍬	36.2	(15.6)	1.8		V	第１面	75
2385	留針	13.3	0.8	0.6	頭部は面取りし、身は扁平につくる	V	第１面	99
2386	木針	(9.6)	1.1	1.2	上端は穿孔箇所で欠損する	V	第１面	81
2387	紐かけのある棒状材	(10.3)	1.6	1.3	頭部を円形に削り出す	V	第１面	43
2388	紐かけのある棒状材	19.8	1.8	1.4	９角の棒状で、一端を平らに削る	V	第１面	42
2389	火鑽板	(18.6)	3.2	1.7	火鑽臼は８個と７個。臼中央の隆起するものがある	V	第１面	103
2390	用途不明	4.0	2.8	2.9	芯持ち材を六角に面取りし、両端は粗くはつって落とす	V	第１面	333
2391	孔あきの板	9.0	7.6	0.6		V	第１面	94
2392	板状材	16.0	(10.6)	4.7	鋸で切断する。井戸材(2342)の破片か？	V	第１面	31
2393	用途不明	28.5	4.9	0.9	樺皮が３重に巻かれ裏側は切れる。表面には刃痕、裏面には刻線が２本ある	V	第１面	124

No.	器　種	長さ	幅	厚さ	備　　考	区	出土遺構・層位	登録No.
2394	用途不明	7.5	2.9	0.8	表側は加工痕が良く残る	V	第1面	21

1．祭祀具関する備考欄の記入事項

墨あるいは刻みで顔などの表現有無（「墨顔・刻み顔・墨書」）

人形の腰への切欠き（「腰有」）

馬形の脚の本数（一般に「1」は底部に、「2」は体部中央の両側面に、「3」は底部と両側面に、「4」は体部の両側面の前後に、「5」は体部両側面の前後と底部に、「6」は体部両側面の3カ所に、薄板を差し込んで脚としている。）

人形の手、馬形の鬣、斎串の切掛けの確認できる最大の回数(右と左)。

2．法量は、容器の円形曲物と皿では「幅」を「径」または「復元径」に、「厚さ」を「器高」に読み替えたものがあり、その場合、「長さ」欄に「径」あるいは「復径」と記入している。

表 14　土器一覧表

番号	種別	器種	調整他	口径	器高	区	遺構・層
1	土師器	甕	口縁部外面ハケ後ナデ、内面上部ハケ、下部ナデ。体部外面縦ハケ後横ハケ、内面ケズリ後ハケ	復20.9	(26.6)	Ⅱ	SD18下層
2	土師器	甕	口縁部外面ナデ、内面ハケ後ナデ。体部外面ハケ、内面上半ケズリ、下半ケズリ後ナデ	復13.3	10.9	Ⅱ	SD18下層
3	土師器	甕	口縁部外面指頭圧後ナデ、内面磨滅、頸部外面ナデ。体部外面縦ハケ後横ハケ（部分的に縦ハケ。スス付着）、内面ケズリ後ハケ	20.5	(17.6)	Ⅱ	SD18
4	土師器	台付鉢？	体部外面ハケ、内面ナデ？。脚部ナデ		(2.6)	Ⅱ	SD18
5	須恵器	杯G	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ	復8.5	2.7	Ⅲ	SF04
6	須恵器	杯B蓋	天井部の2／3回転ヘラケズリ、見込み回転ナデ	15.5	4.1	Ⅱ	SD18
7	須恵器	杯Ⅰ	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ後ナデ。底部に板状工具痕	12.6	4.7	Ⅰ	SF05
8	須恵器	杯Ⅰ	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ	復11.4	4.3	Ⅰ	畦畔（Ⅶ層）
9	土師器	杯A	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ後ナデ	復11.9	3.5	Ⅰ	SF05
10	須恵器	杯A	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ後ナデ	13.3	4.7	Ⅱ	SF03
11	須恵器	短頸壺蓋	天井部ヘラキリ後ナデ。見込み回転ナデ	復13.8	(2.6)	Ⅰ	SF05
12	須恵器	甕	頸部外面平行タタキ後回転ナデと指ナデ・指頭圧。体部外面格子風平行タタキ後カキメ、内面同心円文タタキ	復19.5	(8.9)	Ⅰ	SF05
13	須恵器	甕	体部外面斜めと縦の平行タタキ後カキメ	19.0	43.6	Ⅲ	SD17
14	須恵器	壺	体部1／3ケズリ。頸部に2条と1条の沈線	12.2	26	Ⅲ	SD19最下層
15	土師器	甕	口縁部外面ナデ、内面ハケ。体部外面ハケ、内面ケズリ（頸部は指頭圧後ケズリ）	17.7	(8.6)	Ⅰ	SF05
16	土師器	甕	口縁部外面ハケ後ナデ、内面ナデ。体部外面ハケ、内面ケズリ	22.3	(7.7)	Ⅰ	SF05
17	土師器	甕	口縁部外面ハケ後ナデ、内面ハケ、体部内面ケズリ	18.7	(2.9)	Ⅰ	SF05
18	土師器	甕	口縁部外面ハケ後ナデ、内面ハケ、頸部内面ハケ。体部外面ハケ、内面上部ケズリ、内面下部ハケ後ナデ	14.5	18.9	Ⅱ	SD18・SF03
19	土師器	甕	口縁部外面ハケ後ナデ、内面ハケ後ナデ。体部外面ハケ、内面上ケズリ、内面中ハケ後ナデ、内面下ハケ	復19.4	17.9	Ⅱ	SD18
20	土師器	甕	口縁部外面ハケ（頸部ナデ）、内面ナデ。体部外面ハケ、内面ハケ・ケズリ	復23.8	(5.8)	Ⅰ	SF05
21	土師器	甕	口縁部内外面ハケ後ナデ（外面に強い工具痕）。体部外面ハケ、内面ケズリ後ハケ	復21.7	(6.5)	Ⅰ	SF05
22	土師器	甕	口縁部～体部外面横ハケ後縦ハケ後ナデ、口縁部内面ナデ、体部内面ケズリ	20.7	(11.6)	Ⅲ	SD19
23	土師器	甕	口縁部外面ハケ後ナデ、内面ナデ。体部外面ハケ（スス付着）、内面ケズリ、焼成後口縁部端を鋸歯状に欠く。	復23.0	(11.3)	Ⅰ	SF05
24	土師器	甕	口縁部外面ナデ、内面ハケ後ナデ。体部外面ハケ（スス付着）、内面ケズリ。	復19.7	(14.8)	Ⅰ	SF05付近他
25	土師器	甕	口縁部外面ナデ、内面ハケ後ナデ。体部外面ハケ、内面ケズリ	復21.1	(15.7)	Ⅲ	SD18
26	土師器	甕	口縁部外面ナデ、内面ハケ後ナデ。体部外面縦ハケ後横ハケ（スス付着）、内面ケズリ後ハケ。	復18.8	(20.3)	Ⅲ	SD17・SD19
27	土師器	甕	体部外面ハケ（スス付着）、内面ケズリ後ハケ。26と同一個体か？		(16.8)	Ⅲ	SD17～19
28	土師器	甕	口縁部外面指成形後斜めのハケ後横ナデ、内面ハケ。頸部内面ハケ。体部外面縦ハケ後斜めのハケ後横ハケ（スス付着）、内面ケズリ	21.0	(27.2)	Ⅱ	SD18
29	土師器	甕	口縁部内外面ハケ後ナデ。体部外面ハケ、内面ケズリ	21.5	(11.3)	Ⅱ	SD18
30	土師器	甕	口縁部外面指頭圧後ナデ、内面ハケ後ナデ。体部外面縦ハケ後横ハケ（スス付着）、内面ケズリ後ハケ.	22.4	(27.5)	Ⅱ	SD17・SD18
31	土師器	甕	口縁部内外面横ナデ、頸部外面指頭圧後横ナデ。体部外面斜めのハケ後縦ハケ、内面横ケズリ後縦ケズリ	復22.2	(13.6)	Ⅱ	SD18
32	土師器	甕	口縁部外面ハケ後ナデ、内面ハケ。体部外面ハケ（スス付着）、内面上部ケズリ、内面下部ケズリ後ナデ	20.6	(25.2)	Ⅱ	SD18
33	土師器	甕	口縁部外面ナデ、内面ハケ後ナデ。体部外面縦ハケ後横ハケ（下部はナデ）、内面上半ケズリ後強いユビナデ、内面下半ケズリ、開口部内面ヘラナデ。体部開口。内面にスス付着	復21.9	(26.8)	Ⅱ	SF03
34	土師器	鍋	口縁部外面ハケ後ナデ。体部外面ハケ（スス付着）。口縁部～体部内面ハケ	復51.4	(9.1)	Ⅰ	SF05
35	土師器	甕	口縁部ナデ（疑凹線2条か？）、体部内面ケズリ後ハケ後頸部のみナデ、外面磨滅	復12.9	(5.9)	Ⅲ	灰白シルト
36	土師器	高杯	外面磨滅、内面ケズリ		(5.7)	Ⅲ	黒灰シルト
37	土師器	器台	脚部外面不明、内面ケズリ（脚柱部内面に絞り目）		(7.1)	Ⅲ	灰白シルト
38	土師器	高杯	杯部内外面回転ナデ、杯部底外面指頭圧	復16.0	(5.6)	Ⅰ	SD01砂礫
39	土師器	高杯	脚部外面不明、内面横ナデ。三方に円形透かし		(9.5)	Ⅰ	SD08シルト
40	土師器	脚台	脚部外面～内面下半回転ナデ。脚部内面上半ハケ外面横ナデ		(4.6)	Ⅰ	SD01砂礫
41	土師器	高杯	脚部内外面横ナデ。円形透かし		(7.4)	Ⅰ	SD01砂礫
42	土師器	小型鉢	手づくね（内面は丁寧な仕上げ）	2.4	2.1	Ⅱ	灰色砂
43	土師器	小型鉢	手づくね（粗雑な作り）	3.3	3.1	Ⅱ	暗褐色腐食土
44	土師器	器台	表面磨滅	復21.8	(3.0)	Ⅱ	灰白
45	土師器	器台	疑凹線2条。内外面横ナデ	復21.9	(3.1)	Ⅰ	SD01砂礫

番号	種別	器種	調整他	口径	器高	区	遺構・層
46	須恵器	杯蓋	天井部の１／２ヘラケズリ。見込み回転ナデ	復11.8	(3.8)	Ⅰ	SD09砂礫
47	須恵器	杯蓋	天井部の１／３回転ヘラケズリ後一部工具によるナデ。見込み回転ナデ	復13.2	3.6	Ⅰ	SD07砂礫
48	須恵器	杯蓋	天井部の１／３回転ヘラケズリ。見込み回転ナデ	復13.5	(2.8)	Ⅰ	SD01砂礫
49	須恵器	杯Ｂ蓋	天井部不明、見込み回転ナデ、外面灰被り	復16.7	(2.0)	Ⅰ	SD07砂礫
50	須恵器	杯Ｇ蓋	天井部の１／２回転ヘラケズリ。見込み回転ナデ	復9.5	(2.0)	Ⅰ	SD05砂礫
51	須恵器	杯Ｇ蓋	天井部の２／３回転ヘラケズリ。見込み回転ナデ	復10.4	(2.2)	Ⅰ	SD09砂礫
52	須恵器	杯Ｂ蓋	天井部～見込み回転ナデ	復 9.3	(1.5)	Ⅰ	SD01砂礫
53	須恵器	杯Ｂ蓋	天井部の１／２回転ヘラケズリ。見込み回転ナデ	復14.3	(2.8)	Ⅰ	SD07砂礫
54	須恵器	杯身	底部１／２回転ヘラケズリ。見込み回転ナデ、	復12.6	(3.7)	Ⅰ	SD05砂礫
55	須恵器	高杯	杯部外面１／２まで回転ヘラケズリ。底部ヘラキリ後ナデ？。見込み回転ナデ	復11.5	(3.9)	Ⅰ	SD05砂礫
56	須恵器	高杯	杯部見込み不定方向ナデ。脚部回転ナデ。沈線１条・・・		(7.5)	Ⅰ	SD07砂礫
57	須恵器	高杯	杯部底回転ヘラケズリ。見込み回転ナデ。脚部回転ナデ、沈線１条		(8.4)	Ⅰ	SD01砂礫
58	須恵器	甕	頸部上方櫛描直線文。体部中央櫛描列点文と沈線１条。底部手廻しのケズリ後ナデ		(11.1)	Ⅰ	SD01砂礫
59	須恵器	壺	頸部櫛描波状文。体部上方櫛描列点文		(4.2)	Ⅰ	SD01砂礫
60	須恵器	高杯	杯部底回転ヘラケズリ。見込み回転ナデ。杯部外面沈線２条	14.4	12.9	Ⅰ	SD05砂礫
61	須恵器	杯Ｂ蓋	天井部の１／４回転ヘラケズリ？。見込み回転ナデ	復15.3	(1.9)	Ⅰ	SD04シルト
62	須恵器	杯Ｂ蓋	天井部の１／４回転ヘラケズリ。見込み回転ナデ	復14.8	(1.1)	Ⅰ	SD09砂礫
63	須恵器	杯Ｂ蓋	天井部の１／３回転ヘラケズリ。見込み回転ナデ	復14.8	(2.4)	Ⅰ	SD05砂礫
64	須恵器	杯Ｂ蓋	天井部の１／３回転ヘラケズリ。見込み乱ナデ	復17.4	(1.8)	Ⅰ	SD01砂礫
65	須恵器	皿Ａ	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ	復14.8	2	Ⅰ	SD09砂礫
66	須恵器	皿Ａ	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ	復13.6	2.4	Ⅰ	SD01砂礫
67	須恵器	皿Ａ	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ後一部ナデ	13.8	2.4	Ⅰ	SD01砂礫
68	須恵器	杯Ａ	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ	復13.2	3.8	Ⅰ	SD07砂礫
69	須恵器	杯Ａ	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ	復13.7	3.5	Ⅰ	SD08砂礫
70	須恵器	杯Ａ	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ	復11.5	3.6	Ⅰ	SD01砂礫
71	須恵器	杯Ａ	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ	12.6	4.1	Ⅰ	SD07砂礫
72	須恵器	杯Ａ	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ（押圧痕）	14.2	3.6	Ⅰ	SD08砂礫
73	須恵器	杯Ａ	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ	復12.3	(3.8)	Ⅰ	SD01砂礫
74	土師器	杯Ａ	見込み回転ナデ（中央のみ一定方向のナデ）。底部ヘラキリ。内外面赤彩	復11.5	3.2	Ⅰ	SD05砂礫
75	須恵器	杯Ａ	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ後一部ナデ	13.3	3.6	Ⅰ	SD01砂礫
76	須恵器	杯Ａ	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ	復13.8	4.1	Ⅰ	SD01砂礫
77	須恵器	杯Ａ	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ・一定方向のナデ	14.6	4	Ⅰ	SD01砂礫
78	須恵器	杯Ａ	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ？	復12.8	(3.3)	Ⅰ	SD04シルト
79	須恵器	杯Ａ	見込み一定方向のナデ。底部ヘラキリ	復12.4	4.3	Ⅱ	
80	土師器	杯Ａ	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ	復10.7	4.3	Ⅰ	SD08砂礫
81	須恵器	杯Ａ	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ後一部ナデ。墨書「井」		(1.1)	Ⅰ	SD01砂礫
82	須恵器	杯Ｂ	見込み回転ナデ（中央仕上げナデ）。底部ヘラキリ後ナデ	復12.9	3.6	Ⅰ	SD07砂礫
83	須恵器	杯Ｂ	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ	復13.4	4.1	Ⅰ	SD09砂礫
84	須恵器	杯Ｂ	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ	復12.8	3.6	Ⅱ	灰白
85	須恵器	杯Ｂ	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ	12.9	3.7	Ⅰ	SD08シルト
86	須恵器	杯Ｂ	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ後ナデ。墨書「福」		(1.4)	Ⅰ	SD01砂礫
87	須恵器	杯Ｂ	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ	復13.3	3.5	Ⅰ	SD09砂礫
88	須恵器	杯Ｂ	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ後ナデ	復13.7	4.2	Ⅱ	灰白
89	須恵器	杯Ｂ	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ後ナデ。墨書「出石二」	復9.8	(4.2)	Ⅰ	SD01砂礫
90	須恵器	杯Ｂ	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ	復14.6	3.7	Ⅰ	SD01砂礫
91	須恵器	杯Ｂ	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ	復13.4	3.6	Ⅰ	SD09砂礫
92	須恵器	杯Ｂ	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ	復13.4	4.1	Ⅰ	SD01砂礫
93	須恵器	杯Ｂ	見込み一定方向のナデ。底部ヘラキリ後ナデ。墨書「神」	12.2	3.9	Ⅰ	SD08砂礫
94	須恵器	杯Ｂ	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ後ナデ。墨書「諸□」	復13.8	(3.9)	Ⅰ	SD05シルト
95	須恵器	椀	見込み回転ナデ、体部１／５回転ヘラケズリ。底部ヘラキリ後ナデ	復14.1	5	Ⅰ	SD07砂礫
96	須恵器	椀	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ	復13.1	5.2	Ⅰ	SD05砂礫
97	須恵器	椀	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ	復16.2	5.5	Ⅰ	SD05砂礫
98	須恵器	椀	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ（後ナデ？）。高台若干磨滅		(3.2)	Ⅰ	SD01砂礫
99	須恵器	高杯	杯部見込み回転ナデ	復11.7	(4.1)	Ⅰ	SD07砂礫
100	須恵器	高杯	杯部見込み一定方向のナデ、		(6.6)	Ⅰ	SD05砂礫
101	須恵器	皿Ｂ蓋	天井部回転ヘラケズリ	復28.7	(3.7)	Ⅰ	SD08砂礫
102	須恵器	皿Ｂ蓋	天井部の１／３回転ヘラケズリ。見込み不定方向のナデ	復28.1	(3.6)	Ⅰ	SD08砂礫
103	須恵器	壺	内外面回転ナデ。頸部継ぎ目内面に指頭圧		(7.1)	Ⅰ	SD08砂礫
104	須恵器	壺	内外面回転ナデ		(10.0)	Ⅰ	SD08砂礫
105	須恵器	壺	内外面回転ナデ		(6.2)	Ⅰ	SD01砂礫
106	須恵器	壺	頸部内外面回転ナデ		6.2	Ⅰ	SD08砂礫
107	須恵器	壺	頸部内外面回転ナデ。内面に工具痕。頸部に沈線２条	復13.4	(12.6)	Ⅰ	SD05砂礫
108	須恵器	壺	体部外面２／３ヘラケズリ、沈線１条。底部内面に指頭圧？	8.2	10.3	Ⅰ	SD01砂礫
109	須恵器	壺？	底部外面ヘラキリ後ナデ、内面一定方向のナデ		(3.8)	Ⅰ	SD05砂礫
110	須恵器	甕	体部外面平行タタキ後カキメ、内面同心円文タタキ	11.3	(6.8)	Ⅰ	SD08砂礫

番号	種別	器種	調整他	口径	器高	区	遺構・層
111	須恵器	壺	体部外面平行タタキ後ナデ、下部をヘラケズリ。底部ヘラキリ。体部に沈線1条	12.2	20.1	Ⅰ	SD07砂礫
112	須恵器	壺	体部に沈線2段2条	復12.0	24.4	Ⅰ	SD01砂礫
113	須恵器	甕	体部外面平行タタキ後横方向カキメ、内面同心円文タタキ。底部内面アテ具による調整とナデ	19.4	36.2	Ⅰ	SD05砂礫
114	須恵器	甕	体部外面格子風平行タタキ後一部カキメとナデ（下半はナデ）、内面同心円文タタキ。底部に杯A付着	30.4	43.7	Ⅰ	SD07砂礫
115	須恵器	横瓶	体部外面平行タタキ後不定方向ハケメ、内面同心円文タタキ後ナデ。右側面は平行タタキ後縦方向カキメ後不定方向ハケメ。円盤充填技法	9.6	24.7	Ⅰ	SD05砂礫
116	須恵器	横瓶	体部外面斜めの平行タタキ後カキメ、内面同心円文タタキ。頸部に凹線1条	12.8	34.6	Ⅰ	SD05砂礫
117	土師器	杯A	内外面ともミガキあり	復13.8	(2.9)	Ⅰ	SD01砂礫
118	土師器	皿A	見込みナデ。底部手づくね後ナデ？	復13.6	1.8	Ⅰ	SD05砂礫
119	土師器	杯A	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ後ナデ	復11.7	3.2	Ⅰ	SD05砂礫
120	土師器	杯A	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ後ナデ。表面磨滅	復12.8	3.7	Ⅰ	SD08砂礫
121	土師器	杯A	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ	復12.7	3.5	Ⅰ	SD08砂礫
122	土師器	小型鉢	手づくね。口縁部強いナデ。体部内外面指頭圧。底部外面ナデ。表面磨滅	7.6	4.0	Ⅲ	トレンチ3
123	土師器	甕	口縁部外面ハケ後ナデ、内面ナデ。体部外面ハケ、内面ケズリ	復14.6	(7.3)	Ⅲ	灰シルト
124	土師器	甕	口縁部外面ハケ後ナデ、内面ナデ。体部外面ハケ（スス付着）、内面ケズリ	復19.8	(8.6)	Ⅰ	SD07砂礫
125	土師器	甕	口縁部外面ハケ後ナデ。体部外面ハケ（スス付着）、内面ケズリ	18.5	(17.7)	Ⅰ	SD09砂礫
126	土師器	壺	口縁部内外面回転ナデ。体部外面ハケ、内面ケズリ	復12.2	(7.5)	Ⅰ	SD05砂礫
127	土師器	甕	口縁部外面ハケ後ナデ、内面ハケ。体部外面ハケ、内面ケズリ、内外面煤付着	13.5	13.2	Ⅰ	SD05砂礫
128	土師器	甕	口縁部外面ハケ後横内面ハケ。体部外面ハケ、内面ケズリ	復22.4	(9.3)	Ⅰ	SD05砂礫
129	土師器	甕	口縁部外面ハケ後ナデ、内面ハケ後ナデ。体部外面縦ハケ後横ハケ（スス付着）、内面ハケ	復24.0	(29.8)	Ⅰ	SD09砂礫
130	土師器	甕	口縁部外面ナデ、内面ハケ後ナデ。体部外面縦ハケ後横ハケ（スス付着）、内面ケズリ	復19.3	19.8	Ⅲ	黒灰シルト
131	土師器	甕	口縁部外面ハケ後ナデ、内面ナデ。体部外面ハケ（スス付着）、内面上部ケズリ、同下部タテハケ	20.7	22.0	Ⅰ	SD05砂礫
132	土師器	把手	外面指押サエによる成形。内面ナデ		6.3	Ⅰ	SD01砂礫
133	土師器	鍋	口縁部外面ハケ後ナデ、内面横ハケ後斜めのハケ。体部外面ハケ、内面ケズリ	復41.4	(7.2)	Ⅰ	SD01砂礫
134	須恵器	高杯	杯部見込み不定方向ナデ、底ケズリ？、生焼け		(7.1)	Ⅱ	SF01
135	須恵器	高杯	杯部底ケズリ。杯部と脚部に沈線	12.0	16.2	Ⅱ	SF01
136	須恵器	甕	口縁部櫛描波状文	復13.5	(5.4)	Ⅰ	SD02・03
137	須恵器	杯A	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ後ナデ。漆書「○」		(1.5)	Ⅰ	SD02・03
138	須恵器	杯B	見込み不定方向ユビナデ。底部ヘラキリ後ナデ（工具痕あり）	13.5	3.8	Ⅰ	SD02・03
139	須恵器	杯B	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ	復13.3	3.4	Ⅰ	SD02・03
140	須恵器	杯B	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ後ナデ。墨書「西」		(4.0)	Ⅰ	SD02・03
141	須恵器	壺	内外面回転ナデ		(12.5)	Ⅰ	SD02・03
142	土師器	甕	口縁部外面ハケ後ナデ、内面ハケ。体部外面ハケ、内面ケズリ後ハケ	復21.8	(9.8)	Ⅰ	SD02・03
143	土師器	甕	口縁部外面ハケ後ナデ、内面ハケ。体部外面ハケ、内面ケズリ	復20.9	(9.1)	Ⅰ	SD02・03
144	土師器	甕	口縁部外面ハケ後ナデ、内面ハケ。体部外面ハケ、内面ハケ・指頭圧	復22.6	(9.7)	Ⅰ	SD02・03
145	土師器	甕	口縁部外面ハケ後ナデ、内面ハケ。体部外面ハケ（スス付着）、内面ケズリ	復23.2	(12.0)	Ⅰ	SD02・03
146	土師器	甕	口縁部内外面ナデ。体部外面ハケ、内面ケズリ。外面全体スス付着	復17.4	(10.9)	Ⅰ	SD02・03
147	土師器	甕	口縁部外面ハケ後ナデ、内面ハケ。体部外面ハケ（スス付着）、内面ケズリ	復18.8	(10.5)	Ⅰ	SD02・03
148	土師器	甕	口縁部外面ハケ後ナデ、内面ハケ。体部外面ハケ（スス付着）、内面ケズリ・ハケ（底部に炭化物）	20.3	24.3	Ⅰ	SD02・03
149	土師器	甕	口縁部内外面ナデ。体部外面ハケ（スス付着）、内面頸部下ケズリ、それ以下ハケ	21.0	26.8	Ⅰ	SD02・03
150	土師器	鍋	口縁部外面ハケ後ナデ、内面ハケ。体部外面ハケ（スス付着）、内面ケズリ	復33.8	(13.2)	Ⅰ	SD02・03
151	土師器	小型鉢	手づくね（内外面指頭圧）。表裏磨滅	2.6	2.2	Ⅱ	
152	土師器	小型鉢	手づくね（内面指頭圧。外面指頭圧とナデ）	3.1	3.0	Ⅱ	
153	土師器	甕	口縁部外面ナデ、内面不明。体部外面ハケ（上部は後ナデ）、内面不明（ケズリ？）	復8.8	(4.0)	Ⅱ	
154	土師器	脚部	内面ナデ。外面回転ナデ。くびれ部に成形の痕跡？、脚内面指頭圧？		(3.8)	Ⅲ	SD16
155	土師器	甕	口縁部外面ナデ、内ナデ。体部外面不明、内面ケズリ	復16.5	(5.2)	Ⅱ	
156	土師器	甕	口縁部内外面回転ナデ。体部外面ハケ（頸部は後ナデ）、内面ケズリ。外面全体スス付着	復13.2	(8.6)	Ⅲ	SD16
157	土師器	甕	口縁部内外面ナデ？。体部外面ハケ？（頸部ナデ）、内面ケズリ	復16.8	(5.2)	Ⅱ	不明
158	土師器	器台	脚部外面不明（くびれ部ミガキ？）、内面ハケ（絞り目と粘土紐痕）		6.8	Ⅱ	不明
159	土師器	高杯	脚部外面不明、内面横ナデ？		(6.7)	Ⅱ	
160	土師器	高杯	表面磨滅。脚柱部内面絞り目		(6.5)	Ⅱ	SF01

番号	種別	器種	調整他	口径	器高	区	遺構・層
161	土師器	高杯	脚柱部内面絞り目・横ナデ。裾部外面指頭圧、内面指頭圧後横ナデ		(8.5)	Ⅱ	
162	土師器	高杯	杯部内外面回転ナデ。底部ケズリ？。脚柱部外面不明、内面回転ナデ	復17.0	(9.2)	Ⅱ	
163	土師器	壺	体部外面上半ハケ後回転ナデ？、同下半ケズリ？。体部内面上半指ナデ、同下半ケズリ後横ナデ		(12.7)	Ⅱ	
164	土師器	甕	口縁部外面ハケ後ナデ、内面ナデ。体部外面ハケ、内面ハケ	19.4	(13.8)	Ⅱ	SD17
165	土師器	甕	口縁部外面指頭圧のちナデ（深い工具痕）、内面ハケ後ナデ。体部外面ハケ（スス付着）、内面縦ケズリ後横ケズリ後ハケ	復18.6	(20.7)	Ⅱ	
166	土師器	甕	口縁部外面ナデ、内面ハケ後ナデ。体部外面ハケ（スス付着）、内面ケズリ後ハケ	復23.2	(26.3)	Ⅲ	排水路
167	須恵器	甕	頸部外面ハケのちナデ？。口縁部外面列点文	復12.9	(3.5)	Ⅱ	SD17
168	須恵器	杯身	見込み不定方向のナデ。底部回転ヘラケズリ	復12.6	(4.5)	Ⅱ	
169	須恵器	杯身		復15.3	(3.8)	Ⅱ	
170	須恵器	高杯	杯部底ヘラケズリ。見込み指頭圧	復11.2	(4.0)	Ⅲ	SD16
171	須恵器	高杯	脚部沈線２段。外面スス付着		(10.6)	Ⅲ	SD17
172	須恵器	壺	底部ケズリ	復7.8	(4.6)	Ⅱ	
173	須恵器	壺	外面調整不明	復9.8	(5.1)	Ⅱ	
174	須恵器	平瓶	体部調整不明	復6.9	(4.2)	Ⅲ	SD16
175	須恵器	杯B	外面スス付着	復14.8	6.7	Ⅲ	トレンチ３
176	須恵器	皿A	見込み回転ナデ。底部回転ヘラケズリ後ナデ	復13.7	(1.5)	Ⅰ	
177	須恵器	甕		復21.2	(5.0)	Ⅰ	
178	須恵器	甕	体部外面タタキ後カキメ、内面同心円文タタキ（頸部は後ナデ）	復22.1	(7.3)	Ⅰ	５層
179	須恵器	甕	体部外面格子状タタキ？後カキメ、内面タタキ（頸部は後回転ナデ後部分的にケズリ）	復20.1	(6.5)	Ⅱ	
180	須恵器	杯A	見込み回転ナデ。底部回転ヘラケズリ後ナデ（工具痕あり）	11.9	4.1	Ⅱ	
181	須恵器	杯A	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ	復10.0	3.8	Ⅱ	
182	須恵器	杯A	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ後ナデ（漆付着）	11.6	3.9	Ⅱ	SD17
183	須恵器	杯A	見込み一定方向のナデ。底部ヘラキリ	11.2	4.6	Ⅱ	
184	須恵器	杯A	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ	復13.1	4.0	Ⅰ	不明
185	須恵器	壺	底部ヘラキリ後不定方向のナデ。内面に粘土紐の巻き上げ痕		(8.7)	Ⅱ	不明
186	須恵器	杯B蓋	天井部の１／３回転ヘラケズリ。内面回転ナデ	復14.8	(4.0)	Ⅲ	トレンチ３
187	須恵器	杯B	見込み回転ナデ。底部不明	復10.9	3.8	Ⅲ	トレンチ３
188	須恵器	椀	見込み回転ナデ。底部回転糸切り後ナデ	復11.4	4.4	Ⅱ	
189	須恵器	杯B	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ	復13.8	3.9	Ⅲ	排水路
190	須恵器	椀	見込みナデ。底部糸切り（輪高台貼付けの指の痕跡残る）。内面に重ね焼きの痕跡	復15.5	4.9	Ⅱ	
191	須恵器	椀	見込み不定方向のナデ。底部回転ヘラケズリ後ナデ？。底部硯に転用か？	15.4	4.6	Ⅱ	
192	土師器	杯A	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ	11.4	4.1	Ⅱ	近世河道
193	土師器	甕	口縁部外面ハケ後ナデ、内面ハケ。体部外面ハケ後ナデ、内面ケズリ	復10.8	(4.4)	Ⅱ	
194	土師器	甕	口縁部外面ナデ、内面ナデ。体部外面ハケ後ナデ、内面指頭圧後ケズリ	復9.3	(4.9)	Ⅱ	
195	土師器	甕	口縁部外面不明、内面ハケ。体部外面ハケ、内面ケズリ。外面全体スス付着	復15.0	(5.4)	Ⅲ	
196	土師器	甕	口縁部内外面ナデ。体部外面ハケ（頸部は後ナデ）、内面ケズリ、外面２次焼成？	復18.6	(6.2)	Ⅲ	排水路
197	土師器	甕	口縁部内外面ナデ。体部外面ハケ（頸部は後ナデ）、内面ハケ	復15.5	(4.9)	Ⅱ	
198	土師器	甕	口縁部外面ナデ、内面ハケ。体部外面ハケ（頸部は部分的に後ナデ）、内面ケズリ	復18.8	(5.9)	Ⅲ	SD16
199	土師器	甕	口縁部外面ナデ、内面ハケ後ナデ。体部外面縦ハケ後斜めのハケ、内面ケズリ後ハケ	復19.6	(7.2)	Ⅱ	SD17
200	土師器	甕	口縁部外面ナデ、内面ハケ後ナデ。体部外面ハケ、内面ケズリ（頸部直下はハケ）。外面全体スス付着	復19.7	(7.6)	Ⅱ	
201	土師器	甕	口縁部外面ナデ、内面ハケ後ナデ。体部外面縦ハケ後斜めのハケ、内面ケズリ。口縁部に粘土紐の継ぎ目	復19.0	(8.4)	Ⅱ	
202	土師器	甕	口縁部外面ハケ後ナデ、内面ハケ。体部外面ハケ、内面ケズリ	20.5	(10.3)	Ⅱ	不明
203	土師器	甕	口縁部外面ナデ、内面ハケ後ナデ。体部外面ハケ後指頭圧、内面ハケ。外面全体スス付着	復20.7	(11.4)	Ⅱ	不明
204	土師器	甕	口縁部外面ナデ、内面ハケ。体部外面ハケ（頸部は後ナデ、スス付着）、内面ケズリ	復21.2	(10.3)	Ⅰ	不明
205	土師器	杯A	体部上半横方向のヘラミガキ、下半指頭圧後ヘラケズリ。底部ヘラミガキ。内面放射状暗文？、底部ヘラミガキ。赤彩	復10.0	2.8	Ⅱ	
206	須恵器	皿A	見込み一定方向のナデ。底部ヘラキリ後ナデ	復14.8	2.2	Ⅰ	不明
207	土師器	杯A？	内外面回転ナデ	復13.3	(3.0)	Ⅰ	不明
208	土師器	鉢	口縁部内外面回転ナデ。体部外面不定方向のナデとオサエ、内面ケズリ、頸部外面に絞り目？、手づくねに近い粗製品	復9.8	6.2	Ⅲ	SD16
209	土師器	椀	内面ヘラミガキ。体部外面回転ナデ。底部糸切り後ナデ、内面黒色		(2.5)	Ⅱ	近世河道
210	土師器	椀	内面ヘラミガキ。体部外面下半横方向のヘラミガキ。内黒	復14.8	(3.5)	Ⅰ	不明
211	須恵器	椀	見込み回転ナデ。底部糸切り	復14.6	5.4	Ⅱ	
212	陶器	壺		復4.8	(2.4)	Ⅲ	排水路

番号	種別	器種	調整他	口径	器高	区	遺構・層
213	緑釉陶器	椀	見込み回転ナデ。体部外面上半ヘラケズリ？、同下半回転ナデ？	復14.8	(4.1)	Ⅱ	トレンチ
214	須恵器	片口鉢		復29.8	(4.4)	Ⅱ	
215	須恵器	片口鉢		復31.5	(3.5)	Ⅱ	近世河道
216	瓦質土器	羽釜	口縁部内面～体部外面指頭圧後ナデ。体部内面ハケ	復22.8	(7.7)	Ⅱ	
217	土師器	鍋	口縁部内外面ナデ。外面スス付着	復22.0	(2.5)	Ⅱ	不明
218	土師器	壺	口縁部内外面ナデ。体部外面ハケ、内面ケズリ。体部は磨滅気味	復15.8	(6.2)	Ⅳ	第10層
219	土師器	低脚杯	杯部内面ナデ、外面磨滅。脚部内外面ミガキ（端部はナデ）		(5.1)	Ⅳ	第11層
220	須恵器	壺蓋	天井部の１／３回転ヘラケズリ後ナデ。見込み回転ナデ。	11.8	4.3	Ⅳ	第７層
221	須恵器	甕	同一個体破片の体部外面平行タタキ、内面ナデ	復39.0	(15.1)	Ⅳ	第７層
222	須恵器	甕	体部外面平行タタキ、内面円形あるいは青海波タタキ	復29.0	(9.7)	Ⅳ	ＳＰ０４
223	須恵器	杯Ｂ蓋	天井部ヘラキリ後乱ナデ。見込み３方向のナデ？	復12.7	1.7	Ⅳ	ピット
224	須恵器	杯Ｂ	見込み回転ナデ（一部指ナデ）。底部ヘラキリ後ナデ	復12.6	(3.6)	Ⅳ	第７層
225	須恵器	杯Ｂ	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ	復12.0	3.8	Ⅳ	第７層
226	須恵器	杯Ｂ	見込み一定方向のナデ。底部ヘラキリ	復13.5	(4.7)	Ⅳ	排水溝
227	須恵器	杯Ｂ	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ後ナデ	復12.6	(3.6)	Ⅳ	
228	須恵器	杯Ｂ	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ後工具によるナデ（乱雑な仕上げ、爪形圧痕）		(3.5)	Ⅳ	第７層
229	須恵器	杯Ｂ	見込み一定方向の粗いナデ。底部ヘラキリ後ナデ（爪形圧痕）	復15.7	(6.6)	Ⅳ	第７層
230	須恵器	杯Ｂ	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ後ナデ	復10.8	4.1	Ⅳ	第７層
231	須恵器	杯Ｂ	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ後ナデ	復11.6	3.8	Ⅳ	第７層
232	土師器	杯Ａ	見込み不定方向のナデ。底部ヘラキリ。黒色は漆塗りのためか？	復11.5	(3.9)	Ⅳ	
233	土師器	杯Ａ	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ後ナデ		(4.3)	Ⅳ	ピット
234	須恵器	杯Ａ	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ後一部ユビナデ	復13.0	(4.0)	Ⅳ	第７層
235	須恵器	杯Ｂ	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ後ナデ（工具痕）		(2.7)	Ⅳ	ピット
236	土師器	杯Ａ	見込み一定方向のナデ。底部ヘラキリ後ナデとハケ。内面に漆？付着		(1.9)	Ⅳ	ピット
237	白磁	椀		復15.2	(3.4)	Ⅳ	
238	須恵器	壺		復9.3	(7.8)	Ⅳ	排水溝
239	須恵器	壺	体部外面下部工具によるナデ後回転ナデ。底部回転糸切り後工具によるナデ		(25.9)	Ⅳ	ピット
240	須恵器	壺	体部外面下部ヘラケズリ。底部回転糸切り		(18.1)	Ⅳ	ピット
241	土師器	把手	ユビナデ成形			Ⅳ	ピット
242	須恵器	皿Ａ	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ後ナデ？（指頭圧あり）	復15.2	(2.0)	Ⅳ	第７層
243	土師器	杯Ａ	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ後一部ナデ	12.0	3.8	Ⅳ	ＳＰ０２
244	土師器	鍋	口縁部外面ナデ（下部ハケ）、内面ハケ。体部外面ハケ、内面ハケ。内外面スス付着	復46.8	(7.7)	Ⅳ	排水溝
245	縄文土器	体部	内面：なで（条痕？）・剥離多い。外面：２段の爪形・爪幅8mm		(4.3)	Ⅴ	SK401
246	縄文土器	体部	内面：なで。外面：羽状縄文		(4.8)	Ⅴ	SK401
247	縄文土器	口縁部	内面：なで。外面：横位の条痕（幅２mm強）・下半は縦位の条痕？		(4.5)	Ⅴ	SK401
248	縄文土器	底部	内面：羽状縄文。外面：羽状縄文		(4.0)	Ⅴ	SK401
249	縄文土器	体部	内面：条痕。外面：条痕		(4.2)	Ⅴ	SK401
250	縄文土器	体部	内面：条痕・指押さえあり。外面：条痕		(6.7)	Ⅴ	SK401
251	縄文土器	体部	内面：摩滅？。外面：条痕（幅1、5mmの貝殻）		(5.2)	Ⅴ	SK401
252	縄文土器	体部	内面：条痕（幅1、5mmの貝殻）。外面：条痕（幅1、5mmの貝殻）		(6.0)	Ⅴ	SK401
253	縄文土器	体部	内面：条痕。外面：条痕		(5.2)	Ⅴ	SK401
254	縄文土器	口縁部	内面：条痕。外面：上半に縄文、その下に浅い沈線、その下に羽状縄文		(3.0)	Ⅴ	縄文包含層
255	縄文土器	体部	内面：なで（条痕？）。外面：上半なで、下半２段の爪形（爪幅８mm）		(4.2)	Ⅴ	縄文包含層
256	縄文土器	体部	内面：条痕（幅1、5mm）。外面：幅５mmの竹管列の下に条痕？		(2.2)	Ⅴ	縄文包含層
257	縄文土器	口縁部	内面：指頭圧痕。外面：縄文の後なで消し（口端部なで）		(4.7)	Ⅴ	縄文包含層
258	縄文土器	口縁部	内面：なで。外面：条痕？		(3.1)	Ⅴ	縄文包含層
259	縄文土器	口縁部	内面：条痕（幅1、5mm）。外面：条痕（幅1、5mm）		(3.8)	Ⅴ	縄文包含層
260	縄文土器	体部	内面：条痕（幅約２cm）。外面：条痕（幅約２cm）		(5.4)	Ⅴ	SK401・402周辺
261	縄文土器	体部	内面：外面：羽状縄文？		(9.0)	Ⅴ	縄文包含層
262	土師器	壺	口縁部内外面ナデ（磨滅気味）。体部外面ナデ？、内面ユビナデ・指頭圧	復14.8	(5.9)	Ⅴ	
263	土師器	壺	口縁部内外面強いナデ。体部外面ハケ後強いナデ	復16.4	(11.5)	Ⅴ	
264	土師器	鉢	口縁部～体部外面横ハケ。口縁部内面横ナデ。体部内面ケズリ後指頭圧	復9.1	(4.2)	Ⅴ	
265	土師器	高杯？	脚柱部外面ヘラミガキ？。裾部外面ハケ、内面ナデ・指ナデ		(5.1)	Ⅴ	
266	土師器	甕	体部内面ケズリ？、外面指頭圧、脚端部ナデ		(3.4)	Ⅴ	
267	土師器	高杯	内外面ナデ		(3.7)	Ⅴ	
268	土師器	小型鉢	手づくね。外面指頭圧とナデ。内面指頭圧	復2.9	2.5	Ⅴ	
269	土師器	甕	体部外面不定方向のハケ、内面横方向ケズリ後不定方向ケズリ（下部ユビナデ）。外面に線刻文			Ⅴ	
270	須恵器	甕	口縁部下突帯。口縁部～頸部は凹線間に篦状工具による平行列線文とカキメ。体部外面平行タタキ、内面同心円文タタキ	復37.6	(20.1)	Ⅴ	
271	須恵器	提瓶	体部外面カキメ		(5.0)	Ⅴ	
272	須恵器	高杯	杯部底回転ヘラケズリ、見込み回転ナデ。	復13.3	(9.4)	Ⅴ	

番号	種別	器種	調整他	口径	器高	区	遺構・層
273	須恵器	高杯	杯部底回転ケズリ、見込み回転ナデ。磨滅	復13.5	(6.4)	V	
274	須恵器	高杯	杯部見込み２方向？のナデ。底部回転ケズリ、脚柱部内面絞り目		(7.8)	V	
275	土師器	高杯	杯部内面～脚部外面まで調整不明。脚柱部内面ケズリ（粘土の継ぎ目）		(10.9)	V	
276	須恵器	杯B蓋	天井部の１／３ヘラキリ。見込み回転ナデ	復11.9	(2.8)	V	
277	須恵器	杯B蓋	天井部ヘラキリ後ナデ。見込み回転ナデ	復12.3	(1.5)	V	
278	須恵器	杯B蓋	天井部回転ヘラケズリ。見込み回転ナデ、墨書「井」	復14.0	(2.2)	V	
279	須恵器	杯B蓋	天井部の１／３回転ヘラケズリ。見込み回転ナデ	復14.8	(2.1)	V	
280	須恵器	杯B蓋	天井部ヘラキリ後ナデ。見込み回転ナデ	復14.7	(1.8)	V	
281	須恵器	杯B蓋	天井部の１／３ヘラキリ後乱ナデ。見込み回転ナデ	復13.3	(2.3)	V	
282	須恵器	杯B蓋	天井部の１／３ヘラキリ後ナデ。見込み回転ナデ	復13.8	(2.5)	V	
283	須恵器	杯B蓋	天井部ヘラキリ後ナデ。見込み回転ナデ	復15.8	(1.2)	V	
284	須恵器	杯B蓋	天井部ヘラキリ後ナデ、見込み回転ナデ	復15.7	1.7	V	
285	須恵器	杯B蓋	天井部ヘラキリあるいはケズリ後回転ナデ、２方向のナデ	復18.1	2.8	V	
286	須恵器	杯B	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ後ナデ		(1.3)	V	
287	須恵器	杯B	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ？（磨滅）		(3.4)	V	
288	須恵器	杯B	見込み回転ナデ。底部回転ヘラケズリ後ナデ	復13.8	3.7	V	
289	須恵器	杯B	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ後ナデ	復12.8	3.6	V	
290	須恵器	杯B	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ後ナデ？	復11.1	(4.7)	V	
291	須恵器	杯B	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ後ナデ	復13.7	(3.9)	V	
292	須恵器	杯B	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ後ナデ。底部外面「墨書」	13.4	5.5	V	
293	須恵器	杯B	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ後回転ナデ	復12.7	(3.7)	V	
294	須恵器	杯B	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ後一部ナデ。墨書「開谷」？	復13.3	5.2	V	
295	須恵器	杯B	見込みナデ。底部ヘラキリ	復10.1	5.0	V	
296	須恵器	杯B	見込み一方向のナデ。底部ヘラキリ後ナデ	復10.3	(4.6)	V	
297	土師器	杯A	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ後ナデ		(2.6)	V	
298	須恵器	杯A	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ後ナデ		(3.2)	V	
299	須恵器	杯A	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ後ナデ	復11.1	(3.9)	V	
300	須恵器	杯A	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ後ナデ	復12.0	(3.4)	V	
301	土師器	杯A	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ？。体部外面にハケ状工具痕跡。磨滅気味	復11.7	3.6	V	
302	土師器	杯A	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ後ナデ、内面に漆付着	復12.8	(3.5)	V	
303	須恵器	杯A	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ後一部ナデ	復13.5	4.3	V	
304	土師器	杯A	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ後ナデ	11.8	3.5	V	
305	須恵器	杯B	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ後ナデ	復12.5	3.7	V	
306	須恵器	杯B	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ後ナデ	復12.8	3.7	V	
307	須恵器	杯B	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ後一部ナデ	復13.3	(3.8)	V	
308	須恵器	杯B	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ後工具痕。墨書「井」	11.9	3.8	V	
309	須恵器	杯B	見込みナデ？。底部ヘラキリ		(3.4)	V	
310	須恵器	杯B	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ後ナデ	復10.9	(3.7)	V	
311	須恵器	杯B	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ後ナデ	復12.8	3.9	V	
312	須恵器	杯B	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ後ナデ。墨書		(2.7)	V	
313	須恵器	壺蓋	天井部の１／３切離し後回転ナデ。見込み回転ナデ	復9.1	(2.7)	V	
314	須恵器	壺蓋	天井部ヘラキリ？後回転ナデ。見込み一定方向のナデ。天井部に２条と３条の沈線	復12.6	(3.5)	V	
315	黒色土器？	椀	見込み回転ナデ。底部切離し後ナデ		(1.6)	V	
316	土師器	杯底部片	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ後ナデ。墨書		(0.6)	V	
317	須恵器	杯B	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ後ナデ。墨書「大□」、爪形圧痕		(3.4)	V	
318	須恵器	杯B	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ後ナデ	復15.2	(5.9)	V	
319	須恵器	壺	内外面回転ナデ。底部回転糸切り		(3.5)	V	
320	須恵器	椀	見込みナデ	復16.9	(4.8)	V	
321	須恵器	椀	見込み回転ナデ。底部回転糸切り後板状工具痕	復16.4	(5.7)	V	
322	須恵器	椀？	内外面回転ナデ。底部回転ヘラケズリ		(6.7)	V	
323	須恵器	壺？	底部回転ナデ。底部ヘラキリ？後ナデ。磨滅気味		(1.8)	V	
324	須恵器	壺	内外面回転ナデ。底部回転糸切り後工具痕跡		(6.4)	V	
325	須恵器	壺	内外面回転ナデ。底部回転ヘラケズリ		(6.7)	V	
326	土師器	甕	体部外面不定方向のハケ（スス付着）、内面斜め方向のケズリ後横方向のケズリ。線刻文			V	
327	土師器	甕	体部外面不定方向のハケ（スス付着）、内面斜め方向のケズリ後横方向のケズリ後ナデ。線刻文			V	
328	須恵器	円面硯	長方形か台形の透を８ヶ所（推定）。海部は浅い	復10.7	(2.2)	V	
329	須恵器	円面硯	長方形透、裾部は脚部の外側に貼付けられ稜をなす		(2.0)	V	
330	土師器	甕	口縁部内外面ナデ（磨滅）、体部内外面ハケ	復17.7	(6.5)	V	
331	土師器	甕	口縁部外面ナデ、内面ハケ後ナデ。体部外面ハケ（スス付着）、内面ハケ後ナデ	復23.2	(7.3)	V	
332	土師器	甕	口縁部～体部外面ハケ後ナデ。口縁部内面ハケ後ナデ。体部内面ケズリ	復17.4	(14.3)	V	
333	土師器	甕	口縁部外面ナデ、内面ハケ後ナデ。体部外面ハケ、内面ハケ（工具２種）	復19.7	(10.9)	V	

番号	種別	器種	調整他	口径	器高	区	遺構・層
334	土師器	甕	口縁部外面ナデ、内面ハケ？後ナデ。体部外面ハケ（磨滅）、内面ハケ後ナデ（下部指頭圧）	復16.7	(15.5)	V	
335	青磁	碗	内外面回転ナデ	復15.8	(2.9)	V	
336	土師器	椀	内外面横ナデ	復19.7	(3.6)	V	
337	須恵器	皿A	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ後ナデと工具痕	12.7	1.8	V	
338	須恵器	皿A	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ後ナデ	復15.3	(1.7)	V	
339	須恵器	皿A	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ後ナデ	14.3	1.9	V	
340	須恵器	皿A	底部ヘラキリ後ナデ	復13.6	(1.7)	V	
341	須恵器	皿A	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ後一部ナデ。墨書	復12.8	2.1	V	
342	須恵器	皿A	見込み乱ナデ。底部ヘラキリ後乱ナデと工具痕	復13.2	(2.2)	V	
343	土師器	皿A	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ		(1.7)	V	
344	須恵器	皿A	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ後ナデ。墨書？	復13.2	(1.6)	V	
345	須恵器	皿A	見込み回転ナデ。底部回転ヘラケズリ？。墨書？		(1.2)	V	
346	須恵器	皿A	底部ヘラキリ。タール状粒子付着	復14.4	(2.4)	V	
347	須恵器	皿A	見込み一定方向のナデ。底部ヘラキリ（外縁部後ナデ）	復14.5	(2.2)	V	
348	土師器	皿A	体部内外面横ナデ（下部は指頭圧）	復13.7	(2.3)	V	
349	土師器	皿A	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ	復13.7	(2.6)	V	
350	土師器	皿A	見込み回転ナデ。底部回転糸切り	復13.2	3.1	V	
351	須恵器	皿A	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ後ナデ。墨書「井」	復13.3	2.6	V	
352	土師器	把手	体部外面ナデ、内面ナデ			V	
353	土師器	竈	表面横ナデ・ハケ。裏面指成形			V	
354	土師器	鍋	口縁部～体部内外面ハケ。体部外面スス付着	復37.6	(6.6)	V	
355	土師器	鍋	口縁部外面ナデ。体部外面縦ハケ後横ハケ（スス付着）。内面不明	復47.5	(17.1)	V	
356	須恵器	把手付鉢			(5.7)	V	
357	須恵器	椀		復14.6	(3.3)	V	
358	白磁	碗	見込み回転ナデ。体部外面回転ケズリ。底部回転ナデ、高台ケズリ出し。底部は無釉		(2.7)	V	
359	緑釉陶器	小皿	調整不明	復11.7	(1.5)	V	
360	緑釉陶器	椀	見込み回転ナデ。底部切離し後ナデ？。全体に施釉		(1.9)	V	
361	土師器	皿	調整不明。全体に漆塗？	復9.5	(1.2)	V	
362	土師器	甕	調整不明。	復13.6	(2.6)	確	
363	土師器	甕	口縁部外面ナデ。体部外面ハケ。内面調整不明。	復15.7	(4.6)	確	
364	土師器	高杯	脚柱部内面上部絞り目、下部ケズリ。他は調整不明。		(7.1)	確	
365	土師器	底部	調整不明。		(1.6)	確	
366	土師器	器台	調整不明（内面下部にかすかにハケ）	復21.6	(5.3)	確	
367	須恵器	杯B	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ後ナデ、爪形圧痕	復14.2	3.4	確	
368	須恵器	杯A	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ	復12.2	3.2	確	
369	須恵器	杯B	見込み回転ナデ。底部ヘラキリ後板ナデ	復14.1	4.1	確	
370	須恵器	平瓶	体部上半カキメ、下半回転ヘラケズリ。底部回転ヘラケズリ後板状工具痕	5.2	13.8	確	
371	須恵器	脚部			2.5	確	
372	磁器	碗	見込み回転ナデ。底部ケズリ出し高台。全体に施釉		(4.4)	確	
373	磁器		外面回転ナデ。内面ナデ（下部縦のユビナデ）			確	

第6章　砂入遺跡の地形環境

立命館大学非常勤講師
青木　哲哉

1．はじめに

人間は、自然環境に影響され、またこれを利用しながら生活してきた。中でも、地形は人間の生活舞台であり、活動の場となってきただけに、地形環境と人間生活とは密接な関係にあると考えられる。人間は、居住や生産、埋葬などの生活目的に応じて、活動の場である地形を選定し、またときにはこれを改変することがあった。こうした地形環境は、地球上に人間が誕生してからも変化を続け、現在に至っている。人間は、時代とともに進展する自らの生活を、移り変わる地形環境に巧みに対応させ、よりよい生活を求めてきたのである。この点からみて、過去の人間生活を浮き彫りにするには、各時期ごとの地形環境とその変遷を明らかにすることが必要と考えられる。

地形環境の変遷は、従来の地形研究で中心となってきた数千年オーダーでの考察だけでなく、人間生活に見合ったより細かいオーダーで究明されなければならない。このためには、遺跡の調査区における地形・地質学的な調査が有効な手段となる。調査区では、微地形や堆積物などが直接かつ詳細に観察できるため、細かいオーダーの地形環境を復原することが可能である。また、出土した遺物の編年を通じて、地層の堆積時期や微地形の形成時期が判明し、復原された地形環境がどの時期のものかを捉えられる。一方、遺跡の発掘では、多くの場合人間生活の痕跡である遺構が検出されるため、これらの考古学的な分析によって、過去の人間生活が克明に明らかにされる。遺跡の発掘に参加することで、詳細な地形環境が解明でき、合わせて人間生活に関するデータが得られるため、両者の関わり合いについても考察できるのである。

本稿では、砂入遺跡（兵庫県出石郡出石町）での地形・地質学的な調査結果をもとに、遺跡付近における地形環境の変遷を明らかにしたい。調査では、主に(1)20,000分の1空中写真の判読と現地観察を通じて、遺跡付近における地形の様相を明らかにすること、(2)各遺跡の調査区における微地形と地質断面を詳細に観察することを中心に行い、細かいオーダーでの地形環境を考察した。

2．遺跡付近の地形

豊岡盆地は、円山川の下流部に位置する。円山川は、盆地南西部において曲流しながらほぼ北西方向へ流下し、盆地の中央付近でほぼ北流する出石川と合流する。その後向きを北に変え、城崎付近の狭窄部を経て、日本海に注いでいる。盆地内部には、円山川と出石川に沿って形成された低湿な沖積平野が広がり、丘陵や更新世段丘はほとんど存在しない。盆地の縁辺には、円山川と出石川の支流にあたる多くの小河川によって、周辺の山地を刻む大小さまざまな谷が多数つくられている。砂入遺跡は、こうした谷の中でも豊岡盆地東部にある比較的大規模な谷に位置する。

図22は、この谷中の等高線と、砂入遺跡各調査区の位置を示したものである。谷の北、東および南の三方には、標高150m前後の山地が認められ、これらは主に花崗岩からなる。谷は、南北がおよそ620m、東西が約1700mで、東西方向に細長くのびる。谷の北端には小野川が、また南端には袴狭川がほぼ西流し、谷中には小規模な両河川によって形成された沖積平野が認められる。この沖積平野は、約1.9‰の傾斜で西へ緩やかに高度をさげ、豊岡盆地の東南部に広がる出石川の沖積平野にスムーズに連続する。

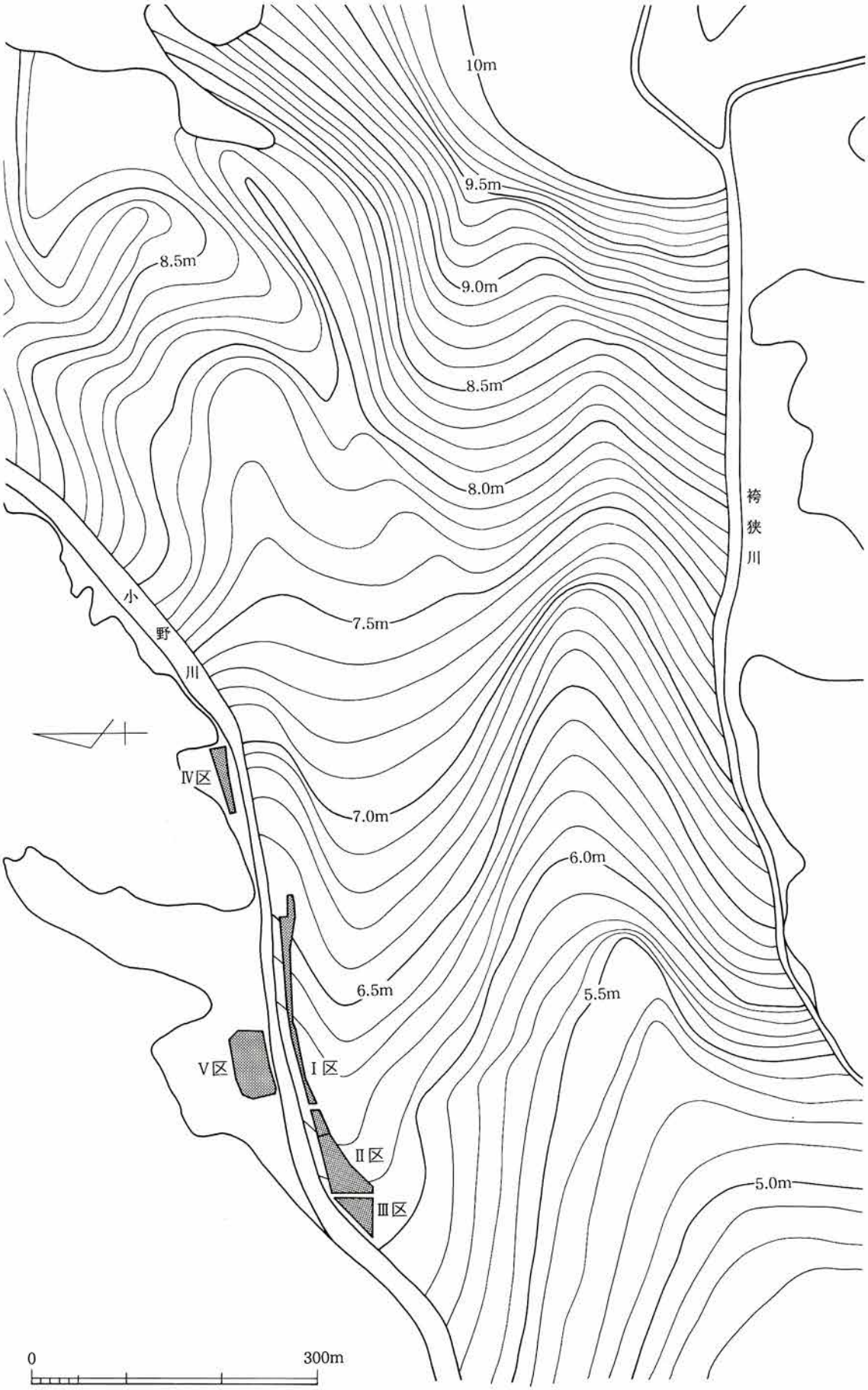


図 22　遺跡付近の等高線図

砂入遺跡は、谷中を流れる２河川のうち、小野川の河岸付近に広がる沖積平野に位置する。

図23は、砂入遺跡が存在する谷の北半分、すなわち小野川河岸付近の地形分類図である。この付近には主に低平な後背湿地が広がり、顕著な自然堤防はほとんど存在しない。また、小野川の旧河道は数本認められ、その形状は現在河川改修によってほぼ直線的に流れる小野川が、改修前には蛇行していた様子を物語っている。今回発掘が行われたのは、砂入遺跡のⅠ区（砂入Ⅰ区）～Ⅴ区（砂入Ⅴ区）の５か所である。砂入Ⅰ区は埋没旧河道と後背湿地に、その西側に隣接する砂入Ⅱ・Ⅲ区は埋没自然堤防、後背湿地および埋没旧河道に、また砂入Ⅳ区と砂入Ⅴ区は後背湿地にそれぞれ位置している。

３．各調査区の微地形と堆積物

図24・25は、砂入Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ区の地質断面図である。また、表15では各調査区の堆積物を年代別にまとめて示している。ここでは、これらの図表を使って、砂入遺跡の各調査区における微地形と堆積物の特徴について述べる。

(1) 砂入Ⅰ区

本調査区では、下部に暗褐色のシルト、暗灰色の砂、および黒褐色の腐植質シルトが認められる。このうち、暗灰色の砂は自然堤防堆積物である。これは、調査区の東端で60㎝以上の厚さで堆積し、その上面は高まりをみせる。自然堤防は、その上位の黒褐色砂質シルトならびにシルトによって被覆され、埋没している。３つの堆積物のうち最上位に位置する黒褐色の腐植質シルトには、飛鳥時代後半の遺物

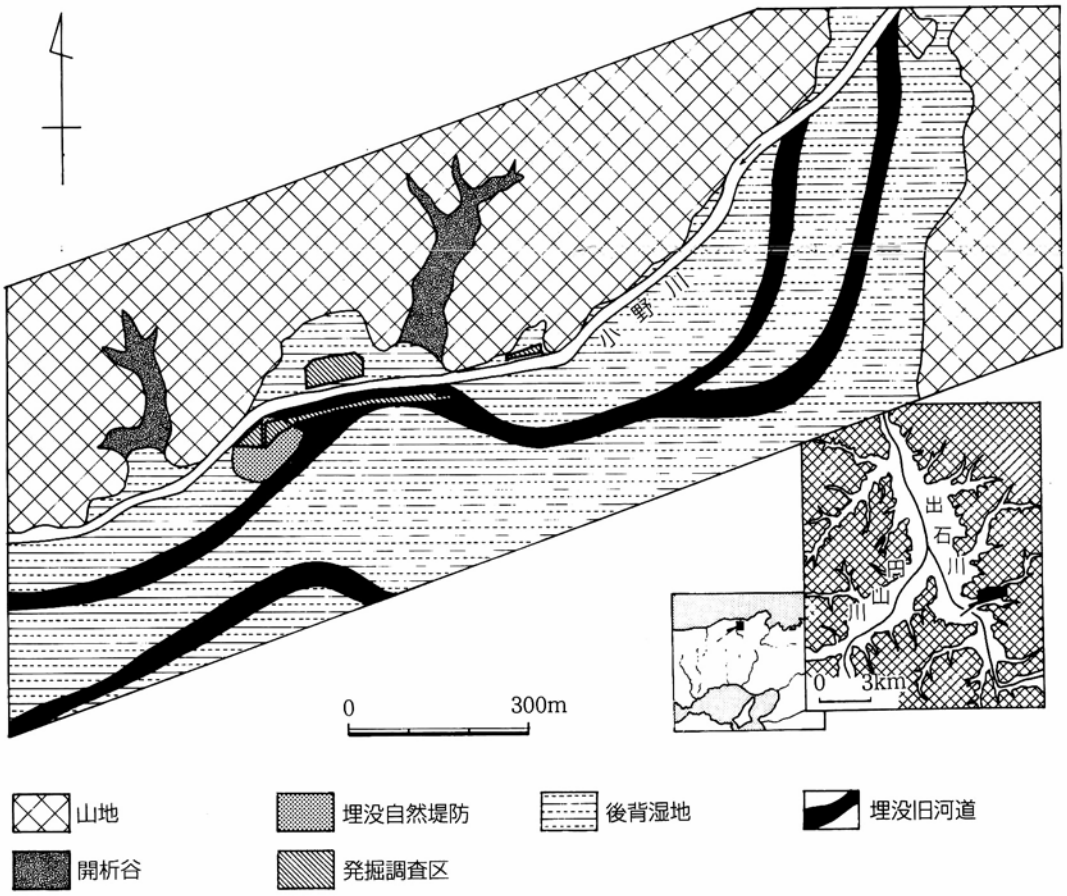


図23　遺跡付近の地形分類図

が混入する。このことから、これらの堆積物は飛鳥時代前半以前に堆積したと考えられる。

以上の堆積物より上位には、小野川の旧河道が11認められる。これらは、深さが1.25～1.75mで、ほぼ同じ場所に重なり合ってみられる。このため、空中写真では1本の旧河道として判読され、図23の地形分類図に示している。本稿では、砂入Ⅰ～Ⅲ区で認められた旧河道を、切り合い関係および出土遺物からわかる形成時期に応じて、4つの旧河道群に大きく分け、古いものから順に旧河道A群～D群と呼ぶ。その上で、旧河道それぞれについて、旧河道C群-1・2・3…というように番号を付した。

砂入Ⅰ区では、旧河道A～D群が確認される。旧河道A群では、砂入Ⅰ区西部で旧河道A群-1がみられる。これは、古小野川が調査区西部を北西方向へ流れた際の流路跡で、飛鳥時代後半の遺物を含む黒褐色の腐植質シルトから切り込まれている。旧河道内を埋積する堆積物には、下位から順に黄褐色のシルト質砂礫、黄褐色の砂礫、ならびに暗灰色の砂質シルトが認められる。このうち、最上位の砂質シルトは飛鳥時代後半の水田土壌であり、畦畔が検出される。これらのことから、旧河道A群の-1は飛鳥時代後半のある時期に形成・埋積されたと考えられる。こうした旧河道A群-1は、褐灰色のシルト質砂に覆われている。なお、飛鳥時代後半の水田土壌である砂質シルトは、調査区東部の自然堤防を被覆する砂質シルトに連続すると思われる。この自然堤防は、飛鳥時代後半に埋没したと判断される。

旧河道B群は、奈良時代後半から平安時代初頭にかけてのある時期に形成・埋積されたものである。旧河道B群-1（SD-01）は調査区東部に、B群-2（SD-07）は西部で観察される。これらは、旧河道C・D群の形成にともなって大部分が侵食されたため、連続するものか分流なのかが不明である。いずれの旧河道内にも、砂礫、砂およびシルト質砂が互層をなして堆積しており、止水的な環境にはならなかったことが知られる。このうち、旧河道B群-1は、暗褐灰色の砂と黒褐色のシルト質砂に被覆されている。

旧河道C群には、6つの旧河道が属する。これらは、それぞれの形成に先立って埋積された旧河道を、部分的に侵食して形成されている。旧河道B群との切り合い関係や、旧河道内の堆積物から検出された遺物によると、旧河道C群は旧河道B群の埋積後平安時代初頭までに、形成・埋積されたと判断できる。これらのうち、旧河道C群-1（SD-02）・2（SD-04）は調査区の東部に、旧河道C群-3（SD-05）・4（SD-10）・5（SD-09）・6（SD-08）は西部に認められる。各地点における旧河道の切り合い関係をみると、調査区東部では旧河道C群-1についてC群-2が、西部ではC群-3・4・5・6の順で形成されたことがわかる。ただし、東部と西部で検出された旧河道の対応関係はわからない。いずれにせよ、旧河道B群が埋積された後平安時代初頭までには、調査区東部では2度の、西部では4度の流路変更が発生し、古小野川流路の形成と埋積が繰り返されたのである。

旧河道内の堆積物は、部分的に侵食されているものの、多くの場合最上部から旧河道の底まで観察できる。旧河道C群-1・6は、最下部にみられる砂礫の上に、シルト質砂や砂質シルトが堆積する。流路形成直後の流れが速く、その後比較的緩やかな水流によって埋められたことが知られる。また、C群-2・5はシルト質砂、C群-3・4は砂礫によって埋積されている。旧河道C群の各流路内では、水の流れがほとんどないような湿地的環境が現出しなかったと考えられる。以上の旧河道A～C群内からは、人形、馬形ならびに斎串などの木製祭祀具が多量に検出されている。

旧河道D群は、それまでに形成・埋積された旧河道を切って形成されている。旧河道内の堆積物中に遺物をあまり含まないため、形成・埋積の時期が明確でなく、旧河道C群の埋積終了期である平安時代初頭より後の流路跡としかいえない。旧河道D群には、D群-1・2（両者ともSD-06）の2つが認められる。調査区付近では、両者とも南東側から流れ込み、調査区で南西方向へ向きを変えるルートをとる。

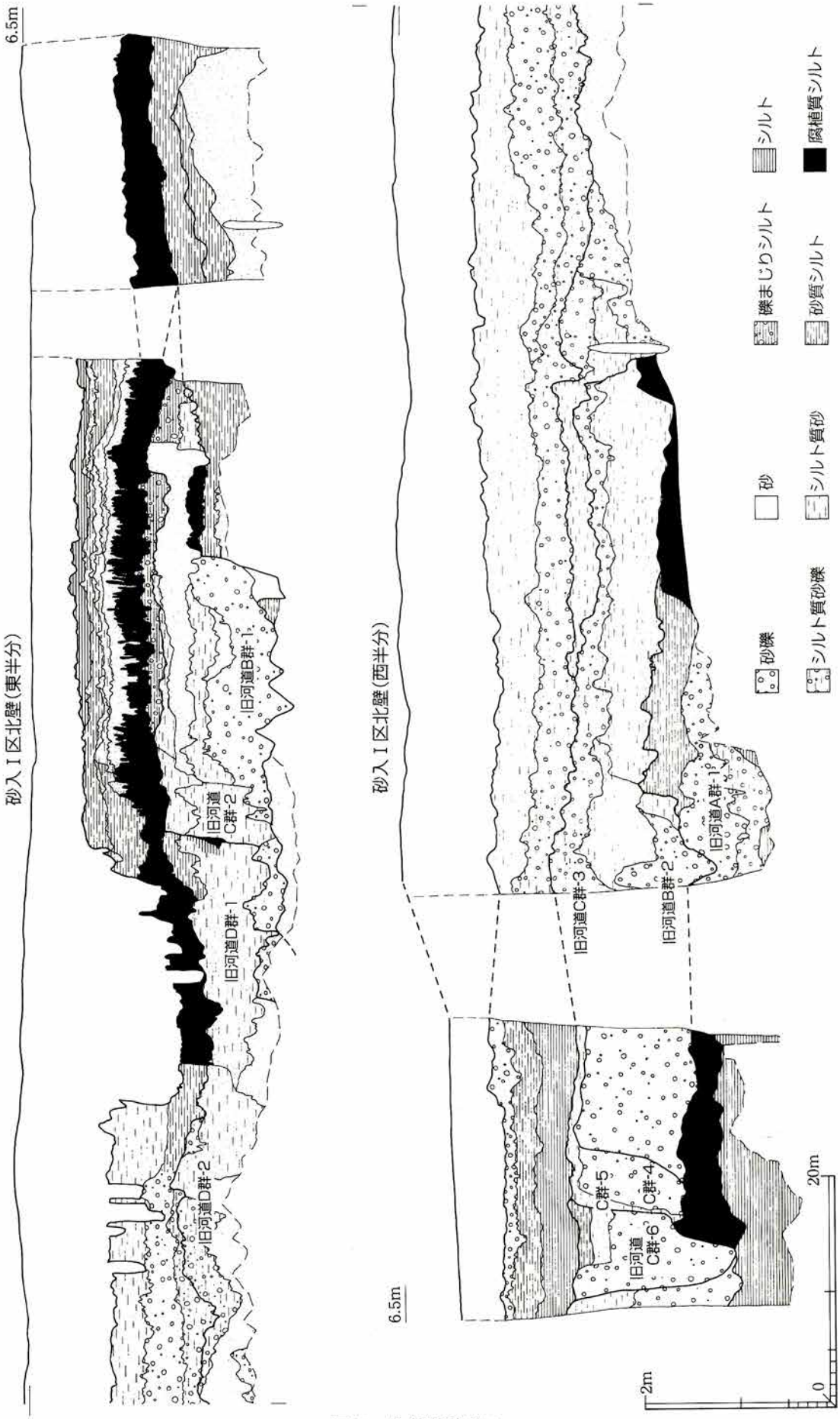

砂入Ⅰ区北壁(東半分)
6.5m
旧河道D群-2
旧河道D群-1
旧河道C群-2
旧河道B群-1
砂入Ⅰ区北壁(西半分)
6.5m
旧河道C群-6
旧河道C群-4
C群-5
旧河道C群-3
旧河道B群-2
旧河道A群-1
20m
2m
0
シルト
礫まじりシルト
砂質シルト
腐植質シルト
砂
シルト質砂
砂礫
シルト質砂礫

図24　地質断面図(1)

曲流する旧河道D群-1が埋積された後、ほぼ同じ位置を古小野川が流下し、旧河道D群-2が形成されたと考えられる。各旧河道内の堆積物は、下部に砂礫やシルト質砂礫、上部に砂やシルト質砂などである。これは、それぞれの埋積過程における古小野川の流れが、速いものから緩やかなものに移行したことを物語っている。

以上の旧河道A群～D群を覆って、10の洪水堆積物が認められる。これらの堆積によって、旧河道は現地表下2～2.8mの地点に埋没している。旧河道を被覆する堆積物は、最下部が暗灰色のシルト質砂礫と砂礫、それより上位が砂やシルト質砂、砂質シルトなどである。最下部の堆積物は、両者とも調査区中央部付近において粗粒で、そこから離れるにつれて細粒化し、シルトに変化する。シルトが堆積したところは湿地化していたと考えられ、腐植物が多く混入している。これより上位には、砂やシルト質砂、砂質シルトなどの洪水堆積物７つと、表土がみられる。いずれも、調査区において微高地をつくっておらず、これらの堆積時期に調査区付近は後背湿地になっていたと考えられる。

(2) **砂入Ⅱ・Ⅲ区**

この調査区は、砂入Ⅰ区の西側に隣接する。ここでは、最下部に淡灰褐色の砂質シルト、乳灰色の砂、暗褐色の腐植質シルト、ならびに黄灰色の砂が認められる。中でも、腐植質シルトが最も厚く堆積しており、最大で厚さ50cm以上を有する。これは、調査区付近が比較的長期間にわたって湿地となっていたことを物語る。

これらの堆積物のうち、最上位にみられる黄灰色の砂を切って、旧河道A群が認められる。旧河道A群には、旧河道A群-2（SD-18）とA群-3（SD-17）の２つが含まれる。いずれも、旧河道内の堆積物から飛鳥時代後半～奈良時代中頃の遺物が検出されており、ほぼ同時期に相前後して埋積されたことがわかる。旧河道A群-2は、幅およそ3mと狭く、支流性の流路跡と考えられる。この旧河道は、やや蛇行しながら東北東から西南西方向へのびる。東側では、Ⅰ区の旧河道B・C群によって侵食されているため、その連続性は不明である。旧河道A群-3は、旧河道A群-2を切って認められる。これは、旧河道A群-2と同様に西南西の方向へのびる。幅が約10mであり、古小野川の本流が流下した跡と考えられる。旧河道内は、灰白色の砂によって埋積されている。なお、これらの旧河道内および河岸からは、人形、馬形、斎串などの木製祭祀具が多数出土している。

旧河道A群は、厚さ10～20cmの砂質シルトに覆われ、さらにその上位には淡黄灰色の砂が認められる。この砂は、調査区の東部～中央部で20cm程度の厚さであるものの、西部ではその上面が高くなり、約1mの厚さをもつようになる。これは、自然堤防を構成する堆積物と考えられる。自然堤防は、旧河道A群の上位に位置し、またその上面で平安時代初頭の道路状遺構が検出されている。このことから、自然堤防は奈良時代後半から平安時代初頭までのある時期に形成されたと考えられる。

自然堤防堆積物の上位には、合計８つの洪水堆積物と表土が認められる。このうち、下部にみられる５つの堆積物は、砂質シルトとシルト質砂との互層をなし、灰褐色または暗灰褐色を呈する。これらは自然堤防の周辺に約50～80cmの厚さで堆積しており、これによって自然堤防の比高はほとんどなくなっている。砂入Ⅰ区の西部における堆積物との連続性をみると、これら５つの堆積物は、旧河道B群の形成直前にもたらされたと考えられる。

その上位には、暗褐色の砂質シルト、乳黄灰色の砂、暗褐色の砂質シルトが50～75cmの厚さでみられる。これらの３つは、自然堤防や旧河道D群-3を覆って堆積しており、これらを埋没させている。旧河道D群-3は、江戸時代の小規模な流路跡であることから、この砂質シルトや砂は江戸時代以降に堆積し

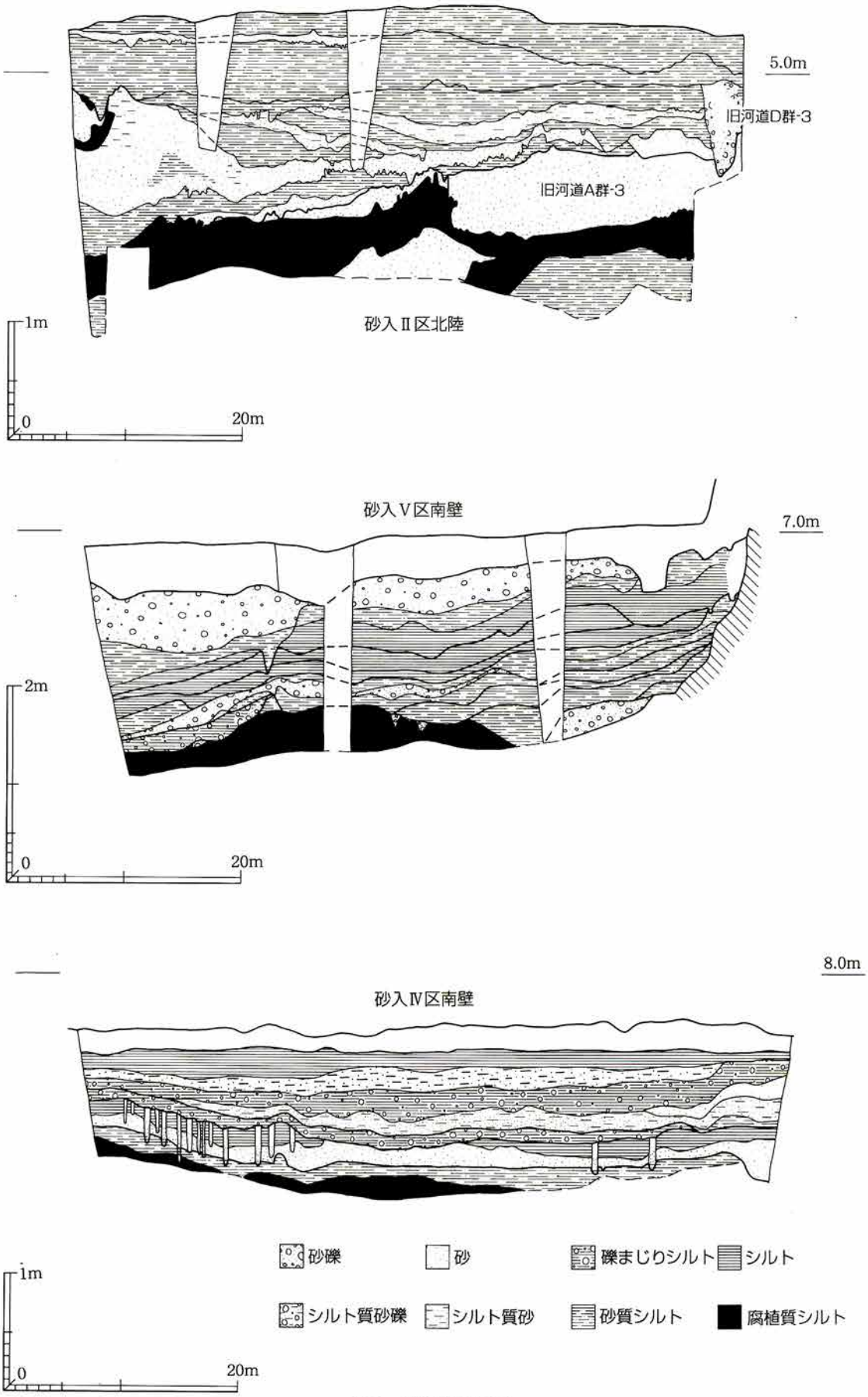

5.0m
旧河道D群-3
旧河道A群-3
砂入Ⅱ区北陸
1m
0
20m
砂入Ⅴ区南壁
7.0m
2m
0
20m
8.0m
砂入Ⅳ区南壁
砂礫
砂
礫まじりシルト
シルト
シルト質砂礫
シルト質砂
砂質シルト
腐植質シルト
1m
0
20m

図25　地質断面図(2)

たことがわかる。砂の上下位にある砂質シルトは、調査区のほぼ全域に厚くみられるものの、間に挟まれる砂は約10cmの厚さしかなく、局所的に分布する。砂質シルトはやや腐植質であり、江戸時代以降には調査区付近が湿地的環境にあったことを示唆している。なお砂入Ⅲ区は、以上の砂入Ⅱ区と基本的に同じ層序である。

(3) 砂入Ⅳ区

本調査区は、砂入Ⅰ区よりおよそ120m上流に位置する。ここでは、合計10の堆積物が確認される。最下部には、低湿な環境を示す暗褐色の腐植質シルトがみられ、その上位には黒褐色の砂質シルトが堆積している。砂質シルトの上面には、古墳時代後期の畦畔が認められることから、この時期になると、低湿な環境であった調査区付近に、水田がつくられたと判断できる。

水田土壌の上には、下位から順に灰褐色の砂、褐色のシルト、褐色の礫混じりシルトがみられる。これらは、いずれも調査区の東端でやや高度を上げるものの、後背湿地にほぼ水平に堆積している。中でも灰褐色の砂は、自然堤防末端の堆積物の可能性がある。この場合、自然堤防は調査区の南側に分布すると推定される。ただし、調査区の南側には小野川の現流路があり、自然堤防の存否に関する詳細は不明である。3つの堆積物のうち、最上位の礫混じりシルトには奈良時代～平安時代初頭の遺物が混入する。また、その下底からは同じ時期の遺構が検出され、特に住居跡としては平安時代初頭の掘立柱建物が4棟認められる。このことから、礫混じりシルトより下位ににみられる灰褐色の砂と褐色のシルトは、古墳時代後期～奈良時代のある時期に堆積したと考えられる。

さらに、その上位にはシルト、シルト質砂および砂などの堆積物が6つ認められる。これらは、平安時代初頭の遺構を覆っていることから、その時期以降の堆積物と判断される。このうち、灰褐色の砂は調査区西端に局所的にみられるだけで、他は調査区のほぼ全域に水平堆積している。これらの堆積物は、後背湿地に搬出された古小野川の洪水堆積物と考えられる。

(4) 砂入Ⅴ区

この調査区は、小野川の後背湿地に位置し、北側には山地に刻まれた開析谷がみられる。山地に近いため、調査区の西部では山地を構成する基盤岩が、急傾斜で北西側から沖積平野下に潜り込む様子が観察される。調査区の堆積物は、こうした基盤岩上面の傾斜に影響されて、南東方向へ緩やかに傾斜するものが多い。

調査区で確認できた基盤岩上の堆積物は、古小野川の洪水にともなうものである。最下位で確認できた堆積物は黒褐色の腐植質シルトで、その上位には明灰色の砂礫と黒灰色の砂質シルトが堆積している。黒灰色の砂質シルトはやや腐植質で、その下位の黒褐色腐植質シルトと同様、湿地の存在を示す。黒褐色腐植質シルトの下底では、縄文時代前期の遺構が検出され、また黒灰色の砂質シルトには古墳時代前期の遺物が混入する。このことから、調査区付近は縄文時代前期頃から湿地化した状態となり、その後古墳時代前期までに、砂礫の堆積を挟んで、再び湿地化したと判断される。図26は、豊岡盆地における縄文海進頂期（約6,000年前）の海域を示したものである。豊岡盆地では、約6,000年前に縄文海進によって海域が最も広がり、砂入遺跡の少し西側に海岸線が位置していた。約6,000年前を過ぎると、海退がはじまり、その過程において砂入Ⅴ区付近は主に湿地の状態が続いていたといえる。

その上位には、黒灰色と灰色を呈する2つの砂質シルトが認められる。このうち、上位の灰色砂質シルト上面からは、奈良時代末～平安時代初頭の水田や柱穴などの遺構が検出される。これは、2つの砂質シルトが古墳時代前期から奈良時代末にかけてのある時期に堆積したことを物語る。

表15　各調査区の堆積物

	砂入Ⅱ・Ⅲ区	砂入Ⅰ区	砂入Ⅴ区	砂入Ⅳ区
平安時代初頭以降 9世紀初頭以降	表　土 暗褐色　砂質シルト 乳黄灰色　砂 暗褐色　砂質シルト 旧河道D群－3内堆積物 ＜江戸時代＞ 乳黄灰色　砂 乳黄灰色　砂礫	表　土 灰色　シルト 灰色　シルト質砂 暗褐灰色　砂質シルト 淡灰褐色　砂礫・淡灰褐色　砂 暗灰色　シルト質砂・暗灰色　砂質シルト 暗褐灰色　シルト質砂 淡灰褐色　砂 暗灰色　砂礫・暗灰色　砂質シルト・黒褐色　腐植質シルト 暗灰色　シルト質砂礫・黒褐色　シルト・黒褐色　礫混じりシルト 旧河道D群-2(SD-06)内堆積物 暗灰色　シルト質砂礫・褐色　砂礫 暗灰色　シルト質砂 暗灰色　シルト質砂礫 旧河道D群-1(SD-06)内堆積物 暗灰色　砂質シルト 淡灰褐色　砂 淡黄灰色　砂礫	表　土 褐色　砂礫 灰色　砂質シルト 褐色　シルト 暗灰褐色　シルト ＜平安時代後半～鎌倉時代＞ 黒灰色　シルト 黒褐色　砂質シルト 明灰色　砂礫＜平安時代中頃～後半＞ 灰色　砂質シルト ＜平安時代中頃～後半＞ 褐灰色　砂質シルト	表　土 黄褐色　シルト 淡褐色　シルト質砂 淡灰褐色　礫混じりシルト 灰褐色　砂 淡灰褐色　シルト質砂 黄褐色　シルト
奈良時代後半～平安時代初頭 8世紀後半～9世紀初頭	灰褐色　砂質シルト 暗灰褐色　シルト質砂 暗灰褐色　砂質シルト 灰褐色　シルト質砂 灰褐色　砂質シルト 淡黄灰色　砂[1] 灰褐色　砂質シルト	褐灰色　シルト質砂礫 旧河道C群-2(SD-04)内堆積物 灰色　シルト質砂 旧河道C群-1(SD-02)内堆積物 暗褐灰色　シルト質砂 暗褐色　シルト質砂 淡灰褐色　砂礫 黒褐色　シルト質砂 暗褐灰色　砂 旧河道B群-1(SD-01)内堆積物 暗褐色　シルト質砂 暗褐色　砂 淡灰褐色　砂礫 暗褐灰色　砂 旧河道C群-6(SD-08)内堆積物 暗褐色　砂質シルト 暗褐色　シルト質砂 褐灰色　砂礫 旧河道C群-5(SD-09)内堆積物 暗褐灰色　シルト質砂 旧河道C群-4(SD-10)内堆積物 褐灰色　砂礫 旧河道C群-3(SD-05)内堆積物 淡灰褐色　砂礫 旧河道B群-2(SD-07)内堆積物 暗灰色　シルト質砂 淡灰褐色　砂礫 暗灰色　シルト質砂 褐灰色　シルト質砂	灰色　砂質シルト ＜奈良時代末～平安時代初頭＞ 黒灰色　砂質シルト	褐色　礫混じりシルト ＜平安時代初頭＞ 褐色　シルト 灰褐色　砂
飛鳥時代後半～奈良時代中頃 7世紀後半～8世紀中頃	旧河道A群-3(SD-17)内堆積物 灰白色　砂 旧河道A群-2(SD-18)内堆積物 褐灰色　シルト	旧河道A群-1内堆積物 暗灰色　砂質シルト＜飛鳥時代後半＞ 黄褐色　砂礫 黄褐色　シルト質砂礫 黒褐色　腐植質シルト＜飛鳥時代後半＞		
飛鳥時代前半以前 7世紀前半以前	黄灰色　砂 暗褐色　腐植質シルト 乳灰色　砂 淡灰褐色　砂質シルト	暗灰色　砂 暗褐色　シルト	黒灰色　砂質シルト＜古墳時代前期＞ 明灰色　砂礫 黒褐色　腐植質シルト[2] 基盤岩（花崗岩）	黒褐色　砂質シルト＜古墳時代後期＞ 暗褐色　腐植質シルト

＜　＞内は堆積物中に含まれる遺物の時期を示す。なお、旧河道Ａ群には７世紀後半～８世紀中頃の遺物が、旧河道Ｂ群とＣ群には８世紀後半～９世紀初頭の遺物が混入する。

～～を付けた堆積物は、水田土壌である。

1）の上面では、平安時代初頭の道路状遺構が検出されている。

2）の下底からは、縄文時代前期の遺構が検出されている。

破線の矢印は、その範囲のある時期に堆積時期が存在することを示す。

さらにその上位には、褐灰色の砂質シルト、灰色の砂質シルト、ならびに明灰色の砂礫が堆積している。灰色の砂質シルトと明灰色の砂礫には、平安時代中頃～後半の遺物が混入し、前者の上面では水田や井戸などの遺構が検出される。このことからみて、褐灰色の砂質シルトと灰色の砂質シルトは平安時代中頃以前に、明灰色の砂礫は平安時代中頃～後半に堆積したことが知られる。また、井戸に関しては、噴砂をともなう地震によって、井戸枠が倒壊した状況で検出されている。平安時代の後半には、この付近である程度規模の大きい地震が発生したと考えられる。

これらの堆積物より上位には、下位から順に黒褐色の砂質シルト、黒灰色のシルト、暗灰褐色のシルト、褐色のシルト、灰色の砂質シルトおよび褐色の砂礫がみられる。このうち、下から3つ目の暗灰褐色シルトには、平安時代後半～鎌倉時代の遺物が含まれる。これは、このシルトとその下位にみられる黒褐色の砂質シルトと黒灰色のシルトが、平安時代の後半に堆積したことを示す。とくに、黒褐色の砂質シルトと黒灰色のシルトはやや腐植質であり、平安時代後半の一時期には調査区付近が湿地化していた状況を想起させる。なお、暗灰褐色のシルトより上位にみられる褐色のシルト、灰色の砂質シルト、ならびに褐色の砂礫は、鎌倉時代以降に堆積したと判断される。

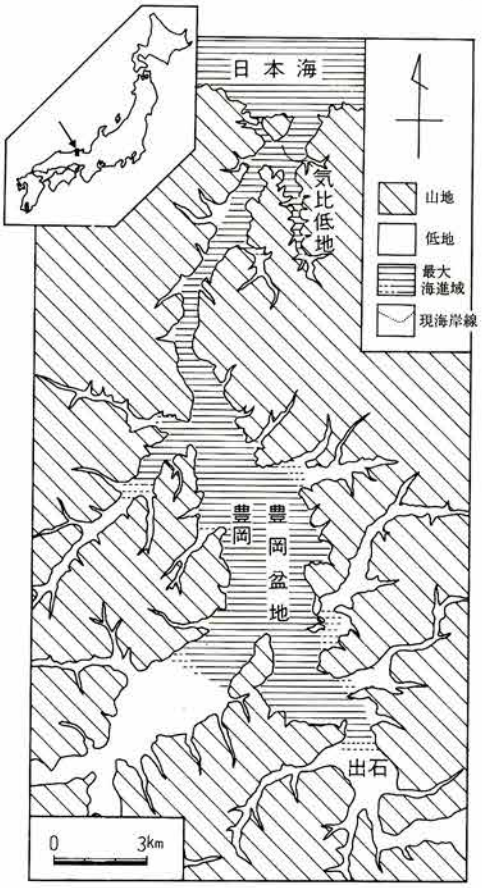


図26　縄文海進頂期における海域(青木原図、1989年)[1]

4．地形環境の変遷について

ここでは、以上までに述べてきた微地形と堆積物の特徴をもとに、飛鳥時代前半以前、飛鳥時代後半～奈良時代中頃、奈良時代後半～平安時代初頭１、奈良時代後半～平安時代初頭２、および平安時代初頭以降の５時期における砂入遺跡の地形環境を考察する。図27には、これらの５時期における地形環境を模式的に示した。

(1)　飛鳥時代前半以前（７世紀前半以前）

この時期における砂入遺跡の各調査区は、おおむね低湿な環境であった。こうした環境のもと、砂入Ⅰ区の東端では、湿地に洪水砂が堆積し、自然堤防が形成された。当時の人間は、この自然堤防上で生活しなかったと考えられ、ここでは遺構・遺物が確認されていない。砂入Ⅰ・Ⅱ区では、その後後背湿地にシルトが堆積し、これが低湿な環境下で腐植化していった。

砂入Ⅳ区でも、湿地において腐植質シルトが生成されていた。ここでは、湿地上を砂質シルトが覆ったものの、低湿な環境は変わらず、古墳時代後期にはこの堆積物を土壌にして水田が営まれた。砂入Ⅴ区では、縄文時代前期以降に低湿な環境が現出し、腐植質シルトが生成された。古墳時代前期までには、砂礫が１度搬出されたものの、その後は砂質シルトが堆積し、低湿な状態がその後も続いた。

(2) 飛鳥時代後半～奈良時代中頃（7世紀後半～8世紀中頃）

この時期に入ると、古小野川は流路を変更し、砂入Ⅰ区西部から砂入Ⅲ区にかけて、3つの流路（旧河道A群-1～3）が形成・埋積された。砂入Ⅰ区では北西方向、砂入Ⅱ・Ⅲ区では西南西方向へ流下する流路であった。この間、人間は流路付近で人形や馬形、斎串などを使った祭祀を行った。流路の周辺は低湿なままで、砂入Ⅰ区ではやや腐植化した黒褐色のシルトが表土となっていた。砂入Ⅰ区の流路を最後に埋積した砂質シルトは、こうした低湿な環境下で、飛鳥時代後半に水田に利用された。また、これと同じ時期に堆積した砂質シルトによって、砂入Ⅰ区東端の自然堤防は埋没した。

(3) 奈良時代後半～平安時代初頭1（8世紀後半～9世紀初頭1）

奈良時代中頃までに砂入Ⅰ～Ⅲ区の流路が埋積された後、古小野川の氾濫が砂入Ⅰ～Ⅲ区におよび、砂やシルト質砂、砂質シルトが堆積した。中でも砂の堆積によって、砂入Ⅱ区の西部からⅢ区にかけて自然堤防が形成された。その後、自然堤防の周囲には砂質シルトとシルト質砂が相次いでもたらされ、これによって自然堤防の比高は大幅に減じていった。この頃、古小野川の新たな流路（旧河道B群-1と2）が砂入Ⅰ区に形成された。これらは、西～西北西方向へのものであった。砂入Ⅰ区の流路は、その後砂礫、砂ならびにシルト質砂によって埋積され、古小野川は流路を変更した。

一方、砂入Ⅴ区では、古墳時代前期から奈良時代にかけて2度の洪水によって砂質シルトが堆積した。この間、顕著な地形変化はみられず、砂入Ⅰ区から連続する後背湿地が広がっていた。また、砂入Ⅳ区では、古墳時代後期以降奈良時代までに砂やシルトが湿地に堆積した。

(4) 奈良時代後半～平安時代初頭2（8世紀後半～9世紀初頭2）

砂入Ⅰ区では、旧河道B群の埋積後に古小野川の流路変更が活発に行われた。古小野川は、それまでの旧河道内堆積物を一部侵食して、砂入Ⅰ区の東部と西部を流下した。砂入Ⅰ区の東部では、流路（旧河道C群-1と2）の形成と埋積が2度繰り返された。一方、砂入Ⅰ区の西部では、4度にわたる流路変更がなされた。最初の流路（旧河道C群-3）は、前時期とほぼ同じ西方向へのびる流路であったものの、その後は方向を若干変え、砂入Ⅰ区の西端を北北西方向へ通過した（旧河道C群-4～6）。砂入Ⅰ区において流路変更が著しかったこの時期にも、古小野川の各流路周辺では木製祭祀具による祭祀が行われた。

ほぼ同じ頃、砂入Ⅱ～Ⅴ区では、道や掘立柱建物群、水田がつくられた。砂入Ⅱ・Ⅲ区では、奈良時代後半における自然堤防の形成後、地形環境の大きな変化がみられなかった。こうした環境のもと、平安時代初頭には自然堤防上にほぼ東西にのびる道がつくられ、その付近で祭祀がなされた。砂入Ⅳ・Ⅴ区でも、この時期地形環境は大きく変化せず、比較的安定した環境であった。砂入Ⅴ区では奈良時代末から平安時代にかけて水田が営まれ、また砂入Ⅳ区では平安時代初頭に4棟の掘立柱建物群が築造された。

(5) 平安時代初頭以降（9世紀初頭以降）

この時期の砂入遺跡付近は、主に後背湿地となっていた。砂入Ⅰ区では流路変更がみられ、また各調査区では後背湿地に洪水堆積物が次々と被覆した。

砂入Ⅰ区では、奈良時代後半～平安時代初頭の活発な流路変更の後も、2度にわたって古小野川の流路（旧河道D群-1・2）が形成・埋積された。両者の位置はやや異なるものの、いずれも砂入Ⅰ区の南東側から流れ込み、調査区で曲流して南西方向へ流下するものであった。これら2つの流路は、それぞれ埋積された後、度重なる洪水の堆積物によって埋没した。旧河道を覆う洪水堆積物は9つみられ、洪水の合間には腐植質シルトの生成されるような湿地の現出時期が存在した。

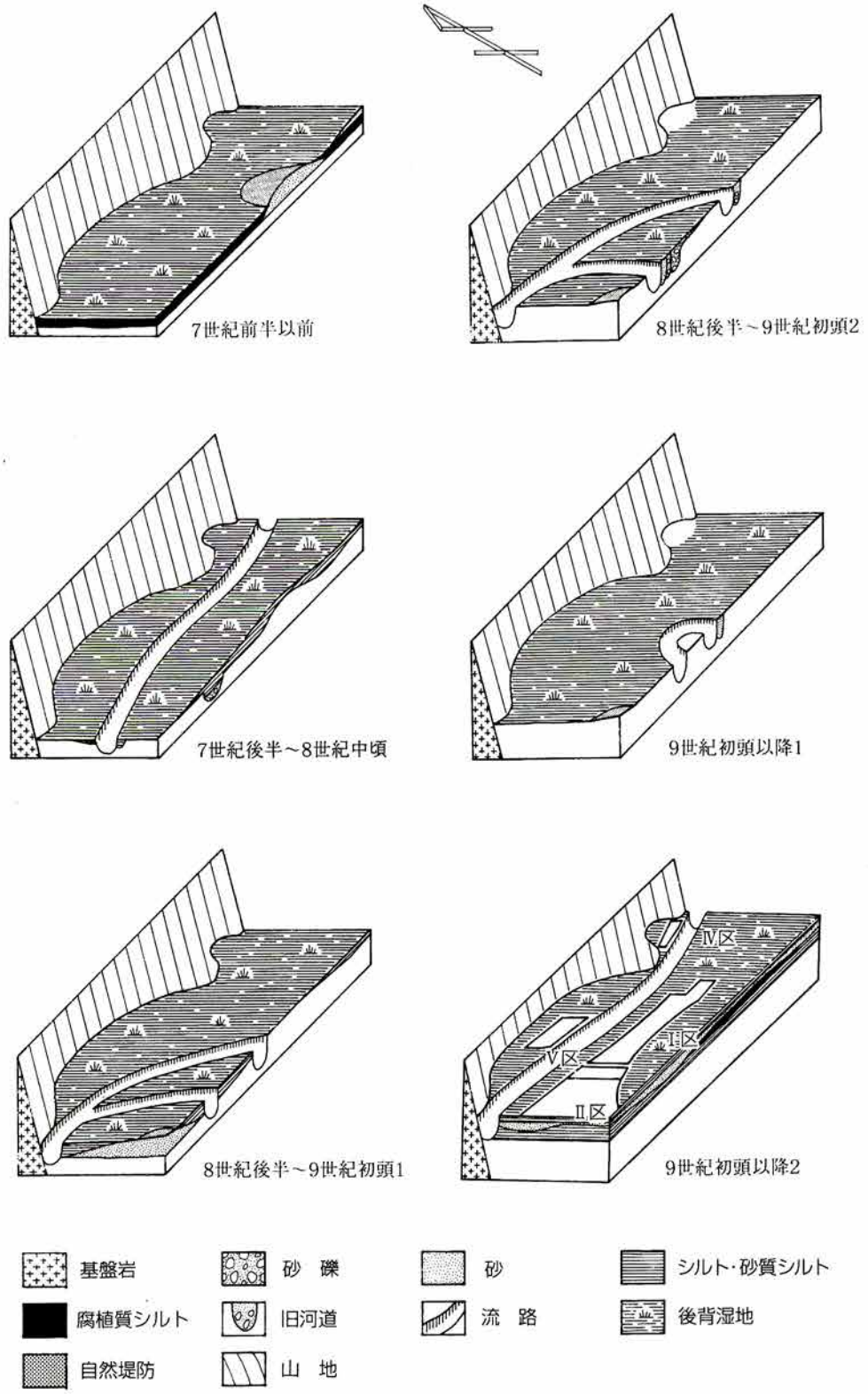


図27　遺跡付近の模式的な地形環境

砂入Ⅱ・Ⅲ区では、平安時代初頭から江戸時代まで、顕著な地形変化はなかったものの、江戸時代以降には、砂質シルトをはじめとする細粒堆積物が被覆した。その結果、自然堤防は埋没し、調査区付近は後背湿地と化した。砂入Ⅳ区では、平安時代初頭の掘立柱建物群が廃絶された後、洪水にともなう5つの堆積物がもたらされた。微高地が形成されることはなく、当時の調査区付近には後背湿地が広がっていた。

砂入Ⅴ区でも、この時期おおむね後背湿地が形成されていた。ここでは、平安時代初頭から中頃までの間に洪水がおよび、砂質シルトが堆積した。平安時代中頃には、この堆積物を土壌とする水田が営まれ、これはその後砂礫の堆積によって埋没した。さらに、平安時代後半になるとシルトや砂質シルトが堆積し、低湿な環境の下でこれらは腐植化していった。洪水は、その後鎌倉時代までおよばず、安定した環境が続いたものの、鎌倉時代を過ぎると3つの洪水堆積物がこの調査区に搬出された。なお、平安時代後半には比較的規模の大きい地震がおこり、井戸枠が倒壊した。

5．おわりに

本稿では、砂入遺跡付近の地形と堆積物を検討し、地形環境の変遷を考察した。その結果明らかになった事柄をまとめると、次のとおりである。

砂入遺跡では、古墳時代以降古小野川の洪水によって、主として後背湿地が形成されてきた。砂入Ⅰ・Ⅳ・Ⅴ区では、この後背湿地でしばしば水田が営まれた。砂入Ⅰ～Ⅲ区では、飛鳥時代後半から平安時代初頭にかけて、後背湿地上を流れる古小野川が、10度前後の流路変更を行った。これは、特に奈良時代後半～平安時代初頭に著しくなされ、流路の形成と埋積が繰り返された。また奈良時代後半頃には、遺跡付近に現在あまり存在しない自然堤防が、砂入Ⅱ・Ⅲ区で形成された。このような地形環境のもとで、奈良時代後半から平安時代初頭の人間は、人形や馬形、斎串などの木製祭祀具を使った祭祀を行った。一定の流路でなく、度々変遷した流路において祭祀が続けられたことは、砂入Ⅰ～Ⅲ区付近が祭祀を行う上での重要な地点である証と考えられる。

註1）前田保夫ほか「完新世における山陰海岸東部気比低地（兵庫県豊岡市）の古環境」、立命館地理学1、1989年、pp1～19.

第７章　砂入遺跡出土木製品の樹種

京都大学木質科学研究所
伊東　隆夫

砂入遺跡は兵庫県出石郡出石町の北方約２㎞の山間の沖積地に位置する奈良～平安時代の遺構で知られる。昭和62年から平成３年の間に５回にわたって河川のショートカット事業にともなう調査が実施された。遺構面は基本的には２面に分かれ、現河道に沿うように奈良時代～平安時代を中心とする時期の溝や旧河道、道路状遺構などが検出されている。溝や旧河道の岸辺などでは「祓」が行われたと考えられ、それに関連する多量の木製祭祀具が出土した。

木製品は人形、馬形、斎串などの祭祀具のほか曲物、槽、鉢、箱などの容器、田下駄、田舟、鍬、木錘、横槌などの農具、下駄、檜扇などの服飾具、火鑽板などの発火具、独楽などの遊戯具、梯子などの建築材、杭など多数の木製品が出土している。

これらの木製品のうち245点につき樹種の同定をおこなった。小片から安全カミソリで木口、柾目、板目の三断面の薄い切片を切り出し、スライドガラスに載せてガムクロラールで封入した。作製したプレパラートを顕微鏡で観察し、以下の識別拠点により木製品の樹種を同定した。

樹種同定の拠点

モミ（*Abies firma* Sieb.et Zucc）

通常樹脂道はみられない。ときに、傷害樹脂道が出現する。軸方向柔細胞を欠く。放射柔細胞の壁は厚い。放射柔細胞の水平壁は数珠状となる。放射仮道管を欠く。

スギ（*Cryptomeria japonica* D. Don）

樹脂道を欠く。軸方向柔細胞は接線状に点在する。分野壁孔は典型的なスギ型となる。

ヒノキ（*Chamaecyparis obtusa* Endlicher）

樹脂道を欠く。軸方向柔細胞は接線状に点在する。分野壁孔は典型的なヒノキ型となる。

クマシデ属（*Carpinus* sp.）

散孔材。単穿孔と階段穿孔。道管にらせん肥厚。放射組織は同性で１－３列。集合放射組織がみられる。

ブナ属（*Fagus* sp.）

散孔材。単穿孔と階段穿孔。放射組織はほぼ同性で単列から広放射組織まで様々の形が出現する。

アカガシ亜属（*Quercus* sp., Cyclobalanopsis）

放射孔材。単穿孔。単列放射組織と広放射組織がみられる。

コナラ節（*Quercus* sp., Prinus）

環孔材。単穿孔。小道管は多数が放射状に配列する。単列放射組織と広放射組織がみられる。

クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.）

環孔材。単穿孔。小道管は放射状ないし火炎状に配列する。放射組織は単列同性。

シイ属（*Castanopsis* sp.）

環孔材。孔圏道管は不連続。小道管は火炎状に配列。放射組織は単列同性。

ケヤキ（*Zelkova serrata* Makino）

環孔材。小道管は花づな状となる。単穿孔。小道管にらせん肥厚。放射組織は異性で１－８列。直立細胞に大型の結晶が出現。

ヤマグワ（*Morus australis* Poiret）

環孔材。単穿孔。道管にらせん肥厚。チロースが出現。小道管は斜線状ないし塊状に分布する。放射組織は異性で１－６列。

カエデ属（*Acer* sp.）

散孔材。単穿孔。道管にらせん肥厚。木繊維が横断面で特徴的な模様をつくる。放射組織は異性で１－６列。

トチノキ（*Aesculus turbinata* Blume）

散孔材。単穿孔。道管にらせん肥厚。放射組織は単列同性で層階状配列。

ムクロジ（*Aphanante aspera* Planchon）

環孔材。小道管は集団をなして接線状に配列するか不規則な帯状となる。単穿孔。小道管にらせん肥厚。放射組織は同性で１－３列。

サカキ（*Cleyera japonica* Thunb. pro parte emend. Sieb. et Zucc.）

散孔材。道管は極めて小さい。階段穿孔。バーは多数。放射組織は異性で１－３列。

カキノキ（*Diospyros kaki* Thunberg）

散孔材。単穿孔。放射組織は異性で１－２列となり、層階状配列。

エゴノキ（*Styrax japonica* Sieb. et Zucc.）.

散孔材。階段穿孔。軸方向柔細胞は年輪外周部で１－２列の接線状配列。放射組織は異性で１－４列。

表17に樹種同定結果の一覧を示す。また、表16には製品群ごとにまとめた樹種の利用傾向を示す。

全体では246点のうちスギが164点、ヒノキが50点、その他が28点、不明が３点であって、スギに次いで多いのがヒノキとなっている。

祭祀具の用材をみると112点のうち98点にスギが用いられており、スギの利用頻度が８割以上と極めて高いことがわかる。個々の祭祀具についてみると、スギの利用度は人形が46点中45点、斎串が37点中26点、馬形が21点中20点となっている。農・工具では41点のうちスギが31点出土しているがそのほとんどが田下駄として用いられている。その他の木製品では容器・食事具の箱、墨絵のある木箱、杓子形木器にそれぞれ１点ずつ、服飾具の檜扇に１点、檜扇状木器に２点用いられ、発火具の火鑽板に３点用いられているに過ぎない。なお、用途不明の材として18点のうちスギが12点、ヒノキが６点用いられ、部材として２点のうちスギが１点用いられている。これらとは異なり、杭にはクリ、アカガシ亜属、クマシデ属、ブナ属、コナラ節、エゴノキ、カエデ属、シイ属、サカキなど多様な樹種が用いられている。さらに、農具には田下駄以外は広葉樹の利用度が高く、容器にあっては曲物類を中心にヒノキが多用されている傾向にある。

結論として、本遺跡の特徴は、祭祀具にスギが多用されていることにある。これまでの遺跡のデータでは人形、斎串、馬形等の祭祀具にはヒノキが多用される傾向がみられる[1]が本遺跡はこれとは異なった傾向にあると言える。本遺跡では祭祀具のみならず多くの木製品にスギを利用している。日本海側には古くより天然のスギが分布することが知られており、これらの地域では多くの木製品にスギを利用す

る傾向があったものと推定される。

1) 島地　謙、伊東隆夫編：日本の遺跡出土木製品総覧　雄山閣　1988.

表16　製品別樹種一覧表　　（ヒノキは？含む）

時代	用途	遺物名	点数	樹種			
				スギ	ヒノキ	その他	不明
弥生～古墳時代	農具	穂摘具	1			ヤマグワ 1	
奈良～平安時代	・・・	木簡・付札	14	11	3		
（一部鎌倉時代）	祭祀具	人形	46	45	1		
		馬形	21	20	1		
		斎串A・D・E	32	26	6		
		斎串F	5			ウルシ属 5	
		刀形・剣形	5	4	1		
		舟形	3	3			
	農具	田下駄類	30	29			
		木錘	3		1	アカガシ亜属 1	1
		鍬・えぶり	2	1		ムクロジ 1	
		鎌柄	1			ヤマグワ 1	
		田舟	1	1			
		作業台	1			カキノキ 1	
		籾掬い	1	1			
	工具	掛矢	1		1		
	容器	曲物類	20		20		
		有孔曲物底板	2		2		
		皿類	3		2	ケヤキ1	
		墨絵のある木箱	1	1			
		箱	1	1			
		鉢	1			トチノキ 1	
	食事具	杓子形木器	1	1			
	服飾具	下駄	2		2		
		檜扇状木器	2	2			
		檜扇	1	1			
	発火具	火鑽板	3	3			
	遊戯具	独楽	2		1		1
	建築材	梯子	1	1			
	その他	木釘	1			モミ 1	
		楔	1				1
		部材	2	1	1		
		用途不明など	18	12	6		
		杭（道路状遺構）	15		1	クリ 6　アカガシ亜属 1 コナラ節 1　エゴノキ 1 シイ属 1　サカキ 1 ブナ 1　クマシデ属 1 カエデ属 1	
近世？	容器	漆塗り椀	1			ケヤキ1	
	合計		245	164	50	28	3

表17　樹種同定結果一覧表

資料番号	報告番号	遺　物　名	遺　構・層　位	時　　代	樹　　種	調査区	木　器 登録番号
1	5	台状枠歯	暗褐色ピート層	飛鳥時代	スギ	砂入Ⅰ区	71(1)
2	5	台状枠歯	暗褐色ピート層	飛鳥時代	スギ	砂入Ⅰ区	71(2)
3	5	台状枠支軸	暗褐色ピート層	飛鳥時代	スギ	砂入Ⅰ区	71(3)
4	6	田下駄C	暗褐色ピート層	飛鳥時代	スギ	砂入Ⅰ区	7
5	7	台状枠支軸	暗褐色ピート層	飛鳥時代	スギ	砂入Ⅰ区	6
6	9	台状枠歯	暗褐色ピート層	飛鳥時代	スギ	砂入Ⅰ区	62(1)
7	9	台状枠支軸	暗褐色ピート層	飛鳥時代	スギ	砂入Ⅰ区	62(2)
8	10	台状枠歯	暗褐色ピート層	飛鳥時代	スギ	砂入Ⅰ区	56
9	12	田下駄B	暗褐色ピート層	飛鳥時代	スギ	砂入Ⅰ区	26
10	13	田下駄B	暗褐色ピート層	飛鳥時代	スギ	砂入Ⅰ区	3
11	14	田下駄A	暗褐色ピート層	飛鳥時代	スギ	砂入Ⅰ区	65
12	15	田下駄A	暗褐色ピート層	飛鳥時代	スギ	砂入Ⅰ区	67
13	16	方形枠横桟	暗褐色ピート層	飛鳥時代	スギ	砂入Ⅰ区	57
14	17	方形枠横桟	暗褐色ピート層	飛鳥時代	スギ	砂入Ⅰ区	59
15	18	方形枠横桟	暗褐色ピート層	飛鳥時代	スギ	砂入Ⅰ区	1007
16	23	火鑽板	SF05	奈良時代	スギ	砂入Ⅰ区	1086
17	24	用途不明	SF05	奈良時代	ヒノキ	砂入Ⅰ区	61
18	163	火鑽板	木道周辺	奈良時代	スギ	砂入Ⅰ区	2760
19	164	田下駄B	SF05	奈良時代	スギ	砂入Ⅰ区	2531
20	165	えぶり	木道周辺	奈良時代	スギ	砂入Ⅰ区	2532
21	166	田下駄A	木道周辺	奈良時代	スギ	砂入Ⅰ区	2535
22	338	紐かけのある棒状材	SD02・03	平安時代	スギ	砂入Ⅰ区	1071
23	339	檜扇	SD02・03	平安時代	スギ	砂入Ⅰ区	1245
24	341	用途不明	SD02・03	平安時代	スギ	砂入Ⅰ区	1036
25	343	紐かけのある棒状材	SD02・03	平安時代	スギ	砂入Ⅰ区	1174
26	344	用途不明	SD02・03	平安時代	スギ	砂入Ⅰ区	1074
27	345	田下駄A	SD02・03	平安時代	スギ	砂入Ⅰ区	161
28	350	円形曲物底板	SD02・03	平安時代	ヒノキ	砂入Ⅰ区	1059
29	351	円形曲物底板	SD02・03	平安時代	ヒノキ	砂入Ⅰ区	1024
30	352	円形曲物底板	SD02・03	平安時代	ヒノキ	砂入Ⅰ区	1259
31	353	円形曲物底板	SD02・03	平安時代	ヒノキ	砂入Ⅰ区	187
32	354	擬高台付皿	SD02・03	平安時代	ヒノキ	砂入Ⅰ区	1221
33	398	人形A	SD18最下層	飛鳥時代	スギ	砂入Ⅱ区	4052
34	399	人形A	SD18最下層	飛鳥時代	スギ	砂入Ⅱ区	3868
35	403	人形A	SD18最下層	飛鳥時代	スギ	砂入Ⅱ区	4065
36	427	斎串A	SD18最下層	飛鳥時代	スギ	砂入Ⅱ区	3404
37	429	斎串A	SD18最下層	飛鳥時代	スギ	砂入Ⅱ区	3405
38	431	斎串A	SD18最下層	飛鳥時代	スギ	砂入Ⅱ区	755
39	435	斎串A	SD18最下層	飛鳥時代	スギ	砂入Ⅱ区	3418
40	510	人形A	SD18	奈良時代	スギ	砂入Ⅱ区	3349
41	511	人形A	SD18	奈良時代	スギ	砂入Ⅱ区	3383
42	513	人形A	SD18	奈良時代	スギ	砂入Ⅱ区	3551
43	531	人形A	SD18	奈良時代	スギ	砂入Ⅱ区	3596
44	537	人形A	SD18	奈良時代	スギ	砂入Ⅱ区	3564
45	648	剣形	SD18	奈良時代	スギ	砂入Ⅱ区	3535
46	653	舟形	SD18	奈良時代	スギ	砂入Ⅱ区	3194
47	674	斎串A	SD18	奈良時代	スギ	砂入Ⅱ区	3390
48	680	斎串A	SD18	奈良時代	ヒノキ	砂入Ⅱ区	3401
49	694	斎串A	SD18	奈良時代	スギ	砂入Ⅱ区	3397
50	709	斎串A	SD18	奈良時代	ヒノキ	砂入Ⅱ区	401
51	719	斎串A	SD18	奈良時代	スギ	砂入Ⅱ区	1886
52	721	斎串A	SD18	奈良時代	スギ	砂入Ⅱ区	1943
53	724	斎串A	SD18	奈良時代	ヒノキ	砂入Ⅱ区	3966
54	734	斎串A	SD18	奈良時代	スギ	砂入Ⅱ区	1889
55	743	斎串A	SD18	奈良時代	スギ	砂入Ⅱ区	1825
56	786	斎串A	SD18	奈良時代	スギ	砂入Ⅱ区	56

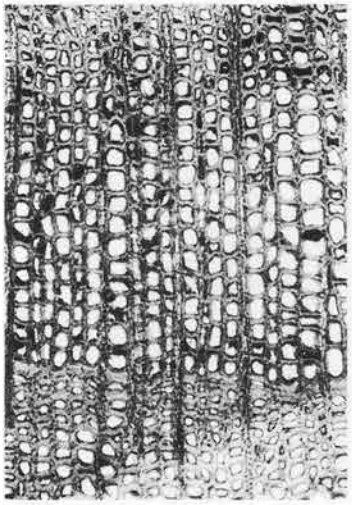
資料番号	報告番号	遺　物　名	遺　構・層　位	時　　代	樹　　種	調査区	木　器 登録番号
57	789	斎串A	SD18	奈良時代	スギ	砂入Ⅱ区	68
58	820	作業台	SD18	奈良時代	カキノキ	砂入Ⅱ区	2788
59	874	人形A	SD18	奈良時代	スギ	砂入Ⅱ区	2258
60	958	特殊刀形	SD18	奈良時代	スギ	砂入Ⅱ区	555
61	960	特殊刀形	SD18	奈良時代	スギ	砂入Ⅱ区	566
62	966	特殊刀形	SD18	奈良時代	スギ	砂入Ⅱ区	545
63	1054	斎串A	SD18	奈良時代	スギ	砂入Ⅱ区	4048
64	1070	斎串A	SD18	奈良時代	スギ	砂入Ⅱ区	1993
65	1075	斎串A	SD18	奈良時代	スギ	砂入Ⅱ区	1908
66	1077	斎串A	SD18	奈良時代	スギ	砂入Ⅱ区	4050
67	1081	斎串A	SD18	奈良時代	スギ	砂入Ⅱ区	553
68	1085	斎串A	SD18	奈良時代	スギ	砂入Ⅱ区	1806
69	1165	円形曲物底板	SD18	奈良時代	ヒノキ	砂入Ⅱ区	2700
70	1166	円形曲物側板	SD18	奈良時代	ヒノキ	砂入Ⅱ区	3531
71	1167	皿	SD18	奈良時代	ケヤキ	砂入Ⅱ区	3534
72	1168	箱	SD18	奈良時代	スギ	砂入Ⅱ区	2702
73	1169	籾掬い	SD18	奈良時代	スギ	砂入Ⅱ区	2701
74	1171	軸連結の板	SD18	奈良時代	スギ	砂入Ⅱ区	2662
75	1172	軸連結の板	SD18	奈良時代	スギ	砂入Ⅱ区	2660
76	1175	掛矢	SD18	奈良時代	ヒノキ？	砂入Ⅱ区	2789
77	1182	用途不明	SD18	奈良時代	ヒノキ？	砂入Ⅱ区	3156
78	1188	馬形B	SF03	奈良時代	スギ	砂入Ⅱ区	2487
79	1209	人形A	SF03	奈良時代	スギ	砂入Ⅱ区	2152
80	1219	人形A	SF03	奈良時代	スギ	砂入Ⅱ区	2274
81	1226	馬形B	SF03	奈良時代	スギ	砂入Ⅱ区	2446
82	1236	人形A	SF03	奈良時代	スギ	砂入Ⅱ区	2214
83	1269	馬形B	SF03	奈良時代	スギ	砂入Ⅱ区	2485
84	1274	馬形B	SF03	奈良時代	スギ	砂入Ⅱ区	2484
85	1290	斎串A	SF03	奈良時代	ヒノキ	砂入Ⅱ区	936
86	1305	人形A	SF03	奈良時代	スギ	砂入Ⅱ区	4053
87	1307	人形D	SF03	奈良時代	ヒノキ	砂入Ⅱ区	4054
88	1323	人形A	SF03	奈良時代	スギ	砂入Ⅱ区	2118
89	1336	人形A	SF03	奈良時代	スギ	砂入Ⅱ区	2202
90	1349	馬形B	SF03	奈良時代	スギ	砂入Ⅱ区	2438
91	1350	馬形B	SF03	奈良時代	スギ	砂入Ⅱ区	2436
92	1353	馬形B	SF03	奈良時代	スギ	砂入Ⅱ区	2423
93	1355	馬形B	SF03	奈良時代	スギ	砂入Ⅱ区	2390
94	1356	馬形B	SF03	奈良時代	スギ	砂入Ⅱ区	2387
95	1361	馬形B	SF03	奈良時代	スギ	砂入Ⅱ区	2435
96	1367	斎串A	SF03	奈良時代	スギ	砂入Ⅱ区	164
97	1368	斎串A	SF03	奈良時代	スギ	砂入Ⅱ区	166
98	1371	斎串A	SF03	奈良時代	スギ	砂入Ⅱ区	165
99	1384	斎串A	SF03	奈良時代	スギ	砂入Ⅱ区	144
100	1395	斎串A	SF03	奈良時代	スギ	砂入Ⅱ区	148
101	1433	田下駄B	SF03	奈良時代	スギ	砂入Ⅱ区	2808
102	1502	舟形	SF02	奈良時代	スギ	砂入Ⅱ区	2673
103	1537	斎串A	SD18上層	奈良時代	ヒノキ	砂入Ⅱ区	585
104	1548	斎串A	SD18上層	奈良時代	スギ	砂入Ⅱ区	113
105	1554	斎串E	SD18上層	奈良時代	スギ	砂入Ⅱ区	836
106	1574	用途不明	黒色粘土・黒色シルト層	奈良時代	スギ	砂入Ⅱ区	2677
107	1578	下駄	黒色粘土・黒色シルト層	奈良時代	ヒノキ	砂入Ⅱ区	2681
108	1590	人形F	暗褐色ピート層	奈良時代	スギ	砂入Ⅱ区	3137
109	1634	楕円形曲物底板	暗褐色ピート層	奈良時代	ヒノキ	砂入Ⅱ区	3160
110	1638	台状枠歯	暗褐色ピート層	奈良時代	スギ	砂入Ⅱ区	2814
111	1641	田下駄A	暗褐色ピート層	奈良時代	スギ	砂入Ⅱ区	2794
112	1643	部材	暗褐色ピート層	奈良時代	ヒノキ	砂入Ⅱ区	2838
113	1682	田船	SD17	奈良時代	スギ	砂入Ⅱ区	3842

資料番号	報告番号	遺　物　名	遺　構・層　位	時　　代	樹　　種	調査区	木　器 登録番号
114	1686	円形曲物底板	SF01-7層	平安時代	ヒノキ	砂入Ⅱ区	2693
115	1693	人形C	SF01-7層	平安時代	スギ	砂入Ⅱ区	2292
116	1696	円形曲物底板	SF01-7層	平安時代	ヒノキ	砂入Ⅱ区	3533
117	1696	円形曲物側板	SF01-7層	平安時代	ヒノキ	砂入Ⅱ区	3533
118	1702	斎串A	SF01-7層	平安時代	ヒノキ	砂入Ⅱ区	1813
119	1739	円形曲物底板	SK02	平安時代	ヒノキ	砂入Ⅱ区	2716
120		(欠番)					
121	1798	木簡	粗砂	平安時代	スギ	砂入Ⅱ区	3536
122	1800	円形曲物底板	粗砂	平安時代	ヒノキ	砂入Ⅱ区	3530
123	1800	円形曲物側板	粗砂	平安時代	ヒノキ	砂入Ⅱ区	3530
124	1804	軸連結の板	粗砂	平安時代	スギ	砂入Ⅱ区	2680
125	1805	鉢	粗砂	平安時代	トチノキ	砂入Ⅱ区	2706
126	1811	部材	粗砂	平安時代	スギ	砂入Ⅱ区	2797
127	1815	用途不明	粗砂	平安時代	スギ	砂入Ⅱ区	2667
128	1816	木釘	粗砂	平安時代	モミ	砂入Ⅱ区	2855
129	1819	下駄	粗砂	平安時代	ヒノキ	砂入Ⅱ区	3537
130	1823	杓子形木器	粗砂	平安時代	スギ	砂入Ⅱ区	4049
131	1829	人形C	近世河道	平安時代？	スギ	砂入Ⅱ区	3823
132	1836	用途不明	近世河道	平安時代？	スギ	砂入Ⅱ区	3832
133	1838	木錘	灰色砂層	平安時代？	？	砂入Ⅱ区	3835
134	1840	漆塗り椀	灰色砂層	近世？	ケヤキ	砂入Ⅱ区	3538
135	1851	鎌柄	SD06	平安時代以降	ヤマグワ	砂入Ⅰ区	1720
136	1853	舟形	機械掘削	平安時代？	スギ	砂入Ⅰ区	1002
137	1970	円形曲物底板	SD18	奈良時代	ヒノキ	砂入Ⅲ区	883
138	1970	円形曲物側板	SD18	奈良時代	ヒノキ	砂入Ⅲ区	883
139	1971	円形曲物底板	SD18	奈良時代	ヒノキ	砂入Ⅲ区	882
140	1971	円形曲物側板	SD18	奈良時代	ヒノキ	砂入Ⅲ区	882
141	1986	斎串D	SD18上層	奈良時代	スギ	砂入Ⅲ区	354
142	2024	梯子	SD19	奈良時代	スギ	砂入Ⅲ区	902
143	2199	人形C	排水溝	奈良時代以降？	スギ	砂入Ⅲ区	876
144	2209	独楽	排水溝	奈良時代以降？	ヒノキ	砂入Ⅲ区	888
145	2210	独楽	排水溝	奈良時代以降？	？	砂入Ⅲ区	889
146	2211	檜扇形木器	排水溝	奈良時代以降？	スギ	砂入Ⅲ区	887
147	2214	斎串？	排水溝	奈良時代以降？	ヒノキ	砂入Ⅲ区	901
148	2268	楕円形曲物底板	第３面	奈良～平安時代	ヒノキ	砂入Ⅴ区	347
149	2270	穂摘具	第３面	弥生～古墳時代	ヤマグワ	砂入Ⅴ区	339
150	2271	木錘	第３面	奈良～平安時代	アカガシ亜属	砂入Ⅴ区	209
151	2272	木錘	第３面	奈良～平安時代	ヒノキ	砂入Ⅴ区	261
152	2274	方形枠	第３面	奈良～平安時代	スギ	砂入Ⅴ区	312
153	2289	楔	第３面	奈良～平安時代	？	砂入Ⅴ区	307
154	2294	用途不明	第３面	奈良～平安時代	ヒノキ	砂入Ⅴ区	198
155	2295	棒状材	第３面	奈良～平安時代	ヒノキ	砂入Ⅴ区	251
156	2314	人形C	第２面	平安時代	スギ	砂入Ⅴ区	444
157	2318	人形A	第２面	平安時代	スギ	砂入Ⅴ区	341
158	2319	馬形A	第２面	平安時代	スギ	砂入Ⅴ区	302
159	2322	剣形	第２面	平安時代	ヒノキ	砂入Ⅴ区	203
160	2325	円形曲物底板	第２面	平安時代	ヒノキ	砂入Ⅴ区	134
161	2326	田下駄B	第２面	平安時代	スギ	砂入Ⅴ区	299
162	2328	田下駄A	第２面	平安時代	ヒノキ	砂入Ⅴ区	182
163	2329	台状枠歯	第２面	平安時代	ヒノキ	砂入Ⅴ区	143
164	2330	田下駄A	第２面	平安時代	スギ	砂入Ⅴ区	355
165	2334	有孔の栓	第２面	平安時代	スギ	砂入Ⅴ区	171
166	2336	用途不明	第２面	平安時代	スギ	砂入Ⅴ区	129
167	2371	人形C	第１面	平安～鎌倉時代	スギ	砂入Ⅴ区	84
168	2374	擬高台付皿	第１面	平安～鎌倉時代	ヒノキ	砂入Ⅴ区	78
169	2375	有孔曲物底板	第１面	平安～鎌倉時代	ヒノキ	砂入Ⅴ区	73
170	2376	円形曲物底板	第１面	平安～鎌倉時代	ヒノキ	砂入Ⅴ区	50

資料番号	報告番号	遺　物　名	遺　構・層　位	時　　代	樹　　種	調査区	木　器 登録番号
171	2377	円形曲物底板	第１面	平安～鎌倉時代	ヒノキ	砂入Ⅴ区	29
172	2379	田下駄Ａ	第１面	平安～鎌倉時代	ヒノキ	砂入Ⅴ区	414
173	2381	田下駄Ｂ	第１面	平安～鎌倉時代	スギ	砂入Ⅴ区	86
174	2383	田下駄Ａ	第１面	平安～鎌倉時代	スギ	砂入Ⅴ区	65
175	2384	鍬	第１面	平安～鎌倉時代	ムクロジ	砂入Ⅴ区	75
176	2389	火鑽板	第１面	平安～鎌倉時代	スギ	砂入Ⅴ区	103
177	2393	用途不明	第１面	平安～鎌倉時代	スギ	砂入Ⅴ区	124
178	2394	用途不明	第１面	平安～鎌倉時代	ヒノキ	砂入Ⅴ区	21
179	5001	馬形	SD02・03	平安時代	スギ	砂入Ⅰ区	152
180	5002	馬形	SD02・03	平安時代	スギ	砂入Ⅰ区	197
181	5003	馬形	SD02・03	平安時代	スギ	砂入Ⅰ区	201
182	5004	馬形	SD02・03	平安時代	スギ	砂入Ⅰ区	208
183	5005	馬形	SD02・03	平安時代	スギ	砂入Ⅰ区	1090
184	5006	馬形	SD02・03	平安時代	スギ	砂入Ⅰ区	1133
185	5007	馬形	SD02・03	平安時代	スギ	砂入Ⅰ区	1285
186	5008	馬形	SD02・03	平安時代	スギ	砂入Ⅰ区	1308
187	5009	馬形	SD02・03	平安時代	ヒノキ	砂入Ⅰ区	1373
188	5010	馬形	SD02・03	平安時代	スギ	砂入Ⅰ区	1486
189	5011	斎串Ｆ	SD18	奈良時代	ウルシ属	砂入Ⅱ区	2004
190	5012	斎串Ｆ	SD18	奈良時代	ウルシ属	砂入Ⅱ区	2020
191	5013	斎串Ｆ	SD18	奈良時代	ウルシ属	砂入Ⅱ区	2026
192	5014	斎串Ｆ	SD18	奈良時代	ウルシ属	砂入Ⅱ区	3007
193	5015	斎串Ｆ	SD18	奈良時代	ウルシ属	砂入Ⅱ区	3022
194	5016	杭	SF01	平安時代	コナラ節	砂入Ⅱ区	杭No.1
195	5017	杭	SF01	平安時代	クリ	砂入Ⅱ区	杭No.15
196	5018	杭	SF01	平安時代	エゴノキ	砂入Ⅱ区	杭No.22
197	5019	杭	SF01	平安時代	クリ	砂入Ⅱ区	杭No.31
198	5020	杭	SF01	平安時代	カエデ属	砂入Ⅱ区	杭No.71
199	5021	杭	SF01	平安時代	クリ	砂入Ⅱ区	杭No.84
200	5022	杭	SF01	平安時代	シイ属	砂入Ⅱ区	杭No.85
201	5023	杭	SF01	平安時代	クリ	砂入Ⅱ区	杭No.98
202	5024	杭	SF01	平安時代	ブナ	砂入Ⅱ区	杭No.100
203	5025	杭	SF01	平安時代	クマシデ属	砂入Ⅱ区	杭No.107
204	5026	杭	SF01	平安時代	クリ	砂入Ⅱ区	杭No.501
205	5027	杭	SF01	平安時代	カシ	砂入Ⅱ区	杭No.520
206	5028	杭	SF01	平安時代	ヒノキ	砂入Ⅱ区	杭No.561
207	5029	杭	SF01	平安時代	クリ	砂入Ⅱ区	杭No.623
208	5030	杭	SF01	平安時代	サカキ	砂入Ⅱ区	杭No.660
209	333	木簡	SD02・03	平安時代	スギ	砂入Ⅰ区	1734
210	332	木簡	SD02・03	平安時代	スギ	砂入Ⅰ区	1738
211	1761	人形Ｃ	SK01	平安時代	スギ	砂入Ⅱ区	3259
212	1763	人形Ｃ	SK01	平安時代	スギ	砂入Ⅱ区	3260
213	1767	人形Ｃ	SK01	平安時代	スギ	砂入Ⅱ区	3261
214	1771	人形Ｃ	SK01	平安時代	スギ	砂入Ⅱ区	3262
215	1773	人形Ｃ	SK01	平安時代	スギ	砂入Ⅱ区	3263
216	1772	人形Ｃ	SK01	平安時代	スギ	砂入Ⅱ区	3264
217	1770	人形Ｃ	SK01	平安時代	スギ	砂入Ⅱ区	3265
218	1769	人形Ｃ	SK01	平安時代	スギ	砂入Ⅱ区	3266
219	1768	人形Ｃ	SK01	平安時代	スギ	砂入Ⅱ区	3267
220	1762	人形Ｃ	SK01	平安時代	スギ	砂入Ⅱ区	3268
221	1766	人形Ｃ	SK01	平安時代	スギ	砂入Ⅱ区	3269
222	1760	人形Ｃ	SK01	平安時代	スギ	砂入Ⅱ区	3270
223	1759	人形Ｃ	SK01	平安時代	スギ	砂入Ⅱ区	3544
224	1734	人形Ｃ	SK02	平安時代	スギ	砂入Ⅱ区	3307
225	1743	人形Ｃ	SK02	平安時代	スギ	砂入Ⅱ区	3308
226	1735	人形Ｃ	SK02	平安時代	スギ	砂入Ⅱ区	3309
227	1744	人形Ｃ	SK02	平安時代	スギ	砂入Ⅱ区	3311

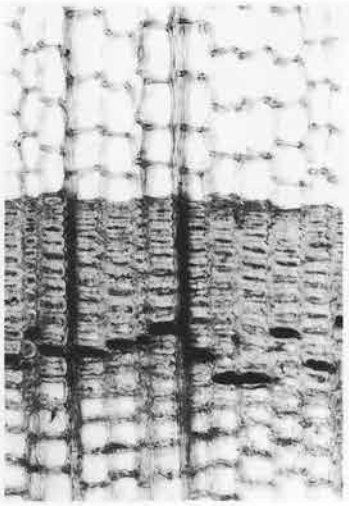
資料番号	報告番号	遺　物　名	遺　構・層　位	時　　代	樹　　種	調査区	木　器 登録番号
228	1732	人形C	SK02	平安時代	スギ	砂入Ⅱ区	3539
229	1731	人形C	SK02	平安時代	スギ	砂入Ⅱ区	3540
230	1742	人形C	SK02	平安時代	スギ	砂入Ⅱ区	3543
231	1737	人形C	SK02	平安時代	スギ	砂入Ⅱ区	3545
232	1738	人形C	SK02	平安時代	スギ	砂入Ⅱ区	3546
233	1745	人形C	SK02	平安時代	スギ	砂入Ⅱ区	3547
234	1841	墨絵のある木箱	灰色砂層	平安時代？	スギ	砂入Ⅱ区	3549
235	1799	木簡	粗砂	平安時代？	スギ	砂入Ⅱ区	3864
236	1991	檜扇形木器	SF02	奈良時代	スギ	砂入Ⅲ区	886
237	2363	木簡	第１面	平安～鎌倉時代	ヒノキ	砂入Ⅴ区	1
238	2364	木簡	第１面	平安～鎌倉時代	スギ	砂入Ⅴ区	2
239	2310	木簡	第２面	平安時代	スギ	砂入Ⅴ区	4
240	2308	木簡	第２面	平安時代	ヒノキ	砂入Ⅴ区	5
241	2311	木簡	第２面	平安時代	スギ	砂入Ⅴ区	6
242	2312	木簡	第２面	平安時代	スギ	砂入Ⅴ区	7
243	2257	付札	第３面	奈良～平安時代	スギ	砂入Ⅴ区	10
244	2366	木簡	第１面	平安～鎌倉時代	ヒノキ	砂入Ⅴ区	11
245	2309	木簡	第２面	平安時代	スギ	砂入Ⅴ区	13
246	2256	木簡	第３面	奈良～平安時代	スギ	砂入Ⅴ区	14

注）資料番号120は221と重複していたため欠番とした
　　資料番号179～208は報告書非掲載資料
　　平安時代は奈良時代末を含む

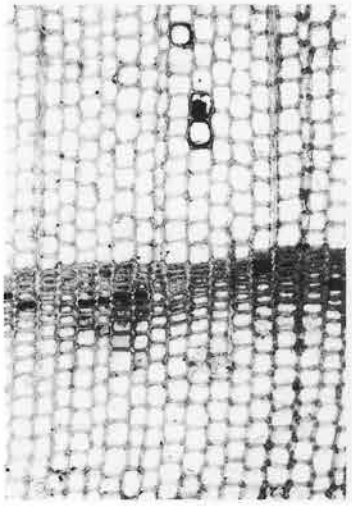


1.モミ(128)木口×100

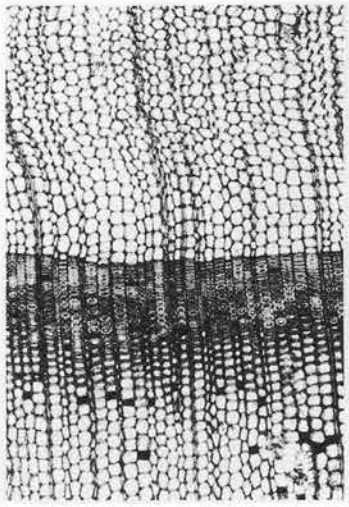
2.モミ(128)柾目×400



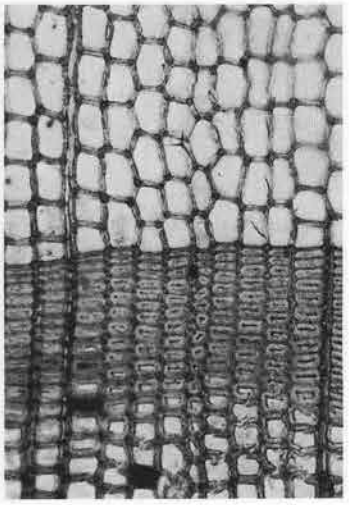
3.スギ(61)木口×100



4.スギ(113)木口×100

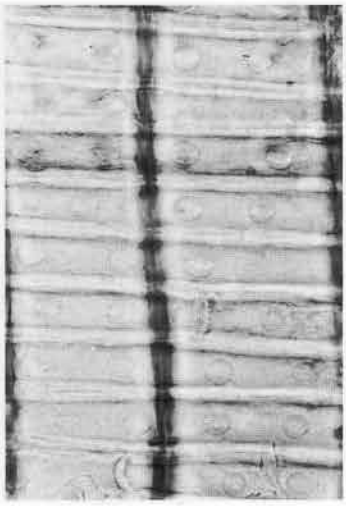


5.スギ(182)木口×40

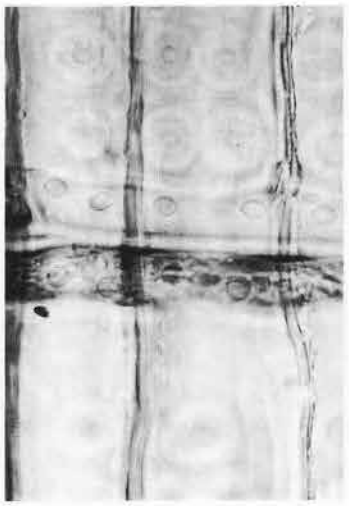


6.スギ(212)木口×100

7.スギ(20)柾目×400

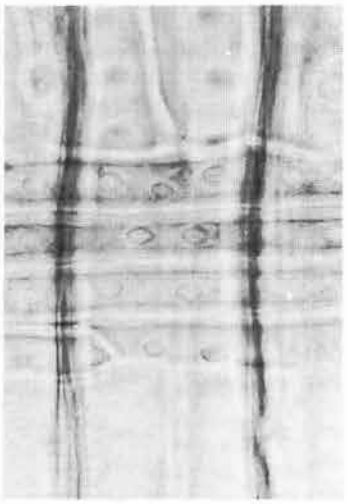


8.スギ(40)柾目×400

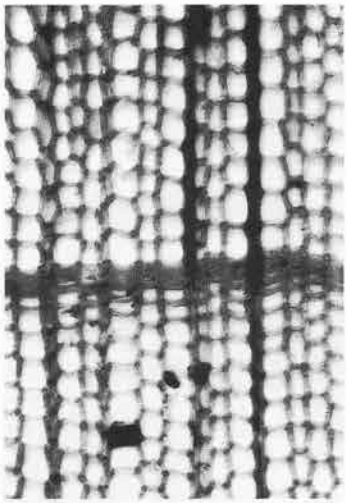


9.スギ(94)柾目×400

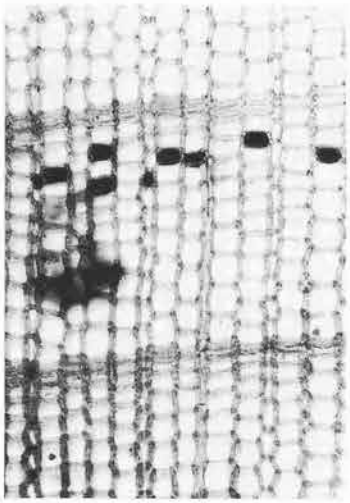
図28　木製品顕微鏡写真　(1)



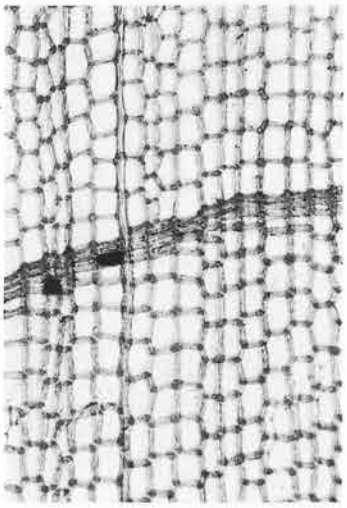
10.スギ(226)柾目×400



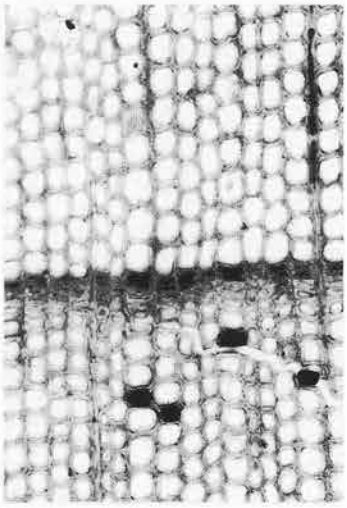
11.ヒノキ(28)木口×100



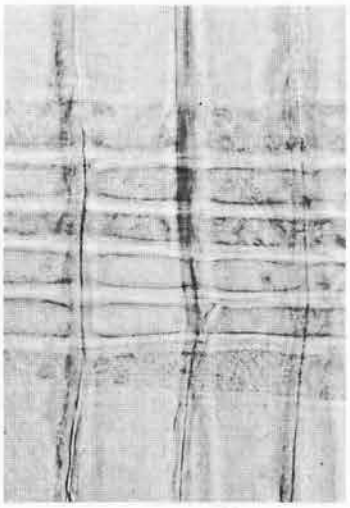
12.ヒノキ(32)木口×100



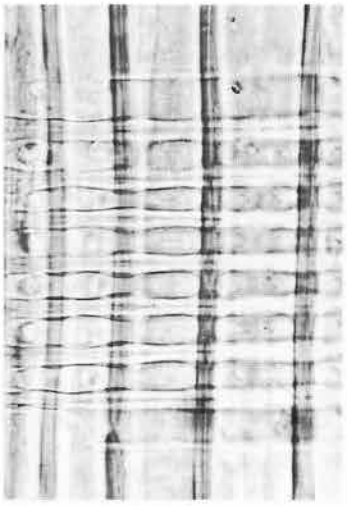
13.ヒノキ(123)木口×100



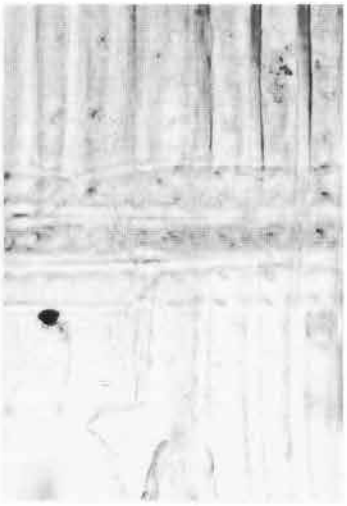
14.ヒノキ(168)木口×100



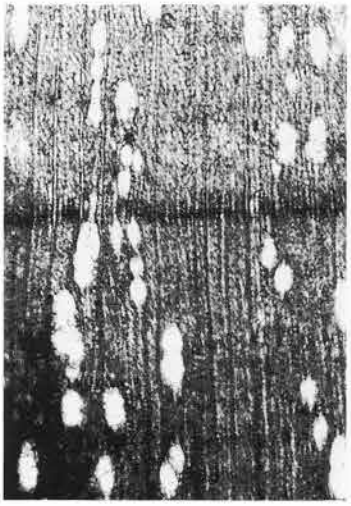
15.ヒノキ(70)柾目×400



16.ヒノキ(129)柾目×400

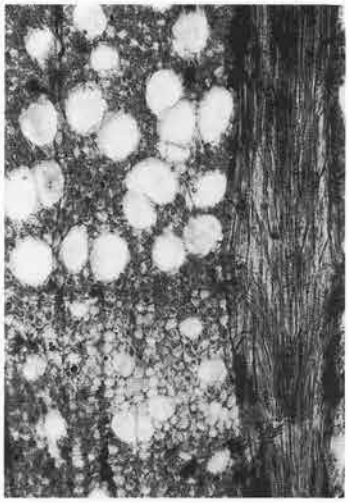


17.ヒノキ(178)柾目×400

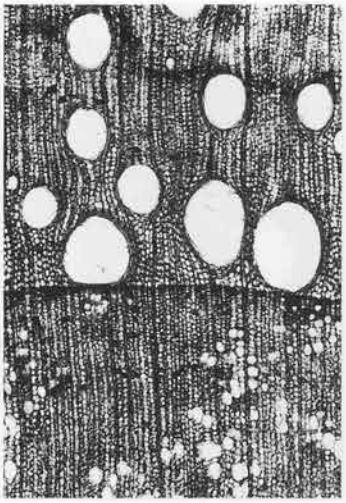


18.クマシデ属(203)木口×40

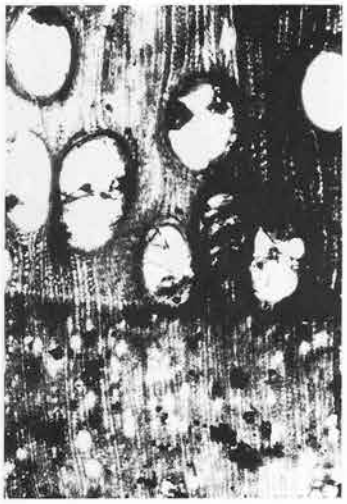
図29　木製品顕微鏡写真　(2)



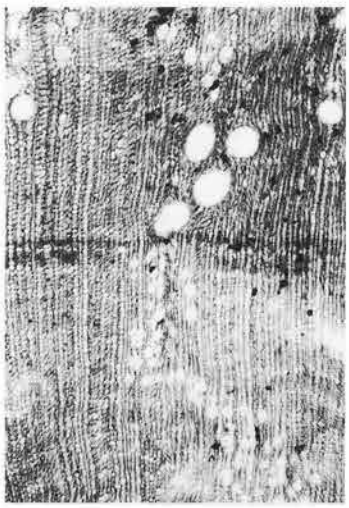
19.ブナ(202)木口×100



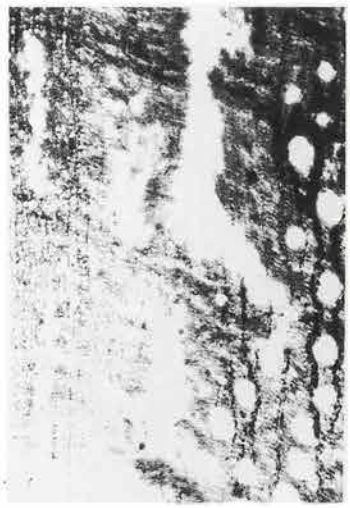
20.クリ(197)木口×40



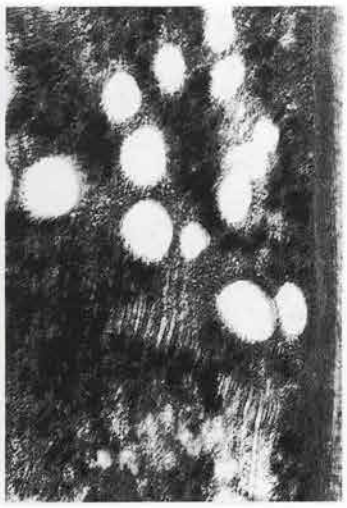
21.クリ(199)木口×40



22.シイ属(200)木口×40

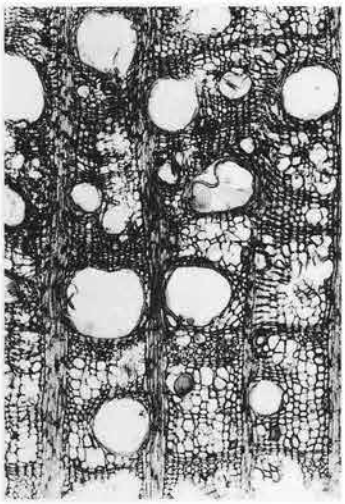


23.アカガシ亜属(150)木口×40

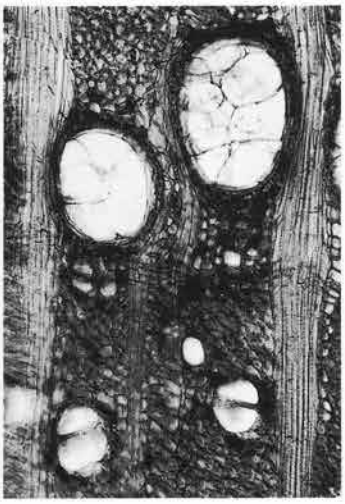


24.コナラ節(194)木口×40

25.コナラ節(194)板目×40

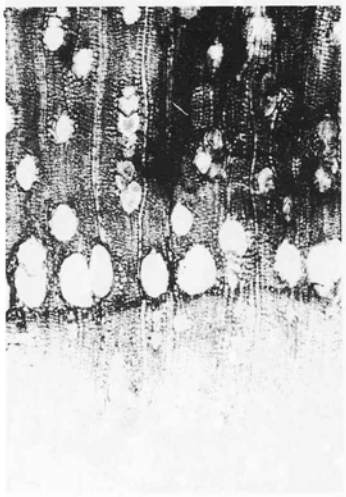


26.ケヤキ(134)木口×40

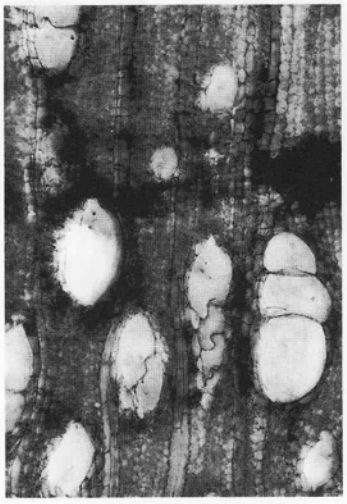


27.ヤマグワ(135)木口×100

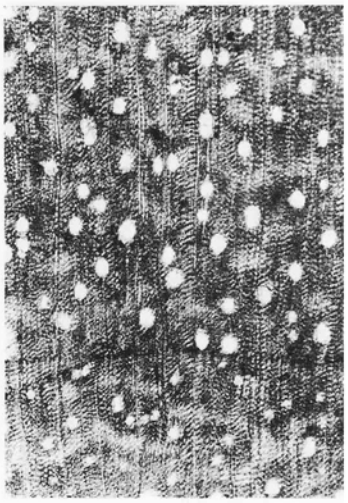
図30　木製品顕微鏡写真 (3)



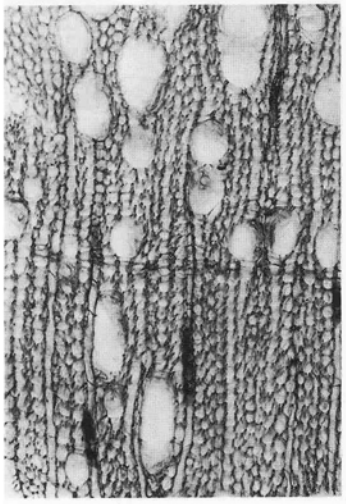
28.ウルシ属(191)木口×40



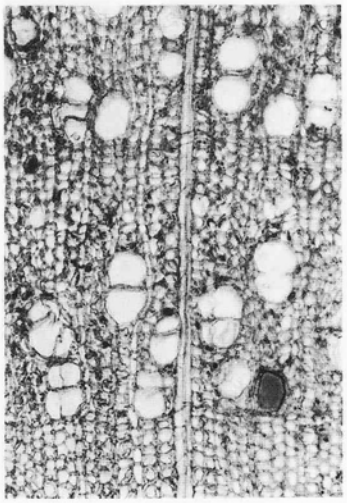
29.ウルシ属(192)木口×100



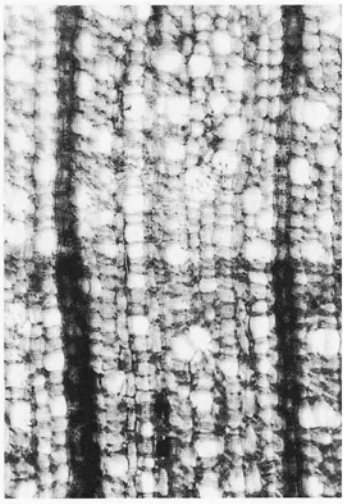
30.カエデ(198)木口×40



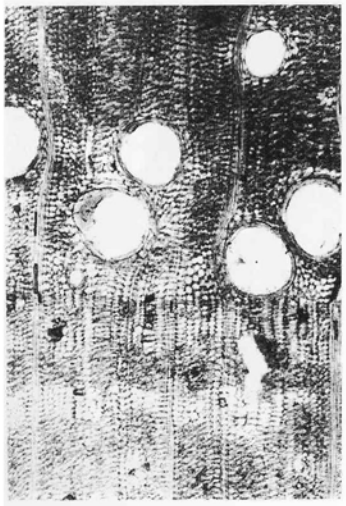
31.トチノキ(125)木口×40



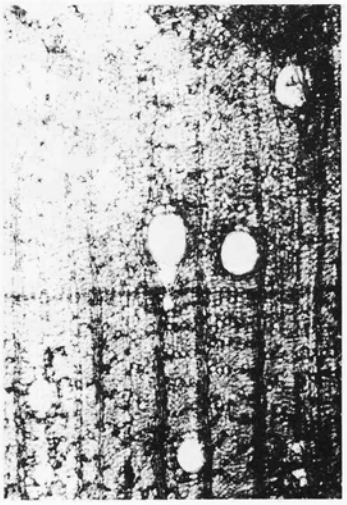
32.エゴノキ(196)木口×100



33.サカキ(208)木口×100



34.ムクロジ(175)木口×40



35.カキノキ(58)木口×40

36.カキノキ(58)板目×40

図31　木製品顕微鏡写真　(4)

報　告　書　抄　録

ふりがな	すないりいせき
書名	砂入遺跡
副書名	小野川放水路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（Ⅰ）
巻次	
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告
シリーズ番号	第161冊
編著者名	藤田　淳（編著）、渡辺　昇・西口　圭介・久保　弘幸・柏原　正民・岡　昌秀・伊東　隆夫（寄稿）・青木　哲哉（寄稿）
編集機関	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
所在地	〒652 兵庫県神戸市兵庫区荒田町２丁目１－５　☎078－531－7011
発行年月日	西暦　1997年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 （確認含む）	調査の原因
		市町村	調査番号					
すないりいせき 砂入遺跡	兵庫県出石郡出石町田多地字持網・袴狭字丸谷	28561	870058	35度 29分 30秒	134度 52分	19880111 ～ 19880331	約1800㎡	小野川放水路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査
			890021			19891211 ～ 19900327	約2250㎡	
			900037			19900918 ～ 19901125	1226㎡	
			910020			19910918 ～ 19911016	1141㎡	
			930079			19931012 ～ 19940307	2747㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
砂入遺跡	包含層	縄文時代前期	土坑	縄文土器・石錘	――――
		古墳時代	――――	土師器・木製穂摘具	――――
	祭祀遺跡	飛鳥～奈良時代	流路・道路状遺構・水田	木製祭祀具・田下駄・土師器・須恵器	祓所
		平安時代	道路状遺構・祭祀土坑・井戸・流路（旧河道）水田	木製祭祀具・木簡・土師器・須恵器・腰帯金具	祓所

兵庫県文化財調査報告　第161冊

砂入遺跡（すないりいせき）

—〔本文編〕—

—小野川放水路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（Ⅰ）—

平成9年3月31日　発　行

編　集　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

〒652 神戸市兵庫区荒田町2-1-5

発　行　兵庫県教育委員会

〒652 神戸市中央区下山手通5-10-1

印　刷　野崎印刷紙業株式会社

〒603 京都市北区小山下総町54-5